

---

# 騎士とエルフの冒険絵巻

伊達直人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

騎士とエルフの冒険絵巻

### 【Nコード】

N5051Q

### 【作者名】

伊達直人

### 【あらすじ】

いつかどこかで読んだ事のある、既に時空の彼方に消え去った物語。今は蜘蛛の図書館にて残骸を晒すのみ。騎士とエルフの冒険絵巻。楽しんで頂けたら幸いです。

漆黒の闇の中に、真紅の飛沫が舞った。

大量の真紅の液体が噴き出し、大地に撒き散らされる。人の……血液が。

音はない。光もない。

だが——『それ』は確実に、目の前に迫っていた一人の男を切り刻んでいた。

一瞬前まで刃物を手に自分に襲いかかろうとしていた男が、あっけなくヒトとも呼べないような幾つもの肉塊と化して転がる様を、少女はぼんやりと見つめていた。

大量の返り血が降り注ぐ。が、それを拭う気力も避ける気力もないままに、少女はその遺体を見つめた。見つめ続けた。

それしか出来なかった。

「あ……ああああ……」

呻き声が、その小さな口から漏れる。何時の間にか、少女は大地に膝をついていた。

そこでまた、愕然とする。

大地に転がる遺体は、一つだけではなかった。もはや何人いたのかも判別できないほどに徹底的に破壊された遺体は、ただの物体となつて少女の周りに転がっている。

そして、流れ出る血が大地を紅く染めていた。染みこんでも染みこんでも間に合わないほどに大量に流れ出る血は、大地を流れ、少女の周りに紅い絨毯を作り上げていく。

その紅い世界の中で、少女はただただ、呆然としていた。

何が起こったのか。そんなことは理解している。けれど。いや、だからこそ——少女は動けなかった。

「……………！」

静かだった世界に、さざ波が走る。人々のざわめき。

少女は恐怖に身体を硬直させた。その間にも、幾つもの足音がどんどん近付いてくる。

「なっ……」

駆け寄ってきた男の一人が、目の前の惨劇を前にうめき声を発する。当たり前だろう。

つい先程まで一緒に生活し、共に笑い、同じ時を過ごしてきたはずの人々が――物言わぬ物体となって転がっているのだから。

死に支配された世界の中に少女が一人佇んでいることに、人々が気付くまでにそう時間はかからなかった。

この少女は……

「貴様が……」

駆け寄ってきた何人かのうちの一人が、食いしばった歯の間から絞り出すように言う。

「貴様がやったのか？」

少女は無言。だが、それはつまり肯定の証だった。

「てめえ……！」

「エレナが泣いて頼むから今日まで生かしておいてやったんじゃないか！」

「今まで置いてやっていた恩も忘れやがって、しかも、しかもこんな……！」

さすがに強面のその男も、目の前の惨劇を口にすることに一瞬の躊躇があった。その代わりに、呆然と座りこんだままの少女の胸倉を掴み、引っ張り上げる。

元々が小柄な少女だ。あっさりとその身体は宙吊りにされ、そして大地に叩きつけられる。

殴る、蹴る、少女はされるがままになっていた。立て続けに加えられる力に、華奢な身体はすぐに悲鳴を上げて動けなくなる。少女は苦悶の表情を浮かべた。それも、無意識のうちだ。

痛い、と思うことはなかった。思考を……何かを思うことを、心が拒否していた。

考えれば、認めてしまうことになるから。自分がやったことが。

それでも……心の何処かが叫んでいた。

生きたい、と。

腹を蹴られ、咳き込みながらも、少女は何かを呟く。だが、激昂し、興奮して少女に暴力を加えている男たちはそれに気付かない。

『秩序と混沌の支配者よ……姿なき世界の王者よ……我……汝に請わん……汝が力……仮初めなれど……我に与えん……』

会話するときに使う言語とは違う言葉。けれど、確かに意味を持ち……そして力を持つ言葉。

魔法言語、と呼ばれる言葉だった。ほとんど無意識に、少女は言葉紡ぎ続ける。

『来れ業火……示せ爆炎……その紅き焰にて……我が前の災厄を滅ぼせ……その力……』

そこで初めて、なされるがままになっていた少女の瞳に光が宿る。大地に転がったまま、その瞳だけが鋭い刃となって男たちを見据えた。

——鮮やかな紫の瞳が。

そして、少女は宣言する。男たちへの死刑宣告を。

男たちが慌てて後ろに下がるが……遅い。

『……今ここに顕わせ!』

少女の叫びが夜空に弾ける。そして。

ごうっ!

突如として、辺りの空間に異変が生じる。『何もなかった』はずの場所から突然噴き出した炎は、瞬く間に輪を描いて広がる。

少女の周りの男たちを巻き込んで。

炎に飲み込まれた男たちが苦悶し、もがき……そして力尽きるのを、少女は静かに見据えた。紫の双眸が、紅い惨劇を映している。

よろよると立ち上がり……先程受けた傷のせいで、あちこちが痛んだが……そして、黙って燃え上がる炎を見つめる。

紅蓮の炎しか視界に入っていないかのように。それだけが、世界の全てとも言うように。

また誰かが駆け寄ってきてはいたのだが、大地に流れる血と、紅い炎と、そして佇む少女と。それらから、起こった出来事を推測するのはそう難しくない。もう、少女に手を出そうとする者はいなかった。

血と炎と、そして沈黙。それだけが、この狭い世界を支配する。どれくらい——そうしていただろうか。

少女は思い出したように、傍らを見上げた。相変わらず紅い色彩しか映っていない、ぼんやりとした瞳ではあったが。

そこには、燃え上がる小さな小屋があった。今日まで……ついさっきまで、彼女が生活していた家だ。先程少女が生み出した炎は、家をも巻き込んでいたのである。この様子だと、跡形もなく燃え尽きるだろう。

だが、それを惜しむような気持ちは沸いてこない。今の少女に、そんな感傷は持てなかった。

ふらふらと、機械的な動きで燃え上がる家の中に入る。大した家具も置いていない部屋に、一つだけ不釣り合いなものがあった。

棺である。上に置かれた小さな花が、弔いが行われたことを示していた。昼間に、少女自身が置いたものである。

一瞬だけ、その棺に目をやり……大した感傷も何も見せなかったが……少女は、まだ燃えていなかった物入れから大きめの布を引っ張り出した。闇色の外套である。それと、持ち出したのは少女の金。それだけだった。

思い出を示すようなものは何一つ手にせず、少女は燃え上がる家から抜け出した。その次の瞬間に、小屋を形成していた柱が崩れ、小屋は崩壊する。一瞬遅れれば、少女もまともに崩壊と炎に巻き込まれていただろうが……それでも、おそらく少女の無表情は変わら

なかっただろう。

家に入ったのにはそれなりの目的があったが、たとえば失敗してここで死んだところで、思い残すようなことも何もない。

燃え上がる炎が生み出す熱風が頬を叩く。それに顔をしかめて、ようやく少女の表情にかすかに感情の色が戻った。

家の側、先程の惨劇の情景を見渡す。

夜空に挑むかのように燃え上がる紅蓮の炎、大地を染め上げる紅い血、自分を虚ろな瞳で見つめる幾つもの遺体。

「ああ……ああ、あ……」

言葉にしたいことは幾つもある。が、それは形を成さず、ただのうめきとなって口から漏れる。

どうすれば良かったのか。どうしたら良かったのか。

——自分は一体何なのか。

「……………」

少女は黙って後ろを振り向く。そこには、無限の闇がぼっかりと口を開けていた。少女の家のすぐ側には深い森がある。

先程家から持ち出した外套を羽織ると、闇に飲みこまれるかのように、少女は森に向かって歩き出した。

明かりと言えば、燃え上がる彼女自身の家と夜空に浮かぶ満月だけだ。その中で子供一人で森に入るのは自殺行為とも言えたが……それを指摘してやるような存在はいない。何せ、この場で意志を宿している存在は少女だけなのだ。

少女は無言のまま森の中を歩き出す。が、少し歩いたところで立ち止まると、家を振り返った。松明ほどの大きさの炎が、木々の間から覗いて見える。

「……行くね」

それだけを、少女は呟き……そしてまた、歩き出す。

少女を見送るのは、幾つもの物言わぬ遺体だけだった。

そうして、この不可解な物語はいったん幕を閉じる。

二年後、新たなる物語の始まりまで――



「さて、お立会い。

今から始まるは、遙か遙か昔の物語。人間もエルフもいなかった頃の、伝説の物語。

昔々。この大陸、ロンバルディアの大地に住んでいたのは人間でもエルフでもない、天人と魔人と呼ばれた人々だった。

彼らは日々争いを続けた。天人は大陸の平和と存続を望み、魔人たちは争いと大陸の滅亡を望んだからだった」

口上を続ける男……街頭で人形劇を演じる、大道芸人であるらしかった……は何やら手にはめられた二つの人形を取り出す。一つは凛々しい鎧を纏った神々しい姿、もう一つは禍々しく黒いその姿に、鋭い牙を持った、動物と人間を掛けあわせたような代物だった。

二つの人形は互いにぶつかり合い、傷つけ合っている。両手を巧みに動かしながら、男は口上を続ける。

「天人と魔人の争いは長い長い間に渡って続いた。どちらの力も拮抗していたが……やがて、天人種族は押されていった。恐れるべし、魔人のその力。大地に争いと不和を撒くその心。だが、天人たちは押されながらも、決して屈しようとはしなかった。

そして！」

男の口調に熱がこもる。ここが山場らしい。

「天人たちは、その魔法技術をこめて最強の兵器を創り出すことに成功した。最後にして最強。そして唯一の兵器。ああ、仰ぎ見るべし、その優美なる姿。鎧を纏いし美しき女神！」

そうして、男は再び新しい人形を取り出す。男の言葉通り、飾り物にしか見えない派手な装飾の施された鎧を身に纏った、美しい女性性の姿だった。その手には、これまた優美な装飾の施された剣を手をしている。

「この女神の前に、魔人は大地に屈するしかなかった。天人種族は

勝利したのだ。ああ、平和は護られたのだ！」

何と言うのか、聴衆よりも語っている男の方が盛り上がっているように見えたが……とにかく、男は語り続ける。

「しかあし！ 長きに渡った戦いに勝利し、平和を手にしたのもつかの間、天人種族はこの大地から姿を消した。遥かなる別の大地に旅立ったのか、それとも皆死んだのか。その結末は誰も知らない。

だが人々よ、忘れるなかれ。己の命を賭してこの大地を護った人々の物語を。平和の旗印を——」

男は一人、涙するような仕草をした。

「……………」

まあ、どうということもなかったのだが。そこでダレット・コルフォースは街頭の語りを聞くのを止め、止めていた歩みを再開する。後ろで金を払ってもらえなかった男が不満げな顔をしているのが感じられたが、これは大して気にしないことにする。

今、語られていた物語は、大陸に住む者なら誰もが知っている昔話だ。今更、手に汗握って聞くような内容でもない。

大きく伸びをし、目の前の風景をぼんやりと眺める。流れゆく、人々の群れ。混ざり合って雑音と化す、人々の声。

「高いよ、これじゃああまりにも。せめて、あと三十セト安くしてくれ」

「ねえ、お母さん。僕、あれが欲しいよ。毎日手伝いするからさ——」

「冗談じゃない。これ以上まけたら、こっちは破産しちゃうよ。大体だな、見てみろよ、この細工の細かさ。まけるどころか、これで限界だよ」

いつも通りの日常。平和過ぎるほどに平和な光景。

ダレットは伸びを一つすると、また歩き出した。

エルゼシア帝国。五十年前に建国された、人間の国である。このロンバルディア大陸をエルゼシア帝国が統一している今、大陸に存

在する国家はエルゼシアだけだ。住人たちは単純に『帝国』と呼ぶことが多い。

その王都、ラインガルド。ダレットが今いる場所……そして住んでいる場所はそこだった。この通りは、王都でも一、二を争う大きな繁華街だ。

王都だから、街の中央には王城がそびえ立ち、その周辺には国家の管理する施設が立ち並ぶが、その区画を、そして貴族たちの邸宅の立ち並ぶ区画を抜ければこのような雑多な……しかし活気に満ちた風景を見ることが出来る。

ダレットは、この雰囲気嫌いではなかった。雑踏に足を踏み入れ、人々の群れに混じっているだけでも幾分か気が紛れるからである。街の持つ活気が少しでも自分に分け与えられるような気がして特に……今日のように、続けることだけが意味を持つ、つまりそれ自体には何の意味もないような儀式を終えてきた後では。何とはなしに、ダレットは腰に吊った長剣に目をやった。

栗色の髪も深い緑の瞳も、大して珍しいものではない。だが、その優男そのものといった容姿に、長剣だけが不釣り合いだった。ダレット自身はあまり自覚していないが。

ダレット自身、別に繁華街に出てきて何か買うわけでもない。ただ、気晴らしにやってきたただけだ。

がりがりと頭を掻きながら、ダレットはまた歩き出した。

雑踏を、小柄な人影が駆け抜けて行く。マントを羽織り、深くフードを被ったその姿はただ眺めれば露骨に怪しかったが、とにかく人の多い王都では、大して気にする人間もない。その人影もそれを承知の上でそんな怪しい格好をして大通りに姿を現しているのだ。無論、それだけが理由でもない。

小柄なその人影がフードの下から見つめているもの。それは、栗色の髪の優男だった。

地味な格好をしているが、見る者が見ればすぐに気付く。着てい

る服はかなり上等な品だし、その立ち振る舞いを見れば裕福な家庭の育ちであろうことは想像がつく。礼儀作法も徹底的に叩きこまれるからだ。

腰に吊った長剣だけが気になったが、人影は大して気にしないことにした。その痩せ型と言ってもいい体型と甘い顔立ちを見ている限り、到底剣など使えるようには見えなかったからだ。ただ、飾りのつもりで身につけているだけだろう。最近、騎士の真似をして裕福な商人の子供などが剣を習うのが流行しているのだ。

（……とりあえず金も持ってそうだし。悪いけど、ちょっと痛い目にあってもらいましょうか）

その人物は心の中で呟くと、再びダレットの後をつけた。した。

それとほぼ同じ頃。

（……何か、嫌な気配を感じるな……）

何と言うのか、背中がぴりぴりとするのだ。何か鋭いものを間近に付きつけられたような、嫌な感触。

内心首をひねった後、極力首を動かさないように、視線だけで後ろを見遣る。だが、とにかく人通りの多い場所のことである。気配の正体は何なのかなど見当もつかない。まさか、目に見える人間全てを疑うわけにもいかない。

（だがまあ、殺気とも違うみたいだし。気を付けた方が良いかな、それとも放っておいたものか……）

先程と何の変わりもなく雑踏を歩きながら、ダレットは黙考する。だが、結局、

（気にしないことにするか）

極めて非建設的な結論に達し、それ以上考えるのを止めた。

「さて、何をしようか……」

何はともあれ、こうやって繁華街を歩くのは楽しいものだ。幾つも並べられた装飾品や菓子、日用雑貨を眺めながらダレットは呟いた。

(……気付かれた?)

心臓が跳ね上がる。可能な限り、気配は殺したのに。無論、こんな大通りでむやみに忍び足をしていてもかえって怪しまれるので、普段よりは、と言った程度だが。

男が視線だけで後ろを振り返った瞬間はびっくりしたが、男はやがてまた歩き出してしまった。どうやら、気付かれなかったらしい。自分の気配……視線を察知出来る人間がそうそういるはずがないのだ。

(さて、さっさと仕事を済ませますか……!)

フードの下で人影は笑う。今までは男……ダレットに歩調を合わせていたのだが、それを崩し、小走りにダレットに駆け寄る。

目標に接触した瞬間に、懷から財布を奪う。それだけの話だ。今までに自分はそれをさんざんやってきたし、そして……失敗したこともないのだ。

その人影はダレットの側に近付き、いつも通りに気付かれないように羽織ったマントを跳ね上げながら懷に手を伸ばす。

いつも通り。簡単なことだ。

だが、次の瞬間、人影は驚愕の表情で身体を固まらせた。

何かが急速に自分に近付いてくる。間違いない……先程と同じ気配だ。

(こいつか……)

ダレットは心の中で呟いた。

マントを被った人影は、どんどん近づいてくる。フードを深く被っているので性別は分からないが、その小柄な体格からして、おそらくまだ子供だろう。

人影は自分に近づき、手を伸ばそうとする。それで分かった。

(要するに、スリってことだな。それで俺を付け狙ってたわけだ)  
納得しながら、ダレットはごく自然に動いていた。

マントの下で、伸ばされた子供の手を掴んで引き寄せる。掴んだ手を捻り上げながら、もう片方の手で当身を加える。小さい頃からさんざん叩き込まれてきた護身術の型をそのまま使ったに過ぎないが、相手には驚愕だったようだ。

当身を加えた瞬間、フードの奥が一瞬見えた気がした。その目が大きく見開かれ、そして瞼を閉じる。

「って、おい……？」

掴んだ手が急に重みをもったことに気づき、ダレットは不審げな顔をした。くずおれた子供の身体を慌てて抱える。どうやら、当身が相当上手く入ってしまったらしい。気絶までさせるつもりはなかったのだが。

腕に抱えた子供を見下ろす。軽い。抱えた感覚だけでしか分らないが、子供としてもかなり痩せている。被っているマントだけがやたらと大きい、それも、ぼろぼろとなっている。

「子供……？ しかも女の子じゃないか。……スラムの子供か……」

言葉の最後は、無意識のうちにため息となった。

大きな都市は、光と同時に、闇も抱えている。このラインガルドの街も、この明るい繁華街の裏には、物乞いや盗賊がひしめいて暮らすスラムがある。そこには、事情で家を失った子供も多い。この子供も、スリで生計を立てていたのだろう。

「しかし、どうするかな……」

片手で軽々とその少女を抱え上げながら、ダレットは頭を掻いた。自分の立場からすれば街の警衛兵に突き出すのが妥当なのだろうが、別に何か取られたわけではないので、この少女を牢に放り込むのは気が引けた。

それに、気を失う一瞬前に見えたものが気のせいではなければ……  
「……しゃあないか」

ダレットはため息をつく、少女を抱えたまま歩き出した。

「ん……」

まず感じたのは、違和感だった。

ついぞ感じたこともない、柔らかく、暖かい感触。それはこの上なく心地良かったが、それが違和感の正体だった。こんなものに覚えはない。

徐々に意識がはっきりしてくる。これは、一体何なのだ？

「……………」

心地良い感触が少々名残惜しかったが、慌てて跳ね起きる。柔らかな毛布がばさりと音を立てた。自分に掛けられたものであるらしいことに、その時気づく。

「何なの……………」

まったく覚えのない状況に、少女は愕然とした顔で呟く。その時。

「よお」

横から掛けられた物憂げな声に、一瞬、びくつと身体が飛び上がる。

「やっと起きたか」

横を見る。やたらと大きなソファに深く腰掛け、腕を組んでいる男がいた。栗色の髪に、緑の目をした優男。さっき、自分が狙った男だ。上着は脱いだようだが、服装もさっきと同じだ。

「……………」

身体中から冷や汗が流れ出てくる。何があったのか、ようやく思い出した。財布を狙ったのが逆にあっさりと気絶させられたのだ。

慌てて周りを見回す。そこでようやく、自分がソファに寝かされていたらしいことに気づいた。どうやら、すぐに警衛兵に突き出されることはなかったらしいが、それは、早いか遅いかだけの差であり、大した問題ではない。

「あんた……………何なの？」

横の男を睨みつけ、少女はうめいた。無意識のうちに、毛布を抱え込む。

「そりゃ勿論、お前に財布をすられそうになった人間だが」

無表情に言い返す男……………ダレットに、少女は言葉に詰まった。

「……あたしを、警衛兵に突き出すの？」

おずおずと少女は聞いた。ダレットはしばらく考え込むような仕草……幾分か芝居がかっている……をしたが、

「止めておく。面倒臭い」

あつさりと言い、肩をすくめた。少女の表情が一瞬にして安堵に変わる。

「じゃあ、何であたしを……。っていうか、ここ、何処なの？」

部屋こそさほど広くはないが、家具や調度品からして、かなりの金持ちの家だと知れた。今自分が座っているソファも、かなりの高級品だ。置かれている家具からして、この部屋はおそらく居間だろう。部屋には柔らかい光が差し込み、部屋全体も、落ち着いた色使いでまとめられている。

どう考えても、自分には縁のない世界だ。

「ここか？ 俺の家だよ」

ダレットは言った。

「……ってことは、あんた、やっぱり金持ちの息子？」

ぼそりと少女は言った。言って上目遣いにダレットを観察する。

大体自分の推測は当たっていたわけだ。一つだけ誤算があったが。ダレットの手際の良さだ。

「まあ、正解だな」

ダレットは、何処か自嘲気味の笑みを浮かべる。

「……………」

じろじろとダレットを見る。ただの金持ちの道楽息子にしては、先程の自分を気絶させたときの手際は良すぎた。一体、この男は何者なのだ？

ダレットはさすがに少女の視線に耐えかねたのか、やおら立ち上がると、戸棚から何やら取り出してみせる。やたらと派手な装飾が施された短剣だった。殺傷力はまるでない、儀礼用の短剣だ。

「ほれ」

手渡されたそれを、少女はしげしげと眺め……そして硬直した。



「帝国……騎士……？」

「そういうことだ」

かろうじて声を絞り出した少女に、ダレットは面倒臭そうに応じた。少女の手から、先程渡した短剣を取り上げる。それは、帝国でよく使われる印章だった。

短剣に彫られた紋章。それは、このエルゼシア帝国の王室の紋章とそれに重なる剣を意匠化したものだった。それが意味するもの。つまり、この国の剣たるべき存在。国王の直属の武人集団。王宮騎士団……！

俗に帝国騎士と呼ばれる集団の存在とその紋章は、少女も知っていたらしい。

「えーと……」

引いたはずの冷や汗が再びあふれてくる。よりにもよって、自分が財布をすろうとしたのが王宮騎士団に所属する騎士だったとは……！

警衛兵に突き出されるところの話ではない。その場で切り捨てられていてもおかしくない。あの時、ダレットは確かに帯剣していたのだ。単なる飾りなどではなかったのだ。

「あ、えっと、あたし……」

しどろもどろになる少女を、ダレットは呆れ返った顔で眺めた。

「だから、警衛兵に突き出す気はないって言ってるだろうが」

「あ、そ、そうよね……」

声が震えている。

「何だってどいつもこいつも、騎士と知ると途端に態度が変わるんだろうな」

ダレットは大きなため息をついた。

「つたく、面倒臭い……」

ダレットはしばらく少女を眺めていたが、やがて口を開いた。

「まあ、俺の話は置いておいて、だ。今度は俺が聞いてもいいか？」  
来た。

当然来るであろう質問に、少女は身を硬くした。

「お前……名前は何て言うんだ？」

「……へ？」

予想外の質問に、少女は拍子抜けした。思わずソファからずり落ちそうになる。

「だから、お前の名前だよ。まさか名前がないわけでもないだろう？」

「まあ、そうだけどさ……」

少女は懺然とした顔をして黙っていたが、やがて小さく呟いた。

「……キルファ。キルファ・インシード」

「俺は、ダレット・コルフォースだ」

言って、ダレットはにやりと笑った。

食べること。

それは、生きるということだ。生き物は例外なく、食物を摂らなくては生きていくことは出来ない。

だから、単なる栄養補給というだけではなく、食するという行為は、自分が生きているということの確認作業とも言える。働き、そして一日を無事に過ごせたことへの感謝をしつつ食べ物を摂り、そして眠りにつく。人々が太古の昔より、引き継いできた生き方だ。

とは言え……

「お前、よく食うなー……」

目の前の少女を眺め、ダレットは呆然と呟いた。

「はぐ、はぐ、ばく……」

少女……キルファは、猛然と食べ物を口に運んでいた。食べるというよりは、とにかく、目の前のものを口に放り込んでいるといった風情だ。味わっているのかすらも謎だったが、しかしその勢いは止まらない。

「だって……おなかすいてたし……」

口の中のものを一気に飲み込み、キルファは言った。

「まあ、そりゃ分からんでもないが……」

彼女を少し見れば、食べ物が足りていないことは分かる。年齢は十四ということだったが、どう見ても痩せすぎだ。骨と皮だけというわけでもなかったが。

スラムの子供に、まともに食事を摂れというのも無理な話だろう。しかも彼女は、もう一つハンデを抱えている。

「……うちの食料庫を食い尽くす気か……?」

「いいでしょ、どうせ金持ってたんだから。帝国騎士が細かいことでやかく言わない」

あっさりと言い放つと、また彼女はせわしく両手を動かす。

「……間違いだったかな、食事までやったの」

キルフアには聞こえないように呟く。彼女がダレットの財布をすりとうとしたのが全ての始まりだった。ダレットの当身で気を失った彼女をとりあえず家に連れてきたのだが、そのまま追い返すのも気が引けたので、一食くらい提供しようとダレットが言ったのだ。ダレットは、あくまで『普通』の一食分のつもりだった。しかし、キルフアの食欲と言うか食べっぷりを眺めている限り、十人分くらいは食い尽くしそうな勢いである。

「……その身体のどこにそれだけの食いもんが入るんだ……？」

キルフアの華奢な身体を呆れたように眺め、ダレットはうめいた。「食べられる時に栄養を蓄えておく。常識じゃないの」

ひたすら口を動かしながらも、ダレットの質問にはしっかりと答えてくる。

「……食後の果物とお菓子です」

大きな果物の入った器を持ってきた中年の女性……ダレットの身の回りの世話をしている使用人である……も、彼女の周りに積み上げられた皿の数に、一瞬間が引きつる。事情はどうあれ、一応、今はキルフアはダレットの客という扱いになっていたので、使用人も丁寧な物腰で応対している。

「……ああ、そこに置いておいてくれ」

ダレットの指示に、女性は軽く頭を下げると、空になった皿を持つて下がる。

「わあ……」

ついぞお目にかかったこともない豪勢な食事。まして、果物や菓子となるとある種の贅沢品だ。目の前に並べられた皿に、キルフアの目が輝いた。

「……それだけ食って、まだ食うか……」

ダレット自身は、あまり甘いものが好きではない。今運ばれた皿には手を付けず、自分の分もキルフアに渡した。

「これくれるの？　ありがとー」

遠慮するそぶりも見せず、キルファはダレットの皿に手を伸ばした。そして、また猛然と口に放り込み始める。口の周りがクリームでべたべたになっているが、気にする様子はない。

「ん……？」

部屋の入り口で、先程の女性が何やら意味ありげな視線をダレットに投げかけている。

「悪い、ちょっと席を外すぞ。そのまま食べててくれ」

「ん、分かった」

口に一杯にものを詰め込みながらキルファが応じる。ダレットは眉をひそめながら立ち上がった。

「……何だ？」

居間の入り口を出た所で、ダレットは女性に囁いた。目の端にキルファを捉えているが、彼女はダレットを気にするでもなく、食べることに集中している。キルファも、ダレットの視線に気付いてはいるようだったが。この少女は、他人の気配には敏感であるようだ。スリをやっているうちに身についた能力なのだろう。

「どういふつもりなんですか」

女性はダレットに責めるような視線を向ける。

「仮にも帝国の騎士様が、あんな薄汚い子供を連れてきて、食事まで与えて……。他の方々や、お父上に知れたらどうなさるおつもりなんですか。しかも……」

女性は、ちらりとキルファを横目で見る。

「あの目の色、どう見ても紫じゃないですか。耳も長いですし。紫の瞳と言ったら……」

「ハーフ、だろ」

物憂げな顔で、ダレットは女性の言葉を継いだ。

「紫の瞳は、人間とエルフ族の混血児の証拠。いくら俺でも、それくらいは知っているさ」

この大陸には、人間ともう一つのよく似た種族が存在する。エル

フ、と呼ばれる人々だ。

人間とよく似た容姿を持ちながらも違う能力を手にした人々。エルゼシア帝国の国王は人間であるため……現在は不遇の状態にある種族だ。

「だったら何だって連れてきたんです。知っていながら……」

「別に、ハーフだからといって何かするわけでもないだろう。ただの腹をすかせた子供だよ。それ以外の何者でもない」

横目でキルファを見る。艶のない、ぼさぼさの灰色の髪。小柄で痩せた身体。薄汚れたぼろぼろの服。

「ですが……」

更に言い募る女性を、ダレットは強引に黙らせた。

「俺が決めたことだ。それに、ただハーフと少し面識を持っただけで何がどうなるって言うんだ。馬鹿馬鹿しい」

「坊ちゃま……」

一転して、女性は不安げな目を向けた。

「……だから、坊ちゃまは止めろっての」

ダレットは大きいため息をついた。二十二歳にもなって坊ちゃま呼ばわりはさすがに恥ずかしい。

この女性、エルザ・リーフトンは、元は彼の母親の侍女だった女性だ。ただ、ダレットの母親は小さい頃に亡くなっている為、その後には何かと面倒を見てくれたのはこのエルザだった。ダレットが親の家、コルフォース家の屋敷を出た後も、強引についてきて身の回りの世話をしている。

彼女にしてみれば、小さい時から世話をしてきたダレットが、ハーフなどに関わったことで騎士としての経歴に傷がつくのではないかと心配しているのだ。それは、ダレットも分からなくもない。

だが。

騎士としての名誉。そんなものは、目の前で少女を一人飢え死にさせることに比べたら、どうでも良いことだった。たとえば、その少女が……人間が忌み嫌う種族、エルフ族との混血であったとしても、

だ。

「とにかく、俺が決めたことだ。これ以上口出しされるいわれはない」

少々きつめにダレットは断言すると、なおも何か言いたげなエルザはそのままに、キルファのいる居間に戻った。

ソファに腰を下ろすなり、ダレットは大きくため息をついた。柔らかなソファに身を沈め、天井の明りを見上げる。

「……何かあったの？」

二人分の菓子と果物をきっちり平らげたキルファが、口の周りを拭きながら訊いてくる。だが、本気で尋ねているようには見えなかった。知った上で訊いているのだ。

「いや、別に」

ダレットは曖昧な笑みを浮かべる。が、

「どうせ、あいつはハーフだろうとか言われたんでしょ」

キルファはあっさりと言い放った。凶星をつかれ、ダレットの表情が一瞬固まる。

「見りゃ分かるでしょうが。どうせ、紫の目なんてハーフ以外にはいないんだから。何だってそんなことを一々言わなきゃ気が済まないのかしらね」

無表情に、淡々と他人事のように言うキルファとは対照的に、ダレットは顔を引きつらせた。ちらりと横を見ると、入口に控えていたエルザも同じような表情をしている。おそらくはわざとだろう、少女特有の高めのよく通る声で、キルファはまったく構わずに話を続けた。

「あんたは、気にしてわざと言わなかったみたいだけどね。けどね、そのことに触れないのが思いやりだと思ったら大間違いよ」

キルファは真っ直ぐにダレットを睨み据える。それはただの少女の目ではない。数々の修羅場を潜り抜けてきた戦士にも通じる、殺気すら感じさせる視線。

「それは……」

言いかけてダレットは口籠もる。

「あたしが何かしたわけじゃないとか言うかもしれないけど。ハーフがやたらと嫌われているのは事実だし、それはあんたも知っているはずよ。知っていてわざと無視するような態度を取ったりしたのなら、結局はあんたも、他の連中と同じよ。だってそれは、現実逃避でしかないんだから。」

そういうのを何て言うか知ってる？ 偽善、って言うのよ」

キルフアは一気にまくしたてる。何も感情を示さない顔の中で、瞳だけが刃のように鋭い光を放っている。

ダレットは何も言い返せなかった。ただうつむき、拳を握り締める。

「そのことについて、今更何を言おうとも思わないけど。今までもそうやって生きてきたし、多分これからそうなる。別に、あんただけが特別ってわけじゃないわ」

それだけ言うと、キルフアはすっと立ち上がった。

「さて。食べ終わったことだし、そろそろあたしは帰るわ。」

せいぜい、目立たないように裏口から出て行くことにしましょうか」

強烈な皮肉。ダレットは言うべき言葉が何も見つからず、エルザは下を向く。キルフアが鼻で笑った気がした。

キルフアは、きびすを返して入り口に向かって歩き出した。狭い屋敷のことなので、大体の構造は見当がつく。

「あ……」

ダレットは、ソファに座り込んだままだった。何も言い返せなかった。結局、自分も他の人間と同じなのだ。自分が毛嫌いしている

「……あ。忘れてたわ」

エルザの前を通り過ぎ、入り口を出ようとしたところで、キルフアは振り返った。



「ご飯、美味しかったわよ。——ご馳走様」

ダレットは、一瞬、キルファがかすかに笑ったように見えた気がした。考えてみれば、彼女の笑った顔は初めて見た気がする。ひたすら食べていた時も、決して笑顔は見せていなかった。

少女の笑顔。

可愛い、とダレットは思った。

この少女は、こんな笑顔も出来るのだ。それなのに、いつも何処か、物事を斜めに見るような目つきをしている。それは、彼女の境遇を考えたら当たり前かもしれないが。

この大陸において、人間とエルフの争いは長い間続き、その間の溝も深い。だからハーフという存在自体が、まず極端に少ない。そして、人間にもエルフにも忌み嫌われる。……お互いの宿敵の血が半分混じった、裏切り者の子供として。

この少女に、安住の地などあるわけがなかった。どれだけの想いをして今日まで生きてきたのだろう。親や兄姉、そしてエルフの愛情を一杯に受けて育ったダレットには想像すら出来なかった。

「あ……」

何か……湧き上がってきた感情があった。何かあるはずだ。この少女に向けて、言わなくてはならないことが――

ダレットは無意識のうちに、出て行こうとするキルファに手を伸ばしていた。何処か思い詰めたような表情を、振り返ったキルファは鼻で笑って弾き飛ばした。

ダレットの内の感情を、何もかも見透かしたような表情。

「何？ また、何か騎士様の『お情け』でもかけようって言うの？

もういいわよ、これで十分。

それとも、偽善者呼ばわりしたのがそんなに気に食わなかった？  
だったら言い返してみれば。言い返せるものなら」

歩みを止め、腕組みをしてキルファは言う。若干十四の少女だが、その姿には年齢以上の貫禄と重みがあった。これもまた、逆境で生き抜いていくうちに身に付いたものなのだろう。少しでも自分の存

在を認めさせるために。

「違う、そんなんじゃない……」

言うべき言葉が見つからない。ダレットは口籠もり、手探りで何かを探すような仕草をする。いや、実際そうだったのだろう。

「悪いけどね、あんたの自己満足の材料にされるくらいなら警衛兵に突き出された方がまだマシよ。さっきの食事はちよっと払えないけど。生憎と懷事情は悪いのよ、あんたと違って。」

泥まみれになって、さんざん罵声を浴びせられても、あたしは自分の力で生きてきたの。あのスラムでね。それが、ハーフのあたしの唯一の矜持なのよ。それを崩されてたまるものですか。

今更、あんたの慰み者にされるつもりはないの」

淡々とキルファは言葉を紡ぐ。

「慰み者って……」

エルザが呟き、どちらかと言うとダレットの方に何やら非難めいた視線を向けた。この女性も、ダレットが言い出しそうなことなど予想がつくのだろう。

「まあ、娼婦とは違うにしても、結局は同じだと思わない？ あんたのために動くことで、あたしは生きる糧を得る。そういうことでしょう、つまり。」

……それだけは、絶対にごめんだわ」

最後の一言。それはキルファの心の叫びであり、この問答の終わりを告げるものでもあった。

「ああ……」

ダレットが、何も次の言葉を見つけれないでいるうちに。

少女の姿は、何時の間にか屋敷から消えていた。

銀色の鎧を身に付ける。やたらと精緻な彫刻と装飾が施された代物で、その複雑さも並ではないのだが、六年間も着用していればさすがに慣れもする。ダレットは手際良く、王宮騎士団の鎧を身に着けていった。横ではエルザが、細かい留め金やら何やらを止めるのを手伝ってくれている。

最後に愛用の長剣を腰の剣帯に固定し、マントを羽織る。これで一応、『帝国騎士』としての正装は完了だ。

(……しかしまあ)

鏡に映るその姿を見ながら、ダレットは思う。

(何だってこんなに大仰な格好をする必要があるのかな。これじゃあ、ろくに動けやしない。それに、どうせ飾り物よろしく突っ立っているなんだろうが)

王宮騎士団の一員として叙勲を受けて六年。毎日王城に勤めているわけではないが、勤めがある日は正装が要求される。その度に、この面倒くさい格好をさせられてきたものだが……

(似合っていないよな、やっぱり。うん)

実際に……客観的に見れば、長身痩躯、しかも甘いと言っている顔立ちのダレットに、その優美な意匠の鎧は似合っていた。一般人が騎士と聞いて思い浮かべるのは、おそらくこういった姿だろう。

だがダレット本人には、どうにも鎧だけが浮いて見える。六年間着続けても、どうしても違和感が消えないのだ。

その違和感の正体は分らない。分らないから……勤めがある日はいつも憂鬱だ。

王城へ向かうには、大多数の貴族や騎士たちは馬車を使う。その馬車にもそれぞれが装飾を施し、その権勢を競ったりするものなのだが……ダレットにはまったく興味が無い。それに、ダレットの小

さな邸宅から王城まではそれほど遠くないので、ダレットはいつも歩いて行くことにしている。

「行ってらっしゃいませ」

エルザの声を背に受けながら……彼女は、天塩にかけて育て上げた子供の立派な騎士姿に、満足であるようだった……ダレットは供を連れるでもなく、邸宅の小さな門を出た。

紅い絨毯が永遠とも思える長さで伸びている。その長さもまた、計算されたものなのかも知れなかった。

国王の権勢を示すために。

通路のあちこちに施された装飾も、ダレットの目には入らない。一般人が入り込んだならば、その豪勢さに目を回しそうな情景ではあったが。

王宮騎士団の仕事。王宮騎士団は軍部とは異なり、国王の直轄の機関である。そのため、主な仕事は国王の護衛だった。もう少し具体的に言うならば、謁見の間で国王の側に控えていることだ。……たったそれだけである。

（今日び、謁見の間で斬りかかる反乱者もないだろうに）

政治の世界において、力を持つのは物理的な力ではない。権力、金……つまり賄賂、そして根回し、他諸々。武力も含まれないではなかったが、さほど重要な地位を占めているとも思えない。むしろ、『武力を保持している』という事実の方が有力な脅しとなって作用する。

その最たるものが、帝国の武人集団の最高峰、王宮騎士団である。その中に身を置いているからこそ、ダレットはその意味を痛感していた。

自分は、一体何のためにあるのか。王室の剣となり盾となり、その国王の身を護ること。それが王宮騎士団たる者の誇り。

そう聞かされて育ってきたし、実際、自分の同僚たちはそう信じて疑っていないようだった。

けれど。実際には何もするわけではない。いや、それは平穩の証なのだから、その方がいいのは確かなのだが、それだったら……この『力』は一体何の為にある？

「……………」

ダレットは自分の腰に佩いた剣に目を落とした。小さい頃からさんざんに叩きこまれてきた剣術。けれど、何の意味も価値もないではないか、この場では。

「おい、そろそろ謁見が始まるぞ」

控えの間で憂鬱な気分に浸っていたダレットに、同僚の一人が声をかける。ダレットは無言で頷くと、立ちあがった。

情けなかった。

違和感を感じていても、無価値を理解していても……それに抗うことも何も出来ない自分が。

あの少女のように。

「くそっ！」

剣を構え、そして一気に振り下ろす。だが、長剣は目の前に立てられた木柱を両断することはなく、途中まで食い込んで止まった。剣の主の迷いを代弁するかのように。

「ちっ……」

誰もいない鍛錬場で、ダレットは一人、がむしゃらに剣を振るっていた。木に食い込んだ剣を強引に引き抜くと、再び構えて振り下ろす。

だが、きちんと精神を統一していない今、剣が思い通りに動いてくれるわけもない。自らのもう一つの身体となってくれるわけもない。

当たり前だ。単なるやつ当たりで会得できるほど、剣術などというものは甘くない。それは何にしても言えることだが。

『馬鹿野郎。いいか、自分がきちんと集中したと思えるまで剣は抜くな。抜けば、それは自分に跳ね返ってくるぞ』

何処かで、剣術を習った師匠の声が聞こえた気がした。実際に昔こんなことを言われた事もあったのかもしれない。むしろくしゃすると、とりあえず身体を動かして誤魔化そうとするのはダレットの昔からの癖だからだ。

「……………」

ダレットは大きく息を吐くと、長剣を鞘におさめた。無茶苦茶に振りまわしたせいで、少し刃こぼれすらしてしまったようだ。

剣は自分を映す鏡だ、とつくづく思う。これもまた師匠の口癖だったのだが。

「おー。何だか荒れてるな」

鍛錬場の入り口で、軽い口調で話しかけてくる男がいた。まだ若い、やや赤みがかった金髪の男だ。ダレットの同僚で、こちらも帝国騎士である。

「……アルトか」

同僚の名を呟く。この男、アルト・ストルツファスもダレットと同じ、名門の息子である。痩せ型のダレットとは違い、しっかりと筋肉のついた体格をしていた。

口調こそ軽いが、実際には真面目な性格の男である。ダレットにとっては友人と言って良いだろう。

「お前が鍛錬場にいるのは珍しいな。普通は家で鍛錬してるんだろ？」

どうやら、アルト自身が剣の稽古に来たわけではなく、ダレットの様子を覗きに來ただけらしい。アルトはダレットの横に座りこむと話しかけてきた。

騎士団として合同で稽古することも多いが、その他にも自発的な練習を目的として、王城の一角にある鍛錬場は開放されている。だが、前述の通り、滅多に人のいたためしはない。

その理由は……

「お前こそ何しに來た。ご執心の姫君がいるんだろう？」

要するに、実際の職務はお飾りのような騎士団員でも、その他…

：つまり恋愛沙汰には忙しいのである。美しいと評判の貴族の姫君に何とか会おうと手を尽くしてみたり、あちこちの侍女に手を付けてみたり。

結局のところ、騎士とは言ってもいわば貴族だ。正確には国政に携わる貴族たちと騎士団員は区別されるが、やっていることは大差ない。

ダレットがやたらと暇を持て余し、国王に謁見することを許される帝国騎士でありながら一般の繁華街にお忍びで出掛けたりするのも、実はここらへんが原因なのである。ダレットは恋愛沙汰などまったく興味が持てないのだ、今のところ。

「ああ、昨日ちょっと喧嘩しちゃってな。それで、昨日の今日で会いに行くのも何だか情けないし。こっちから謝るのも悔しいじゃねえか」

照れくさそうに頭を掻きながらアルトは言う。実際、アルトと件の姫君との熱愛は有名な話なのだ。家柄も十分に釣り合うから、そう遠くないうちに結婚するだろうと言われている。政略結婚がほんどのこの御時世には羨ましい話であった。

「それで、俺をからかいに来たってわけだ。いいからさっさと仲直りして来い」

心底面倒臭そうに、ダレットは言った。正直、誰と話すのもうざったいような、そんな気分だったのだ。

「何だよ、つれないな……何か嫌なことでもあったのか？」

アルトがダレットの顔を覗きこむ。ダレットは無言のままだった。あの少女の顔が脳裏をよぎる。同時に、少女の言葉が突き刺すように頭に響いてきた。

嫌なこと、と言うわけでもない。何よりも嫌なのは、この現状から逃れようとすることも出来ない、自分自身だ。

気付かされてしまった。あの、一人の少女に。エルフの血が半分混じった、紫の瞳を持った少女に。

無言のダレットを、アルトがどう思ったかは分からない。だが、

アルトは何か思い出したように言った。

「そういや、お前にも確か縁談があるんだろ？ まあ、俺もお前もそろそろ年貢の納め時だからな。二十二にもなって、まだ独身ってわけにもいかねえしなあ、俺たちの立場からすると」

この貴族社会においては、結婚年齢はそう高くない。政略結婚となると、特に女性は十三、四で嫁がされることも珍しくない。確かに、ダレットのように二十歳を過ぎても婚約者の一人もいないのは珍しい部類に入る。

いや。そんなことはともかくとして、だ。

「ちよっと待てっ！」

ダレットは悲鳴のような声を上げた。アルトに向き直ると、友人の胸倉を掴みかねない勢いでまくし立てる。

「俺は聞いてないぞ、そんなこと！ 大体、ただの噂だろう、そんなこと……！」

暇を持て余している貴族たちの、特に貴婦人たちは他人の噂を種に盛りあがるのが日課のようなものだ。その、ダレットの縁談云々に関しても、そんな噂が曲解を重ねまくって伝わっただけだと、そう思うのだが……

慌てた様子のダレットを、アルトは不思議そうに眺めている。

「いや、ちゃんと決まった話だって聞いたぞ？ ……もしかして、お前だけ聞かされてないのか？」

壊れた人形のように、首をがくがくと縦に振るダレット。そんな話、初耳である。しかも、それがよりにもよって自分の結婚話などと！

一つだけ確認しておかねばならない。ここで半狂乱状態に陥るより先に。

「それでっ！ その話だと、相手は誰だ、相手はっ！」

アルトの肩をがしつと掴み、がくがくと揺すりながらダレットは訊いた。縁談である以上、相手の女性がいるはずである。

「聞いて驚け、それがだな……」



明らかに友人の動揺ぶりを面白がっている様子で、アルトは意地の悪い笑いを浮かべた。もったいぶったように、なかなか次の言葉を言わない。

「だからっ！ 誰なんだ、それはあああっ！」

興奮でほとんど我を忘れている。さすがにアルトもこれ以上放っておくのはまずいと思ったのか、おもむろに一人の女性の名前を口にした。

「カシユラル・レストラード。あの軍部の＜戦女神＞だよ……お前も運がいいな、あれだけの美人と結婚出来るんだから。いいよなあ、さすがに名門中の名門、コルフォース家のご子息だ」

最後のアルトの嫌味はまったく耳に入らず……女性の名前を聞いた時点で、ダレットの思考は活動を停止した。

「結婚？ ……私がか？」

涼やかな声が部屋に響き渡った。口調こそ勇ましいが、その声は紛れもなく若い女性のものである。

「はい。何でもアワード將軍の取り成しと聞きましたが……違うんですか？」

「知らん。私はそんな話は聞いていない」

その女性……カシユラル・レストラードは自分に与えられた執務室の机を指で軽く弾いた。ちょっとした世間話のつもりでその縁談を口にしたその部下は、それが彼女が機嫌の悪いときの癖だと知っている。露骨に脅えた表情を見ると、慌てて部屋から退室した。

「……どういうことだ？」

カシユラルは独り呟く。狭い執務室に、必要以上にその声は響いたが……誰もいない部屋のことだ、遠慮する必要もないだろう。

「……確認、だけはしておくか。どうせ他愛のない噂だとは思うが……あまり広がりすぎると少々厄介だ。まったく、人の噂ほど手の付けられんものもないな」

嘆息し、独り結論を出すと、カシユラルは立ちあがった。

さらり、と長く伸ばした艶やかな黒髪が揺れる。少々機嫌が悪そうに光る瞳も同じく、黒曜石のような漆黑。それとは対照的に、肌は陶磁器のように滑らかで白かった。

それに、何よりも。

少々切れ長の眼に長い睫、形の良い眉。ずっと通った鼻梁。鮮やかな紅の唇。

異性の憧れと同性の嫉妬を同じ数だけ集めそうな、まさに神が創り出した彫刻のような美貌。完璧に整った、色白で端正な顔立ち。今は少々怒りで肌が紅潮していたが、それもまた別の魅力を醸し出している。

いかに美しいと評判の貴族の姫君でもここまでの美人はいないだろう。誰にもそう思わせるだけの美貌を彼女は持っていた。

しかし。

その身に纏うのは豪華なドレスではなく……武骨な、飾り気のないでもない軍服である。濃緑の男物の軍服を、少々大きさを調整しただけでそのまま着ている。それがまた、彼女のめりはりの効いた体型をはっきりと映し出しているのだが。

將軍補佐。それが、彼女に与えられた地位だった。

彼女は何処ぞの名門の姫君というわけではない。正規軍に編入されて八年、実力だけで、しかも女性というハンデを跳ね除けてまで現在の地位まで上り詰めた、まさに叩き上げの軍人だった。

エルゼシア帝国が建国して五十年経っているが、これだけ変わり者の人材も珍しい。実力主義とは言え、男社会である軍部において、將軍のすぐ下の地位に女性がいることは例がない。そしてこれからもおそらくないだろうが。

しかも、それが妙齡の、しかも絶世の美貌と評される人物なら尚更だ。彼女はまだ二十一歳……ダレットとほぼ同い年である。

だが別に、彼女はその美貌で現在の地位を手に入れたわけではない。武人としての武術、部下の統率力、仕事の達成力。あらゆる分野において彼女は並の男たちを凌駕していた、それだけの話だ。

とにかく。軍部一、そしておそらくは王都一の変わり者の美女として有名な女性、それがカシユラル・レストラードだった。＜戦女神＞という二つ名も、その美貌と実力からきている。

カシユラルはすつと立ち上がると、すたすたと歩き出す。その仕草は確かに、優雅と言うよりは勇ましいと言えた。まさに、武人の動き方である。

腰に吊った、少し刀身が反り返った形の剣……俗に刀と呼ばれる武器が、かちやりと音を立てて揺れた。

「父上っ！」

父親の私室に、ダレットは駆け込むなり怒鳴った。

騎士の位を拝命してコルフオース家の屋敷を出てからは、父親の家に戻ることは少なかった。ダレットには姉が三人、そして兄が一人いるが、姉はいずれも結婚して家を出ているし、親と同居している兄がまた、ダレットは妙に苦手だった。出来ればあまり家には寄り付きたくなかったのだが……今回ばかりは仕方がない。

「何だ、騒々しい」

部屋の執務机で黙々と仕事をこなしていた父親は、末息子の突然の乱入にも顔色一つ変えずに応じた。

ゴフセフ・コルフオース。ダレットの父親にして、帝国の宰相を務める人物である。まあ、少々息子が騒いだくらいで動じていては、国の宰相など務まらないだろうが。

「俺に……いや、私に縁談がある、という話を聞きました」

父親の厳粛な視線に射竦められ、ダレットは無意識のうちに背筋を真っ直ぐに伸ばしたまま、硬直したような状態で口を開いた。傍から見たら、人形がぱくぱくと口だけ動かしているようにでも見えなかったかもしれない。

「本当の話なんですか？ ……だったら、何で俺に……じゃなかった、私に一言も説明がないんです！」

父親の前に出た緊張よりも混乱と興奮の方が勝った。父親の机に詰め寄り、ダレットは喚く。

「まあ、待て」

ゴフセフは仕事を一時中断し、こめかみに手を当てて考え込むように言った。眉根を寄せて、何かを思い出すような仕草をする。

「私も確かに、その噂は耳にした。だが言っておくが、私はお前の縁談なぞ了承した覚えはない。大体、何処から聞いた話だ？」

「俺……私は、騎士団の同僚からです」

確か、アルトは決まった話だと言っていた。それなのに父親は了承などしていないと言う。噂話と父親の話、どちらを信じると言われたら間違いなく父親の言葉だが……

何かが引つ掛かる。だが、ダレットは生憎と頭脳労働には長けていない。がりがりと頭を掻き、考え込む。

その時、部屋にまた一人、入ってくる気配がした。ダレットは前から気配を捉えていたので驚きはしないが、ゴフセフは驚いたように顔を上げる。

入り口には一人の男がいた。栗色の髪に緑の瞳。その顔立ちも、同じ鑄型から鑄抜いたかのようにダレットと似通っているが、身に纏う雰囲気だけが決定的に違う。

ダレットの兄、ジェラルドだ。この騒ぎを聞きつけて顔を出しに来たのだろう。

「ダレット」

ジェラルドは弟の行状をたしなめるように言う。

「屋敷の中で走りまわるな、喚くなど昔から言っているだろう。何だってお前はいつまで経ってもそれが直らないんだ」

情けない、とでも言うようにジェラルドは露骨に顔をしかめた。が、元々陰しい顔つきなので、見慣れている者でないとその違いは分からないだろうが。

とにかく四六時中、やたらと厳格な、悪く言えば堅苦しい雰囲気撒き散らす人物、それが兄ジェラルドだった。性格もそのまま、とにかく何につけても厳しい。ダレットも小さい頃から何回兄に叱られたか分かったものではない。嫌いというわけではないのだが、この兄に関してとにかく、昔から苦手意識が抜けない。

ジェラルドは一礼をして部屋に入ってくると、ダレットの隣に立った。これで、コルフォース家の男三人が揃ったことになる。

「私も、お前の縁談が云々、という話は聞いた」

ジェラルドは、とにかく噂話などには興味のない人物だ。その兄

ですら耳にしているのだから、相当その噂は広まっていると思うって間違いないだろう。

「しかも相手は、『あの』カシユラル・レストラードときている。あの女性の手腕は評価に値するし、家柄云々に関してとやかく言う気もないが……」

ジェラルドも困ったように顔をしかめた。

「大体が、話の出所が分からん。それに出来過ぎだ」

狭い部屋の中で、三人が揃って顔をしかめて考え込んでいる。ただし、ダレットは頭脳労働がとにかく苦手なので、本気で考え込んでいるのは父と兄だけだったろうが。ダレットはただ顔をしかめているだけだ。

「カシユラル・レストラードはとにかく有能で通っているし、それは事実だ。だが、家柄がない。元々が一般兵の出身だからな。そしてこちらは、建国時……いや、それ以前の並立時代からの名門ときている。」

よくある組み合わせだ。力があっても家柄がない者が、家柄の名譽を欲しがるという話は。……だが」

ゴフセフはそこで一端言葉を切り、二人の息子を見据えた。

「カシユラル自身がそれを望んだとは少しも聞いていない。それに、あの女性の性格からして、今更家柄なぞ望むと思うか？」

カシユラルは、正規軍からの叩き上げだ。現在の地位を手に入れるまでには、さんざん、名譽ばかりを重んじる人間たちと戦ってきたことだろう。だったら、その『家柄』に固執し、それだけの人間を毛嫌いすることはあっても、自らも同じようになろうとは決まらずに思っている。

「彼女は軍部の人間ですからね。管轄が違うから、よくは分かりませんが……下手をすると、我が家の権威に関わりかねません。一応調べてみた方がよさそうですね」

ジェラルドが父に向けて言った。ゴフセフも、無言で頷く。当の本人だけが、何やら取り残されている。

父ゴフセフと同じく、ジェラルドも文官として王城で勤めている。元々コルフォース家は文官を中心に輩出してきた家柄であり、ダレットのような武人は珍しいのだ。父も兄も嗜み程度には剣を習っているはずだが、ダレットのようにそれを本職とはしていない。

「とにかく、ダレット、お前は家に戻れ。出来るだけ目立つような行動は控えた方がいい」

ジェラルドが弟に言った。もつとも、目立つような行動など普段からするようなダレットでもなかったが。

王宮騎士団内でも、ダレットは特に目立つような存在ではない。王宮騎士団という存在自体にさほど手柄など立てるような機会などなかったし、恋愛沙汰にしても、ダレットは興味がないので女性に関する噂など今までたつたためしがない。

とにかく、ここは自分よりは父と兄に任せた方が確実である。人にはそれぞれ、得意分野というものがあるのだ。

「……分かりました」

ダレットは頷くと、父親の部屋を後にした。

「はああああ……」

一気に緊張感から解放され、ダレットは大きくため息をついた。自分の父と兄とは言え、あの二人の前に出るととにかく緊張して気疲れする。

コルフォース家の屋敷を出たとは言っても、今のダレットの家……元々は彼の母親、ゴフセフの妻の持ち物だった屋敷である……はさほど離れていない。面倒なので、ダレットは特に供も連れずにやって来ていた。もつとも、現在ダレットの家に、供に出来るような使用人はいなかったが。

夜の暗い道に、立ち並ぶ家々から漏れる明かりがかすかに陰影を作っている。そんな静かな情景を眺め、ダレットはふと思いついた。気がつけば自分の家の前まで来ていたが、家には入らず、ダレットはぼんやりと夜の街を歩き出した。

(アワード將軍……だと?)

カシユラルは執務室で一人、机をこつこつと叩いた。考え込むときの癖なのだが、今はそれを咎めるような人物もいない。夜遅くのことなので、部下たちも帰宅、あるいは宿舎に戻ってしまった。だが、カシユラルは一人軍の本部の部屋で書類と格闘していた。目の前には、やたらと細かい数字がずらずらと書かれた書類が、文字通り山になって積まれている。それに片っ端から目を通し、目に付いたものに印をつける。その繰り返しだ。

彼女が今やっている仕事。それは、公金横領の捜査だった。公式なものではなく、彼女自身が個人的にやっていることである。

気がついたきっかけは大したこともなかったのだが、こと不正となると調べ上げないと気が済まない性質である。暇な時間を利用しては、軍部の予算、決算の書類に目を通していつているのだ。彼女の立場からすれば、機密書類の謁見と言えどそう手間はかからない。個人的に捜査を続けて数ヶ月。やっと、その犯人が見えてきたのだ。それが……彼女の上司の一人、アワード將軍だったのである。

そのアワード將軍が、何故、今自分の縁談話などを吹聴して回る? (……まあ、どうせろくなことではないのだろうが)

時期が時期だけに、きな臭いことこの上ない。そろそろ証拠も集まってきたおり、告発するまでの詰めもできてきていた。

(ふうむ……)

事務作業を一時中断し、カシユラルは立ちあがって伸びをする。

そのまま立ちあがって歩き出すと、別の資料室に向かった。

こちらは、主に人事に関する書類を納めた書庫である。その中から、アワード將軍に関する書類を引っ張り出した。

そこそこの名門の出身であり、ほとんど年功序列の賜物で現在の地位まで出世してきている。そのせいで、個人的な功績はほとんどない。カシユラルは思わず眉をひそめる。一番嫌いな型の人間だ。

ざっと目を通し、カシユラルは書類を納めた。気になった情報は、この書類にはなさそうだ。



(……となると……)

別の書庫に行かなければならなくなりそうだ。カシユラルは面倒臭そうに顔をしかめ、そしてまた歩き出した。

縁談話は、どうやら事実になりそうであった。

ダレットの父、ゴフセフに正式な話の申し込みがあったのである。ただし、話を持ち込んだのはカシユラルではない。彼女の上司に当たる人物、アワード將軍である。カシユラルの方にも、アワード將軍から話が行ったらしい。

ゴフセフには断る理由が見つけれなかった。カシユラルの美貌、手腕、地位、それらは決してコルフォース家には不利益にはならないのである。

カシユラルにしたところで、上司からの話をそう簡単に突っぱねるわけにはいかなかった。せいぜいが、「考えさせてくれ」と先延ばししたくらいである。

何よりも、あのばら撒かれた噂。あれが痛かった。アワード將軍の仲介で二人が結婚する、そうほとんどの人間が思っている。しかし、それが実は単なる噂だったと知れば、將軍の顔に傷がつく。話をばら撒いたのは將軍自身であったのだ。

ゴフセフにしてもカシユラルにしても、露骨に重要人物の顔に泥を塗るような真似は出来なくなってしまうており……気がつけば、言い逃れがきかなくなっていたのである。

「畜生……畜生っ！」

夜の街を、ダレットは当てもなくうろろと歩き回っていた。苛々だけが募るが……また剣を振り回すわけにもいかない。今度こそ他人を、自分を傷つけてしまう可能性すらある。刃物というものはそういうものだ。

自分の知らないところで、自分の人生が決められてしまう。そう考えれば考えるほど、不快感だけが膨れ上がっていく。

あのカシユラルという女性にしたところで、ダレットはせいぜいが顔と名前を知っているという程度の間柄でしかない。王宮騎士団と軍部は管轄が違うためだ。カシユラルの美貌は知っているし、男として美人と一緒になれるというのは嬉しい話ではあった。

だが……

「何か、引っ掛かるんだよな。この話」

普通とは状況が逆だ。普通は正式に話が決まった時点で、周りに話が行くものだと思うのだが。その過程で少々話が漏れることはあっても、仲介した本人が、話が決まる前からああもおおっぴらに話すものだろうか？

あれではまるで……

(……この話が流れないように、仕組んだみたいじゃないか)

となれば、アワード将軍とやらには、何が何でもカシユラルと自分を結婚させたい事情があるということになる。だが、そんなものは思いつかない。大体がアワード将軍にしたところで、カシユラルと同様、面識などほとんどないのだ。父や兄は何回か話したことくらいはあるだろうが。

「訳が分からないな……」

どのくらい歩いてきたのだろう。立ち止まり、ふと、呟いたその時。

(……気配)

夜のことだから、姿など見えない。だが……確かに、『誰か』がこの近くにいます。

(何処だ?)

目を閉じ、一点に意識を集中。意識を絞り込む。心の何処かが、ぞっとするほど冷え込んでいくような、そんな感覚。

目を開ける。今度ははっきりと、夜の街を疾走する『何か』が見えた。黒い外套に身を包んだ、小柄な人影。

(どう考えても怪しいよな。あんな黒い服を着て、気配まで殺して) 普通なら、もし昼間に目の前を通り過ぎられても気付かないよう

な……それほどまでに、人影は完璧に気配を消していた。それを察知できたのは、ダレットだからだ。そんな日常生活にまるで役立たない芸当は、昔、さんざんに仕込まれている。

帝国騎士として、尋問くらいはしても罪にはなるまい。

そうと決まったら、ダレットの行動は速かった。

足元から小石を拾い、人影に投げつける。小石程度で動きを止められるとも思わなかったが、人影は自分の行動に絶対の自信があったのだろう。殺した気配が一瞬、乱れる。

そこに突進し、外套を掴んで一気に引きずり倒す。起きあがられるより先に、身体を地面に抑えつけた。ダレットは体術にも通じているから、この小柄な人物ではまず振りほどけなどしないだろう。

「……何者だ？」

低く誰何の声を発しながら、ダレットは片手で人影のかぶったフードを剥ぎ取る。が、次の瞬間にその顔が引きつった。

自分が地面に抑えつけている人物。それは紛れもなく、以前に出会ったあの紫の瞳の少女であったのだ。

「……………」

少女……キルファも露骨に顔を恐怖の色に染めた。よりにもよってまた、あの帝国騎士と出会ってしまったのだ。

「お前、何やって……」

ダレットが呆然と呟く。それでも、掴んだ手首は離そうとはしない。キルファが逃れようともがくのを、全力で抑えこむ。

「放っておいてよっ！」

この静かな夜の街では、特に少女の高い声は響く。キルファは思わず叫んだ後、慌てて声の調子を抑えた。

今のキルファに何を聞いても答えはしないだろう。ダレットは黙って、キルファの走っていった方向を眺めた。

そちらには、軍部の宿舎があった。普段なら気を止めなどしないだろうが……

カシユラル・レストラードは、將軍補佐となった今でも自分の邸宅を持たず、宿舎の一室で生活している。それは彼女が独身であるということ、そして権勢というものに無頓着であるというのが理由なのだが。ダレットも、縁談話があつて以降、それくらいは耳にしている。

「カシユラル、か……？」

ダレットにしてみれば、単に思い出したように呟いただけであつただけなのだが。キルファの無表情に、かすかに動揺の色が混じる……まるで、目的を見抜かれたかのように。

「……ちよつと、乱暴な手段になるが、悪いな」

抑えつけたキルファの外套を強引に引き剥がす。ここに警衛兵がいれば間違いなく捕まってしまうようなやり口ではあつたが、生憎と乱暴狼藉の主は、警衛兵より遥かに地位が上だった。

転がり出てきたものは、何本もの投擲用ナイフ、腰の後ろに差したやや小振りなナイフ、投針。盗賊が持っている基本装備。そして……

「……………」

乱暴に引つ張り出したお陰でくしゃくしゃになった一枚の紙片を手にも、ダレットは首を傾げた。普通の紙片とは違う。暗いので書かれている内容は読むことが出来ないが、紙に施された細かな装飾は、間違いなく自分に馴染みの深いもの……貴族の使うような紙だ。しかも、署名までされているようであつた。

月明かりだけを頼りに、ダレットは手にした紙に目を凝らす。せめて、署名だけでも読めればと思ったのだ。

「……アワード將軍？」

署名の主は、そうなつていた。

「……何なんだ？　これは」

低い声でダレットは囁く。同時に腰から短剣を抜くと、まだ抑えつけたままのキルファの首筋に突きつけた。あまりやりたくないのだが、こればかりは仕方がない。

だが、それでもキルファは話そうとはしなかった。話せば自分が殺される……そんな切羽詰った印象すら受ける。

「うーん……お前の悪いようにはしないから、せめてこれが何なのかだけでも話してくれないか？」

「ここでもう抑えておける時点で十分に悪いわよ」

キルファが無然とした顔で言う。

「まあ、そりゃそうだが……」

ダレットは呟くと、キルファを抑えつけていた片手を離れた。片手だけで少女の身体を身動きできないように押さえつけていたことになるが、ある程度体術に通じていれば、可能な芸当だ。だが、首筋の短剣はそのままである。

キルファも、ある程度ダレットの技量を理解しているのだろう。

迂闊な動きはせず、黙って立ちあがる。地面に転がったナイフに視線を向けるが、拾うより先にダレットの剣先が迫るのは確実だ。

「お前……別にスリだけやって生計を立ててたわけでも、ないんだな？」

「生憎と、生活にかかる金ってのは多いのよ。あんたみたいなお坊ちゃんには分からないだろうけどね。そりゃスリなんかもやるけど、他にも色々やるわ」

ようやくキルファが口を開いた。肝心な部分は話そうとはしなかったが。

「そのナイフやら何やら、それに気配の殺し方。素人にしちゃ多すぎるし、手馴れすぎてるな？」

「スラムでの必須技能よ。自分の身くらい自分で護らないといけないからね。油断なんて出来ないから、こうやっていつも携帯している」

嘘だ。ダレットは直感的にそう思った。

「まさか、暗殺……」

呟くダレットに、キルファが悲鳴のような声を上げた。

「冗談言わないで！　いくらスラムのハーフでも、人殺しで金を稼ぐ真似なんてやらないわよ！」

人殺し。その一言には、単なる言葉のあや以上の何かが込められているような気がした。それが彼女の矜持なのか、それとも……

「じゃあ、暗殺まではやらないにしても、脅しや盗みなんかだったら……」

よくある話なのだ。例えば夜中に貴人の寝室に忍び込み、脅しの文書なりナイフなりを置いて行く。それはつまり、「いつでも貴様を殺せる用意がある」という意志表示となる。

凶星らしい。キルファの表情が強張った。無表情を装ってはいるが、確かに動揺している。

それならば、彼女があれだけ気配を殺す術を身に付けている事も、万が一のためにナイフを大量に携帯していることも納得が行く。

(……待てよ)

今回も、それと同じことを彼女がやろうとしていたら……？

手に握り締めていた先程の紙片をもう一度凝視する。細かい文字を、必死で月明かりの中で読もうとする。

が、その努力は横からの声であっさりと無駄に終わった。

「アワード將軍から、カシユラル・レストラード將軍補佐へ。」

これ以上の詮索は命に関わる。命が惜しかったら出すぎた真似はするな。おとなしく結婚して家にでもこもっている……だってさ」

文書に目を通していたのだろう、キルファが横から懇切丁寧に文書を諳んじてくれた。

「カシユラルと、アワード將軍の間に何かあったのか……？」

ダレットは首を傾げる。

「まあ、大体想像はつくんだけどね」

キルフアが肩をすくめて言った。

「お偉方ってのは、頭良さそうに見えて意外と単純なのね。特にこのアワード將軍なんて、頭悪すぎ」

淡々とキルフアが言うが、その口調には、はっきりと分かるほどの嫌味がこめられていた。

「要するに、アワード將軍がお前に、これをカシユラルのところに脅しに持っていくように依頼したわけだな？」

国でそれなりの地位にある人物は、誰もが裏の世界とも繋がりを持っている。清濁併せ呑む信念がなければ、到底国政に携わることなど出来ない。

これ以上の言い逃れは聞かないだろう。懇切丁寧に解説したのは自分であるにせよ、自分が言わなくともいずれ分かることだし、何よりダレットに自分は勝てない。逃げられない。それだけは確実だった。

「まあね」

キルフアは素直に認める。

「そういうわけで、それ、返してくれない？ あたしとしては仕事なのよ、それが」

キルフアが紙片……脅しの文書を指差して言った。

「今から、カシユラルのところに忍び込むつもりか？」

「まあ、それが仕事だし」

ダレットの問いに、キルフアは何の気負いもなしに答える。瞬間、ダレットの顔が引きつった。

「止めておけ！ 下手をしたら殺されるぞ！」

必死の形相でそれを止める。だが、キルフアは顔色一つ変えない。「カシユラルが、何で＜戦女神＞なんて呼ばれてるかは知ってるか？」

「確か……とんでもなく強いんでしょ。軍のそこらへんの兵士たち

よりもずっと」

「そんな人間のところになんか忍び込んでみろ、下手すれば殺されるし、失敗して捕らえられたら間違いない……」

「今度はアワード將軍の方に殺されるってわけね。口封じに」

淡々と、それこそ他人事のようにキルファは言った。

「お前、分かってて……」

「所詮、お偉方にしてみれば、あたしなんて捨て駒なんですよ。成功すればそれでよし、失敗しても口を封じればそれで終わる。けどまあ……あの頭悪すぎの將軍様は、あんたの登場までもは予想出来なかっただろうけど」

キルファが鼻で笑ったような気がした。確かに、自分が二度もこの少女と出会ったのは偶然以外の何物でもない。けれど……

「お前、知ってて……それでも、やってるのか？ そんな、仕事を」「あんたには分からないだろうけどね」

キルファは刃の如き冷ややかな視線でダレットを射抜く。月明かりに、紫の双眸が怪しく光った。

「この大陸で、ハーフの居場所なんて何処にもないの。それこそ、誰もいない場所にでも行かない限りね。それでも、居場所もなくても生きていこうと思ったら……それくらいの覚悟は要るの。」

人を蹴散らしてでも、生きていこうとする覚悟が。だったら当然、蹴散らされる覚悟もしなくてはならない。それだけの話」

現在、このロンバルディア大陸には二つの種族が存在する。一つはダレットのような大陸を支配する人間、そしてエルフ族。二つの種族は長い間互いに争い合い、今だに歩み寄る気配はない。

そのこすれ合う二つの種族の間に生まれた存在に、居場所などあるわけがないのだ。ただ、その軋轢に押しつぶされるだけである。

キルファの瞳に秘められた哀しい覚悟。ダレットには、その想いは想像すら出来なかった。今まで、ただ安穩とした人生を過ごしてきた自分には。

「……………」



ダレットはしばし黙考し……そして、言った。

「もしお前が、この仕事をしくじるなり、何なりすれば……どうなる？」

「しくじらなくても殺されるわよ。多分、刺客は来るんじゃないかしら。多少なりとも陰謀を知ってるわけだから。まあ、今までもそういうことはあったけどね。全員返り討ちにしたけど」

「返り討ちって……」

「だから、殺してはいないわよ。ぼこぼこにしてその服ひん剥いて、縛り上げて大通りに転がしとくだけ」

ふとダレットは、似たような話を聞いたのを思い出した。カシユラルが正規軍に編入されてしばらくした頃、彼女の美貌に良からぬ感情を抱いた連中がいたらしく、彼女を強引に自分のものにしようとしたそうだが……やはり、返り討ちにされて似たような目にあい、軍本部の玄関に逆さ吊りにされていたらしい。その後間もなく、その兵士は退職したそうだが。それ以来、彼女に手を出そうなどという命知らずはいなくなったらしい。

「……女って怖いよな」

ふと呟く。

「こっちだってただ利用されてるだけじゃないのよ」

「……いや、そういう意味じゃないんだけどな」

ダレットは曖昧に笑って……引きつった笑いではあったが……話を続ける。

「さっき言ったよな？ お前、この話、大体見当が付くって」

「まあね。でもまあ、少し考えれば分かりそうなもんだけど」

「だったら……取引を一つ、する気はないか？」

「……………」

思いがけないダレットの言葉に、キルファは眉をひそめた。もともとダレットは頭脳労働が得意ではないので、必死で頭を回転させながら話を続ける。

「俺が、そのアワード將軍の刺客からお前をかくまう。その代わり

に、お前はその真相の見当を話す。……これでどうだ？」

ダレットが、にやりと笑った。キルファが、意外とでも言った顔をする。彼女にしてみれば、刺客は脅威ではあるのだが。

「……何であんたが、そんなことを知ろうとするの？」

「その文書にあったろ。結婚でもしておとなしくしている、って。……その結婚の相手ってのが、俺なんだよ」

「そう言えば、ね」

露骨に迷惑そうな顔をするダレットとは対照的に、キルファは何かを思い出したような顔をする。この類の仕事を引き受ける時に、保険としてある程度の情報を集めておくのは暗黙の了解である。文書を読んでおくのもその延長だ。

何より、自分の首筋にはまだダレットの短剣が突き付けられたままなのだ。これでは取引などではなく、脅しだ。否、といえるわけがなかった。

「分かったわよ……」

不承不承頷くキルファに、ダレットは我が意を得たりとばかりに頷いて笑った。

取引というのはただの詭弁に過ぎない。何故かは分からないが、この少女にこれ以上危険な橋など渡って欲しくない……そう思っただけだ。本人がそれを自覚しているなら尚更に。

もっとも……本人ははっきりと自覚してはいないが。

迷惑そうな顔のキルファとは対照的に、ダレットの顔は嬉々としていた。

「坊ちゃん、お願いですから夜、一人で出歩くのは危険だからお止め下さいと……」

「だからその呼び方やめろ。それに、俺の剣の腕前は知ってるだろ」  
相変わらずのエルザとダレットのやり取りを、キルファは横で興味もなさそうに聞いていた。

この小さな家……もっとも、貴族の感覚での話だが……に入るの

は二度目だが、どうにも馴染まない。まあ、庶民には一生涯理解出来ない感覚なのだろうが。

落ち着かないらしく、きよろきよろと部屋の調度を見回している。ダレットもあまり華美なものには興味がなさそうだから、エルザが整えているのだろう。落ち着いた色合いで統一されている。

この家は元々ダレットの母親の持ち物だった家だ。その頃から大して変わってはいない。日々の手入れが良いので、年月を経たもの特有の深みと落ち着きを醸し出している。

そういうわけで、決して華美な部屋ではないのだが。それでも馴染めないのは、日々の生活のせいだろう。

（……何考えてるのかしら、いや、そもそも何者なのよ、この男……）

キルファは、横目でダレットを胡散臭そうに眺めたが……この状況からは逃れられそうもなかった。

「……お前、銀髪だったんだな」

キルファを眺め、ダレットが呆れたように言った。

「何だと思ってたのよ」

キルファがとにかく落ち着かない様子で言う。困りきった顔で、自分の着ている服を見下ろしている。

キルファを自分の家にかくまう。そう簡潔にエルザに説明したところ、当たり前の話ではあったが、彼女は猛烈に反対した。それをダレットが説得して……もとい、ごねて押し通した。それが昨夜のことである。

キルファの格好があまりにも薄汚いので、エルザがその身体を徹底的に洗い、ついでに服や髪を整えてやっているのである。ハーフのキルファに最初は気味悪そうな視線を向けていたが、今は嬉々として櫛を動かしている。何だかんだ言って、女の子を着飾らせるのが楽しいのだろう。キルファにしても、最初こそ暴れ出しそうな気配だったが、今はおとなしくしている。

それを横で眺めていたダレットの台詞が、先程の言葉である。確かに、さっきまではキルファの髪はぼさぼさで汚れており、見た目は埃のような灰色。元の色など分かるわけもなかった。

この大陸では、銀髪のような色の薄い……ほとんどない髪は珍しい。大抵が黒や茶色、金色などである。紫の瞳に加えてこの髪の色では、苦勞も並大抵ではなかっただろう。

「……こんなもんですかね。髪がもう少し長ければ、束ねられるんですけど」

髪を整えていたエルザが、満足げに言った。キルファは尚も首をひねりながら、鏡の中の自分を見下ろす。艶やかな銀髪を短く整え、小奇麗な服を着た自分がいた。

この家にはダレットと住み込みで働いているエルザ、他には数人

の使用人しかない。そんなわけで、女物の、しかも子供の服などなかったの、仕方なしにエルザが急遽調達してきた。

「可愛い、可愛い」

ダレットが適当に手を叩く。元々彼は一番下の弟なので、歳の離れた妹でもできた気分なのかも知れない。それを、キルファは半眼で睨みつけた。

確かに、こうやって格好を整えれば、キルファはそこらの貴族の姫君よりもよっぽど可憐な容姿をしていた。細い線で描かれた整った顔立ちに大きな紫の瞳、艶やかな銀髪、小柄で華奢な身体。女としての豊満さは将来に期待するしかないが。

気が強そうな鋭い瞳をしているが、それもまた凜とした気品に見える。豪華なドレスでも着せれば、立派に貴族の息女として通用するだろう。

(……カシユラルも、昔はこんな感じだったのかな)

ふと、ダレットはそんなことを思う。もつとも、カシユラルの顔を見たことなど数回しかないが……一度見れば忘れられない美貌だ。「これならまあ、傍から見たら使用人にでも見えるでしょう。まさかこの家にこの子がいるとは思わないでしょうから、まず見つかる心配はないと思いますわ」

キルファに着せてあるのは地味な……それでも、キルファ自身の感覚からすると高級品に見えたが……衣装だ。もしアワード将軍が通りかかっても、小間使いの少女とでも思うことだろう。キルファと直接、アワード将軍が接触したわけでもない。

「ま、そうだな」

ダレットも納得し、とりあえず『キルファ隠蔽作戦』は幕を閉じた。……もつとも、ダレットとエルザが遊んでいただけのように見えなくもないが。

「それで？ お前が言う、この騒ぎの真相ってのは？」

ダレットの視線がずっと鋭くなる。それはまさしく刃となって、キルファを見据えた。

これ以上の詮索はするな。命が惜しかったら出すきた真似はせず、結婚して家にこもっている。

脅迫状にはこう書かれていた。

「……だから、つまり、アワード將軍ってのはそのカシユラル・レストラード將軍補佐に何かしらの弱みを握られてるってことでしょ」  
こともなげにキルフアは言った。

「それが何なのかまでは分からないけどね。まあ、ろくなことじゃないでしょ。それで、あたしに脅迫状を持ちこむように依頼した」  
キルフアはソファに座り、その柔らかな感触を楽しむかのように深く身体を沈めながら説明する。

「……そこまでは分かる。だが、何だっけいきなり結婚話なんになる？」

ダレットががりがりと頭を掻きながら言った。頭脳労働に慣れていない頭が、過労で倒れそうな気ずらす。

「普通、女の人が將軍補佐なんて重要な地位にあることなんて……いや、人前に出るようなことすらまずないでしょう？」

確かにそうだ。ダレットの母や姉たちも、滅多なことでは人前になど出なかった。むやみに高貴な女性が人前に姿をさらすことははしたないとされているからだ。

カシユラルにそれが当てはまらないのは、彼女が名門の出身ではないからだ。一般兵からの叩き上げとして、彼女は存在している。

「カシユラルは名門の出身なんかじゃない。だから、現在の状況を黙認されている。……卑しい身分の出身の女風情が、ってね」

皮肉な笑いを浮かべてキルフアは言った。確かに、軍部では彼女の力量を認め、その美貌に惚れ込むような人間が多いが、その身分故に軽蔑しているような人間も、特に高位の人間には少なくない。

「でも、ここでカシユラルが結婚したとする。名門中の名門の息子とね。そうして、名門の一族の仲間入りをしたとしたら……そうしたら、カシユラルもいわゆる『貴婦人』の範疇に含まれるわ。それ

でも、現在の地位が維持できると思う？　それを、貴族社会の慣習が許すと思う？」

「……………」

盲点だった。ダレットは目を見開き、横で話を聞いていたエルザも意外といった顔をする。

「確かに……名門の貴族の夫人が軍部で將軍補佐なんてやっているなんて前例がない。いや、今も十分ないが……さすがに、それは許されない」

カシユラルの存在が目の上のたんこぶのような人間たちが考え出した、彼女を排除する手段。それが、彼女を何処かの名門の息子と結婚させてしまうことだったのだ。

「アワード將軍にしてみれば、彼女が弱みを他人に漏らすより前に彼女を排除したい。カシユラルが何処まで話を知っているのか、そのところはよく分からないけど……だから、急いで結婚させて引退させてしまおうとした。『貴婦人』となったら、出歩くことすらままならなくなるからね。あんたの言う結婚の噂が何たらってのもつまりはそういうことだと思うわ」

確かに、あの噂のお陰で、父ゴフセフもカシユラルも逃れられなくなってしまったのだ。

「……じゃあ、俺の名前がそこに出てきたのは……」

「多分、あんた自身、いや……コルフォース家が何か関係していたから、って訳じゃないと思うわよ。名門中の名門で、適齢期で、ついでに婚約者の一人もいないいちょうど良い存在ってのがつまりあんただった、それだけの話だと思うわ。」

……ついでに言えば、あんたの親父さんは宰相でしょう？　その息子の結婚の仲介をしたとなったら、権力も人脈も増えるだろうしね」

「……………」

淡々と語られる真相に、ダレットは拳を握り締めた。

自分が何かしたわけでもない。ただ『コルフォース家』という名

前が問題だったのだ。自分でなくとも、誰でも良かったのだ。例えば、あの友人のアルトでも。……まあ、彼には婚約者がいるが。

誰でも構わない。ただ、ちょうど都合が良かったのが自分だった、それだけの話だった。

だったら。

「だったら……『自分』は。『ダレット・コルフォース』とは……一体何なのだ？」

これでは、王宮騎士団で感じていたことと何ら変わらないではないか。何も自分である必要などない。『自分』が存在する意味などない……

「……………っ！」

ダレットは拳を机に叩きつける。それを、キルファが不思議そうな顔で覗き込んでいた。

「……公金横領？」

ダレットは父の言葉を口の中で繰り返した。

ダレットは父親に呼ばれ、コルフォース家の屋敷を訪れていた。

兄、ジェラルドも側に控えている。前回と同じ状況だ。

「ああ。少々、軍部の方に探りを入れてみた。アワード將軍には、公金横領の疑いがあるらしい」

「……だったら、何だってそれを告発しないんです？」

「証拠がない」

ジェラルドの言葉に、ゴフセフは苦々しい口調で答えた。

「よしんば証拠があったとしても、自分の上司を告発しようなどという人間はそうはいないだろう……そうだな、あのカシユラル・レストラードでもない限りは」

キルファの予想した通りだ。ダレットは思わず背筋が凍るのを感じていた。

「だったら……」

ダレットは、キルファの推理した真相をぼつり、ぼつりと語る。



さすがに切れ者で通っている父と兄でも、そこまでは考えが及ばなかったらしい。語るにつれて表情が変わって行く。

いや、キルファが真相に感付いたのは、貴族社会というある種の閉鎖社会の外にいる存在だからだ。ダレット達が当たり前だと思っていることでも、キルファには不思議に映ることも数多くあるのだろう。

キルファの話したことはあくまで推理であり、証拠などないのだが……その信憑性は疑う余地がない。

もつとも、キルファのことは伏せておいた。もし彼女のことを口にしようものなら、お堅い兄が「それはそれ。これはこれだ」などと言って、キルファを警衛兵につき出しかねない。とにかく、この兄は『馬鹿』と『超』が付くほどの真面目人間だ。その分、融通も効かない。父はそういうわけでもなかったが。

「そういうことか……だったら、特に我が家にとっての害はない。焦る必要もない。だが……」

そこで、男三人は顔を見合わせた。父と息子二人の視線が、重なる。

「気に食わないな」

ゴフセフが、三人の心情を代表して呟いた。

「事情は読めました……：よりにもよって我が家の名前が利用されるとは思いませんでしたね。あの將軍、特に功績もなかったはずですが、悪知恵だけは働くと見えます」

ジェラルドも苦々しげに呟く。もつとも、実は彼が言うほどに厳密な策略でもなかったのだが。

いくらカシユラルを急いで結婚させて引退させようとしても、彼女がそれまでに証拠を集め終わり、告発してしまったら意味がない。しかし、それでも多少の時間は稼げるだろうから、その間に証拠の隠滅でもするつもりだったのだろう。

ダレットは黙ったままだ。

（思惑は読めた。策略も分かった……：だが、どうする？　これじゃ

あ、あの將軍の思惑通りに結婚させられて、終わりじゃないか)

肝心の打開策はまったく見えないのだ。アワード將軍とやらには特に何の接点もないが、ただ利用だけされてたまるものか。

根本的な打開策は二つ。その公金横領とやらの証拠をばら撒いてやるか、それとも縁談を消してしまうか。

前者はあまり意味がない。縁談自体は既に成立してしまっている。更に悪いことに、父も兄も縁談自体には特に不満がないらしいのだ。たとえアワード將軍が失脚したところで、結婚は予定通り行われる。彼らはカシユラルの技量を認めている。家柄云々に関しては、特に何も言う気がないらしい。反対してくれたら、そちらの方が有り難かったのだが。

父と兄にしてみれば、今までずっと独身だった息子、もしくは弟がようやく身を固めることになり、かえってほっとしているのだろう。ジェラルドは既に妻も娘もいる。

だが。

(俺はまだ結婚なんてする気はないんだ、正直なところ)

この貴族社会では、政略結婚が当たり前だ。アルトのように恋愛結婚が実る場合もたまにはあるが、ほとんどは本人の意思など関係なしである。『自分』はどうでもいい。これでは……この策略にはまることと、何ら変わらない。

我侬だと分かってはいる。分かっている……納得は出来なかった。少なくとも、今のダレットには。

だったら、後者しかないのだが。どうにかして、この縁談を破談にしてやる方法……

キルファは、「ちょうど良い、名門の息子だからあんたの名前が上がった」と言った。だったら、その「名門の息子」がいなくなっってしまったら……?

(……………!)

何かが……ふっと、一瞬だけ光が見えた気がした。それはぼんやりとして形を取らない。だが、ダレットの心の中に確かにそれは存

在し、大きく膨らんでいく。

（そうだ。これなら。これなら……將軍の裏もかける。この下手な策略も潰してやれる）

自分の思いつきに、ダレットは内心手を叩きたい気分だった。が、父と兄の手前、それだけは辛うじてこらえる。

「とにかく、事情だけははつきりしたことですし……それでは、失礼します」

はやる心を必死に抑え、ダレットは唐突に父の私室を後にする。後には、ゴフセフとジェラルドだけが残された。

「……ジェラルド」

ゴフセフは、啞然としている長男に話しかけた。

「今のダレット。……どう思う？」

「何か隠してますね」

淡々とジェラルドは言う。

「さっきのあの表情。何かいたずらでも思いついたときの顔そのものですよ。あの顔は小さい頃から変わりませんからね、あの弟は……それに」

ジェラルドの険しい表情が、一段増す。ゴフセフも言わんとしていることは察したのか、黙って先を促した。

「弟は、それほど策略だの何だのに長けてはいません……情けないことにね。だから、王宮騎士団への入団に賛成したのですが。さっきの、あの話はおそらくは本当でしょうが……ダレットにあれを教えたのは、おそらく別の誰かでしょうね」

同感だとしても言うように、ゴフセフが頷いた。

「その誰か、が誰なのかまではそれこそ見当もつかんがな」

まさかそれがスラムの少女、しかもハーフなどとは二人とも想像すらしなかっただろう。

「けれど」

ジェラルドが、ふと険しい表情を和らげた。

「単なる私の勘ですが。その『誰か』は、おそらくダレットにとつ

て害になる存在ではないでしょう……むしろ、良い意味で刺激になる可能性すらある。ああ見えて、人の性質には敏感ですからね、ダレットは。その弟が、事情を話すまでに信用したのなら」

「……そうだな」

ジェラルドの顔。いつもの険しい顔つきに混じった柔らかさ。それはまさに、『兄』としての顔だった。ゴフセフも、息子の言葉に頷く。

「後は、あのダレットが何をやらかすか、だ」

苦々しげにゴフセフは言った。

「どうせ、ろくなことではないでしょう。我々としては、せいぜい後始末の準備でもしておきますか」

「……そう、だな」

ジェラルドの達観したような、諦めきったような言葉に、ゴフセフは大きくため息をつき、こめかみに手を当てながら頷いた。

「……本気？」

父親に呼ばれたとかで出かけたダレットが帰ってきたのが夜遅く。やたらと嬉々とした表情のダレットを不審がったキルファが問いかけたところ、ダレットは更に楽しそうに自分の『思いつき』を語った。

その後にキルファが呟いたのが、先程の言葉である。

「ああ。これなら将軍の変な策略とやらも、全部御破算に出来るだろう？ それでいて簡単。完璧じゃないか」

「いや、あのね……」

もはや何を言う気も起こらず、キルファはめまいのする頭をおさえてソファに身体を沈めた。ここにエルザがいなくてよかったと思う。彼女がこんな話を聞いたら、気絶どころでは済まないだろう。

（だから。一体何者なのよ、この男は）

今まで心の中で何回も呟いた言葉を、また呟く。それしか出来ない。浮かんでくる言葉はそれだけしかない。

（名門コルフォース家の末息子。王宮騎士団団員。……まあ、そこまではいいわ、そこまでは）

必死で頭の中の情報を整理する。いつもは回転の速い頭だが、今ばかりは活動するのを拒否しているような感覚すら受ける。

（それで。それでいて、何で出てくる発想が、こんななのよっ！）

内心、絶叫する。が、ダレットがびっくりしたような顔をした。

……どうやら、知らず知らずのうちに口にしてしまっていたらしい。

（ああああああああ）

もう、言葉を紡ぐことすら脳が拒否している。スラムで生活すること二年、修羅場もさんざん潜ってきたし、信じられないような光景も見た。だが……

ここまです予想を裏切る男など、見たこともない。いや、想像すら

しなかった。

ずるずるとソファから身体が滑り落ちる感覚を味わいながら、キルフアはダレットを見上げる。嬉々としてダレットは立ちあがり、早くも『準備』を始めそうな様子だ。

「いや、あの……考え直す気、ない？」

他人事ながらさすがに気が咎めるのか、キルフアはおずおずと言う。だが、今のダレットが聞きいれる筈もない。

「何でだ？ それに、これが終わったらお前も刺客に狙われることもなくなるだろ？ だったら、少し手伝え」

確かに、自分の得意分野ではある。それは確かだ。ついでに、多少は命の安全も確保できる。悪い話ではない。が……

（ああああああああああ）

まためまいがしてくる。目の前の優男が、何やら得体の知れない化け物にすら見えてくる。

しかし。ここで断れば、この男は一人でもやりかねない。だったら、自分がついていった方がまだましかもしれない。

「……分かったわよ」

キルフアは不承不承、頷いた。

誰もが深い眠りについていよう、深夜。

こそこそ動く見るからに怪しい人影と、赤々と燃え上がる松明があった。

夜の闇にもはっきりと見えるような、豪華な邸宅。さすがにダレットの実家、コルフォース邸には劣るが……彼の実家とは違って、わざと自分を派手に、その権勢を見せようとするような主人の思惑がありありと伝わってくるような、そんなたたずまいだった。

はつきり言って、この家を見ただけで吐き気がしてくる。一番、嫌いな型の人間であるようだ。

この屋敷の主人……アワード將軍とやらは。

「これはまた、結構な警備だな」

屋敷の前に立っている私兵の数が半端ではない。使用人がエルザくらいしかない自分の家とは大違いだ。ダレットは陰から覗きこみ、感心したように言う。

「んー、まあね。でも大したことないわよ、多分」

「分かるのか？」

「大体。士気はとりあえず低そうだし、こういった警備って、巡回の間隔さえ見抜けば結構、何とかなるのよ」

ダレットの横でキルファが囁く。手馴れている者特有の、自信過剰でも何でもない、ただ、事実を述べているだけの口調。

キルファに、ダレットが提案してみせたもの。

それは、アワード將軍の屋敷に乗り込んで『証拠』を奪取した挙句、姿を消してしまうことだった。

確かに、都合の良い『名門の息子』、ダレットが姿を消してしまえば、縁談は破談、もしくは無期延期にせざるを得ない。カシユラルに害が及ぶこともなくなる。ついでに、アワード將軍の公金横領の証拠を掴んでばら撒いてしまえば完璧、というわけだ。  
だが。

（……よりもよって、よ？ お偉い騎士様の考えることが強盗に家出？ ……止めるあたしの頭はおかしくないわよね、多分）

ぶつぶつとキルファは考える。まためまいがぶり返しそうな気がしてきたが、さすがにこの場面ではまずい。慌てて意識を集中し、不安を打ち消す。

何よりも。成り行きの産物とは言え、それを手伝おうとしている自分も十分におかしいのかもしれない。ダレットのことをとやかく言えた義理ではない。

それに、いつも自分がやっていることでもある。脅迫もやるが、何処ぞの屋敷に忍び込んで何がしかを盗み出す、と言う仕事も何回か請け負ったことがある。そして、自分はことごとくそれを成功させてきた。

例外はただ一つ……今回の、カシユラルの脅迫だけだ。

キルフアは前回と同じ闇色の外套を羽織っている。体格の小柄さも手伝うから、彼女の技量なら見つかる可能性も低い。ダレットも、いつもの騎士団の鎧など身に着けず、目立たない色合いの外套を着て、顔を隠している。いつもと同じなのは腰に佩いた長剣と予備の短剣だけだ。

数日間、このダレット・コルフォースを見ていて思ったことなのだが。

(……どうにも、貴族とか騎士とかそういう感じはしないのよね、この男)

確かに、その仕草には幼少時から叩きこまれてきた礼儀作法が垣間見える。武術も習っているから、その動作にも隙がない。

だが、それとは別に……根本的な部分で、何か、今まで自分が見てきた『貴族』とは違うような部分が見受けられる。その正体が何なのかまでははっきりしない。単なる感触だ。

貴族であって貴族でない。騎士であって、騎士とは違う部分を持ち合わせている。

ある意味で、この男も自分と同じ『変わり種』なのかも知れない。「……そろそろ大丈夫かしらね。一気に抜けるわよ」

警備兵が目の前から姿を消した。後は戻ってくる前に塀を乗り越えてしまえば良い。

一応、手筈は打ち合わせてある。忍び込むのはキルフアであり、ダレットはその援護に回る。つまり、ダレットは囷だ。キルフアが忍び込んだら、後は正面から突入して警備の目を引きつけてやれば良い。

正面から怒鳴り込んでやれば、さすがに周りの屋敷も騒ぎに気付く。強盗が入ったとなれば、街の警備兵の捜査がすぐに入るだろう。その時に、公金横領の『証拠』が見つかり、警備兵の手に渡るようにキルフアが細工しておけば作業は終わりだ。公金横領を暴露するには、どうにかして国の機関に証拠を渡してしまえばいいのだから。

警備兵は軍部の管轄であり、アワード將軍は軍部の最高幹部だから



らもみ消される可能性もないわけではなかったが……間に將軍補佐たるカシユラルがいる以上、その可能性は低いだろう。

ちなみに、アワード將軍の屋敷に乗りこむことを提案したのはダレットだが、その他諸々の細かい策に関して考えたのはキルファだ。ダレットはどうにも、思いつきだけで突っ走る癖がある。その最たるものが、この騎士の風上にも置けないような行動なのだが。

「それじゃまあ、後は頼んだわよ」

一言囁くと、キルファは一気に夜の街を駆け抜ける。疾走しているにも関わらず、足音一つ立てない。気配も完全に殺しているから、普通の人間なら目の前を通りすぎられてもまず気付かないだろう。

体格の小柄さもあるが、生来、キルファは身軽だ。塀は高かったが、手馴れた動作で塀の向こうに縄を放り投げ、向こうの木の枝に重りを付けた縄の端を絡ませる。縄を伝って軽々と塀を乗り越え、キルファは屋敷の内部に入り込んだ。

「……さてと。俺の仕事はこれから、かな……」

初めて剣を手にしたときにも似た高揚感。久しく忘れていた感覚に、ダレットは全身の血が沸き立つような感触を覚えていた。

キルファが完全に塀の向こうに姿を消したのを確認し、ダレットはすたすたと歩き出した。

「がっ……」

悲鳴は、最初は一人だった。短い苦鳴とともにその男……正面玄関を警備していた男の一人だ……は倒れ、動かなくなる。単に気絶させただけだから、そのうち目を覚ますだろう。

（悪いな。恨みがあるのはあんたの主人なんだけど、な）

心の中で呟く。抜き身の長剣を手に、ダレットは正面玄関に飄然と立っていた。

男の悲鳴、そして何より全身で『私は怪しい者です』と主張してでもいるような格好の男。あちこちに散っていた、もしくは控えていた警備の私兵たちが次々に集まってくる。

それでいい。自分は十分に屋敷の内部の人間たちの目を引きつけてやれば良い。

ただ立っているだけなのだが、警備の兵たちが一様に一瞬、躊躇するのが分かる。まあ、これだけの数の兵を目の前にして動じないのだから、当たり前だろうが。

それに、何よりも。分かるのだ……警備の男たちにも。

目の前の男……ダレットが発する気迫が。一流の使い手、自分たちとは桁違いの力を持った人間であることが。

しかし。仕事としてやっている以上、この不審者を取り押さえないわけにはいかない。

「貴様、何者だ！」

決まりきった声……まあ、斬新な台詞というものがどんなものなのかは想像しかねたが……を上げながら、男たちがダレットに向かって斬りかかってくる。いかに使い手と言えど、この人数差だ。どうにかなるでも思っているのだろう。

十分に引きつけてから、ダレットは不意に駆け出した。正面玄関から離れ、後退して近くの細めの路地に入る。元々、近所の屋敷に騒ぎを知らしめる事が目的なのだ。

細い路地に入り込まれ、男たちは一気に飛びかかることが出来なくなった。それに、その人数の多さが災いして、動きも取りにくくなってしまうている。

一人対多数の戦闘の場合は、どうすればよいか。簡単だ。同時に一人以上と剣を合わせないような状況を作ってやればいい。

路地に追って入り込んでくる兵士たちに剣の柄頭、あるいは鍔元……一番、切れ味の悪い部分である……で当身を食らわせ、気絶させていく。

と。

目の前の男の一人を気絶させた瞬間、その向こうから突き出すように剣が飛び出してきた。後ろから追ってきた男が、目の前の仲間の肩越しに剣を突き出してきたのだ。無茶苦茶とも言える行動だっ

たが、鋭い剣先が脅威であることには変わりない。

「とっ……」

ダレットは跳んで一步後退。同時に、その勢いで先程気絶させた男の身体を突き飛ばしてやる。

急に仲間の身体を押し付けられては、剣を突き出してきた兵士も動けない。剣を手にしたまま、身体を硬直させざるを得なくなる。

そこを突き飛ばし、細い路地の中を強引に身体を押しつけて外に出る。路地には先程気絶させた兵士たちの身体が転がっている。済まないとは思ったものの、油断している暇はない。

広い場所に戻り、兵士たちが一斉に自分を取り囲む。先程より幾らか数は減っているはずだが、この数の多さではよく分からない。まあ、地道に潰す以外に方法がないのも確かだが。

「さて……」

ダレットは再び剣を構え、兵士たちに向き直った。

「……また、派手にやってるわね」

外から聞こえてくる物音に、キルファは小さく呟いた。予想以上に、派手にダレットが外で暴れているらしい。そのお陰でこちらは大きな苦勞もなく、屋敷の内部を疾走していられるのだが。

夜遅くのことだから、部屋の大部分は明かりは消されている。闇色のマントを羽織った人影が疾走しているなどとは、屋敷の人間は思いもしないだろう。

屋敷の構造は、堀を乗り越えたときに見た光景から大体見当が付いている。それほど複雑な構造でもなさそうだ。まっすぐに、屋敷の主人がいるであろう場所を目指す。『証拠』があるとしたら間違いないそこだ。

構造こそ単純だが、この屋敷は無意味に広い。これもまた、主人の性格を反映しているように思えたが……今はただ、腹立たしいだけである。

(……あの男が暴れているにも限度がある。警衛兵が呼びつけられ

る前に終わらせないと)

かすかに焦燥感を覚えながら、キルファはなおも屋敷の中を足音もなく駆け抜けた。

「ふうむ……?」

夜の街を一人歩いてきたその人物は、かすかに首を傾げた。

遠目にも分かる。何か、騒ぎが起きているようだ。松明の明かりが幾つも揺れて見えるし、怒鳴り声も聞こえてくる。様子からして、屋敷の警備の兵士たちだろう。

(強盗でも入ったかな?)

皮肉めいた笑いを浮かべ、思う。少々黙考していたが、人影はまた、歩き出した。……その屋敷に向かって。

屋敷に近付いてみても、誰も近寄ってくる気配がない。警備兵のほとんど全員が、騒ぎのために出払ってしまっているらしい。

と、怒鳴り声が聞こえてきた。

「てめえ! ……何者だっ!」

「おとなしく……がっ!」

何やら悲鳴めいた叫び声と、そして苦鳴。この声からして、強盗説というのが正しそうだ。それにしても……

(囧だな。そうでなかったら、ここで兵士たちの相手をしている意味がない。仲間がいるな……おそろく)

人影は思う。気配を殺し……意識的にやったことでもなかったが……騒ぎの様子を窺う。警備兵たちの中心に立ち、抜き身の長剣を手をしているのは一人の男だった。

顔を隠してはいるが、革鎧の一つも身に付けていない。それでいて、簡単に大勢の兵士たちをさばいている……いや、あしらっている。相当な使い手だ。

斬りかかってくる兵士の一人の剣を受けると、軽くひねる。それだけで、兵士の剣はあっさりと宙を舞った。そこに肉薄して当身を食らわせ、気絶させる。その繰り返しだ。機械的に、武術の型でも

やっているかのような印象すら受けるが……男が全身から発している気迫は、間違はなく実戦でしか発揮されないものだ。

少しの間、その人物はその一方的な戦いを眺めていたが、ふと何か思い出したような顔をした。男の姿と、剣さばきと、以前目にしたある情報が。

確信などないが……おそらく、真実だろうと思う。この人物にしては珍しい思考だったが。基本的に、証拠もなしに確信はしない性格だ。

（……さて。どうするかな）

再び、黙考する。だが、それも数秒のことで……この騒ぎに便乗することに決めた。

人影は目の前の塀を見上げると、少々助走しただけで軽くそれを乗り越えた。

（ここかしらね……？）

屋敷の最奥部。そして、一番豪華な部屋。間違いないだろう。ここが屋敷の主人、アワード將軍とやらの私室だ。

部屋の中に気配はない。おそらく、外での騒ぎの指示に出払ってしまっているのだろう。部屋には一応鍵がかかっていたが、キルファは懷から針金を取り出すと何なくそれを開けた。彼女にしてみれば、鍵とも言えないような代物だ。

部屋に忍び込む。大きな窓からは、月と星のささやかな光が差しこんできていた。その中に浮かび上がる、派手かつ悪趣味な装飾に、思わず嫌悪感を覚えた。

（さっさと終わらせないと）

キルファは心の中で呟き、置いてある大きな机の中をあさる。案の定、『証拠』となりそうな書類が幾つか見つかった。結託していた人間との手紙、軍の本部の書類を改竄したようとした跡、などなど。

（……分かりやすい。分かりやす過ぎるわ）

思わず感動などしつつ、部屋を見回す。とりあえず『高そう』かつ小さな品物を幾つか手に取り、部屋全体に荒らしたような形跡を付けてやる。それから、先程見つけた『証拠』を、荒らした部屋の隅に押し込んだ。一見しただけでは見えないが、『捜査』すれば見つかるような場所に、だ。

アワード將軍にしても、まさか机の中に入れておいたものが、部屋の別の場所に移動させられているなどとは思うまい。灯台下暗し、というやつである。

ダレットが派手に暴れているお陰で、そろそろ街の警衛兵が呼ばれているはずである。警衛兵が捜査に入るまで、現場は現状を維持すること。軍部の人間として、そんな常識を知らないはずがない。慌てて荒らされた部屋を隠そうとすれば、かえってボロが出る。結果的に、キルファが隠した『証拠』が將軍の手に再び戻る可能性は低いはずだ。

（まったくね……あの男、行動するならそれなりの計画を立てなさいよね）

手際良く作業を終了し、部屋を出る。キルファが屋敷の外に出て合図を出せば、ダレットも適当に退却する予定だ。

部屋の外に出る。侵入が困難な場所ほど、出るのは簡単なもので……さっきほどの苦労はせずに外に出られるはずだ。油断は出来ないが、九割方成功したと思って良いだろう。

自らの作戦の成功に、キルファはにやりと笑う。

その時。

「……何者だ？」

囁くような、しかしはっきりと分かる殺気を込めた声が聞こえた。涼やかな……おそらくは女性の声。

「……………」

キルファは、思わず身体を硬直させた。

確かに、辺りへの警戒を怠ってはいた。だが……気配を殺すのは忘れていなかった。それに、ここまで接近されて気付かないような自分でもないはずだ。

（何……？ 何なのっ？）

低い誰何の声に、キルファの心臓が跳ね上がる。思わず声を上げそうになるのを必死で抑えこみ、動悸をこらえる。

だが、恐怖は消せはしない。目の前にいる人物。自分の気配を察知した人物。自分に気配を悟らせなかった人物……

（何者……なの？）

「相手が分からないのはお互い様よ……先に答えるのが礼儀だと思わない？」

出来るだけ低い声で、囁くようにキルファは言う。先程の女性の声と同じように。

お互いに姿が見えない状況で、ただ気配の探り合いだけが続く。

相手……声からすると女性……はしばらく黙っていたが、また口を開いた。

「ふむ。まあ、それもそうか……だが、私も素性を明かすわけにはいかん。それに」

ふと、相手の女性の視線が、先程細工してきた部屋に向いたような気がした。まだ、扉は閉めていない。荒らされた部屋の様子がぼんやりと浮かび上がっている。

「目的も大差ないようだしな。……名乗るのが礼儀だというならば、お互いに名乗らないことにするか」

あっさりとした口調。声は涼やかな女性のものだが、口調はやたらと勇ましいし、また堅い印象を受ける。何処か、普通の女性とは違う気がした。もっとも、ここに忍び込んできている時点で十分に普通ではないが。自分と同様。

だが、この女性の意見は自分にとっても悪いものではない。自分の素性は気付かれていないはずだ。

「……そうね」

キルファも小さく囁く。

「さて。面倒が起らないうちに、お互いに撤収するか」

女性が囁き、そして駆け出す気配がする。疾走しているらしいのだが、自分と同様に足音一つ立てない。

ふと……その女性の長い髪が揺れたような気がした。

まだダレットは正面玄関で派手にやりあっているらしい。遠くから見ると、やたらと偉そうに怒鳴り散らす中年の男が見えた。あれが、アワード將軍とやらだろうか。ダレットは將軍とほとんど面識はないと言っていたから、たとえ顔を合わせた……もつとも、ダレットは顔を隠しているが……としても、気付かれることはないだろう。

忍び込んだときと同じ要領で外に出る。そうしてから、隠し持っていた火薬を一発だけ破裂させる。殺傷力などほとんどないが、ただ、やたらと大きい破裂音がするものだ。

これだけ大騒ぎしているのだから、今更爆発音が一つしたところで大した影響はない。ダレットへの完了の合図だった。

ダレットが適当に追ってくる兵士をあしらいながら撤収するのを確認してから、キルファ自身も屋敷から離れる。万が一のことを考え、合流する所は離れた場所に指定してあった。

夜の街を駆け抜けながら、今更ながらキルファは肌が粟立つのを感じていた。

「何だったのよ……さっきの女」

気配を感じただけでも分かった。並大抵の使い手ではない。彼女がその気になれば、自分など気付かれずに殺すことも可能だっただろう。だから、余計に訳が分からない。

目的も大差ない。確か、女性はそう言っていた。つまり、あの女



性も何かアワード將軍に恨みでもあったのだろうか？

(……………?)

何か、思いついたような気がしたが……確信が持てない。それに、思いつきはぼんやりとしていて、はっきりとした形を成さない。

(訳が分からないけど……とにかく、先に合流する方が先ね)

もし、今後あの女性と出会ってしまったらどうなるのか。この場は敢えて考えないことにする。

キルファはなおも夜の街を疾走した。

「よお」

合流に指定しておいた場所には、先にダレットがいた。既に顔を覆っていた布は外している。

「大体、予定通りか」

「まあ、ね……」

キルファの渋い顔に、ダレットが不審げな表情を浮かべる。あの破裂音の合図があった以上、成功したはずなのだが。

一瞬、躊躇する。あの女性のことを話すべきか。

「……何かあったのか？」

「何でもないわ」

結局、キルファはかぶりを振って誤魔化した。もし、今後あの女性に出会った時、ダレットに話しておいたら彼も狙われる可能性がある。ダレットも使い手であることは承知していたが、あの女性の気配……殺気は尋常ではなかった。

「それで。これからどうするの？」

姿を消す、などという提案を聞いて一番気がかりだったことなのだが……答えが何となく恐かったので、結局今まで聞かずじまいだったのだ。まあ、エルザから聞いた話だとダレットには地方領主に嫁いだ姉がいるそうだから、そちらにかくまってもらう、というのが一番現実的かもしれない。とりあえず、ほとぼりが冷めればいいのだから。

だが。

「いや……旅にでも出るかな、なんて思ってるが」

「またも、キルファはめまいを起こして昏倒する羽目になった。思わず脱力したキルファを、ダレットが慌てて支える。最初に出会った時と似たような状況だ。」

「またあんたは……そういう、どうしようもないことを……」

「眩きがダレットの耳に入ったのかそうでなかったのか、定かではなかったが……とりあえず、ダレットは不思議そうな顔をする。」

「いやだって、とりあえずこの王都から離れないとまずいことは確かであるわけで」

「ダレットの脳味噌だとそれを考えるのが精一杯であるらしい。キルファは強引にそう思っただけで納得することにした。」

「しかし、『いきなり姿を消した』という事実が重要なのであって、周りがそう思えば本当に姿を消す必要などないのである。何処か、王都の目立たない場所にも潜伏していれば済む話なのだ。」

「旅というのは、言葉以上に困難を伴う。身分を証明するものがないければ行き先の街に入ることもままならないことがあるし、盗賊たちも出没する。山や森には狂暴な肉食動物も多数生息している。」

だが……

「あんた、帝国騎士がそんなことをあつさり……」

「だから、だよ」

「ダレットの表情に何やら真摯なものを感じ取り、キルファは脱力するのを止めた。ダレットの瞳が、キルファの紫の双眸を見据える。『帝国騎士って言ったって、実際は何をするわけでもない。俺がいる意味があるのかな……って思ってたな。』」

「だったら、『帝国騎士』じゃない、ただの『俺』に何が出来るのか、試してみるのも悪くない……なんて、な」

「『コルフォース家』の名を離れて、ただの『ダレット・コルフォース』になる。それは、不安ではあったが……同時に、とてつもない解放感を感じていた。」

『自分自身』に何が出来るのか。何の意味があるのか……それを、見つけられるような気がした。

「まあ、俺は王宮騎士団なんて器じゃないからな。教官のうけは悪いんだよ、正直なところ」

「へ？」

初耳だった。正直、ダレットの武術の技量を見たのは自分自身が気絶させられたときと、先程の囃としての戦闘だけだったが……相当の手練であることは確かだ。帝国の武人の最高峰と言われる王宮騎士団においても、十分に通用するだけの力量に見えた。

エルゼシア帝国の建国戦争があったのは五十年前。大規模な戦争経験のない人材が多い今、あれだけ実戦で通用する力を持っていることは誇りに思ってもよさそうなものなのだが……

何時の間にかダレットと並んで歩いていた。歩きながら、キルファは首を傾げる。

その時。

「……どちらに行かれるのですか？」

後ろから不意に聞こえた静かな声に、キルファは身体がびくつと跳ねるのを感じていた。

静かな、しかし強固な意志を封じ込めた声。涼やかな女性の声……間違いない。さっきの女性の声だ。

(……どうする?)

よりにもよって、ダレットと一緒にいるところを見られてしまうとは。暗がりでの会話だけだったので姿は見られていないはずだが、この女性に一言でも声を聴かれてしまえば終わりだ。

(……え?)

そう。姿は見られていないはずなのだ。それなのに何故、この女性が声をかけてくる?

念の為に懷から投擲用ナイフを抜きながら……それでも、この女性に何処まで通じるかなど疑問だったが……キルファは振り返ろう

とする。だが、横から聞こえた声に思わず身体を硬直させた。

「……カシユラル・レストラード……」

呆けたようなダレットの眩き。

（カシユラル……レストラード？）

今回の騒動で何回も聞いた名前。帝国の軍部の＜戦女神＞。将軍補佐。

そんな単語が頭の中を駆け巡る。滑稽なほどに引きつった顔で、キルファは後ろを振り返った。

「……………」

夜の女神、とても形容するべきなのだろうか。同姓のキルファから見たため息の出るような美貌を持った、黒髪黒瞳の美女がそこに飄然と立っていた。

（……これは……さっきの娘か？）

完璧な無表情を決め込んでいたが、内心、カシユラルも驚愕していた。

先程、將軍の屋敷に忍び込んだところで出会った少女。声とその影から小柄な女性、もしくは子供だろうとは踏んでいたが……

（紫の瞳に、尖った耳……まさか、ハーフとはな）

月明かりに、艶やかな短い銀髪が映えている。鮮やかな紫の双眸が、何処か脅えたように、強張った表情で自分を見ていた。向こうも、自分が先程出会った者であることには気付いたらしい。声を聞かせたのだから当たり前だが。

（ふうむ……？）

内心の動揺など微塵も顔には出さず、淡々と、慇懃な口調でカシユラルは言った。

「こんな夜中に、どちらに行かれるのですか？ ……ダレット・コルフォース騎士？」

ほとんど尋問のような口調である。まあ、こればかりは職業上仕方のないことではあったが。

「ですが……それも仕方のないことかも知れませんか？」

言って、にっこりと笑う。それは確かに、魅力的な笑みではあったが……

その黒瞳が、ちつとも笑っていない。氷のように冷たい瞳に、かすかに皮肉の色が混じっている。

「先程、將軍の屋敷で強盗事件を起こして、そう簡単に姿を現すわけにもいかないでしょうから」

きっぱりと、カシユラルは言った。

縁談騒ぎの思惑は、カシユラルにも読めていた。元々、大した策略でもなし……切れ者で通っている彼女にしてみれば、苦笑したいような陰謀ではあった。

が、その彼女ですら『結婚』から逃れることは不可能だった。自分自身に歯噛みしたものの、どうしようもない状況になっていた。

それで仕方なしに、公金横領の証拠を盾に縁談を白紙に戻すことを要求しようと、アワード將軍の屋敷に向かったのだ。

それで行ってみた所で遭遇したのが、先程の騒ぎである。どうやら、一足違いだったらしい。

正面玄関で警備兵たちをあしらっていた男。その正体は、騒ぎの正体を確かめようとして自分も忍び込み、目の前の少女と遭遇したところで確信した。

將軍の私室を荒らしていた少女。物取りにしては何かを持ち出す気配がなかったし、取り出した書類……おそらくは公金横領の証拠……を押し込む、などという得体の知れない行動を取っていた。だが、自分と目的が同じだとすれば、その行動は納得がいくのだ。

現在、將軍を陥れる理由があるのはただ二人。自分自身と、縁談相手のダレット・コルフォースだけだ。

まあ、帝国騎士のダレット自身が出てくるとは意外だったが、ダレットが使用人数人だけを雇って暮らしていることくらいはカシユラルも耳にしていたし、その腕前を見ても確かだった。

目の前の少女の正体こそ分らないが、まあ、このダレットの関係者なのだろう。

それで、とりあえず確認だけしようと屋敷から撤収したダレットを追ってきたのである。極力気配は殺していたし、また距離も取っていたお陰で気付かれずに済んだようだ。尾行は彼女の得意分野である。……あまり誉められた特技でもないが。

（……まったく。とんでもないことを考える男だな）

目の前の『婚約者』を眺め、カシユラルは呆れたように思う。だが……

（面白い。……面白い男ではある、な）  
にやりとカシユラルは笑った。

「えーと……」

ダレットも顔を面白いように引きつらせている。まさかあつさりと見抜かれるとは思っていなかったのだろう。いや、あの顔を隠した状況で、それもその場にいなかったはずのカシユラルが、何故そんなことを知っている？

「……あ」

ようやく思い出したように、隣で同じく強張った表情をしているキルファを見る。先程のキルファの渋い顔、その正体がこの女性だとしたら……？

「おい、会ったのか？　もしかして、カシユラルに」

「忍び込んだところでちよつとね……でも、顔は見られてないはずだったのよ。あたしも向こうの顔は見えてない」

「……カシユラルも、さっき忍び込んだのか？」

「そうみたい。理由はよく分からないけど……大方、あたしたちとやろうとしたことは一緒なんじゃないの？」

カシユラルの目の前で、こそこそと会話するダレットとキルファ。訳が分からないのは二人とも同じである。

カシユラルはそんな二人を面白そうに眺め……そして、皮肉めい

た笑いを浮かべながら言った。

「それで？　これからどうなさるつもりですか？」

にっこりと笑う。……それこそ脅しにでも使えそうな、にこやかかつ不気味な笑い。

「……俺はこれから、『行方不明』になります。そうしたら……今までの話も全部、消える。それで、問題ないはずですね？」

カシユラルは意外とでも言いたげな顔をする。かすかに目を見開くような仕草をした。

「でも……今回の騒動は、元々私の行動から出たこと。貴方には直接の関係はないはず。……その、貴方がですか？」

そう。本来なら、ダレット・コルフォースが何かしたわけでもないのだ。そのダレットが、そこまで責任をかぶる必要はない。……いや、カシユラルの矜持が許さなかった。

無然とした顔をする。この男に先を越されたような、そんな敗北感がカシユラルを支配する。

困難は自力で克服する。それだけで、今まで生き抜いてきた……ある意味、キルファと似たような境遇のこの女性には、ダレットの行動は何とはなしに悔しいものに感じられた。自分の自己満足だとは分かってはいるのだが。

「まあ、最後にあれだけの騒動を起こしたのは俺ですしね……それに」

さすがに、『騎士の生活が嫌だから都合が良いので家出します』とは言い辛かった。

まあ、ダレットの表情を見れば、大体何を言おうとしているのかは見当がつく。とにかく、嘘のつけない男だ。詐欺師の類にだけはなれまい。

「成る程」

カシユラルはかすかに笑い、そして言った。

「それならば、事後処理は私が引き受けましょう。……今頃、將軍の屋敷には警衛兵が行っている筈ですが……その処理を含めてね」

確かに、キルファの考えた策は警衛兵がいなければ成立しない。カシユラルは軍の人間だから、警衛兵の指揮は本職だ。

「それで、貸し借りはなしということ。……それで、よろしいですか？」

それはダレットに言うよりは、自分自身に向けられた言葉だった。ダレットが頷くのを見て、カシユラルは満足の表情を浮かべる。「私の用はそれだけです……この後は、私の個人的な質問ですが」  
淡々とカシユラルは続けた。ダレットは首を傾げる。

「この騒動に関して、失礼かとは思いましたが、少々、貴方に関することも調べさせてもらいました。お父上に母上、兄上に姉上方、それに王宮騎士団の書類」

本来、カシユラルが欲していた情報はコルフォース家とアワード將軍に何らかの関係があるかどうかだった。それがまったくないと分かった時点で、カシユラルは、この策略に気付いたのだ。狙いがダレット、コルフォース家でない以上は、自分としか考えられない。「その中に、王宮騎士団の訓練試合の成績表がありました。貴方は王宮騎士団の中でもずば抜けた成績を収めている。単に戦闘力とだけ言うなら、王宮騎士団の中でも指折り……いえ、一番と言っている」

カシユラルの黒瞳に、わずかに鋭さが混じる。

「しかし、総じて教官の評価は低い。理由は……」

『邪道』

ダレットとカシユラルの言葉が見事に重なる。

「騎士道精神に欠ける、と理由が書いてありましたけど。……それが何なのか、聞きたかっただけです」

「俺が剣を習った師匠というのが、元傭兵でしてね」  
苦笑してダレットは言った。質問があるというので正直びくびくしていたのだが……そんなことを聞いてくるのが、カシユラルのカシユラルたる所以といったところか。

「いわゆる、『騎士』の剣術とは少々、流派が違うんですよ。何が



あっても生き残ることを前提とした、『実戦剣術』

実戦では何が起こるか分からず、そして、勝負は一度でも負けたら終わり。すなわち、それは死を意味する。

それを避けるため、いや、生き残るために手段を選ばない武術。

外道と呼ばれる技を含めた、総合的な武術を実戦剣術と呼ぶ。

しかし、特に騎士にはこの『実戦』剣術を嫌う傾向が強い。有名な師について型を徹底的になぞるところから始める、正統派の剣術を習い、また尊ぶ人間が多いからだ。そういった人間は、時に傭兵の剣術を『邪道』と呼んで罵ることがある。逆に傭兵たちは騎士の剣術を『お遊戯剣術』などと呼んだりもするが。

もっとも、『実際』に戦うことがないから、そういった発想が生まれるのだが。実戦と訓練試合では、その傾向も、何より気迫がまったく異なる。

「成る程……だったら」

カシユラルがまた、かすかに笑う。が、先程までの何か含んだ笑いではなく……幼さすら感じさせる、また同時に鋭い笑い方。

「一つ、我俣を聞いて頂けますか？」

カシユラルの笑み。それは絶世の美貌と相俟って、確かに魅力的ではあった。が、危うさすら感じられる魅力だ。

かちやり、と小さな金属音がする。ダレットはその正体を把握するのに、一瞬の間を要した。

剣帯の金具と、それに吊った刀がこすれ合う音だ。カシユラルは左手を鞘に、右手を柄に添え……にっこりと笑って言葉を寄越す。

「一手……お手合わせ願えますか？ ダレット・コルフォース騎士」

嬉々として抜刀の構えを取り、カシユラルが言う。一瞬ダレットは絶句し、それからようやく、断れるような状況でないことを察する。今にでも斬りかかってきそうな勢いだ。

「ちよっ……」

尋常ではない気迫。思わず自分も剣の柄に手を掛け、それでもダレットは慌てたように言う。

「何で……」

「生憎と、私も『お綺麗』な剣術には縁がなかったもので。たまには似たような傾向の相手と戦うのも訓練になると思いますよ……少なくなるとも、ただ型をなぞっているよりはね」

否、と言える状況ではない。仕方なしにダレットも長剣を抜く。

「いざ……」

カシユラルが駆け出す。だが、刀を抜く気配はない。

「勝負！」

夜空に、カシユラルの叫びが弾けた。

「ちよっ……」

何故、カシユラルがいきなり勝負などと言い出したのか。何とはなしにキルファは察する。

悔しかつたのだ。この男に、先手を取られるのが。今まで自力で困難を切り抜けてきたのに、他人に情けをかけられて助けられることが。貸し借りなしなどとは言っていたが……それだけで満足するような女性でもなさそうだ。

他人に頼ることを、そんな自分を許せない。それは……キルファにも理解できた。

だから、敢えて止めなかった。カシユラルが抜刀の構えを取るなり、邪魔にならないように下がる。

それに、少々興味があつた。

＜戦女神＞の実力とやらが。先程、自分が恐怖した殺気の正体が。

駆け出し、一気にダレットとの間合いを詰める。ダレットは長剣で防御の構えを取るが、カシユラルは未だ刀を抜かない。

ただ、距離だけが縮まる。そして、ダレットの長剣の間合いに入つた、と思えた瞬間。

「……………っ！」

銀光がきらめく。まるで、カシユラルの鞘から光が噴き出したか

のように。

ぎんっ、と澄んだ高い音が響く。火花が散り、一瞬の二人の攻防を浮かび上がらせる。

「つつ……」

後退するダレットを、カシユラルは追わない。自分も体勢を立てなおし、刀を構える。

「……拔刀術」

ダレットが呟いた。

拔刀術。刀を鞘から抜く、その動作すら利用する奥義。鞘走った刀は、通常より遙かに速い速度でもって相手を襲う。居合抜き、なだとも呼ばれるが……元々、この大陸では刀を使う人間が少ないため、滅多に見られない技である。

今の一撃は辛うじて受けられたが――速い。拔刀術だったから、と言うだけではない。男女の体格差で臂力こそダレットが上だが、剣閃の速さではカシユラルに分がある。

「さすがですね。大体、この一撃で勝負がつくのですが」

確かに、並の使い手ならば今の拔刀しながらの一撃であっさりと胴を薙がれて終わるだろう。ダレットも受けこしたものの、その手がびりびりと痺れている。

顔をしかめながらも、ダレットも長剣を構え直す。カシユラルが再び踏み込んできた。

繰り出された刺突を、横に跳びながら剣で刀の方向をずらしてやる。そこに、今度はダレットが踏み込んで片手を剣から離して肘打ち。しかしこれは、カシユラルが後ろに跳んで避けた。

とんでもない敏捷さである。

「成る程。これが邪道たる所以ですか」

にっこりとカシユラルが笑った。確かに、剣での試合に肘打ちを混ぜるような真似は通常はやらない。だが、これは勝ちを目的とした、と言うよりは、剣を、刃を向けないためにわざとダレットがやったことである。ここで勝負がついてくれたら話は早かったのだが。

「でも。情けをかけていたら、そちらがやられますよ?」

ダレットの考えくらは、カシユラルはあっさりと見抜いていた。さらりと言って寄越す。

(どうする……どうする?)

必死でダレットは考えを巡らせていた。

自分にしてもカシユラルにしても、今使っているのは訓練で使う模擬剣などではない。真剣だ。当たればそれだけで傷を負うし、最悪、致命傷にもなり得る。自分が死ぬのも御免だし、カシユラルを殺す気などもっとない。

しかし、相手を殺さずに制圧する。それは、相当な実力差がなければ無理な芸当だ。今まで撃ち合った三手で、カシユラルの技量は大体読めていた。手加減などして勝てる相手ではない。しかも、こちらに躊躇いがあれば尚更勝率は下がる。

「ちっ!」

またカシユラルが斬りかかってきた。それを受け、弾きながら……ダレットにはなおも迷いが残っていた。

「ちょっと……」

止めなかったのは間違いだったか。二人の戦闘を眺めつつ、キルファの額に冷や汗が浮かんでいた。これでは、どちらかが傷ついて……死んでもおかしくない。

ダレットにしろカシユラルにしろ、二人とも相当な使い手であることは見れば分かった。自分など、及びもつかないような戦いだ。

今更ながら、肌が粟立つのを感じる。あの時……二度目にダレットに出会った時、もし止められていなければどうなっていたことか。おそらく、気付く間もなく自分は殺されていた。

アワード将軍がカシユラルの技量を見誤っていたのか、それとも知った上で捨て駒として自分を利用したのか。まあ、どちらも考えられる話ではあったが……

(……一発、ぶん殴ってくれば良かった。あのおっさん)

先程垣間見た、おそらく今頃警衛兵への対応に追われているであろう小太りの中年男の姿を思い出し、キルファは毒づいた。

「はあ、はあ……」

双方、そろそろ息が上がってきている。これで合計七手。人間が連続して剣を振れる間というのはそう長くないし……何より、余程双方の力が肉薄していなければ、ここまで撃ち合うことなどない。

カシユラルがいったん離れ、刀を構え直す。今まではほとんど彼女から攻めてきていたから、彼女の方が運動量が多いはずなのだが、その動きはまったく鈍らない。むしろ、その嬉々とした笑みが深まっているようにすら見える。

最初の動機はどうあれ、単純に楽しんでいるのだ。この戦いを。彼女にしても、自分と張り合えるほどの腕前を持った人間にはここしばらく出会ってはいなかった。

反対に、ダレットの表情は曇っている。

(……どう、する?)

まだ答えが見つけられない。

自分の利点。それは剣の間合いが遠い……つまり、剣身が向こうより長いこと、そして単純な打撃力と臂力。そして……

(……だったら!)

初めて、ダレットから仕掛けた。小細工も何もなし。大上段に振りかぶり、そして振り下ろす。カシユラルは刀でそれを受けるが、一撃は予想したよりも遥かに重かった。

上から、それも全力での一撃に手が痺れる。が、必死でそれをこらえ、横に身体をずらしながら刀をひねった。湾曲した刀身に沿ってダレットの剣が流れる。結果的に、カシユラルの身体から剣の力の方向がずれることとなった。

その一瞬後、カシユラルは横に跳ぶ。全力での一撃を外され、ダレットの体勢が大きく崩れる。そこに横薙ぎの一撃が加えられた。刀は真っ直ぐにダレットの脇腹を狙っている。大きく体勢を崩し

たダレットには、剣で受けることも身体を反らして避けることも出来ないはずだった。

カシユラルは勝ちを確信する。  
が。

「……………！」

がん、と鈍い音と手応えがあった。予想もしなかった方向に力を加えられ、思わず刀から手を離してしまう。

そこに。

体勢を立て直したダレットの剣が迫る。

首筋に刃が突き付けられた。

「……とんだ、奥の手ですね」

地に落ちた自分の刀を拾い、カシユラルは笑って言った。その顔には別段、悔しさなど感じられない。晴れ晴れとすらしている。

「奥の手、なんてもんでもないがな……咄嗟に思いついただけだ」  
あの時。横薙ぎに振るわれた刀を、拳で上から刀の腹を叩いて撃ち落したのだ。確かに、剣や刀ではそういった技もあるが……素手でやろうとする人間など、まずいないだろう。桁外れの勘と動体視力が要求される。

ダレットは大きく息を吐き、剣を鞘に納める。そのまま街の道路に座りこんだ。大きく肩が上下している。

「さてと。そろそろ私も戻りますか……ああ、もう一つ聞きたいことがあるのですが」

刀を鞘に戻しながら、カシユラルが思い出したように言う。

「貴方と、その娘……どういった関係なんですか？」

問われて、ダレットとキルファは顔を見合わせた。どういった関係。考えてみれば、単に偶然出会っただけなのだが。

「……………」

二人とも、お互いを見たまま黙りこんでいる。それをカシユラルがどう思ったかは分からないが、かすかに笑みを浮かべたようだった。

た。

「まあ、良いでしょう。それでは」

あっさりとした口調で別れを告げると、カシユラルは立ち去っていった。あまりにもあっけない幕切れに、しばらく二人とも呆然とする。

しばらく、ぼんやりと座っていたが……やがて、ダレットが立ち上がって言った。

「さてと。それじゃあ、俺たちもそろそろ行くか。さっさとこの街を抜けないと、厄介だし」

「……………へ？」

ダレットの物言いに、キルファはしばらく黙りこみ……それから、思い出したように間の抜けた声を上げる。

「いやあの、行くなってどういう……」

「だから、旅にでも出るかなー、なんて言ってたじゃないか。夜が明ける前にこの街から出ないと、色々と面倒が」

要するに、闇に紛れて街を抜けるつもりなのだ。通常、街から出るには入り口にある城門を使わなければならないが、それだと『姿を消す』ことが出来ない。

「いや、そういうことじゃなくて……あたしも？」

ゆっくりと、それこそ壊れかけた人形のような動作でキルファは自分を指差す。確かに今まではダレットと一緒に行動していたが、それはお互いに利害が一致するからであって、これからも一緒に行動するなどは一言も言ったつもりはなかったのだが……

「違うのか？」

心底不思議そうに、ダレットは首を傾げる。

「……………」

キルファは黙って下を向いた。ダレットの傍らにいたのはこの数日だけだが、それが終わるのが……何だか、むしように寂しく思えた。

確かに、訳の分からない男ではある。とんでもないことを言い出

したりもする。何も考えていないような行動を取ったりもする。

そして、とんでもないお人好しでもある。そもそも、自分をかばう必要などこの男にはなかったのだから。

けれど……

「……一緒にいても、良いの？」

一番、訊くのが恐かった問い。それでも、口にせずにはいられなかった。

ずっとずっと一人だった。自分の居場所などないと思っていた。だから、ずっと一人で生きてきた。それで当たり前だと思っていた。

けれど――

「ああ」

ダレットが笑って手を差し伸べる。その手を、キルファは黙って見つめた。

ずっと……探していたもの。欲していたもの。

それは、この手ではなかっただろうか？ 自分に差し伸べられる手。自分の側にいてくれる存在。

何のことはない――恐かった。寂しかったのだ。一人でいるのが。一人で生きていくのが。

ただ、それを認めたくなかっただけなのだ。

だから。

ゆっくりと手を伸ばす。おずおずと、ぎこちない動作ではあったが……しっかりと、差し伸べられた手を取った。

剣を握る手は、ごつごつと角張ってはいたが……不思議と、温かかった。

「……………」

ぼんやりと、自分の手を見つめる。その先には、いつもの笑みを浮かべたダレットがいた。のんびりとした笑い。不思議と……見る



者を落ち着かせるような、そんな笑み。

「さてと。行くか」

再びダレットが言い、そして歩き出す。

「分かった」

その背を……キルファは満面の笑みを浮かべて、追った。

ロンバルディア大陸。

人間とエルフという二つの種族が混在しており、また、現在はエルゼシア帝国という国家が統一している地だが……もう一つ、地形上の特徴がある。

ありていに言って、やたらと山、山脈が多いのだ。大陸を縦に何本もの山脈が走っており、その間にある平地に人々は街や村をつくって住んでいるような状態なのである。地方と地方の領地の区別も、もっぱら山脈によることが多い。

そのため、旅……つまり長距離の移動には相当の苦労を強いられる。エルゼシア帝国が建国されて五十年、街道などもそれなりに整備されてきてはいるのだが、それは近距離間の街や村を結ぶに留まり、まだ山脈を超えるような街道までは整備されていなかった。

よって……

「えっと……今いるの、どこらへんだ？」

家から持ち出してきた地図を眺め、ダレットは頭を掻いた。王都を抜け出して十日あまり。王都の近辺にいるのはまずいので、山を越えて別の地方領に出ようということになったのだが……とにかく行っても行っても山道で、方向感覚というものもいい加減狂っていた。

キルファも横から地図を覗きこむ。街の位置に関してはかなり正確に記されている地図だったが、さすがに山道の途中にあるものまでは記載されていない。

「多分ここらへんじゃない？　山に入って一日これくらい進んでるとしたら」

地図をなぞりながらキルファが説明する。何やら眉根を寄せ、地図を凝視していた。

「こりゃあ、また野宿だな。もう少し進めば村があるみたいだが」

「そうねー……」

ここ数日はずっと山の中を歩いているので、当然野宿である。キルフアはスラムで実質野宿生活をしていたので別段困るようなこともなかったが、ダレットは勝手が違って戸惑うことが多い。いかに自分が恵まれた生活をしていたかが分かるというものだ。

ダレット自身もそれは自覚しているので、弱音を吐くことはなかったが。

「また野宿となると……それじゃあ、どうしようか。適当な場所を探して、それよりも何か食べるもの探さない」と

キルフアは事務的な口調で言う、あちこちを見回す。とりあえず、食料だけは調達しなくてはならない。携帯食料も持つてはいるが、それは出来る限り節約しなくてはならない。

「食べ物、ねえ……。あ、あそこにキノコがある」

今、二人がいるのは旅人たちが踏み固めてできた細い山道だ。すぐ側には、うっそうと木々が生い茂っている。キルフアは木の根元に食料を見つけ、駆け寄った。懐から布を取り出すと、ひよいひよいと取っては入れる。

ダレットも追いつくと、それを手伝い始めた。

「あ。それ、食べない方がいいわよ。オオワライテングタケ。三日間ほど笑い転げたいなら話は別だけど」

種類を確認せず適当にキノコを収穫していたダレットに、冷ややかにキルフアが言った。何時の間にか手にしていた、毒々しい青色をしたキノコをダレットはまじまじと見つめ、そして額から一筋冷や汗を流す。

キルフアは、やたらと野草や薬草の知識が多い。それはここ数日でダレットも気付いていた。

「お前、やたらとそういうことに詳しいよな」

とダレットが訊いたところ、

「昔、手伝いをしてたからね」

とそれだけ言った。何か嫌な思い出でもあるのか、苦虫を噛み潰

したような顔をしたのでダレットもそれ以上は追及しなかったのだ。  
「えーと。こんなもんかしらね」

布にキノコを山盛りにしたところで、ようやくキルファはキノコ取りを止めた。満足そうに頷くと、包んだ布を抱えて歩き出す。

「お前、それだけの量を食う気か……？」

ダレットが引きつった顔で訊く。

最初に会った時も彼女は滅多やたらに食べていたが、あの時は単に飢えているだけだろう、と思っていた。が、実は単に大食いであっただけらしい。

「当たり前じゃないの。食べられる時に食べておく。野宿の基本よ」しれっとキルファは言った。どうせ、これだけの量もほとんどがキルファの腹に入ってしまうのだ。ダレットはため息をついた。

そろそろ日が暮れてきている。寝る場所を探さなくてはならない。こういった時、野宿は不便である。まず水を調達できること、それから出来れば雨をしのげる場所を探さなくてはならない。また、野生の動物が襲ってくる可能性もあるため、その見極めもしなくてはならない。

実を言えば、旅に出た当初は馬車を買う、という案もあったのだ。その方が荷物の運搬は格段に楽だし、寝る場所にも不自由しない。雨もあまり心配しなくて良い。

が、前述の通り山が多い地形であるので、山を越えるのには馬車は不向きであること、またキルファが馬を扱えないことから、その案は没になった。ダレットにしても騎乗に関して習ったことがある程度で、御者はやったことがない。

「なあ、これ何だろうな？」

また地図を眺めていたダレットが一点を指差した。現在位置……と思われる場所……のすぐ近くに、小さな印が書かれている。が、点が打たれているだけで、何の説明書きもない。

「さあ……」

キルファは眉根を寄せた。元々『何かを読む』という作業に慣れ

ていないため、先程と同じように顔をしかめて地図を凝視している。王都など大きな都市ではともかく、辺境では読み書きの出来ない人間、また『読めても書けない』という人間は多い。そこそこ大きな街だと代筆屋という職業が存在し、手紙などの代筆をやったりもする。だが、キルファは何処で習ったものか、読み書き程度ならこなせるようだ。無論、ダレットは貴族の子供として読み書き、一般教養は叩きこまれている。あまり成績は良くなかったが。

「何かの記号とか、そういうものじゃないの？」

キルファが訊いた。

「いや、街やら村やらの記号とは別なんだよな。この近辺、エルフの村はあるみたいなんだが、それはもっと先だ。かといって、危険地域ってわけでもなさそうだし……」

ダレットは首を傾げる。

「行ってみよっか？」

唐突にキルファが言った。

「こんなわけの分からん場所にか？」

「別に危険ってわけでもなさそうなんですよ？　かなり近いみたいだし。それで寝る場所を見つけられたらめつけもんでしょ」

ダレットも、正直、野宿で疲れが溜まってきているところだった。野生の獣が襲ってくる可能性があるのでキルファと交代で焚き火の番をするのだが、お陰でかなり寝不足だ。それはキルファも同様のだろう。

もし、何かしらの建物でもあれば、獣が入ってくる可能性はぐんと減る。久々にぐっすりと寝られるかもしれない。

「そう、だな」

結局、ダレットも頷いた。

「ここらへん、だな……」

地図を確認し、ダレットは言った。しかし、そこには何の変哲もない、いい加減見飽きてきた森が広がっているだけだ。さっきいた

場所と何ら変わらない。

「無駄足か……？」

ダレットがため息をついた、その時。

「ねえ、これ何だろ？」

木々の中に入り込んでいたキルファの声が聞こえた。追ってダレットも入る。

「偶然こんな愉快的な石が出来ました、ってわけじゃないよな」

ダレットが思わずうめいた。

目の前にあるのは、ダレットの膝くらいの高さの石だ。が、その形はどうみても天然のものには見えない。幾何学的な紋様が全面に彫られ、正確な直方体の形をしている。小さめの石柱といったところか。

「こっちにもあるわ」

近くをうろついていたキルファがまた言った。見渡してみると、木の陰に隠れて、似たようなものが幾つもある。

「何かしら、意味があるんだろうな。多分」

「どっかに相当な暇人でもいたのかしらね？ ……しかしまあ、結構な数よ、これ」

ぶつぶつ言いながら、キルファはなおもあちこちを探っている。

キルファは、探索に関しては目端が利く。さすがに元盗賊だ……と言ったら、彼女は怒るだろうが。

「ちよっと、何か書くものがある？」

キルファが問い掛けてきた。が、生憎とペンは荷物の底に仕舞い込んでしまっており、出すのは結構な手間だ。仕方なしに、キルファは地面を一部ならすと、そこに木の枝で何やら書き始めた。

「何やってるんだ？ お前」

「んー、この石柱、ばらばらに並んでるみたいだけど、何か意味があったりするのかなって思ってる」

石柱の位置を確認し、大体の位置を図に描いていってみる。全体を把握できたわけではないが、明らかに何らかの規則に従って置か

れているのが分かる。

「この模様、何か見覚えはない？」

石柱の置かれている場所を点として、それを繋いでいってみると、幾何学的な模様が現れた。正方形を幾つもつなげ、組み合わせたような形だ。

「うーん……ありがちでかえって分からないな……待てよ」

手近にあった石柱に駆け寄り、彫られている紋様を覗き込む。案の定、そっくりな紋様もあった。

「これだな、多分」

「何の紋様か、あんた知ってる？」

「さあ……」

どこそこの紋章、といわくがあるものは実はかなり多い。帝国の紋章から始まって、ダレットが所属していた王宮騎士団、軍部、それぞれの地方領主に至るまで皆違った紋章を掲げている。ダレットがあまり真面目に覚えていなかったせいもあるだろうが、全部把握している人間もそうそういないだろう。あの兄なら有り得そうな話にも思えたが。

「って、この紋様、中心にも模様があるわね」

石柱を覗き込んで、キルファが言った。先ほど自分が描いた図も確認してみるが、そちらには中心には何も無い。

「こういった場合、中心に何かあるってのがお約束なんだけど」

ダレットをほっぽって、キルファはさっさと中心部と思われる場所に向かって歩き始めた。

そして。

「……ここまでお約束だと、かえって悲しいものがあるわね」

ぼそりとキルファが言った。目の前には、一抱えほどもある岩がどん、と鎮座している。先ほどのものと似たような紋様が彫られていることから、間違いないだろう。

「でも、これが何の意味があるのか……。変な岩があって終わり、だったら単なる無駄足だぞ」

そろそろ辺りも暗くなってきた。そんなに遊んでいる余裕はない。岩の周りを探ってみるが、何もない。本当に、岩が一つ置かれていただけだ。

「地図の作成者も、似たような苦勞をしたんでしょね。それであまりにも腹が立ったから、書き込んでおいたんじゃないの？」

わざわざ調べて謎解きまでして、見つけたのが岩一つでは腹も立つというものだ。いわくありげな紋様まで彫られていながら、何もないあたりがかなり陰険である。

「どこの暇人が造ったのかは知らないけど、相当嫌味な奴だったってことだけは間違いなさそうね……」

ぶつぶつと言いながら、腹いせのつもりか、キルファが拳でその岩を軽く叩く。その瞬間。

「……………！」

閃光。

音はない。ただ、強烈な光が、一瞬辺りを支配した。明暗が逆転したかのように、辺りの空間を白い光が埋め尽くす。

不意のことだったので、顔を覆う間もなかった。強烈な光に完全に目をやられてしまっている。どうやら光はすぐに消えたらしいのだが、目を開けてもまったく周りが見えなくなってしまうている。

「くそっ……何だっというんだ」

「あたしに聞かないでよ」

悪態をついているうちに、徐々に視界がはつきりしてくる。何も、周りの風景は変わってはいなかった。薄暗い森の中。うっそうとした木々。

いや……

「何、これ……」

キルファが呆然と呟く。

先程の大岩が、物の見事に砕け散っている。さっきまで大岩だったはずの無数の石ころの先には、ぽっかりと穴があいていた。

暗いために先を見通すことは出来ないが、地面の中に続いている



ようだ。

「地下通路、か？」

「そうみたいだけど……何なのよ、これ。気味悪い……」

さつき、自分は軽く岩を叩いただけだ。それなのに、何故いきなり大岩が砕け散ったのか。常識では有り得ない。普通なら真っ先に離れるところなのだが……

「とりあえず、変な印の正体がこれだってことは分かったけど……どうする？　行ってみる？」

見たところ、地面に穴が空いており、それがずっと続いているだけだ。別段、危険であるようには見えなかった。何かしら罠が仕掛けられている可能性もないわけではなかったが、それならばその時点で引き返せば済む事だ。キルファは、罠を見抜くことに関しても自信がある。

「ここで引き返すのも腹が立つしな。それに、この中で寝られたらそれで良いだろ」

中がどうなっているのかは想像もつかなかったが、今まで大岩で塞がれていたのだから、狼が群れをなしている、などということはまずないだろう。森にいたとしても、入ってこられないように入り口に少し細工でもしておけば済むことだ。

別に謎を解明は出来なくとも、一晚野宿する場所を確保出来ればそれで良いのだから。

「そうね。それじゃ、行きますか」

キルファは頷くと、穴の中に身を滑らせた。

携帯用のランプに明かりを点けると、ぼんやりと通路の様子が浮かび上がって見えた。

「うわー……」

「……これはまた」

二人はそれぞれに呟く。

通路は全面が石で覆われており、そこにも先程のものと似た幾何学的な紋様が彫りこまれている。ランプの明かりが小さいこともあって、おぼろげに浮かび上がる情景は幻想的でした。

「……凄いわね」

石壁に彫りこまれた紋様を手で撫でながら、キルファが言う。この通路がどれくらいの長さなのかは先が見通せないのです。よく分からないが、そう短いわけでもなさそう。それだけの長さの石の通路全てにこんな細工を施すのだから、一体どれだけの手間と時間がかかっているのかなど想像もつかない。

王城に勤めていたせいで豪華な装飾は見慣れているはずのダレットですら、感心したようにため息を漏らしている。

「……まあ、凄いのはいいんだけど。結局のところ何なのかしらね、ここ」

ランプを掲げて歩きながらキルファが言った。

砕け散った大岩、この手間のかかった通路。何かしらの理由があって建設されたものであることは明白だったが、こんな辺鄙な山の中にそんな凝ったものを作る理由が見当たらない。

「……もしかしたら」

しばらく黙った後、ダレットが思いついたように言った。

「遺跡、って奴かもしれないな」

遺跡。かつてこの大陸に存在したという、＜天人＞と呼ばれる種族が残したとされる建築物の総称である。それ自体はあちこちで見

つかっているのだが、実体はまったく明らかにされていない。何故なら……

「遺跡？ ……まあ、有り得ない話じゃないけど……でもさ」

何かを思い出すような仕草をしながら、キルファは続けた。

「遺跡って、それらしい建物が見つかったとしても全然入れないって聞いたけど」

そう。入れないのである。

今自分たちが見ているような、複雑な紋様が施された建築物は大陸のあちこちで発見されている。その古さ、形式からして人間、もしくはエルフが造ったものでないことは明白なのだが……一体どういった仕掛けなのか、内部にまったく立ち入ることが出来ないのだ。扉らしいものが見つからなかったり、土木作業用の工具で壁の一部を壊そうとしても、こういった材質なのかびくともしなかったり。昔は随分と発見の報告がされたらしいが、そのいずれも立ち入れないため、最近では放り置かれているのが現状である。

地図に記されていた記号は、おそらく遺跡の存在を示すものだったのだろう。だが古い報告を書き入れただけで、説明までは記さなかったようだ。

「まあ、それはそうだが……けど、他に可能性が何かあるか？」

「一、どっかの暇人が作った。二、暇人の単なる嫌がらせ……と言いたいところだけど」

キルファが顔をしかめた。

「さっきの砕けた大岩。あんな仕掛け、どう考えても造れないのよ。一応岩も調べたけど、まったくそんな細工は見当たらなかったしね」  
元々盗賊で、細工に関しては勘の利くキルファが言うのだから、間違いないだろう。

「造れないなら、尚更遺跡って可能性が高いんじゃないか？ ……ほら、天人は今の俺たちとは比べ物にならないような高度な文明を誇っていたとか何とか」

昔読んだ……もとい、読まされた文献を思い出し、棒読みするか

のような口調でダレットが言う。

「まあ、そういう論法なら考えられないこともないけど。……けど、何の為にこんなものを造ったのかしらね？」

「さあな。それこそ俺に訊くな」

通路はとにかく長い。先程から随分と進んでいるはずだが、景色は一向に変わらない。相変わらず、石の通路が続いているだけだ。

あの王城の絨毯ですらここまでは長くなかった、とダレットは思う。いい加減、うんざりしてきていた。

「しかし、この先に何があるか、よね」

「これでさっきの場所に戻ってたりしたら、それこそ嫌がらせ以外の何物でもないな」

嫌味な口調でダレットが言う。通路は細く、またランプ以外に明かりがないため、直線なのか湾曲しているのかもはっきりしない。

「まあ、ここが本当に遺跡だとして。一つだけ言えることがあるとしたら……天人って相当の暇人だったのね、多分」

うんざりしているのはキルファも同様なのか、天人たちが聞いたらさぞかし腹を立てるであろう台詞を口にする。

「そうだなー……」

いい加減、喋るのすら億劫になってきた。二人は黙々と歩みを進める。どれくらい歩いたのか、それすらも分からなくなってきた頃。

「……何かしら」

キルファがぼつりと呟く。

長い通路の向こう。ぼんやりと、小さな蒼い光が見えた。

狭い通路とは対照的に、そこはやたらと広がった。

通路の終点。そこには、正確な正方形の空間が広がっていた。天井も高い。どうやら今まで進んできた通路は、ゆっくりと地下に向かって傾斜していたらしい。

一体どういった仕掛けなのか、部屋全体を、先程見た淡い蒼の光が包み込んでいる。ランプのような光源の類は一切見当たらなかった。

たが、不思議と暗さはまったく感じない。

そして、広い空間の中央に、祭壇か何かのように、数段高くなつた場所が存在している。ダレットは思わず、王城の謁見の間を連想した。かつての自分は、その王座の側に控えていたものだが。

どう見ても、露骨に怪しい。ダレットは首を傾げると、すたすたと部屋の中央に向かって歩き出す。

「ちよっと！ そんな怪しいものに近付いたら……」

キルファが思わず制止する。だが、もし罨などが存在したとしたら、今まで通路を進んでくる間にとうに引っ掛かっているか発見しているはずだ。わざわざこんな最深部にだけ罨を設置する意味がない。キルファがざっと見ても、罨に相当するものは見当たらなかった。

まあ、先程の大岩のこともあるので、自分の目がどれほど頼りになるのかは怪しいものだったが。とにかく、キルファは慌ててダレットの後を追った。

そして。

「これって……」

二人は階段状になった場所の頂上、それこそ祭壇に捧げる供物のように置かれたものを見つめて呟く。

部屋の中心に置かれているもの。それは、小さな指輪だった。部屋全体を覆う蒼い光と同じ色をした石が、銀色の金属環に嵌め込まれている。そのほかには何の特徴もない、何処ぞの露店に二束三文で売っていきそうな代物である。

「……だから。そんな怪しいものに手を伸ばすの止めなさいって」指輪を手にとろうとしたダレットの服の裾を引っ張り、冷ややかに言うキルファ。何とはなしに、年齢が逆転しているような気がする。本来ならダレットの方が八歳ほど年上であり、保護者的な役割も背負うはずなのだが。

「いやだって、別に危ないようには見えないぞ、これ」

「それはそうだけど、意識の問題よ。少しは警戒とかしなさいよね」

ぶつぶつと言いながら、キルファも指輪を覗きこむ。銀髪が蒼い光を受けてきらきらと輝いた。どうやら部屋を照らす光は、この指輪の石から発せられているらしい。

「……普通の指輪、よね。多分。見た目は。……やっぱり、細工とか罫とか仕掛けられてるようには見えないんだけど……」

キルファが首を傾げる。長々とした凝った通路の終点にあるものなのだから、やはりそれに見合った……少なくとも、石壁の細工の分だけは……価値があるものなのだ、と普通は思うのだが。

見た目は安物の指輪だ。嵌められている石もそれほど高い宝石には見えない。だが、この石が光を発していると言う現象がやはり常識では考えられない。先程の大岩と同様に。

「何だってのかしらね……？」

ぶつぶつと呟きながら、指輪に手をかざす。手のひらがやはり、蒼い光を受けてぼんやりと輝いた。先程のようにいきなり指輪が碎けるなどとは思わなかったが、何かしら起こるかもしれない。そんな、好奇心なのかやけっぱちなのかよく分からない感情。

何も起こらない。少々苛ついた顔で、キルファは指輪を手にとってみた。手にした感触もやはりただの指輪で、今まで見てきたもの……スラムにいた頃、娼婦たちが身に付けていた安物と何ら変わりはない。

しかし。

「……………」

目の前で、蒼い『何か』がうごめいたような気がした。思わず指輪を手にしたまま、キルファは一步後退する。ちらりと隣を見れば、ダレットは呆然として目の前を見つめている。

キルファが何も言葉を発せないでいるうちに、その『何か』は段々にはっきりとした形を取る。蒼い光が収束していくかのような現象が、目の前で起こっている。

蒼い光の彫像。それが、『それ』を例えるのに最も相応しいだろう。収束した光は、長い髪をした美しい女性の姿を取った。蒼いそ

の姿の向こうに、石壁が透けて見える。そんな、実体のない幻影の姿。

『……あなた』

高く澄んだ声が、広い部屋に響き渡る。目の前の姿と同様、美しいが現実味がまったくない、まるで幻と相對しているかのような、そんな声。

『ようやく、来た。ずっとずっと待っていた……長い、間』

まるで舌足らずな子供が喋っているかのような、文節ごとにつつかえる話し方。それだけが、目の前の成人女性らしい容姿に不釣合이었다が、とにかく、光の彫像が口を動かすのと同時に『声』が聞こえる。何が何やらさっぱり分からないが……まあ、この『女性』が喋っていると思って間違いないのだろう。

山中で変な石を発見してからというものの、さんざん常識からかけ離れたものを見てきたが、これはその最たるもののような気がする。いい加減真実を追求する気も起こらず、ただただキルファはぼんやりと立ち尽くしていた。

ふわり、と女性は手を伸ばす。光の手が、指輪を手にしたまま茫然としているキルファの頬に触れた。実体のない、幻の姿であるにも関わらず……不思議と柔らかい感触を残す。

反対に、キルファは怪訝な顔をする。

「……待ってた？」

確かに、目の前の女性はそう言った。だが、自分たちは偶然入り込んでしまっただけで、別にこんな凝った仕掛け……理屈も何も分からなかったが……に待たれる覚えなどない。ここを見つめる人物を待っていた、とでも言うなら有り得る話ではあったが。

「あんた、一体何なの？」

『私は……番人。ここを護るように、命じられたもの』

淡々と幻影は答える。

「あたしたちがここを見つけるのを、待ってたの？」

首を傾げながらキルファは訊く。何となく手にした指輪に視線を

落とすが、どう見てもただの指輪だ。

『あなた……そう、ずっと、待ってた』

何だか問答になっていない気がした。キルファは顔をしかめる。しかし、「偶然一番最初にここを見つけた人物」を待っていた、という説はなくなったように思えた。明らかにこの幻の女性は、自分を見ている。隣に立ち尽くしているダレットは眼中にも入っていないらしい。

自分と、その他大勢の人間、もしくはエルフとの区別。そんなものは無論、彼女自身も身に染みて知っているが……

「あたしを待ってた、その理由……基準は、一体何？」

『あなた……そう、紫の瞳。あの人たちと、同じ』

紫の瞳。人間とエルフの混血児の証。ハーフは確かに珍しいが、まあ、自分の他にいないわけでもないだろう。それにしても……

「あの人たちってのは、誰？」

光の幻影との問答……になっているのかは疑問だったが……はとにかく疲れる。どうやったら望む答えを引き出せるのか、キルファは必死に考えを巡らせる。

『私を、創った人。それを、ここに置いた人』

「まあ、そりゃそうか……」

嘆息して、キルファは尋ねるのを止めた。

「……結局。あんたは、一体何なの？」

あれこれと考えるのもいい加減疲れてきて、キルファは結局、根本的な質問を繰り返した。

『私はここを、護るように創られたもの。役目は、あなたを待つて

……来たら、それを渡すこと。終わったら……消える』

初めてまともな回答が得られたような気がしたが……

「ちよっと、消えるって！」

キルファは慌てたように手を伸ばす。が、指先が光の姿をあつさりとしり抜けるのを見て、愕然とした。

目の前で、幻影は徐々にその姿を薄れさせていつている。周りの



蒼い光に同化するかのように、氷が溶けるかのように。

『……ねえ』

その姿を薄れさせながら、幻影はふとキルファに語りかけた。

『あなたは、希望。私を、創った人たちの。暁の、具現。だから……』

ふと……幻影が笑みを浮かべたような気がした。儚く、すぐに溶けて消えてしまいうな……しかし、だからこそ美しい笑み。

『自分に、誇りを持って良い。あなたが、幸せになることが、願う人たちも、いたの。ね……？』

心の奥底を見透かされたような気がして、キルファは手を伸ばしたまま立ち尽くした。その間にも、どんどん幻は消えかけていつている。

『それは、きっと、あなたの、力になる。遥かな過去から、贈られた、力……』

幻影が、手にしたままだった指輪を示した気がした。どういう意味なのかキルファが問おうとした瞬間、幻影は完全にその姿を消滅させる。

後には、ただ呆然としたままのキルファだけが取り残された。

「……何だったの？」

どれくらい立ち尽くしていたのか、やがてキルファはそれだけぼそりと呟く。

「それはこっちの台詞だ」

不意に、横から声がした。びくつとして振り向けば……慄然とした顔のダレットが立っている。

「何だかいきなり一人でぶつぶつ言い出すし、俺が声をかけても耳に入っていないみたいだし。傍から見ると結構恐かったぞ。何をやってたんだ、本当に」

「へ？」

キルファはきょとんとした。一人で、ぶつぶつ言っていた？

「だって、さっきの……蒼い光の幻みたいなの……いたじゃない

いの？」

キルファの自信なさげな言葉に、ダレットは今度こそ訳が分からないと言った顔をする。

「何のことだ？ ……さっきからずっとここにいたが、人の気配なんてなかったぞ？」

確かに、先程の女性はまったく気配など感じさせなかった。だからこそ幻だと思ったのだが。いや、それにしても、ダレットの物言いは辻褄が合わない。

「もしかして……見えてなかったの？ さっきの女の人」

「いや、見えてなかったと言われてもなあ……。俺にはお前がぶつぶつ言っているようにしか見えなかった、としか」

困った顔をしてダレットは頭を掻く。もし本当に見えていなかったとしたら、そうとしか言いようがないだろう。

「……………」

これ以上ダレットを言及しても無駄だ。キルファは黙って手にした指輪を見る。これが……力？

「……何なのかしら、本当に」

もう何回呟いたかも忘れた台詞をまた呟くキルファの目に、指輪の置かれていた台座に彫られた文字が目に入った。

台座に彫られた、紋様にも似た細かい文字の羅列。先程見たときにはこんなものはなかったはずだ。

(……普通なら、ここでまた驚くんだろうけどね)

キルファは内心、嘆息する。さんざん非常識なものを見せられたせいで、感覚……常識が麻痺していつているような気がする。今更文字の羅列が出現したところで何とも思わない自分が、妙に不気味に思えた。

「……これって」

細かい文字の羅列を眉をひそめて覗きこんだキルファが、小さく声を上げた。

「何なんだ？ これ」

どうやら彫られた文字はダレットにも見えるらしく、隣から声が聞こえる。だが、おそらくダレットには、文字と認識することすら出来ないだろう。ただの記号、もしくは紋様にしか見えないはずだ。人間であるダレットには。

「魔法言語、って呼ばれる文字なの。……魔法を使うときに唱える言葉」

辞書をそのまま棒読みするかのような口調で解説するキルファ。必死で文字の羅列を目で追うが、何せ文字読みに慣れていないせいでまるで作業がはかどらない。

「魔法、って……」

隣でダレットが絶句しているのを察し、キルファは解説作業を一時中断した。

「魔法。呪文の詠唱によって、本来有り得ない現象を引き起こす技術、もしくは能力、ね……」

淡々と、昔教えられた言葉を並べるキルファ。ぼんやりとした顔で、まるで彼女の口を借りて別の誰かが喋っているかのような印象

すら受ける。

魔法。本来有り得ない現象を引き起こす技術。そして……

エルフ族しか持ち得ない能力。

ダレットら人間とエルフ族との区別。それは、『魔法』と呼ばれる能力を持ち合わせているかどうかだ。外見上の区別としてはエルフ族は長く尖った耳を持つが、それはどちらかと言うと、魔法を使える者のみに発現する特徴と言った方が良い。エルフと人間の混血児であるキルファも、長い耳を持っている。

魔法を使えない存在、人間であるダレットには、『魔法』という存在は恐怖、もしくは胡散臭い奇跡にしか見えないだろう。エルフと人間が完全に別れて生活している現在では、魔法を目にしたことのある人間などほとんどいないはずだ。

だから、魔法を起動する際に必要となる魔法言語を、ダレットが知らなくても無理はない。人間の身で学んでも、何の意味もないからだ。

ダレットとて、魔法の存在と、その起動の際に呪文と呼ばれるものが必要であることくらいは知っているが……彼自身は、正直単なる合言葉だと思っていた。言語体系、または文字が存在することは初耳である。

いや、それは良いとして。

「お前、その……魔法言語が、読めるのか？」

「一応ね」

文字読みを再開しながらキルファが言った。振り返りもせず、ただただ解読作業に没頭しているが……徐々にその顔が引きつっている。

「……どうかしたのか？ 何か、変なことでも書いてあったのか？ ここから出られない、とか」

解読作業に関しては戦力外であることが判明しているので、横でキルファを眺めていたダレットがのん気に言う。

「……有り得ない、わよ。こんなもの」

今まで見たこともないほど動揺した顔で、キルファが呟く。握り締めていた先程の指輪を眺め、戦慄した顔をしている。嵌めこまれた蒼い石が、とてつもなく不気味で……しかし、魅力的なものに思えた。

「結局のところ、何なんだ？　そこに書いてあるもの」

「取扱説明書」

まだ指輪から目をそらすことが出来ず、魅入られたように蒼い石を見つめたままキルファは言った。

「この指輪のね」

「説明書って……ただの指輪じゃないのか？　それ」

「ただの指輪どころか……」

そこまで言いかけて、キルファは言葉を切った。ふう、と大きく息を吐く。

「まあ、多分あんたに説明してもこの非常識さは理解できないだろうから止めとくわ。でも、一つだけ言えるとしたら……さっき、あんた、ここは遺跡じゃないかって言ったわよね」

「ん？　……ああ」

「あんたにしては上出来だわ。多分、それは正解」

「……俺にしてはって」

何やら不満げな顔をしているダレットは見ぬ振りをし、キルファは続ける。

「それでね。何だか先着一名様で、天人様がくれるってさ。これ」  
皮肉めいた笑いを浮かべ、キルファが手にしていた指輪を掲げて見せる。蒼い石が一瞬、きらめいたように見えた。

「……でも、天人が残したものってことは……」

「遺産、ね。天人種族の」

天人種族の残した建築物を遺跡、そして残された品物を通常、遺産と呼ぶ。だが遺跡に立ち入れないため、遺産と呼ばれるものの数は更に少ない。ごく稀に、遺跡の側に埋まっているものが発見される程度だ。何の意味があるのか、それはまったく分かっていない。

何故、自分たちだけが遺跡に入れたのか。本当の意味での『遺産』を手に入れることが出来たのか。そんなものは、分からないが……  
「……力、か」

不意に、キルファが呟いた。かすかに浮かべた笑みに、一瞬、自嘲の色が混じる。若干十四歳の少女には有り得ないような、深い疲れすら感じさせる表情に、ダレットは思わず背筋が凍るのを感じる。  
「そうね。これなら……この力なら、役に立つかもしれない」

手にした指輪を握り締め、そして指に嵌めてみる。まるで吸い付くかのように、指輪はぴったりと華奢な指にはまった。

「それ。貰っておくのか？」

「まあね。くれるって言うんだから貰っておくわよ」

肩をすくめてキルファは言った。

「さて。ここの遺跡は単なるこの指輪の保管場所だったみたいだし……多分、他には何もないわ。危険もね。どうする？　ここで一晩明かす？」

「そう、だな」

どれくらい遺跡の内部を歩いてきたのかは分からないが、おそらく外はもう深夜だろう。言われて、一気に疲労がにじみ出てくるのを感じる。

ダレットは欠伸混じりに頷いた。

一方、帝国の王都、ラインガルド。

「まったく……」

初老の男性が重々しくため息をついた。傍らに控えていた、栗色の髪に深緑の目をした若い男……隣の初老の男に面差しがよく似ている……も似たような動作をする。二人とも、妙に疲れた顔だった。ダレットの父ゴフセフと、兄ジェラルドだ。

「あの馬鹿息子……一体何をやらかしてくれるかと思えば」

「強盗に家出、ですね」

淡々と答える長男を、ゴフセフは半眼で睨みつけた。が、それも

一瞬のことで、また大きいため息をつく。

この数日間、二人は働き通しだった。王都でちょっとした政変があり、その処理に追われていたのである。

軍部の最高幹部の一人、アワード將軍の失脚。罪状は公金横領。証拠は將軍補佐の地位にあるカシユラル・レストラードが握っていたものと、『強盜騒ぎ』で將軍の屋敷に捜査に入った警衛兵が見つけた。

それだけなら問題はない。騒ぎはあくまで軍部の内部での話であり、ゴフセフとジェラルドは文官だから、余波が来ないとは言えないが、不眠不休で働かなくてはならないような事態ではない。

だが、そのアワード將軍とカシユラル・レストラードに末息子、もしくは弟が関わっていたことが問題だった。將軍の屋敷での『強盜騒ぎ』の翌日、ダレットは姿を消していたのである。

これでは、普通はこう思う。『ダレット・コルフォースが屋敷に乱入した挙句、姿を消したのではないか』と。時期が重なりすぎている。その動機こそ見つけられないが、人間というのは何かと結び付けて考えたがるものだ。

もっとも、公金横領の証拠はともかく、屋敷に乱入した強盜がダレットであるという証拠こそ何処にもない。強盜は顔を隠していた。髪と瞳の色、それと大雑把な体格だけは目撃証言によって分かっているが、栗色の髪も深緑の瞳にしても珍しいものではないし、体格にしたところで、せいぜいが『やや長身である』ということだけだ。これでは到底、人物の特定など出来ない。

とは言うものの。人の噂こそ手の付けられないものであり、その打ち消し、もしくは言い訳に二人はこの数日間走りまわっていたのである。失脚が確定したアワード將軍などは、直々にコルフォース邸に乗りこんできて怒鳴り散らした。

それをのりくらりとゴフセフが口車と証拠不充分を言い訳にかわし、ジェラルドが反対に脅しのような文句を付きつけ、ようやく追いついた。それが先程のことである。二人とも疲労していて当然

だ。

もったも。

証拠こそないが、二人とも『強盗騒ぎ』の犯人がダレットであろうことは確信している。直前のダレットの行動を見ていれば、容易に想像のつくことだ。二人とも、ダレットの性格は熟知している。

「……しかし。やはり、手が込みすぎているな、あのダレットにしては。細工が周到過ぎる」

思い出したようにゴフセフが言った。

「そうですね。それに何より、状況からして、犯人は、最低でも『二人』いたはず。弟一人では出来ない」

警衛兵の捜査で、一人が正面玄関で警備兵たちと争っていた隙にもう一人が忍び込み、將軍の私室を荒らしていったことが分かっている。

「やはり、裏に誰かがいるな。……それだけは確実となったわけだ。同一人物だと思うか？　ダレットに真相を吹き込んだ人物と」

「おそらくは」

ジェラルドはやはり淡々と答えた。抑揚に乏しい口調は疲れなど微塵も感じさせず、自分の息子ながら、思わずゴフセフはその神経を疑いたくなってくる。

「まあ、頭の切れる人物であるようですから……発案はダレットのような気もしますけどね。細工はその『もう一人』がやったと思って間違いないでしょう。」

しかし……」

そこでジェラルドは一旦言葉を切る。元々険しい顔つきに、更に眉根を寄せながら話を続けた。

「状況からして、正面玄関で争っていた『匪』がおそらくダレットでしょう。目撃証言も合いますし、長剣を所持していたこと、それにまあ……剣の腕は立ちますからね、ダレットは。それしか取り柄もありませんけど。」

いくらダレットが匪になっていたとしても、です。屋敷に忍び込



んで、誰にも見つからずに細工を施せる人物。そんな人物が、そう  
そういるものでしょうか？」

「ふむ……」

言われてゴフセフも考え込む仕草をした。

アワード將軍の屋敷は見たことがある。規模も大きいし、堀も高  
い。警備に雇っている私兵の数も多い。いくら警備兵はダレットが  
引きつけていたとしても、普通の人間なら侵入など到底出来ないは  
ずだ。それに、撤退の手際も良すぎる。

「『裏』の世界の人間、ということか？」

ゴフセフとて、スラムの主、裏社会の権力者とは多少の繋がりがある。国政に綺麗事など言ってはられない。それに……スラムとて無法地帯というわけではなく、独自の法、もしくは規律のようなものがある。権力者を押さえておけば、地道に犯罪者を摘発するよりよっぽど効率的に犯罪を抑止することが出来る。

「可能性はありますが……」

ジェラルドはゴフセフのように、清濁併せ呑むような思想は持ち合わせていない。まだ若いということもあるのだろうが、良くも悪くも、真面目に過ぎるのだ。裏社会、の単語を聞いて露骨に嫌悪の表情を表に出す。

「やはり、接点が見つかりません。ダレットと、その人物の」

ダレットは王宮騎士団所属だ。裏社会と接触する理由などないのである。騎士団というものは物理的な武力であると同時に、ある種の名誉職、もしくは抑止力としての意味合いも持つ。

騎士とスラムの人間が接触するなど、もっての外なのだ。本来ならば。

「結局……情報不足、か」

結論を出し、ゴフセフがまたため息をついた。

「そうですね……それに、こういった結末になった以上、表だってダレットを探すことも出来ません。『行方不明』とすることで決着をつけたのですから。」

せいぜいがアリエノール姉上やマリアターゼに頼んで、地方領を極秘に探すことくらいでしようか」

アリエノールにマリアターゼ。共に地方領に嫁いだダレットの姉の名だ。

何処の家でも後継者争いは熾烈なものだが、このコルフオース家に関して言えば、長男のジェラルドが文官、弟のダレットは王宮騎士団団員となったことで大した争いも起こっていない。後継ぎはジェラルドと、自他共に認めているからだ。

コルフオース家にはもう一人、ラウラという娘がいるが、そちらは王都の人間の家に嫁いだために、結婚したとは言え、今も近所に住んでいてよくコルフオース邸にも顔を出している。

まあ、それはさておき。

「あの馬鹿息子、今頃何処で何をやっているのか……」  
ゴフセフが一人ごちる。

「まったく、この無鉄砲さとはた迷惑ぶりは誰に似たのやら……」  
呟き……そして、何とはなしに長男が自分を見つめているような気がして、ゴフセフは顔をしかめた。

「私とでも言いたいのか？」

「少なくとも半分は」

半眼でジェラルドを睨みつけるゴフセフに、淡々とジェラルドは答える。

「まあ、それは私も同様ですが。しかし、あの性格は父上というよりは……母上ですね」

「レティシアか……」

随分昔に亡くなった妻の名を呟き、ゴフセフは立てかけてあった小さな肖像画に目をやった。亜麻色の髪と蒼い瞳の、小さな宝冠を身に付けた女性の姿が描かれている。何処か儂げな印象の美女だったが……実際に彼女を知っている人間は、その印象がどれほど当てにならないかを知っている。

レティシア・ファアーレイン・コルフオース。ジェラルドとダレッ

トの母親、ゴフセフの妻だ。

「あのじゃじゃ馬の性格そのものだ……しようもないところばかりを受け継ぎおって」

もはや何回ため息をついたのかも覚えていないが、それ以外にどうしたらいいのかもわからない。結局、ゴフセフはまたため息を繰り返した。

「昔は随分と苦勞させられたものだが……この歳になってまたあの苦勞をさせられるとは思わなかった」

疲れのせいもあるのだろう、ゴフセフは愚痴をこぼす。だが、自分の長男は愚痴を聞かせる相手にはあまりにも不適當だった。

「母上も多分、同じことをおっしゃると思いますよ。生きていらっしやったなら」

やはり淡々と答えるジェラルドに、ゴフセフはまたため息をついた。

「……もういい。御苦勞だった……お前もう休め。明日も仕事がある」

「はい」

頷くと、ジェラルドはすたすたとゴフセフの執務室を後にした。後にはゴフセフと、小さな肖像画だけが残される。

「……………」

肖像画をもう一度眺め……そしてゴフセフは、また小さく息を吐いた。

軍部の宿舎。將軍の失脚による各種の事務手続き、引継ぎ作業もようやく一段落ついたため、久々にカシュラルは自分の部屋に戻ってきていた。ここ数日は軍の本部に泊まり込みで作業をしていたのだ。

まあ、元々自分の行動が端を発したことなので、誰にも文句を言えた筋合いではないのだが。

「ふう……」

＜戦女神＞と呼ばれようと何だろうと、数日間ろくに眠っていないければさすがに疲れもする。大きく息を吐き、乱暴に軍服を脱ぎ捨てた。下着だけのあられもない姿でベッドに寝転がる。

疲れてはいても、常に彼女の感覚は警戒を怠らない。心地良い睡魔に身体を委ねながらも、神経の何処かがぴんと張り詰めているのが自分でも分かる。

意識してやっているものではない。それは既に、カシユラルという人間を構成する要素の一部……習性のようなものとなっている。

気がつけば、いつも手の届く範囲に刀を置いている。それは、眠るときも同様だ。枕元に刀が立てかけてあるが、それもごく自然な習慣として彼女はやっている。

小さい時から叩きこまれた習慣というものは、そうそう簡単には抜けてくれないものだ。いくら周りの環境が変わろうとも、年月が経とうとも。

「まったく……」

長い黒髪が、彼女が動くたびに揺れる。暗い部屋に、ほとんどあらわになった白い肌がぼんやりと浮かび上がる。普通の男なら、まず間違いなく理性を失いそうな情景ではあった。まあ、理性を失ったが最後、返り討ちに遭うことは必定なのだが。

「あの無能共が。私を蹴落としたかったのだろうが、そうそう簡単にやられてたまるものか」

誰もいない部屋で、カシユラルは一人呟く。

カシユラルは部下、それも一般兵から絶大な支持を得ている一方、秩序を乱す変わり種として上層部からは煙たがられている存在だ。それは、彼女自身も十分に承知している。知っているから、彼女は妥協しない。容赦しない。そうやって自分の力、存在を強引にでも認めさせることで、現在の地位を維持している。

引継ぎ作業をしていて分かったことなのだが、カシユラルを強引にでも結婚させて軍部から追い出すという策略は、随分昔からあったようなのだ。上層部の人間はかなり前から顔を寄せ集めてそんな

相談をしていたらしい。ダレット・コルフォースの名も、そんな中で挙がったものなのだろう。

だが、公金横領の証拠を掴まれて焦ったアワード将軍が先走り、何よりも駒として利用するつもりだったダレット・コルフォースがとんでもない行動に出たお陰で、その計画は御破算となった。他に利用できるような都合の良い人間などそういないし、何より、二度も同じことを繰り返せばどうなるか、上層部も承知しているだろう。アワード将軍の二の舞は、彼らとて御免のはずだ。

カシユラルが見る限り、上層部の将軍たちの中に卓抜した手腕を持つ人間はいない。いずれも名門の出身というだけで現在の地位を手に入れただけだ。もし庶民に生まれたとしても、『それなり』の人生を歩んで終わりであろう、そんな人間だけなのである。

だからこそ、彼らは保身に必死となる。頭抜けた才能、つまりカシユラルに追い抜かれなかったために。自らの凡庸さを承知しているからこそ、相手を蹴落とすことには手段を選ばない。まともには相手が出来ないからだ。

カシユラルが一番嫌う型の人間たち。だが……不運なことに、多いのだ。そんな人間は、この世の中には。

「……………」

ふと、カシユラルは一人の男の顔を思い出した。ダレット・コルフォース。変わり種の騎士。

(……面白い男ではあった、な)

夜の街での対峙を思い出す。全身の血が沸き立つような高揚感。負けはしたが……悔しさは感じなかった。自分は本気だったし、その上で相手を傷つけずに制圧する、それだけの力量を持つ相手にぶつかったのは久し振りだった。

今は何処かを旅しているであろうその男が、妙に羨ましく思えた。何にも縛られずに自由に生きられる。それは同時にとんでもない重責……自らのやったことは全て自らに跳ね返ってくる……を伴うが、とてつもなく魅力的に思えた。

が。

「私には所詮、こんな生き方しか出来ないのかもな」

彼女を縛る鎖はあまりにも重い。過去と言う名の鎖。呪縛。それを振り切る力は、彼女にはない。振り切る気力すら沸いてこない。

振り切れば……それは、自分の歩いてきた道を否定することになるから。自分と、そして同じ境遇で育った仲間の。

「……………」

何処か……心の奥底に重苦しいものを感じながら、彼女は眠りについた。

翌日。

遺跡で一晩を過ごし、久々にぐっすり眠れたお陰で、キルファもダレットもやたらと元気だ。何はともあれ、十分な睡眠というのは健康な生活を送る上で欠かせないものである。

足取りもいつもより幾分か軽い。すたすたと山道を歩きながら、キルファはダレットに尋ねた。

「ねえ、この山抜けるのにあとどれくらいかかる？」

「えーと……」

相変わらず地図を片手に頭を掻きながら、ダレットが答える。

「あと二日つてところだ。ただ、もう少し行くとエルフの村があるみたいなんだよな。ドラウイダ、って名前らしい。山中の村にしては結構大きいな」

「エルフ、ねえ……」

二人は立ち止まり、顔を見合わせた。

エルゼシア帝国が大陸を支配している現在、エルフ族は人間に『支配』されているという形になる。帝国の国王は人間だからだ。

建前上は帝国はエルフ族の存在を認めているが、同時に、様々な制限が加えられている。居住地域、公職に就くことの禁止、重税、などなど。そして、人間の街……帝国が指定した場所……に入るのにも相当の制限が加えられている。

よって、現在では人間が住む街、エルフが住む村は完全に隔離されているのが実情だ。エルフとて、差別に遭うことを承知で人間の街に入ろうなどとは思わないだろう。事情にもよるが。

差別が法律上、建前上のものだけならばまだ良い。長い間争ってきた人間とエルフの間の確執は両者の心理に深く根を降ろしている。例えばエルフが一人で人間の街にでも入り込み、そして見つかったら最後、ぶつけどころのない憎しみ、理由すら分からない苛立ちが

爆発することは確実だ。いわれのない暴力が加えられ、最悪の場合は死に至る。

実際、キルファはそういった事例を見ている。彼女自身、何回そんな目にあったか分からない。辛うじて生き延びてきているから、今こうやってのん気に歩いていられるが。

「出来れば……顔を合わせたくないわね。あんたもあたしも、どんな目に遭うか分かったもんじゃないし」

「うーん……」

ダレットは尚も地図を眺め……そして、呟いた。

「とりあえず、近くまで行ったら森に入るか。こう回ったら、何とか迂回できないか？」

地図をなぞってダレットが説明する。正直、ずっと王都で育ったダレットにはその差別と確執の実情など実感が沸かなかったが……まあ、好き好んで争いに首を突っ込むこともないだろう。

「そうね。ちょっと遅れるけど、まあ、面倒に巻き込まれるよりはマシか」

「そうだな」

二人は頷くと、また歩き出した。

だが。

そうそう、物事が上手く行くとは限らないのである。

ひゅんっ！

風を切る音、そして何かがぶつかったような硬い音。

「……………」

自分の顔のすぐ隣にあるもの——近くの木に突き立った矢を見て、ダレットは絶句した。

もし咄嗟に身体を横にずらしていなければ、矢が刺さっていたのはダレットの首であっただろう。何となく、殺気を感じて身体を動かしたただけだったのだが。

「……矢だな」



「……矢よね」

語尾だけ変えて二人は呟く。  
突き立った矢はまだ震えている。相当な弓勢だ。まともに当たれば、それこそ命がなかっただろう。

「えーと……」

ダレットが今更ながら硬直し、だらだらと冷や汗を流している隙に。

ひゅんっ！ と、再び矢が撃ちこまれる。間違いない。射手が誰かなどは分からないが……明らかに、自分たちを狙っている。

矢は何本も立て続けに撃ちこまれてくる。二人とも何とかかわしているのは、ひとえにずば抜けた勘の賜物だ。

「とりあえず逃げろ！ 二手に分かれた方がいい！」

「分かった」

矢はどれも別々の方向から射られているが、その間隔からして、おそらく射手は一人だ。二手に分かれれば、相手を撒くことも逆に制圧することも可能だろう。

二人は正反対の方向に向かって駆け出した。

「ちっ……」

木々の間を疾走しながら、ダレットは舌打ちした。気配が一つ、明らかに自分を追ってきている。どうやらさっきの射手は自分を狙うことにしたらしい。

まあ、小柄な子供と大の男と、先に制圧するべきはどちらかを考えれば当たり前の話ではあったが。

木々の間を縫うように走っているの、今は弓で狙われる様子はない。相手も自分も走っているし、木が障害になるからだ。

さっきからしばらく出鱈目に走っているものの、一向に間隔が広がる様子はない。きっちりと自分を追ってきている。人間が全力疾走していられる時間など、そう長くはない。そろそろ息が上がってきている。

このままではちがあかない。もし向こうの方が体力で勝れば、追いつかれて終わりだ。何故いきなり狙われたのかなど分からないが、とりあえず現状のままでは確認すら出来ない。

現状の確認……

(……相手を押さえるしかないか)

ダレットは心の中で呟く。

相手を押さえる手段。弓を引かれるより速く、相手の動きを制してしまうこと。今ダレットが持っているのは長剣に対する短剣、隠し武器が数種。だが、いずれも接近戦を前提としたものであり、飛び道具に対抗するには距離を縮めないことには話にならない。

走りながら長剣を抜くと立ち止まり、木々の後ろに隠れるようにして……万が一、弓で狙われるのを防ぐためである……相手が追いつくのを待つ。

距離が縮まる。相手の姿が段々大きくなる。まだだ。まだ、剣の間合いには入らない――

(今っ！)

相手が弓を引くより自分が剣先を向ける方が速いと確信できるだけの距離。それを確認してから、ダレットは長剣を手に飛び出した。

「……とっ！」

森の中に、男の声が響き渡る。良く言えば陽気な、悪く言えば軽薄な……どちらにしても、今はこちらの神経を逆撫でする効果しかないような、そんな声。

射手はダレットの剣先を曲芸のような動きで避けると、そのまま地面に転がる。数回転がると、ひょいと身軽に跳ね起きた。ダレットも敢えて追撃はせずに剣を構え直す。

「いきなり斬りかかってくるかよ！ この森も物騒になったもんだな、おい」

射手の男は、やたらと明るい口調で言いながら皮肉な笑いを浮かべた。

「それはこっちの台詞だ。先に矢なんぞ射掛けてきたのはそっちだろうが」

油断なく剣を構えながら、ダレットは相手の男を観察する。

かなりの大男だ。長身の部類に入るダレットより、更に一回り大きい。がっしりとした体格で、鍛えられている身体であるのが分かる。琥珀を連想させる茶色がかった金髪に、明るい茶色の瞳。

そして。

その耳は、長く尖っていた。

「……エルフ？」

剣先を相手に向けたまま、ダレットは呟く。

「見りゃ分かるだろ。で、あんたは人間か」

ダレットを見据え、自分に向けられた剣先に脅えるでもなく男はさらりと言った。

ダレットは今まで王都から出たことなどほとんどなかったから、当然、エルフと出会うこともほとんどなかった。変わり種が一人と、あとはハーフのキルファだ。

「……何でいきなり矢を射てきたんだ？ 説明してもらおうか。一つ間違えればこっちは死んでたぞ」

苦々しげにダレットは言う。

「俺はこの近くの村のもんなんだけどな。最近、盗賊が出るってんで交代でそこの警備をやってたわけだ。……そこに、こそこそと普通の道を使わないで歩いてる奴を見つけたら、普通は怪しむわな」相変わらずの軽い口調で、男は親切丁寧に解説してくれた。

この近くにエルフたちの村があるのは分かっていた。だから、わざわざ迂回することにしたのだが……それが裏目に出たらしい。

「たとえば、それが人間でも、だ」

言って男は笑う。その眼の色に、一瞬、猛禽のような鋭いものが混じった。

いくら帝国がエルフを『支配』しているとは言っても、それはあくまで帝国の目が行き届いている範囲での話だ。こんな辺境、もし

くは山の中ではそんな理屈は通用しない。強い方が正義である。

「言っておくが、俺はただここを通りかかっただけだ。盗賊なんかじゃない……」

「証拠は？ ……だったら、何でこそこそこんな森の中を歩いてたんだ？」

男が笑う。言いながら、腰から短剣を引き抜いた。弓……部品次第で様々なものを打ち出せる特殊弓は、ダレットが最初に斬りかかった瞬間に手から離れている。

ダレットにしても、まさか「お前らと顔を合わせたくなかったから」とは言いづらかった。いや、ダレットの表情から男はそれを理解したようだったが……ゆっくりと、芝居がかった動作で短剣を構える。

一目で分かる。相当の使い手だ。

何故こんな山中の村に、これほどの使い手がいるのかは分からなかったが……

「悪いが、あんたを不審者として村に連れていく。盗賊かどうかの判断はそれからすればいい」

冗談ではない。エルフの村になど引きずって行かれたら、間違いなく袋叩きに遭う。

帝国がエルフを支配してからというものの、エルフたちの人間に対する恨みは相当なものがある。それは、かつて人間がエルフに支配されていた時期があるから、人間自身もよく知っている。

そんな状態の中に、一人、宿敵が放りこまれたらどうなるか。とりあえず、何も考えずに……ほとんど本能的に、殺そうとするだろう。心の奥底に染みついた感覚というものは、そう簡単には自覚できないし、また抜けはしない。

「冗談じゃ……」

ダレットも無意識のうちに長剣の柄を握り直す。額に汗が浮かぶのが分かる。こちらが一步後退すれば、向こうはその分前に踏み出す。

つまり。――逃げられない。この男をどうにかしない限り、エルフたちにどんな目に遭わされるか分からない。

(……やるしかない、か)

冤罪だの何だのと言っていられる状況ではない。おそらく何を言っても通用しない。正直、争いなど起こしたくなかったが……自分の命に関わるとなれば話は別である。

先程別れたキルファも気になるが、そちらを心配してられるような状況では、もつとない。

「ちっ……」

長剣を構える。が、男はそれに動じるでもなく、かえって寧猛な獣のように笑った。手にした短剣が、猛獣の爪のように見える。

「……面白れえじゃねえか！」

短剣を手に、男は嬉々とした表情で踏み込んだ。

しばらく出鱈目に走ったところでキルファは立ち止まった。

「……来ない、わよね」

後ろを振り向き、確認する。気配も感じない。どうやら、先程の射手はダレットの方に行ったらしい。

(……どうする?)

元々方向感覚の狂いやすい森の中を、しかも知らない場所を出鱈目に走ったのだ。森の中を迂回していたこともあって、現在位置などまるで分からない。地図はダレットが持っている……いや、先程走り出したときに、背負っていた荷物は邪魔になるので放り出している。

とりあえず、自分が先程走っていたであろう道を逆に辿ってみる。慎重に地面を探り、生えた草が踏み潰された跡を探しながら歩いてみる。

どれくらい、そうしていただろうか。それほど長い距離は走っていなかったらしく、ほどなくして先程放り出した荷物だけは見つけることが出来た。

横を見れば、木にはまだ射込まれた矢が突き立っている。これで、最初の地点にまで戻れたことは確かなわけだが……

「問題は、ダレットが何処に行ったか分からないってことなのよね」  
キルファは呟く。最後に自分と正反対の方向に走り出したところまでは見ているが、その後のことなどまったく分からない。

「どうしたものかしらね……」  
荷物を前に呟いた、その時。

「……………」

きん、という硬く澄んだ音。金属と金属と打ち合わせたような、そんな音がかすかに聞こえた。

自然の中で聞こえるような音ではないだろう。となると……

(……剣のぶつかる音)

剣での撃ち合いの音。それが一番近いように思えた。

「……ダレット、ね」

呟くと、キルファは再び、音のした方向に向かって駆け出した。

間合い。つまり、相手との距離。剣を習い始めたばかりの初心者  
は軽視しがちな要素であるのだが……それは、戦闘時においては重要な意味を持つ。

武器にはそれぞれ、己の力を発揮出来る間合いというものが存在する。その間合い以外の場所から攻撃を仕掛けても、決定打になるどころか、相手に後の先を取られて返り討ちにあう危険すらある。

つまり――

「……………っ！」

ダレットは自分に迫ってきた短剣を避け、後ろに跳んで後退する。が、男はそれを許さずに再び踏み込み、連続して攻撃を仕掛けてくる。

第二撃は体さばきでは避けきれず、長剣の鰐元で受けた。が、そこからとんでもない力が押し込まれてくる。見た目通りと言うべきか、相手の男は相当な腕力の持ち主であるようだ。

ぎりぎりのところで押し込まれる短剣を受け流し、また後ろに跳んだ。一気に後退して距離を取る。相手もこれ以上は追わずに短剣を構え直した。

「はあ、はあ……」

ダレットは大きく肩を上下させる。かなり際どい攻防だった。

(……強い)

心の中で呟く。

ダレットが手にしているのは長剣、相手のエルフの大男が手にしているのは短剣。この場合、剣身の長さの違いからダレットの方が間合いが遠い。

つまり、距離が遠ければダレットが有利だが、相手の男にそれより内に入り込まれてしまうと、長剣では対応出来ない。短剣は元々極近距離、接触距離での戦闘を前提にした武器である。

ついでに言えば、短剣は小さい分、小回りが利く。たとえばダレットが先制して仕掛けたとしても、受けられてしまう可能性が高い。長剣の強みはその長さ、重量からくる威力なのだが……この怪力の男相手にそんなものがどこまで通用するかは怪しいものだった。

「器用なもんだな。大体、今のでけりがつくんだが」

男は口笛を吹くような仕草をする。この男なりに感心したつもりらしい。まあ、体術も使えるダレットだからこそ避けられたのだが。このエルフの男。その巨体に似合わず、動きは恐ろしいほど敏捷だ。あつという間に懐に入られ、短剣での攻撃を仕掛けられた。今更ながら、よく避けられたものだ。とダレットは冷や汗をかく。

だがまあ、ここで悠長に幸運に浸っている場合ではない。現実、男はまだ目の前に立ちはだかっている。

今度はダレットから仕掛けた。上からの長剣の一撃を、男は短剣の鰐元で受ける。並の剣なら叩き折ってしまうほどの一撃をまともに受けながら、男の様子に変化はない。平然として、ダレットの剣を弾き返す。

そこに、今度は男が短剣を突き込んできた。体さばきで何とかか

わすが、先程と同じく、追って男も踏み込んできていた。

しかも、今は手が伸びたまま……つまり、剣は使えない状態だ。

(……まずい！)

ダレットは思わず負けを覚悟する。

が、男は短剣をダレットには向けず、身体をひねり、上半身を後ろに向けると短剣を握った手を軽く振った。きんつ、と甲高い音が響き渡る。飛んできた何かを叩き落したのだと、次の瞬間に悟った。

男は一撃目を叩き落すと同時に、大きく横に跳んだ。先程まで男がいた場所に、何かが突き刺さる。投擲用の小さなナイフ。

「……さっきのちっこい方か」

男が呟くのが聞こえた。

「……キルファ？」

男の向こうに見える小さな人影を確認し、ダレットも呟く。

投擲用のナイフを指の間に挟みこみ、殺気立った顔で佇む少女がそこにいた。

案の定だった。剣戟の音の方向に行ってみれば、ダレットと大男が戦っていた。大男が先程の射手だと思って間違いないはずだった。だから、極力気配を殺して男の後ろに回りこみ、投げナイフを投げ付けた。気付かれている様子はなかったし、狙いも完璧。キルファは命中を確信していた。

だから……

(まさか、避けられるなんて)

咄嗟に男が叩き落すとは思っていなかった。とりあえず、ダレットの窮地だけは救えたようだが。

「さっきの奴ね？ ……一人だけを追いかけってしまうなんて、間抜けにも程があったわね」

投げナイフを手にしたまま、内心の動揺は極力隠して、キルファは冷然とした口調で言った。

「さて。これであんたは手詰まりね？ 一人対二人よ。それでも抵



抗する？」

先程とは完全に状況が逆転していた。ダレットは正直、キルファの投げナイフなどは初めて見るが……扱い慣れているし、狙いも良いし威力もある。頼もしい援護だった。

「いや……」

男は短剣を地面に投げ捨てる。ダレットは安堵した様子で長剣の構えを解く。が……

男が小さく何かを呟いているのを察知し、キルファは咄嗟にナイフを握った。が、自分が男にナイフを投げ付けるより、向こうの方が速い。

「伏せてっ！」

叫び、自らも地に伏せる。

次の瞬間。

森の中に、轟音が響き渡った。

『風よ・鉄槌と化せ!』

魔法。そう悟ったときには遅かった。

咄嗟に身を伏せたキルファの頭上を、強烈な突風……いや、大気の塊が駆け抜ける。森の中に轟音が鳴り響き、吹き散らされた枝葉がばらばらと大量に落ちてくる。

咄嗟に身を伏せたものの、完全に避けきれなかった。元々この魔法――＜風槌＞は、魔法の使用者、魔導士を中心とした一定範囲内を全て巻き込む無差別範囲の魔法である。

「つつ……」

多少なりとも大気の鉄槌の影響を受け、キルファの小柄な身体は地面を転がる。ややあって、後ろにあった木にぶつかってようやく止まる。背中から木の幹に打ちつけられ、キルファは小さく咳き込んだ。

それから、よろよろと立ち上がる。大量にかぶった木の葉を払うと、苦々しい表情で男を睨みつけた。

「いきなり……魔法の不意打ちなんてね……」

目の前の男がエルフであることは分かっていた。当然、魔法を使われる可能性もあったのだ。それは覚悟しておくべきだった。

だが……最初に短剣でダレットと剣戟を繰り返しているのを目撃していたこと、それに、二年間王都ラインガルドのスラムで生活していて、エルフ、または魔法と縁がなかったお陰で、魔法の可能性を考慮することを忘れていた。

向こうは一人、こちらは二人。卑怯などと言う言葉は、それこそ甘え以外の何者でもない。

「こっちとしても、形振り構っていられるような状況じゃねえしな。まあ、こんな風に使うのはあまり好きじゃないが」

ふらふらとした足取りで立っているキルファに、男は短剣を拾う

と悠然と近付いてくる。

(……ダレットは……?)

視線だけで辺りを見渡すと、かなり遠くの大木の根元にダレットは転がっていた。キルファより反応が遅れたようだったから、おそらく直撃を食らったのだろう。相当遠くに吹き飛ばされているし、気を失っているのか、動く様子がない。大気の鉄槌の直撃を受けたせいか、それとも木の幹に激突したせいなのかは分からなかったが。

先程、男が呟いていた言葉。魔法を発動させる言葉……つまり、魔法言語。キルファはそれを理解出来るが、ダレットには意味不明の音の羅列としか聞こえなかったはずだ。そもそも魔法という概念すら彼はよく分からないのだから、無理もない。その威力だけは身を持って知ることになったようだが。

「……あたしも、迂闊だったけど」

エルフを完全に制圧しようと思ったら、それこそ縛り上げて猿轡でもかませるしかない。自分の判断ミスだ。

あっさりと油断してしまった。短剣を捨てたことで、一瞬気を緩めてしまった。

(どうする……?)

先程の剣戟はキルファも見ている。ダレットを相手に対等、もしくはそれ以上に渡り合う男に、自分が敵うわけがない。再び投擲用ナイフを抜くが、投げ付けるより先に倒されることは確実だ。

だとしたら……

(せいぜいが口先三寸で切り抜けるか、時間を稼ぐしかない)

不本意な結論ではあったが、現実なのでこればかりは仕方がない。無駄死にはしない主義である。

「何でいきなり矢を撃ってきたの?」

無意識のうちに後ろに退きながら、キルファは大声で怒鳴る。内心の恐怖を誤魔化すかのよう。

「その兄ちゃんには説明したけどな、最近、この近くに盗賊が住みついたらしいんだよ。うちの村もこの間襲われてな、まあ何とか

撃退したんだが、元を断たないときりがねえから、こうやって周辺を警備したり近くを搜索したりしてた。

そこに、いきなり怪しい二人組が通りかかったもんだから、な」

そこで、男はひよいと肩をすくめて見せた。相変わらず陽気とも軽薄とも取れる笑みを浮かべているが、妙にその仕草は様になっている。

「それで、『お前が盗賊だろう』って言ってぼこぼこにするつもりだった、と」

キルファが男を睨み付けた。

「……よく分かってるな」

男は皮肉げに笑い、一言付け加えた。

「さすがに、半分はエルフだけある」

「余計なお世話よ」

人混みの中では目立たないようにフードをかぶっているが、先ほど強風を食らった拍子に外れていた。紫の瞳をおもちゃでも見つけたかのように眺め、言って寄越す。キルファは憮然として男を睨み付けた。

「まあ、盗賊連中は魔法を使ってたからエルフってのは確実なんだよな。こうやって近づいてみないと見分けがつかねえけど。とりあえず、嬢ちゃんたちが無関係ってのは認めてやるよ」

「だったら最初からそうしておきなさいよ。いい迷惑よ、ほんと」

キルファがこれ見よがしにため息をついた。呆れ返ったように見せかけているが、実際は安堵だ。自分一人では、このエルフの男は相手に出来ない。

「まあ、それで、だ。」

そうだな……嬢ちゃんたち、王都の方角から来てたよな。何か怪しい洞窟とか、変な人影とか見なかったか？ 正直、手がかりが掴めてないんだよ。だから俺たちも、こうやって地道に警備なんぞやってるわけで」

一瞬、昨夜の遺跡のことが頭に浮かぶが、それは黙っておいた。

盗賊に関係がないことは確実だし、色々と面倒だ。特に、エルフが相手では。

「別に……見なかったわよ。反対の方に本拠があるんじゃないの？」  
「いつ襲ってくるか分からんから、あまり大がかりな搜索も出来ないんだよね……まあ、探してみるしかないか……」

男は一人でぶつぶつ言っている。そこに、がさがたと足音がした。  
「う……」

ダレットだ。ようやく意識を取り戻したらしい。ただ、受けたダメージは消えていないのか、足取りはふらふらしている。

「おーい、生きてるか？」

男がからかうように言った。それをダレットは壮絶な顔で睨み付ける。

「お前がやったんだろうが……それに、俺が盗賊なんかじゃないってのは最初から分かってたんじゃないか……？」

「話を聞いてたのか。まあ、そうだ。けどまあ、実際に殺したわけじゃなし、それでいいだろ」

「死ぬかと思ったぞ。いきなり変な風は吹くし……あれが魔法って奴か」

ダレットは今まで魔法を見たことがない。エルフすら見たことがほとんどないのだから、当然の話だ。いきなり食らった威力に、呆然としている。

「はいはい、悪かった、悪かった」

男はぱたぱたと手を振ってみせる。だが、この男が謝っても、まるで真実味が感じられないのは何故だろうか。

「さて、じゃ、とっとと行くわよ。これ以上厄介事に首なんて突っ込みたくないしね」

キルファが言い、男をじろりと睨み付けた。

「そうか？ ……と、一つ思い出した」

男が小さく手を叩く。

「昨日の夜……夕方頃か、嬢ちゃんたちが来た方向で、変な光が見

えたんだよな。一瞬で消えたが……

あれ、何か心当たりがないか？」

キルファとダレットは顔を見合わせた。

心当たり。あり過ぎる。どう考えても、昨日、遺跡に入ったときの光だ。

「それって……」

何かを口にしかけたダレットを、キルファが慌てて止めようとする。だが、もう手遅れだった。

「何だ、知ってるのか？」

「まあね。けど、あんたの探してる盗賊には関係ないわよ、言っておくけど」

キルファが早口でまくし立てる。これ以上深入りされてたまるか。「そうか？　けど、何だったんだ？　俺も一応興味あるし」

男が首を傾げる。そこに、ダレットがまた口を開いた。苦虫を噛み潰したような表情のキルファには気付いていない。

「ほら、向こうに変な石柱とか岩があるだろ？」

「ああ、遺跡のことか。でも……あそこは何もねえだろ？　中心に変な岩があるらしいが、昔、村の連中が怪しがつてどんなに強力な魔法で壊そうとしてもびくともしなかったって話だ」

「壊れなかった？」

二人は再び顔を見合わせる。

「お前、やっぱり馬鹿力か……」

「違うわよ！」

おかしい。キルファが軽く叩いただけで、岩はあっさりと砕けたはずだ。

「あー、漫才をしてるとこ悪いが。遺跡がどうかなったのか？」

「その岩だけど。触ったら、光ってあっさりと砕けたわよ？　多分、光ってのはそのことだと思うわ。岩の下に通路があったから、岩はそれを封じてたんだと思うんだけど」

「……砕けた？」

男は啞然とした声で聞き返す。その顔は面白いように固まっている。

「嬢ちゃんが壊したのか、あれを？」

「……多分」

キルファも自信なさげに言った。自分でもあの時何が起こったのか、いまいち把握していないのだ。

「ふうん……」

男はしばらく考え込んでいたが、

「一応、見に行ってみるか。大して遠いところでもないし、気にはなるしな。あんたらも来るだろう？」

「……俺たちも行くのか？」

「壊した張本人だろ。俺の村が管理してたってわけでもないが、村の連中は結構気にしてるからな。＜天人＞の遺跡ってんで。」

……何だったら、不審者として村に引きずって行っても構わねえぞ、俺は」

「……喜んで行かせていただきます」

ダレットはため息をついた。キルファはかなり嫌そうな顔をしていたが、やがて諦めた。

「それじゃ、ま、行くか。そういやあんたら、この山を抜けるにしても、一日二日は野宿になるだろ？ 村の連中には関係ねえって言うておいてやるよ」

「それはどうも」

キルファが無愛想に言った。

「そーいーや」

男が思いついたように言う。

「まだあんたらの名前を訊いてなかったな。名前は？」

「俺はダレット・コルフォースだ。こっちがキルファ。キルファ・インシード。あんたは？」

「サリクスだ」

言って男……サリクスはにやりと笑った。

エルフは姓を持たない。正確に言えば、五十年前までは持っていたのだが、エルゼシア帝国が成立してエルフが支配下に置かれてから、姓を名乗ることを禁じられている。

もつとも、エルフも村の中では普通に受け継いだ姓を名乗っていたりもする。サリクスが姓を名乗らなかったのは、人間のダレットを気にしてのことだろう。

「さっさと行くわよ。山は早く抜きたいし」

キルファは言い捨てると、先頭に立って歩き出した。

人間と、エルフト、その中間のハーフと。奇妙な取り合わせの三人は、揃って遺跡に向かった。

「まさか失敗するとはな。あれだけ下準備をしたにも関わらず、だ。……次は失敗は許さんぞ」

木がうつそうと繁った場所。昼でも光が届きにくい場所に、二人の男の姿があった。二人とも、耳は長い。エルフ族だ。

「あの男だ。サリクス……あの野郎、やたらと馬鹿力の上に武術に長けているときている。ついでに魔法も使える。下手に手を出したらこつちがやられる。あの男さえどうにかすれば、あとは警備兵とは言っても烏合の衆だ。どうにでもなる」

「どうにかする……か。どうするんだ、具体的に」

片方の男はいらついた顔で言う。

「それは……」

もう一方の男は詰まった。睨まれ、うつむいてがたがたと震える。

「まあいい。こつちも一番の手練を出すしかねえだろう……俺が出る。あとは、あの野郎もな」

あの野郎、と聞いて男は今度こそ凍りついた。

「まさか、本当に……」

「しゃあねえだろう。出し惜しみしてやられてたんじゃただの間抜けだ。

いいか、今度こそちゃんとやれよ」



「……分かった」

男はこそそと去っていく。すぐ側に、村があった。

「……さて」

残った男はいかつい顔をかすかに歪めた。本人は笑ったつもりらしいのだが、傍から見ると余計に不気味だ。

「仕事と行くか」

「うあ。本当に壊れてやがるな」

見るなり、サリクスは言った。

遺跡の入り口を塞いでいた岩は、粉々に砕けている。割れているのではない。欠片の一つ一つが、握り拳より小さい。元々はかなり大きな岩だったのだが。

「ここまで見事に壊れると気持ちが良いな。しかし、どうやったらこうなるんだ？」

「こっちが訊きたいわよ。からくりなんて何もなかったのは、あたちがさんざん調べて証明済みなんでしょう？」

キルファとダレットは後ろで眺めているだけである。一晚を過ごした場所に戻っても、楽しくも何ともない。逆行する羽目になって腹立たしいだけである。

「この下には、行ってみたのか？ ……つうか、入れたのか？」

「一応、入ってみた。そうしたら……」

「別に、何もなかったわよ。変な模様の壁がえんえん続いてただけ。やたらと通路は長かったけどね」

ダレットを遮り、キルファが言った。

「その指輪……」

キルファに耳打ちするダレット。どうしてわざわざ黙っているのかが分からない。

「わざわざ面倒になると分かってて説明してやる馬鹿なんていないわよ。どうせ、見た目はただの指輪だし、黙っておけば問題ないでしょ。」

下手に刺激したら今度こそ始末されかねないし」

こそそそとキルファは言った。

「始末って、そうかなあ……」

サリクスの背中を見て、ダレットは首を傾げた。

「それほど悪い連中にも思えないが」

「あの男が変わってるか、それとも何か考えがあるかのどっちかよ。人間にそうあっさりとは好意を寄せるエルフなんているもんですか」

妙に大人びた口調で、キルファは言う。確かに、世間の事に関してはキルファの方が知っている。ダレットは騎士として、ある意味閉鎖された世界で暮らしていたため、中途半端に世間知らずだ。

「ま、これに関しては、単なる飾りくらいに思っておいたほうがいいかもね」

指輪を嵌めた左手をひらひらと振って見せ、キルファは言った。

こそそそと喋っている二人を、サリクスは不審そうな目で見ている。

「ん……？」

ふと遠くを見たダレットが眉をひそめる。青空に、一筋の灰色が見える。雲などではない。あれは……

「煙……だな」

眩きを聞いて、サリクスが顔色を変える。

「間違いない……村の方角だ」

「そう言えば、盗賊に襲われたとか言ってたわね」

「あいつら、また来やがったのか。……畜生！」

吐き捨てるように言うのと、キルファとダレットに背を向けるなり走り出す。すぐに、その姿は見えなくなった。

「あー……行っちゃった。さすがに速いわねー」

キルファがのんびりと言う。

「いや、そんなにのんびりとしてないで……行かないのか？」

「何処に？」

心底不思議そうに、キルファは訊いた。

「いや、だから……サリクスの村に。盗賊に襲われたって言うなら、

助けに……」

「何であたしたちがエルフの村の騒ぎになんて関わらなくちゃならないのよ。襲われようが何だろうが、知ったことじゃないわ。むしろ、今のうちにここを抜けるわよ。今なら、盗賊連中も村に気を取られているだろうから」

冷ややかにキルファは言った。

「あんた、自分が人間だってこと忘れてない？ エルフの村なんかに行ったら、袋叩きにされることはあっても、感謝なんてされるわけがないじゃないの。たとえ、村を救った恩人でもね」

吐き捨てるように言うと、これ見よがしにため息をつく。

「弱きものを助ける、か。まるで御立派な騎士気取りね……って、あんたは本当に騎士か。ま、立派かどうかは知らないけど」

ダレットは唇を噛んだ。

騎士道。小さい頃から繰り返し聞かされてきた英雄談。大勢の人々が憧れるけれど……自分は捨ててきたもの。

自分が、助けられるものなら助けたい。感謝されたいわけではない。弱き人々のためでもない。——自分のために。理想でも絵空事でもなくて、そんな砂糖でくるんだようなお伽話ではなくて、自分の本当の想い……現実として。

エルフ。人間。そんな区別など、どうでも良かった。

「……………！」

ダレットは無言で駆け出す。今まで歩いてきた、サリクスが駆け戻った道を疾走する。村の位置は大雑把にしか分らないが、煙の方向に向かえば辿りつけるだろう。サリクスに矢の襲撃を受けた場所から、ここまではそう遠くない。

「……って、本当に行っちゃったわね」

一人残されたキルファは、ぽつりと呟いた。

「世間知らずと言うか、お人好しの馬鹿と言うか……。最初に会った時から思ってたけど。今時あんな人間も珍しいわね」

腕組みをして、ただ立っているだけである。動く気配はない。

「さて……あたしはどうしようかしらね」

キルファはしばらくぼうっと立っていたが……やがて、二人が走り去った道を歩き出した。

「何だ、わざわざ俺が出ることもなかったじゃねえか。あの犬男が留守とは思わなかったな」

ドラウイダの村。辺りからは炎が立ち上り、エルフたちが右往左往する村のど真ん中で、男……カリエスはぼやいた。盗賊団の首領の、いかつい顔の男である。身長こそ大して高くはないが、身体中が盛り上がった筋肉に覆われている。額には切り傷がはっきりと残っており、それが武骨さを引き立てている。

周りでは、手下たちが大忙しで働いている。具体的には、村の蓄えを奪っているわけだ。先ほどのもう一人、村からの内通者の話どおり、サリクスとか言う男を除けば、警備のエルフたちとて大した戦力ではない。

これならば、わざわざ村のエルフを引き入れることはなかったかもしれない。単純な力押しで事足りた。

「まあ、有難いことではあるんだけどな。もうちょっと、手応えがあってもいいよなあ」

ふと呟く。

「おい、あんまり楽しんでるんじゃないぞ。取るもん取ったらとっとと退くぞ」

部下たちに向かい、カリエスは怒鳴った。

（迂闊だった……!）

疾走しながらサリクスは心の中で喚いた。まさか、自分が留守の間に都合良く盗賊がやってくるとは思わなかった。そんなに村から離れたつもりはなかったが、村までの道がとてつもなく遠く感じる。気持ちだけが先走るが、どうしようもない。

立ち上る煙が近づく。村が見えてきた。いつもは、村の周りに巡らされた塀には見張りがいるのだが、今は見張り台は空である。

「何だって簡単に入り込まれたんだ！　誰かしら、気づくはずなのに……」

前回の襲撃の時も思ったことである。が、調べるだけの時間はなかったのだ。

見張り小屋に入ると、立てかけてあった武器を手取る。いつも使っている、愛用の武器だ。外に出たときは使わないだろうと持っていなかったのを惜しむ。これがあつたら、あの人間……ダレットとの勝負もまた違ったものになっただろうに。

「あいつか！」

村の中心で大声で指示を出している男。おそらく、あいつが首領格だろう。

首領に気づかれないように建物の影に回る。

『秩序と混沌の支配者よ・姿なき世界の王者よ・我・汝に請わん・汝が力・仮初めなれど・我に与えん……』

魔法言語の詠唱。同時に狙いを定め、辺りの『場』に意識を接続する。

意識だけが身体から浮き上がり、周りの空気に溶け込むような感覚。周囲の空間と意識を完璧に同調させる。

呪文の詠唱に従って、周囲の『場』が徐々に変化していくのが分かる。一時だけではあるが、自分が、周囲の世界法則を支配する。

『――炎よ・その炎熱をもって・敵を砕け！』

呪文詠唱完了。攻撃魔法＜爆呪＞起動。

男の足元が突如、光を発する。次の瞬間、轟音が轟いた。

「＜爆呪＞……か！」

足元が光った瞬間に悟り、防御体勢を取ったお陰で、重傷は負わずに済んだ。が、細かい傷は無数に負っているし、着ている服はぼろぼろになってしまっている。

＜爆呪＞は、攻撃魔法としてはポピュラーな術だ。地面の一点を基点として爆発を起こすだけのものだが、能動的な防御などにも使

えるなど、応用範囲が広い。それに、魔法としては初級の部類に入る。

カリエスも、この魔法は知っている。が、彼自身は魔法は使うことが出来ない。

魔法とは、『場』と呼ばれるもの、いわゆる世界法則に意識を接続し、魔法言語によって一時的に世界法則の上書きを行う技術だ。それによって、本来起こり得ない現象を引き起こすものである。

人間には、『場』に意識を接続する能力がない。だから、魔法を使えるのはエルフ族のみなのだが、エルフ族の中でも、接続した『場』を書き換えるまでの干渉力を持ったものは少ない。大体、五、六人に一人の割合だ。また、どこまで広範囲の『場』に干渉出来るか……どれほど強力な魔法を使用できるかも、個人によって大きく差がある。

が、けた違いに強力な魔法使用者……魔導士でもない限り、目で確認できる範囲にしか魔法は使えないはずだ。魔導士は、この近くにいることだけは間違いない。見回してみるが、今更反抗しようなどというエルフは見当たらない。

「さて……どいつだ？」

もっとも、カリエスに探す気など毛頭ない。こうなったら、この村人全員を始末してしまえばすむことだ。

にやり、と残虐な笑いを浮かべる。手にした武器を握り締める。金属の冷たい感触が心地良い。

その時。

「貴様あつ！」

突進してくる人影が目に入る。武器を手にし、一直線にこちらに向かってくる。髪や目、体格の特徴からして間違いない。あの、サリクスとか言う男だ。

「ようやく登場……ってか」

獰猛な笑いを満面に浮かべ、カリエスは振り下ろされる武器を受けた。

ぶん、と風を切る音がする。

普通のエルフなら胴を真つ二つに出来そうなその一撃を、カリエスは巨大な棍棒で受け流した。サリクスも、連続攻撃はせずに一旦下がる。

「ハルバード長柄戦斧か」

サリクスの手をしている武器を一目見て、カリエスは言った。サリクスが、苦虫を噛み潰したような顔をする。

長柄戦斧と呼ばれる類の武器ではあるが、サリクスのものはかなり柄が長い。身長と同じ位か、それより長いかもしれない。その分、遠心力を加えた攻撃が出来るのだが、扱いにくさも倍増する。

その武器を、サリクスは軽々と扱っている。カリエスも、思わず口笛を吹いた。

「てめえだな、さっきの＜爆呪＞は。不意打ちしやがって」

「いきなり村を襲う奴になんざ言われたくないね」

軽口を叩き、長柄戦斧を構え直しながらも、サリクスは内心舌打ちしていた。彼は魔法を起動させることこそ出来るものの、辛うじて初級の魔法を使うくらい力しかない。魔導士としては二流か三流の部類に入るだろう。

だから、彼は武器の使い方を学んだ。戦士として見た場合、遥かにこちらの方に分がある。

とは言うものの、さっきの＜爆呪＞は気づかれずに仕掛けた自信があった。殺すまではいかなかったも、戦闘不能くらいにはできただろうと思っていたのだ。それなのに、この男は平気な顔をして動いている。

「何で村を襲った」

「こっちも、食わずに生きていくことは不可能なんでね」

カリエスはさらりと受け流す。サリクスも、問答の無駄を悟った。「ここですめえをぶっ飛ばしてどうにかなると思えねえな……」

サリクスが呟く。まだ村にはカリエスの部下たちが沢山いる。全



員を倒すわけにもいかないが、少しでもそちらを潰したほうが現実的かも知れない。取られた村のものを取り戻すのが第一なのだ。

「俺としてもな、部下たちの仕事を邪魔されたくはねえんだよ。だから……」

「ここで俺を足止め、かよ」

サリクスさえ押さえておけば、今までと状況は変わらない。楽な仕事だ。

「……そういうことだ！ 諦めて俺と勝負しな！」

今度は、カリエスが先に踏み込んだ。巨大な棍棒がうなりを上げる。

長柄戦斧の柄でそれを弾き、力の方向をずらす。直撃したら頭蓋ごと碎かれるであろう一撃を、真正面から受けるだけの力はサリクスにはない。それに、まず長柄戦斧の柄が叩き折られる。

「なかなかやるが……それだけじゃどうしようもねえぞ！」

にやりと笑い、更に棍棒を振り下ろす。その武器の性質上、長柄戦斧と同じで連続しての攻撃は出来ない。一撃ごとの勝負になる。

何回か攻防が続くが、どちらも決定打を放てない。武器の性質が似すぎているのだ。

更に、その重量のため、そう長く振り回してはいられない。すぐに、サリクスもカリエスも息が上がってきた。ついでに言えば、サリクスは先ほどダレットともやりあっている。スタミナ不足だ。

そして、ここで時間を取られれば取られるほど、村への被害は大きくなくなってしまふ。

（畜生が！）

心の中で毒づく。

その時。

かすかに風を切る音がした。

「……………」

カリエスの腕が一瞬震える。こめられ、たわめられた力の一部が霧散する。

そこを見逃すサリクスではない。力任せに棍棒を払うと、長柄戦斧の刃を返してその峰……刃の反対側で脇腹を殴りつける。

「がっ……」

苦悶の表情を浮かべ、カリエスは大地に膝をついた。

サリクスも、肩で大きく息をする。そして、

「……余計なことしやがって。俺一人で余裕で勝てたのによ」

側の木の陰に向かい、にやりと笑って言った。

「邪魔だったか？」

木の陰から出てくると、手にした小さな金属塊……隠し持っていた飛礫である……を仕舞いながら、ダレットは苦笑した。

「あんた、何でここに……」

倒れ伏したカリエスをとりあえず縛り上げると、サリクスは訊いた。

「いや、襲われてるってんで、気になってな。どうにか手助け出来るかと」

「手助けて……俺らはエルフだぞ？」

それなのに、何だってわざわざ盗賊のいる村に飛び込んでくるのだろうか？

「キルファにも同じことを言われたよ」

ダレットは苦笑した。そんなに珍しいことなのだろうか？ エルフを助けようとする人間は。

「……そういや、あの嬢ちゃんはどうしたんだ？」

「……さあ」

「何なんだその、さあ、ってのは」

さすがにサリクスも呆れた顔をする。

「あいつが別に関係ないと言ったんで腹が立って、走ってこっちに来たからな。まあ、多分、あの遺跡の近くにいると思うが」

「どっちかつつうと俺も嬢ちゃんに賛成だが。ま、今は手伝ってくれるんだろ？ こいつらをどうにかするのを」

「まあな、乗りかかった船だ」

ダレットとサリクスはにやりと顔を見合わせて笑った。

「それじゃ、行くか」

サリクスは言うのと、長柄戦斧を手にとった。

「……変わった武器だな。さっきは見なかったが」

「こっちが本当だ。好きじゃねえんだよな、弓とかって」

確かに、サリクスの体格には短剣や弓よりはこの長柄戦斧のほうが似合っている。ダレットも、腰に佩いた長剣を抜いた。

「掃討戦か。面倒くせえな」

「ま、追い出せば良いんだろう？　気楽にやるさ」

言うなり、二人は駆け出した。

首領がやられた盗賊団はもろかった。指示系統も何もない、ただの暴徒の集まりと化している。連携も何もあったものではないので、一つ一つ潰していくのはそう難しくない。

「おらおらっ！」

勢いよく長柄戦斧を振り回す。盗賊の男の手にする中剣はあっさりと弾き飛ばされ、そこに当身を加えて気絶させる。

盗賊団の数は十四人。うち一人は既に倒している。

二人で対抗するのには多すぎる数だったが、要は一人以上と同時に剣を合わせなければいいだけのことだ。

見る間にその数は減っていく。仲間がやられたと見るや、盗賊たちは駆けつけてくるので、それを順に倒していけばいい。中には少しは腕の立つエルフもいたが、ダレットとサリクスの敵ではない。

「なあ……」

盗賊のうちの一人を殴り倒しながら、ダレットは訊いた。

「こいつら、全員エルフだろ？　何で魔法を使わないんだ？」

「エルフだったって、全員が全員魔法をはいはい使えるわけじゃねえさ。俺だってただちよっと使えるだけだ。結構難しいし面倒なんだよ、魔法ってのは」

「そんなもんなのか」

「そんなもんなんだよ。まあ、見たところ、この中には魔導士はいねえみてえだしな。普通にぶちのめせば大丈夫だろ」

「それを聞いて安心したよ」

ダレットが苦笑する。先ほどのように、いきなり魔法の不意打ちを食らってはたまらない。

「さて、あと少しか」

サリクスが更に長柄戦斧を振るった。

はあっ！ はあっ！

息が上がる。苦しかったが、ここで立ち止まるわけには行かない。もし見つかったら、殺される……！

「畜生、何だって人間が来るんだ……！ サリクスの野郎、人間と何だって仲良く……」

息切れしながらも、何故だか言葉は出てくる。しょうもない愚痴だが。

盗賊の手引きをして、自分が見張りをしているときに盗賊団を中に引き入れる。役目はそれだけだった。元々、ただ生まれたというだけで好きでもない場所だ。愛着などはなかった。手引きの報酬はかなり美味しかったし、それを元手に他の場所に移ってもいい。

一回目は、同じ村人、サリクスの反撃で駄目になった。サリクスの力量は男も知っていたが、これほどだったとは。だから、サリクスが外回りの警備をしている間に、盗賊を中に引き入れた。何故だかはよく分からないが、サリクスはしばらく戻ってこなかった。上手く行ったと思ったのだ。

サリクスが慌てて戻ってきてても、あの首領が何とかしていてくれると思った。が、予想外の人物……人間の男が出てきたお陰で、全てが御破算になった。首領はやられてしまうし、あの様子だと、他の盗賊たちもやられるだろう。人間の男も、何者かは知らないが桁外れに強い。ただの優男にしか見えないのに。

盗賊がやられてしまえば、彼らの口から自分の名前が出るだろう。裏切り者として、村の連中が自分を許すはずがない。

だから……その前に、出来るだけ遠くに逃げなければ！

「……………」

街道とも呼べない道の向こうに、人影が見える。やたらと小柄で、フードで顔を隠している。が、それをいぶかしがっている余裕は男にはなかった。

「どけっ！」

強引に押しのけ、走り去ろうとする。人影はそれをひよいとかわしたが、振り回した手がフードに引っ掛かった。

「……っと！ 何すんのよ！」

女か、もしくは子供の声だ。子供は慌てて、外れたフードを被りなおしている。余程、顔を見られてはまずいことでもあると言うのか。

慌てて苛立っていたこともあり、男は立ち止まるなり怒鳴った。

「うるせえ！ いきなり出てくるのが悪い……」

言葉は途中で沈黙に変わった。フードの下にあるものが一瞬、見えただけである。

「紫の目……！ てめえ、ハーフか！」

「そうよ！ それがどうかしたの？」

子供……キルファも負けじと怒鳴り返す。

相手が子供だと言うこともあり、男は自分が逃げなくてはならなくなつた不条理をぶつけようとした。子供の手を取ってひねり上げようとする。旅装束であるところからして、少しくらいは金を持っているかもしれない。そうでなくとも、殴り飛ばして、踏みつけてやれば、少しは気分も晴れるかもしれない。

本当はそんなことをやっている余裕などないのだが。焦りと苛立ちで、客観的な判断が出来なくなっている。

男のそんな身勝手な考えは、ことごとく外れた。

キルファは男の手をあっさり逃れると、身軽に身体をひねって一

歩離れる。懷に仕込んだ投げナイフを抜くと、無造作に投げつけた。投げナイフは男の頬をかすめ、近くの木に突き刺さる。拔群のコントロールだった。

「あ……」

先ほどの恐怖が再び蘇り、男はがたと足を震わせた。

（ちよっと脅かしたただけなのよ？ 何でこんなに脅えてるのかしら、このおっさん）

いきなり投げナイフを取り出すほうにもかなり問題があるのだが。キルフアは男の様子にいぶかしげな顔をする。

「止めて、殺さないで……」

ぶつぶつと男は呟く。その瞳に、キルフアは映っていない。キルフアは知る由もないが、同じ村のエルフたちだ。怒りに顔をこわばらせた。

（要するに、何かやらかしたってことかしらね？ それか誰かに追われてるか）

そこまでは、キルフアにも察することが出来た。

（ま、いいか。放つといてさっさと行こ）

エルフの村に走り出してしまったダレットも心配だ。まったく何を考えているのか、あの得体の知れない騎士は。

「畜生、人間なんて出てこなければ……」

きびすを返して歩き出そうとしていたキルフアは、男の呟きに足を止めた。

「人間……って、何があったの？」

振り返って聞いたです。

がたがたと震え、うわごとを呟いていた男は、キルフアの問いかけに我に返ったようだった。

「うるせえ！ ハーフのガキなんぞには関係ねえ……」

だん！

硬い音が、男の声を遮る。

こわごわ、顔を動かさずに目だけで確認する。顔のすぐ側に、も

う一本ナイフが突き刺さっていた。先程とは反対側だ。

そして。それを投げ放った少女は、完全に据わった目をして男を見ている。

「何があったのかって訊いてんのよ。答えなさい」

冷たい目をしてキルファは言う。問いかけではない。命令だ。が、なおも男は喚きたてた。

「黙れ、出来損ないに喋ることなんぞねえ……」

もう一本、ナイフが突き刺さる。今度は、男の服の裾を後ろの木に縫い付けていた。

出来損ない。ハーフを指して使われる言葉である。キルファは今更それを責めることもなかったが、その目が刃のように輝く。

この少女は、何の躊躇いもなく自分にナイフを投げつけるかもしれない。ようやく男はそれを悟る。だが……遅すぎた。

「だったら、その出来損ないの前でがたがた震えてるあんたは一体何なの？ 自分の立場ってものを考えるのね」

手の中でナイフを弄び、キルファは氷のごとき冷ややかさで言った。

「……これで全部か」

村の中心に盗賊たちをまとめて縛り上げると、ダレットは一息ついて言った。

「そうみたいだな」

周りでは、村のエルフたちが、奪われかけた品物を確認したり、火がかけられた家を消火したりしている。いつもの平穏は戻っていないものの、危機は脱したと言えた。

「しかし、何で入れたんだろうな……」

サリクスがぼつりと疑問を漏らした。

「どういうことだ？」

「いや、一回目に襲われたときも、警備はきちしやってたはずなんだな。それなのに、二回も侵入されちまった。何か理由があるのかと思うんだが、何が何だか」

「うーん……内通者でもいたとか」

少しだけダレットは首を傾け、そして指を立てて言った。

「まさか。……いや、有り得るな」

「心当たりがあるのか？」

「一人、最近、やたらと態度がおかしかった奴がいてな。大して気にしていちやいなかったんだが、もしかしたら……」

「そいつかもしれない、と」

「まあ、可能性の話だな。あとで問いただしてみくらいはした方がいいかもしれねえな」

サリクスは口の中で呟く。

「さてと、それじゃあ」

ダレットは立ちあがると、村の出口に向かって歩き出す。

「もう行くのか？」

「いい加減、キルファを探さないとな。機嫌を損ねたら後々困る」



「そういや……お前ら、どういう関係なんだ？」

「……さあ。何なんだろうな」

ダレットは苦笑した。自分でも分からないのに、それほど長い間というわけでもないにしろ、一緒に旅をしている。

相棒。それが一番ふさわしい気がした。

「まあ、いいさ。仲良くやれよ。何、あと五年もしたらいい女になるぞ、あの嬢ちゃんは」

「はいはい」

また苦笑いをする。顔立ちの整った少女だとは思いますが、その身体  
の線は、まだ女らしさとは程遠い。……本人の前でこんなことを言  
ったら、間違いなく殴り倒されるだろうが。

その時。

「……………！」

轟音。

「うわっ……」

突如として吹きつけた爆風が頬を叩く。近くを、折れた木の枝が  
吹き飛んでいった。

しばらくして、ようやく爆風はおさまる。村の外れ、すぐ側の森  
の中から煙が立ち昇っている。

「何だったんだ……？」

「爆発の魔法……だな」

自分自身が魔法を使うこともあり、サリクスはすぐに断言した。  
火薬による爆発では、ここまでの威力は生み出せない。

「魔法って……村の誰かが使ったのか？」

「いや、この村にこんな強力な魔法を使える奴はいない。せいぜい  
が俺くらいなもん……」

「……ということは」

二人は顔を見合わせた。

「……まだいやがったのか！」  
考えられることは一つしかない。盗賊が他にもいたのだ。

二人は慌てて駆け出した。

「はははっ！ 全部燃えちまえ！ いい気味だ！」  
高笑いが響く。

村の外れ。村を取り囲む塀は爆発で吹き飛んでいる。大きく地面はえぐれ、中心はまだ煙がくすぶっている。

「あいつか？ いや、あれは……」

「……正気じゃねえな、どう見ても」

走ってきたダレット、サリクスは立ち止まると困惑の表情を浮かべた。

目の前には一人の男がいる。どう考えても、その男が爆発を引き起こした魔導士だ。が、男は異常に痩せており、顔は頬骨が浮き出ている。くぼんだ眼窩に、異常に見開かれた目。その目の光は、明らかに通常とは異なっている。

年齢はいまいちはっきりしないが、まだ若いようだ。異常に小柄な体を、ぼろぼろの濃緑色のコートに包んでいる。

「てめえ、何のつもりだ？」

サリクスが問いかける。元より答えなど期待していなかったが、意外にも、男は返事を寄越した。

「全部ばらばらになっちまえばいいんだ。全部、な」

そしてまた高笑いをする。

これでは問答にならない。

「畜生、訳が分からねえ！ とりあえず取り押さえるぞ！ 話はそれからだ！」

「分かった！」

二人は男に向かって駆け出す。男は二人に気づいていないのか、まったく反応を示さない。虚ろな瞳には、何も映っていない。

いや。ぶつぶつと口の中で呪文を唱える。サリクスはそれに気づいたが、構わずに走った。魔法を起動させるより先に倒してしまえば済むことだ。魔法を起動させるには、極度の集中とそれなりの時

間が要る。

が、それは普通の状態のエルフの場合だ。この男は、色々な意味で普通ではなかった。

ごう！

風がうなりを上げる。真空の刃が、幾重にも重なって放たれる。

不可視のそれは、たちまちのうちに二人を切り刻んだ。

「くあ……」

辛うじて倒れるのだけはこらえたが、たまらずに地面に膝をつく。細かい無数の刃は、二人の身体を両断こそしなかったものの、大小取り混ぜて無数の傷を作っていた。服が、たちまちのうちに紅く染まる。

このままでは、いずれ出血多量で倒れてしまう。激しい運動などもつての外だ。

「何なんだ、あいつは……！」

サリクスが毒づくが、男は答えるはずもない。ふらふらとした足取りで、村に入っていく。村の内部で、もう一度この魔法を起動されたら、とんでもないことになる。

攻撃魔法＜風刃＞。真空の刃を作り出す魔法だ。これもよく知られている魔法……ただしサリクスは使えない……だが、これほどの威力はないはずだ。あの男は、基本となる呪文に威力増加の呪文を加えて、殺傷力を上げているのだろう。

魔法。世界法則を書き換えるこの技術は、その威力の一方でとてもない危険をはらんでいる。魔法を行使すれば、多かれ少なかれ、反動がくる。どんなに優秀な魔導士でも、魔法を使いすぎれば、そのうち精神疲労を起こして倒れてしまう。

そのはずだ。あの男は、何者なのだ……？

「畜生が……」

サリクスの呻き声は、あっさりと風に吹き散らされた。

「爆発……？」

轟音は、キルフアの耳にも届いていた。

「魔法かしら……ね」

火薬による爆発とは音が違う。それに、この向こうにあるのはエルフの村だ。魔法を使ったほうが遥かに早い。

しかし、並のエルフが使える魔法の規模でもないような気がする。音から推測することしか出来ないが、かなり大規模な爆発だ。

先ほど出会ったエルフの男が、盗賊を手引きしたと言う話は聞き出した。ついでに、今盗賊が攻めてきていることも、そこに人間の男……おそらくはダレットがいることも。

それはつまり。その爆発の側にダレットがいる可能性があるということだ。

「……………」

見る見るうちに顔が青ざめる。魔法に対抗する術も、知識もあの男は持っていない。防ぎようがない。

「あの馬鹿！」

叫んで、キルフアは駆け出した。

「くそつ……」

剣帯から剣を鞘ごと外し、それを杖のようにして、ようやくダレットは立ちあがった。横のサリクスも似たようなものだ。

鎧の類は身に付けていなかったものの、傷はそう深くはない。手当てさえ出来れば、数日で治るだろう。が、数が多すぎる。少し動いただけで、全身に針を突き立てられたかのような痛みが走る。これでは剣を振るうことなど出来ない。意識の集中がそもそも無理だ。

「あの野郎、何をする気だ……？」

サリクスがよろよろと歩きながら、村の中に歩いていく。ダレットも慌ててそれを追おうとする。が、意識だけが先走り、身体は一向に言うことを聞いてくれない。

「あのエルフ……目がおかしかったが。何か理由があるのか？」

「知らねえよ。俺に訊くな」

こっちが訊きたいくらいだ。サリクスは吐き捨てるように言う、切れた口元を拭った。

『氷よ……我が意に従いて・氷陣と成せ!』

男を中心に、氷の吹雪が発生する。極寒の風は辺りのものを容赦なく凍てつかせ、高速で飛び交う氷の粒は、確実に範囲内のものを撃ち抜く。

「はは……はははあっ!」

村のエルフたちが倒れ、苦しんでいるのを見て、男を満足そうに高笑いを上げた。常軌を逸した目に、狂喜の光が見える。

自分が何をやっているのか。考えることが出来ない。考えられない。魔法を使うこと。強力な魔法を。出来るのはそれだけ。自分にあるのはそれだけ。それで周りがどうなるうが、知ったことではない。自分が使った魔法の効果が見えれば、それでいい。

「はは……ひやははっ……」

そして、今、自分の魔法を食らった連中は、あんなにも苦しんでいる。これほど楽しいことがあるだろうか。

さて。どうせだから、もっと魔法を使ってやろう。もっともっと強力なやつを。

『矢となりて・我が敵を貫け!』

攻撃魔法<炎矢>起動。

無数の炎が、風を切って疾った。

「これね」

地面にあいた大穴の前で、キルフアは呟いた。間違いない。先程の爆発音はこれだ。

魔法であることは間違いないだろう。狙いを絞らずに力を解放する爆発系の呪文は、精度が低い代わり、簡単に起動することが出来る。しかし、それにしてもこの穴は大きかった。余程強力な魔導士が魔法を使ったのだろう。

顔をしかめて地面を見やる。と、視線が一点で止まった。

地面に染み込みかけた紅い染み。

「……………」

その正体は、考えなくとも分かる。血だ。見渡せば、あちこちに血が飛び散っている。全体としては大した量ではなさそうだが……  
「……＜風刃＞でも起動したかしらね……？」

正解である。

キルファは少しの間、首を傾げていたが、やがて慌てて走り出した。

「……あの馬鹿！」

村の中に駆け込みながら、独りごちる。

「ダレット！ ……まったく、エルフ連中かばって自分が大怪我してたら、指さして笑ってやるわよ」

この血が、ダレットのものである可能性もあるのだ。自分自身に舌打ちしながら、キルファは焦燥に眉を寄せた。

「野郎、好き勝手やりやがって……」

サリクスが走る。

「畜生っ！ 覚悟しやがれ！」

大声で怒鳴られ、自分に刃を向けられて始めて、男はサリクスとダレットの存在に気づいたようだった。その目が二人を捉え……

笑う。

「てめえ、何考えて……」

サリクスが長柄戦斧ハルバードを振るう。痛みは無理矢理に無視しているようだが、その動きは確実に鈍っている。動くたびに、身体から血が流れる。

『風よ・鉄槌と化せ』

魔法が起動する。サリクスの身体を、大気の巨大な鎚が叩いた。巨体がなす術もなく吹き飛ばされ、地面を転がる。ダレットが慌てて駆け寄ろうとするが、彼も身体が思うように動かない。

サリクスは死んではいけないようだが……このまま、放置しておいたらまずい。

男は、それきり二人には興味を失ったらしく、ふらふらとした足取りで立ち去ろうとする。

「待て……」

ダレットは、その背中に向けて言うと、長剣を構えた。そして、そのまま突っ込む。

「……………」

振り下ろした剣は、物の見事に空振りした。一瞬にして、男の姿が消えうせてしまったかのようだ。

しかし、男はダレットの横に回りこんでいる。魔法に気を取られて、それを制圧することのみに集中してしまっていた。まさか、こんなに機敏だとは思わなかったのだ。

無論、普段のダレットなら確実に捉えることが出来ただろう。本人は気づいていないが、全身の傷はあまりにも重い足枷となっている。

体勢を立て直そうとするダレットを、再び魔法が襲った。＜風刃＞が、ダレットを今度こそ切り刻もうとする。

（駄目か……）

見えぬはずの真空の刃が、はっきり見えた気がした。ゆっくりと、無数の刃はダレットめがけて振り下ろされる。

ダレットは思わず目を閉じる。

次の瞬間、蒼い光が辺りを包み込んだ。

「いた！」

疾走するキルファは、一瞬、安堵の表情を浮かべる。が、それもすぐに消える。

「怪我してるわね……案の定よ、あの男は！」

ダレットは全身に傷を負っている。それなのに、剣を構えている。この村の、エルフを護ろうと。

（情けないわね……）

ダレットの行動が、ではない。自分がだ。関係ない、と言って関わろうとしなかった自分が。

ダレットが、男に斬り付ける。が、それはあっさりとかわされ、反対に男の魔法がダレットを襲おうとする。

キルファには、男が誰だかは分からない。が、その目が常軌を逸していることだけは理解できた。あの男は、嬉々としてダレットを殺そうとしている。

（駄目……絶対に、駄目！）

心の中で叫ぶ。どうすれば。どうすれば良い？

（あの指輪！）

遺跡で見つけた指輪と、書かれていた内容を思い出す。荒唐無稽としか言いようのない内容だったし、到底信じる気にはなれなかったが……今は、それを信じるしかない。

左手を前に突き出して、指輪に意志を注ぎ込む。そうして、鍵となる言葉を叫んだ。

『開門っ！』

（封じられし力……）

指輪から流れ込んで来るかのように、キルファの脳裏に言葉の羅列が浮かぶ。

（我が命に従いて・開放されよ・その力もて・世界の歪みを是正せよ・全ての存在よ・真白き世界へ還れ！）

瞬間。

指輪から発せられた蒼い光が、キルファを包み込んだ。



自分を襲うであろう一撃。不可視の刃。

ダレットは目を閉じて、それが来るのを待った。が、いつまで経っても来ない。

「……………」

恐る恐る目を開けるダレットの瞳に、呆然と立ち尽くす男の姿が映った。

「……何とか間に合ったわね」

後ろから声が聞こえる。聞き慣れたはずの声が、これほど嬉しいと思ったことはなかった。

「キルファ……」

ダレットは呆然と言う。よろよろと男から離れ、キルファの横に退がる。

「何があったんだ……？」

「これよ」

キルファは左手を上げ、指に嵌めた指輪を見せ、ひらひらを手を振って見せる。先ほど強烈な蒼い光を発した指輪は、今はただの蒼い石となっている。

「半信半疑だったけどね」

あの遺跡に記されていたことは、この指輪と合言葉で、高速で「魔法を消す」魔法を起動できる、ということだった。一切の魔法を消去する、＜白紙＞の魔法。

現在のエルフの魔法技術では、『魔法を維持する』ことは出来ない。書き換えを要請した『場』も、時間が経てば元に戻ろうとするからだ。その性質を打ち消すことは出来ない。だから、魔法を使うにはその場で呪文を唱えるしかない。そのはずだ。

だが、たとえばこの指輪を鍵として白紙の魔法を起動直前の状態で保持しておき、いざとなったら合言葉一つで起動できるような技

術が、昔の＜天人＞にはあったらしい。キルファも、実際に見るまでは信じていなかったが。

やはり、これは『遺産』なのだ。その技術力に、キルファはただただ呆然とする。

「半信半疑って……もしたただの指輪だったらどうするつもりだったんだ」

今更ながら、思わず冷や汗をかきながらダレットは訊く。

「ま、その時は迷わずに逃げるわよ」

言いながら、キルファは苦笑する。嘘だ。おそらく、目の前でダレットがやられたら……その瞬間、自分は理性を失っていただろう。以前と同じように。

「そういやお前、何でここに……？」

「どうせあんたのことだから、こんなことになってるんじゃないかと思ってる。わざわざ来てあげたわけ。それよりあの男、一体何なの？ あの目、どう見ても麻薬中毒か何かよ」

「麻薬中毒……成る程な」

ダレットも、目の前で呆然としている男に目をやった。さっきまで残酷な光で輝いていたその目は、もう、虚ろで何も映していない。魔法を消去されたショックか……おそらく、何も見えていないだろう。

キルファは懷から投げナイフを抜くと、男に無造作に投げつける。両足を射抜かれて、男はあっさりと地面に転がった。

「終わった……か」

ダレットは大きく息を吐く。緊張が限界を超え、そのまま地面に倒れこんだ。

「人間……？」

かすかな眩きは波紋を生み、輪は徐々に大きくなる。

騒ぎが収まり、隠れていた村のエルフたちが陰から出てきている。倒れ伏したダレットを見て、エルフたちはあからさまな憎悪を顔に

浮かべる。

「何で人間がここにいるんだ？」

「出ていけ！　ここは、お前らの……人間のいる場所じゃない。俺たちの、エルフの村だ」

ざわめきは怒号に変わり、怯えの瞳は憎しみの色に染まる。それは、村中に伝染していく。

それが暴動に発展するまで、大して時間はかからなかった。先ほどの恐怖と襲われた理不尽を、得体の知れない人間にぶつけて発散させようとしても言うのかも知れない。

集まってきたエルフの一人が、倒れたダレットを蹴飛ばそうとした。全身を負傷しているのは承知にも関わらず、だ。

側にいるキルファが、男の服を引っ張って何とか止める。エルフたちの怒りは、今度はキルファに向いた。

「失せろ、貴様等！　お前も人間なんだろうが！」

「あの盗賊連中も、貴様等が連れてきたんじゃないのか？」

罵声と呪いの言葉が混じり合う。混ざったそれは刃にも似ていた。「冗談じゃないわよ！」

あまりの理不尽に堪り兼ねて、キルファは大声で怒鳴った。被っていたフードを跳ね上げる。あらわになった紫の瞳が、エルフたちを睨み据えた。

「ダレット……この人間、盗賊を倒そうとしてこれだけの怪我をしたのよ？　何の縁もゆかりもない、あんたらを助けるためにね！」

キルファも頭に血が昇っている。護身用のナイフを腰の後ろから抜くと、ダレットをかばうように前に出る。

「うるせえ！　出来損ないに偉そうな口を聞かれる覚えはない！」  
「出来損ない……ね。さっき会ったエルフも、同じことを言ったわ」

キルファは冷たい、皮肉だけの笑みを口元に浮かべる。

「その男。気絶しちゃったから近くの木に縛り付けておいたけど。何て言ったと思う？　この村に盗賊を引き入れて、金を貰うつもりだったんだってさ。」

とんだ笑い話ね。何の恩もないエルフを助けようとする向こう見ずの大ボケの馬鹿の人間もいれば、自分の村を売りつけた誇り高いエルフ族もいるんだから！」

エルフたちは、一瞬気圧されたように黙る。が、

「うるせえ！」

「さっさと出て行け、殺すぞ、貴様等！」

再び、怒鳴り声を上げる。が、先ほどの勢いはない。自分たちの恥を隠すかのごとく、彼らは騒ぎつづけた。

「言われなくても出て行くわよ。あたしたちだって、こんな所にいつまでもいたくないわ」

大仰にため息をつく、足元のダレットに視線を落とした。

「だから言ったのよ、こんな連中なんて放っておけて。自分たちが助けられたことに感謝すら出来ない馬鹿共なんて。自分たちじゃ何も出来なかったくせに、いざ助かると恩も忘れて言いたい放題。冗談じゃないわよ、ほんと。付き合ってられないわ。」

ちゃんと言ったのにさ、忠告も聞かないで突っ走るんだもの。だからそんな怪我するのよ」

無論、まだ気を失ったままのダレットが返事などするわけがない。が、キルファは誰かに聞かせようとするように、大声で言った。誰か。言うまでもない。

「ちよつと。大丈夫？ 立てる？」

キルファがかがみ込んで耳元で言うと、ようやくダレットは氣を取り戻した。

「動ける？ 悪いけど、ちよつとだけ無理して歩いてくれる？ 急いでここを出るわよ」

剣を杖のようにして、ダレットはよろよろと起きあがる。寝起きの表情で、ぼんやりと周囲を見回した。そこでようやく、険悪極まらない雰囲気気付く。

「ちよっ……何があったんだ？」

ダレットはわけが分からない。すたすたと歩いていくキルファを、

慌てて……相変わらず、足元はおぼつかなかったが……追った。

「まったく……どうしようもないお人好しね、あんた。あんな連中のために自分がこんな怪我してさ」

村の外の森の中。薬草を探し、手際良くダレットの傷を手当てしながら、キルファは言った。まだ怒りの表情をしている。先ほどの言い争いの怒りの発散先が見つからないのだ。

「俺にはさっぱり事情が分からないんだが……」

木にもたれかかり、キルファに荷物の中から取り出した包帯を巻いて貰いながら、ダレットは首を傾げる。エルフたちとの言い争いは、彼は気を失っていて聞いていない。あの陰悪な雰囲気にもさっぱり気づいていなかったと言うのだから、この男の脳天気ぶりも相당한ものだ。一歩間違えれば、永遠に意識を取り戻すことはなかったかも知れないと言うのに。

「これだけ怪我したあんたを追い出した時点で、少しは気づきなさいよね。あたしが傷の手当てが出来たから良かったようなものの、放っておいたら厄介よ、これだけの傷」

ぶつぶつ言いながらも、キルファはてきばきと薬草を塗り、包帯を巻いていく。が。

「痛っ！ 力入れすぎ！ もう少し丁寧に頼む……」

苛立ちが出てしまっていたらしい。包帯を力任せに締め上げ、ダレットが思わず苦鳴を上げた。

「二、三日は痛いかもしれないけど、傷がふさがったら大丈夫よ。幸い、それほど深い傷はないし。どうせあんたしぶとそうだしさ」

一通り手当てを終え、キルファは大きく息を吐いた。どっと疲れが出たとも言うように、近くにあった木に寄りかかる。

「まあ、良かったじゃないか。俺はまあ……死なずには済んだし。村も助かったし」

ダレットは言って、のんびりと笑った。キルファはそれを見て、深くため息をつく。

「本当に……お人好しを通り越して、ただの馬鹿よ、あんた」

がつくりと首をうなだれるキルファ。その顔が、不意に翳る。

「……どうした？」

キルファは答えない。うつむいたままで、ダレットの外套の端を掴む。

「キルファ？」

「いや……何だか、むしろように情けなくなってね」

下を向いているので、表情は分からない。だが、ダレットには泣いているように見えた。

「感謝すらないあの村の連中も。それに……最初、助けようとしなかったあたしも。お陰で、あんたに怪我までさせてしまったしね」

「でも、最後にけりをつけたのはお前だろ？」

ダレットは笑う。何の裏もない、ただの微笑み。キルファはそれを何処か懐かしく感じた。

「だったら、それを自慢に思えば良いさ。何かやったんだからな、お前は。そんなに自分に責任をおしつけることもないだろ」

「今だけは……あんたが羨ましいわ」

「……へ？」

「何の打算も、しがらみもなしに、他の人たちを助けようと出来るあんたが。あたしは駄目なのよね……まず、自分のことに頭が行っちゃって。それが情けない。……本当に」

今まで、生きるだけで精一杯だった。他人のことなど考える余裕はなかった。それに……自分のことを思ってくれる他人など、いなかった。だから気づかなかったのだ。

隣にダレットがいて、思い知らされる。自分の嫌な面を。

「別に、そんな御大層なことなんて考えてはいないがな」

ダレットは苦笑した。

「ただ、何も考えずに動いたただけだ。まあ……お前の言葉を借りれば、ただの馬鹿だな」

「そうね……」

キルファもかすかに笑った。

「その方があんたらしいわ」

その時。

「あー、お取り込み中悪いが」

「サリクス？」

木の陰からひよこつと顔を出したのはサリクスだった。ダレットと同じように、身体中に包帯を巻いている。何やら、手に包みを抱えていた。

「もしかして……ずっと聴いてた？」

キルファが顔を真っ赤に染める。

「いやあ、聞こえちゃいなかったがな。しかし仲が良いな、あんたら」

「……………!」

慌ててダレットの服の端を離す。サリクスは、それをにやにやと笑って見ている。

「ほれ、差入れだ」

放り投げられた包みを、キルファは慌てて受け取った。

「……何？ これ」

「包帯と薬。あと携帯食料。あつて邪魔になるもんじゃねえだろ」

「……どういふことだ？」

サリクスはどかつと二人の近くに腰を下ろす。

「俺も気絶してぶっ倒れてたからな、後でうちの奴に追い出したって聞いて驚いた。済まねえな。俺の村の連中がまったく何の感謝もするどころか、かえって恩を仇で返すような真似をして。」

それで慌てて持ってきた。その怪我じゃ、あまり遠くには行つてねえだろうと思ったからな。ま、俺からのせめてものお礼とお詫びつてとこだな」

「……良いのか？」

「なに、気にするなつて」

サリクスは明るく笑った。

「それに、ちょっと訊きたいこともあったしな」

「……………」

心当たりがあり過ぎる。キルファの額から、冷や汗が一筋流れた。「さっきの魔導士だがな、嬢ちゃん、麻薬中毒がどうか言っただろ。どういふことだ？」

「……聞いてたのか？」

キルファがダレットにその話をしたときには、サリクスは魔法を食らって倒れていた。てっきり、気絶したものだと思っていたのだが……

「いやまあ、身体は全然動かなかったけどよ、あの時まで意識だけはあったんだよ。それで一応、事の顛末は知ってる」

「あの男の目。どう考えても異常だったでしょ？ 麻薬中毒の連中が、あんな感じの目をするところがあるのよ。それで魔導士だったから、間違いないと思うわ」

「魔導士と麻薬が、どう関係するんだ？」

「魔導士の力量ってのは生まれつき決まってるから、魔法の力を上げるなんて言うことは無理。でも、集中力である程度は上げられる。それはサリクス、あんたも分かるでしょ？」

意識を『場』に接続し、呪文を流し込むときには極度の集中力が必要。強く集中した方が、より広範囲の『場』に干涉できるから、魔法の威力も当然上がる。無論、本人の才能……生まれつき持っている干涉力の内での話だが。

「麻薬で精神のバランスを崩して、無理矢理集中力を上げてたのよ。そういった方法があるって話を聞いたことがあるの。聞いたことないかしら、魔法の力を上げる薬草っていうの」

話……いや、噂だけはサリクスも聞いたことがある。彼自身は眉唾だと思っていたが、手を出すエルフもいるらしい。ただ、滅多に見つからない薬草らしいが。

「が、実際は何の効果もない、ただの麻薬か」



「そういうこと。ついでに言えば、この麻薬で効果が上がるのは、魔法の威力じゃなくて起動の速度ね。一瞬で、限界まで集中できるから。呪文を唱えてから魔法が起動するまで、やたらと速くなかった？」

「ああ……」

そのお陰で時間を読み損ない、サリクスもダレットも怪我をする羽目になったのだ。

「しかも、そのせいで精神異常になっちゃうんだから、何のための薬だか。多分、それでおかしくなったのを、あの盗賊団が拾っていた……いや、飼っていたとでも言ったほうが正しいかしらね。確かに、魔法戦力にはなるから」

「成る程な」

サリクスが呟いた。

「しかし、キルファお前、やたらとそういうことに詳しいよな。薬草とかのことも」

「昔の聞きかじりよ」

ダレットの問いに、キルファが何処か自嘲気味に笑った。

「ま、訊きたい事ってのはそれだけだ。まあ……あの魔法を打ち消したのにも興味はあるんだけどな、訊かないでおくことにするか」  
「そうね、ええ、是非そうしてください」

キルファが空笑いする。

エルフが最強と頼む魔法の力を、全て無効化してしまうく白紙の魔法。エルフなら誰でも脅威に感じるだろう。それこそ、命を狙われてもおかしくない。

「さて、と」

サリクスが立ちあがる。傷が痛むのだろう、その動作に長柄戦斧を振り回していたときの敏捷さはない。

「もう行くのか？」

「ああ。あんたらも、どうせすぐここを発つんだろう？」

「まあね」

「じゃあな。運が良ければ、また会えることもあるだろ。それと……有難う」

ひらひらと手を振って、サリクスは立ち去っていった。あっさりとした幕切れに、しばらく、二人とも黙っていた。

「……何か。変なエルフだったわね」

ややあつて、ぽつりとキルファが言った。

「まあな。……エルフにも、良い奴はいるさ。見た目とかそんなもんで考え方が決まるわけじゃなくて、色々な奴がいるってことだろ。人間にも、エルフにも」

「……そうね」

噛み締めるように呟く。ややあつて、キルファはぎこちなく笑った。

「俺たちは何でこんなことをやってるんだろうな！」

ダレットは思わず喚いた。

「あたしに訊かないでよ！」

隣のキルファも、やけくそ気味に言い返してくる。もうどうにでもなれ……そんな風情がありありと漂ってくる声。だが、走るその速度を緩めることはない。

周囲に家が建ち並ぶ道を、二人はひたすら全力疾走していた。

時刻は真夜中。少々欠けた月が、ぼんやりと街並みに影を落としている。本来ならば、ただ静けさだけが漂っているであろう、そんな情景。

だが、ダレットとキルファの二人が喚き散らしながら街の中を爆走しているお陰で、そんな風情はものの見事に消し飛んでいた。もつとも、やたらと騒がしいのは二人のせいだけではないが。

「……何人追いかけてきてるのよっ？ 凄い人数よ、これ！」

ちらりと後ろを振り返り、キルファが再び喚き散らした。

街の中を疾走する二人の後には、やはり何人もが彼らの後を追って走っていた。十人前後といったところか。老若男女関係なし、しかも全員が全員、何かしらの武器を手に行っている。

三流の怪奇小説にでも出てきそうな光景だった。無論、読めば数日はうなされる類のものだ。暗がりの中で何人もがぞろぞろと追いかけてくる光景は、不気味以外の何者でもない。

「ちっ……！」

目の前に突如として現れた人影に、今度はダレットが舌打ちした。暗がりなのではつきりしないが、大人の男だろう。手にしているいびつな影は、おそらく薪割り用の小さな斧だ。

「待ち伏せされた！ ……どうする？」

「地の利は圧倒的に向こうが有利だからね！ ……しゃあない、そ

この細い路地に入って！」

キルファの言葉に、二人は進路を変えた。家々がぎっしりと建て込んでいる区画の、細い路地に潜り込んだ二人を追って、何人もが細い道に入り込む。

「うわー……まだ追ってきてるわ」

石壁の中を幾重にも反響して響く足音に、キルファが舌打ちした。入り組んだ路地であるため、音の方向がはっきりしない。そのせいで、余計に焦燥感だけが募る。

「まあ、向こうもそう簡単には諦めてはくれないだろうけどな」  
曲がりくねった道を適当に走りつつ、ダレットが言った。

「でなけりゃ、最初からこんなことしないだろうけどさ！」

やけくそ気味にキルファが相槌を打つ。向こうに行き止まりを見つけ、舌打ちすると少し戻ってまた別の道に駆け込んだ。

「もう！　まるで迷路じゃないの、ここ！　たいして大きい街でもないのに……」

「ラインガルドはこんなじゃなかったのか？」

キルファは、元々王都のスラムにいた。王都のスラムも、細い道が入り組んだ構造になっていたはずだ。

「あそこもそうだったけどさ、ここまで無計画じゃなかったわね！」

王都ラインガルドのスラムは、都市の再開発によって放棄された区域だ。当初はきちんと計画を立てて建てられた部分なのである。

ここのように、最初から無計画に家を建てた結果ではない。……今はどうでもいいことではあるのだが。

「……なあ、ここ、さっき通らなかったか？」

変わり映えのしない家並みを眺め、ダレットがぼそりと言った。

「そうかもしれないけど！　もう知ったことじゃないわよ、そんなもんっ！」

とうとう我慢が限界に達したか、キルファが怒鳴る。自分でも何を言っているのかよく分かっていないらしい。

「ああもうっ！　何だってこんなことになるのよ！」

精一杯の怒鳴り声は、じめじめとした石壁に幾重にも反響し、ぼんやりと消えた。

——話は、数時間前にさかのぼる。

「……ねえ、ここなの？」

引きつった顔でキルファが訊いた。

「ここだな」

地図を片手に答えるダレットの顔も、何処か虚しく響く。

二人がいるのは、小高い丘の上。眼下には街が見える。確かに、見えている。これ以上はないというほどに。この街の状態も、全部、はつきりと。

「まさか、ここまで辺境とは思わなかったわね……」

キルファが呟いた。

風が、何処か空しく通り過ぎる。二人とも、ただ風に吹かれている。ひゅううう……と、冬でもないのに鋭く寂しげな音が響いた。

「……一応、ヨールンの街って地図には書いてあるんだが。街か、ここ？」

「前の、サリクスがいたエルフの村のほうが、よっぽど大きかったわね」

王都を離れ、山道を歩いてしばらく経つ。森にもいい加減飽きてきた頃、ようやく平地にたどり着いた二人の目の前に広がるのは、山間の小さな集落だった。地図には街と書いてあるし、一応、街の証明たる城壁もあるのだが、半分以上崩れているのがここからでも分かる。

市内を見ても、ほとんど人通りがない。まだ昼間だと言うのに。

「過疎化が進んだのかしらねえ……」

キルファの意見は、空しく風に舞った。

「ま。とりあえず、人間の街なんでしょ？ 誰もいないって事もないだろうし、とっとと行こ。久々に屋根のあるところで寝たいしさ」  
キルファがすたすたと歩き出す。ダレットもため息をつく、後

を追った。

先ほど上から見た、ヨールンの街の入り口。

崩れかけた外壁は穴だらけだったが、それでも一応、城門には門番がいた。街に入る人間を監視し、事前に盗賊などの侵入を防ぐためである。門以外の場所からの出入りは禁じられており、見つからば投獄される場合も多々あるのだが、この街の場合はちゃんと監視出来ているのかも怪しいものである。

「二人ですね……どうぞ」

門番は二人を見ると、ほとんど調べることもせずに中に入れた。役目を放り出してきたとは言え、元騎士のダレットとしては、不安で仕方がない。

キルフアは相変わらずフードで顔を隠しており、傍から見れば露骨に怪しかったが、調べようともしない。横にダレットがいるからなのだろうが、手抜きにほどがある。もっとも、フードを外す羽目になったらそれはそれで面倒なので、有難いことではあったが。

「何だか、寂しい街ですね」

やけに無愛想な門番に、ダレットは世間話の口調で言った。

「ええ、まあ。こんな山奥の街ですし。それに、ここは元々エルフの街だったところでしてね。土着の人間はほとんどいないんですよ」

門番……冴えない風貌の中年男だった……は、やたらと丁寧な言葉遣いで返事を返す。が、その目は、明らかに得体の知れない旅人を警戒している。キルフアは、森の小動物を連想した。

元々エルフが住んでいたところに、人間が移住しているのには理由がある。

エルゼシア帝国が大陸を統一したのが五十年前。エルフと人間の熾烈な争いは人間の勝利で幕を閉じたわけだが、そこで問題になったのは、その後のエルフたちの扱いだった。

建国王は、英断とも暴挙とも取れる決断をした。

すなわち、人間とエルフの完全な分離。エルフは人間の街に入る

ことを厳しく制限され、元々自分たちが住んでいた街を追い出された。エルフの居住区域は制限され、特定の地区しか認められず……具体的には、大陸の至る所にある山の中のみ……、それに加えて、エルフの村には城壁を作ること禁止された。

そして、今までエルフが住んでいた平地には人間が移住した。この街も、そんな場所のうちの一つなのだ。

「ここに来るまでに、一つ、エルフの村の前を通りましたけどね。そちらは結構大きかったですよ」

「ああ……ドラウイダの村のことですか」

ドラウイダとは、サリクスがいた村の名前だ。相槌を打ちながらも、門番の表情に一瞬、怯えの色が混じる。

建国戦争に勝利し、山の奥深くに追い払っても、人間はなおも恐れているのだ。エルフを。彼らの使う、魔法を。

建国王が、エルフの人間の街への出入りを制限した理由もそれだ。魔法は武器のように取り上げれば防げるものではないし、使いようによっては下手に人数を集めるよりよっぽど大きな威力を発揮する。何より、その原理からして人間には理解不能だ。

完全に魔法を防ごうと思ったら、エルフ自体を人間から引き離してしまうしかない。

「ところで。この街に宿はありますか？」

「ああ……一軒だけありますよ。＜大熊亭＞って言って、この通りをまっすぐ行ったところです。そんなに大きくはないんですが、看板が出てますし、すぐに分かりますよ」

門番は親切に解説してくれた。こんな辺境の小さな街では、宿屋など経営しても儲かるまい。一軒あっただけでも良かったと言わねばなるまい。

「有難うございました」

ダレットは丁寧に礼を言うと、街の中に入った。キルファも、黙ってその後を追う。

二人の後姿を見つめる門番の目が、一瞬、鋭く光った。

「……しっかし……本当に泊まれるのかしらね、この宿屋」

キルファが建物を見上げて言った。

確かに、門番が言ったとおりの場所に＜大熊亭＞はあった。が、看板……大きな熊の絵が描かれている……は絵の具がはがれてほとんど読めなくなっているし、建物も冗談抜きで傾いている。入り口の前も掃除されていないようで、この宿屋の主人のやる気のなさがかがえた。

「野宿と大差ないんじゃ、これじゃあ」

「いや、そこまで言わなくても……」

しかし、ダレットも似たような気分だった。自分が生まれた王都と比べてはならないと思うのだが、それにしてもこれは凄まじい。

「……まあ、行くか」

ここですらまでも宿屋をじろじろ観察していても仕方あるまい。他に選択肢はないのだ。

入り口のドアを開けようとすると、ぎぎいっと軋む音と、木が割れるような音が同時に聞こえた。ダレットは一瞬、ドアを壊したかと冷や汗をかいたほどだ。

「ちよっと、本当に大丈夫……」

板張りの床も、歩くとぎしぎしと軋んだ。床は埃だらけで、足跡が残っているような気がする。

「……お客さんかね」

入り口の側のカウンターから、しゃがれた声がした。向くと、初老の女性が一人座っている。おそらくこの宿屋の女主人だろう。元々は闊達な女性だったのだろうと思わせる、線の太さがあった。

「二人、泊まりたいんですか」

「ああ……だったら、ここに名前を書いてくれ。二人一緒の部屋でいいかい？」

帳面とペンを出しながら、女性は言った。

「いえ。別々にして下さい」



キルファがやたらと力を込めて言う。

「ああ、女の子か。そんなフードを被ってるから分らなかったよ。そうだね、それなら二部屋用意しようか」

そこで初めて、女性は笑った。

「お客さんたち、どうしてこんなところに？」

「いえ……単に旅をしてるだけです。色々見て回ろうか、なんて」ダレットが愛想笑いをすると言う。家出などとは絶対に言えない。

「そうかい。羨ましいことだねえ、若い男女二人が旅なんて」

「そういうのじゃありませんっ！」

隣りでキルファが大声で怒鳴った。が、女性はあっさりとそれを聞き流す。

「でもねえ、お客さん。この街、見ての通り小さいところなんで、食堂なんてほとんどないんだよ。あってもガラが悪くてね。」

うちでも簡単な食事だったら出せるけど……どうする？」

確かに、見渡せば、辺りには幾つかテーブルと椅子が並んでいた。一階が食堂、二階が客室という典型的な宿屋らしい。この様子だと、どちらもこの女性一人が面倒を見ているのだろう。正直、心許ない感があったのだが……

「そうですね……それじゃあ、お願いします」

ダレットは少し考える振りをして言った。

「そうかい。じゃあ、そこで待っておいで。どれ、お客さんなんて久し振りだねえ……」

女性は奥に入っていく。やがて、食事を作っているらしい物音が聞こえてきた。

ここしばらくはずっと野宿で、野草やキノコ、携帯用の干し肉しか食べていない。久し振りに手の込んだ食事にありつけるかもしれない。

外を見れば、日が暮れかけていた。今までの疲れがどっと出て、二人とも椅子に深く座り込んだ。

「ま、外はともかく、何とかかなりそうだな」

ダレットが安心したように言った。

「んー……まあね」

キルファが気のない相槌を打つ。

それからしばらくして、女性が盆に料理を載せて運んできた。

野草と兎の肉のスープ、煮て味をつけた芋、野菜の炒め物、川魚の煮つけ、自家製のパン。質素ではあるが、今までのことを考えれば御馳走と言えた。

「ほれ、お待ちどうさま」

「有難うございます」

ダレットが笑って料理を受け取った。

「いただきまーす」

キルファが目を輝かせて料理に手を伸ばした。野菜の炒め物を取ろうとしたが、手が届かず、身を乗り出す。が、その瞬間、身体のバランスを崩した。

「うあっ……きゃあああっ！」

がしゃんっ！

伸ばした手が、皿に引っ掛かった。炒め物を乗せた皿が引っ繰り返り、上の料理が床にぶちまけられる。

「あああっ！」

ダレットが悲鳴を上げた。

「まだ全然食べてなかったんだぞっ！」

女性も機嫌を悪くしたようで、眉をひそめてキルファを睨んでいる。

「ごっ……ごめんなさい！」

慌ててキルファは謝った。急いでぶちまけられた料理を片付けようとする。

「ああ、いいよ。そんなことは私がやるから。それより、全然食べてなかったのにねえ。もう一回作ろうか？」

「いえ、それは……。あたしの不注意ですし」

珍しく、キルファが愛想笑い……フードの下なので、表情はいま

いちはずきりしないが……をした。

「珍しいな、人の三倍は食うお前が」

「悪かったわね！」

横から茶々を入れるダレットにキルファが怒鳴り返し、手にしていたフォークを突き付けた。

「ふう……」

自分が借りた部屋に引き上げ、ダレットは大きく息を吐いた。

キルファが料理を一品駄目にしてしまったが、それでも、久々の手料理は美味しかった。王都にいた頃を思い出す。

「親父も、兄さんもエルザも……何をやってるんだか」

呟き、ダレットはごろりとベッドに寝転がった。ぎし、と木材が軋む。意外にベッドの寝心地は良かった。

全部放り出してきてしまった自分の後始末は全部、あの三人がやっているのだろうと思う。三人とも妙に責任感が強いから、さぞかし苦労していることだろう。

「はあ……」

が。今更後戻りは出来ない。自分が決めたことだ。

何時の間にかダレットはうとうとと眠りかけていた。久々に人間がいる街に来て、気が緩んでいたのかも知れない。

そこに。

こんっ。こんっ。

小さな、ノックの音がした。

「誰だ……？」

半分夢うつつのまま、ダレットはドアに向かって言った。

「入るわよ」

ノックの主はキルファだった。言うなり、ダレットの返事も待たずにはかかずかと部屋に入ってくる。この宿のドアに、鍵は付いていない。

彼女は、旅装束をきっちり着込んでいた。

「……………」

寝ぼけ眼のまま不審がるダレットを尻目に、キルファは壁にかけてあったダレットの外套と長剣を投げて寄越した。

とりあえず、条件反射でダレットはそれを受け取る。

「……………何なんだ？ 一体」

「ここを出るわよ」

何の前置きもなく、キルファは言った。横目できつとダレットを睨み付ける。

「……………どうということだ？」

「ここにいつまでもいたら、殺されかねないって言ってるのよ」

キルファは鋭い目を窓の外に向ける。が、ダレットは何が何だか分からない。

「別に、不審なことなんてなかったと思うんだが……」

言われるままに外套を着こみながらも、ダレットは首を傾げる。

キルファはそれを見て、嘆息しながら言った。

「……………さっき、何であたしが料理をぶちまけたと思う？」

「単なる不注意」

「違うわよっ！」

即答するダレットの即頭部を、キルファは思わずはたいた。が、ダレットがあっさりと避けたため、キルファの手はむなしく宙を切っただけだった。

「あのさ……………サブリアって草の名前、聞いたことない？」

ダレットはなけなしの知識を総動員する。確か、山に多く自生する草だ。

「えーっと、確か、毒薬の材料になるとか何とか……  
……って、まさか！」

「そのまさかよ」

キルファが重々しく頷く。

「あれ、結構変わった匂いがするのよね。細かく刻んであったから葉の形までは分からなかったけど、間違いないわ。

それに……」

キルファは一瞬、人の悪い笑みを浮かべる。

「あれって、こんな山の中にわんさか生えてる毒草なのよね。あたしも、ここに来るまでかなりの数を見かけたもの」

「……あったのか？ 山を通ってるときに」

「あったのよ。あんたは気づかなかっただけで。まあ、普通は毒草なんて要らないから、別にいいけどさ」

「はあ……」

ダレットは気の抜けた声を漏らした。

「……でも何だって、そんな草を混ぜ込んだんだ？」

「ま、こんな辺境の街なもの。旅人に毒を盛って、持ってる金を奪おうってところじゃない？ 辺境じゃ実際、よくある話らしいから。あたしが気がついて良かったわ、本当に。あんただけだったら、間違いない今ごろ山に放り捨てられてるわね。死体になって、身ぐるみ剥がれてさ」

「……悪かったな」

無然としてダレットは言った。しかし、真実だ。

「それじゃあ、まあ」

ダレットが長剣の金具を腰に固定しながら言った。

「そういうことなら、とっとと逃げるか。しかし、何でこんなことをやったのかなあ……」

ダレットはぶつぶつと呟いている。

「そんなに悪そうな人には見えなかったけどな。この街の人たち」  
「あんたの判断基準だったら、世の中に悪人なんていないわよ。ま、何をもって悪人とするかは知らないけど。」

まさかあんた、また首を突っ込むつもり？ 前回、あれだけ痛い思いをしたのに」

キルファが呆れ顔で言った。以前、エルフの村で盗賊騒ぎに首を突っ込み、ダレットはかなりの怪我をしている。その怪我はほとんど治ってはいしたが、また同じような目にあってはたまらない。

「まあ……そうだな」

前回の借りがあるので、ダレットはそれ以上、何も言わなかった。ドアには鍵が付いていない。あまり考えられないことだ。これも、万が一、毒を盛るのに失敗した場合のためなのかも知れない。

二階の窓から出ようかとも思ったのだが、外には月が光っている。そこを見られたら、怪しい人影以外の何者でもない。

結局、ドアから素直に出ることにした。が、歩くたびに床が軋むので、見つかるのではないかと冷や汗ものだ。

「ちょっと、大きな音立てないでよね」

キルファが囁いた。彼女は、普通に歩くのと変わらない速さで歩いているが、床はまったく軋む音を立てない。王都での所業のせいで、忍び歩きはお手の物だ。

一階に降りてみると、カウンターにあの女主人はいなかった。食堂部分には、明かりすら点いていない。必要のないところまでランプを点けるほど不経済なこともなかったが。

奥の部屋の明かりが付いているところを見ると、そちらにいるのだろう。

見つからないように、二人は出来るだけ体勢を低くして、宿の外に出た。

……とまあ、そこまでは良かったのだが。  
あっさりと見つかってしまったのである。それが、今現在、街の

中をひたすら走り回っている理由だ。

上手く宿屋を出られたと思った。後は、城壁の崩れたところを見つけて、そこから出ればいいと思ったのだ。

が、宿屋を出た途端、近くにいた街の人間と鉢合わせしてしまった。その中年の男は二人の姿を見るなり、薪割り用の短い斧を片手に追いかけてきた。

男が大声で街中に呼ばわたため、二人を追う人数はどんどん増えていっている。

「……まさか、街ぐるみだとは思わなかったわね！」

城門に向けて走りながら、キルファは愚痴を言った。

城門にも誰かしらいるだろうが、小人数だったら、ダレット一人で切り抜けるだろう。そうして山の中に入れば、街の人間の目を欺けるかもしれない。後は、急いでこの辺りを離れるしかないだろう。

「くそっ！ 久々にゆっくり寝られると思ったのに！」

何しろ、夜中である。今までの疲れもたまってきたので、ダレットも愚痴が多くなっている。

「何だってこんなに面倒なことが降って沸いてくるのよ！」

走りながら前を見ると、そこには鎌を構えた初老の女性がいた。見覚えはないが、追っ手に間違いないだろう。地の利に関しては、明らかに街の人間に分がある。どうやら、先回りされたらしい。慌てて方向転換する。

何せ出鱈目に走り回っているだけである。何をどう走っているのか、本人たちにもまったく分かっていない。

「あっちに行ったぞ！」

「俺はこっちから行く、お前は向こうから回れ！」

後ろから、何人もの怒鳴り声が聞こえてきた。

「もう……道順がさっぱり分からないわ！」

細い路地に入り込み、どれくらい走ったのかも分からなくなった頃、キルファが喚いた。

「外に出るのが難しいな」

ダレットがのんびりと……今まで通り走りながらだが……言った。「それだけじゃなくて！ 挟み撃ちに遭う可能性があるって言うてんのよっ！」

確かに、今走っているのは細い裏路地だ。明かりも月明かりだけで、見通しが良いとは言いにくい。挟み撃ちに遭っていても、直前まで分からない可能性がある。

「……だったらどうする？」

「どうもこうもないわよ！ 強行突破！」

キルファが物騒なことを言う。

が、それがただの冗談では済まなくなっていた。

「……行き止まりか」

足を止め、ダレットがうめいた。

細い路地は、前に建てられた煉瓦造りの建物で分断されていた。

元々、家と家の間にできたような細い路地だ。区画によっては、こうなっていることも十分考えられた。

後ろからは、何人もの足音が聞こえてくる。追いつかれるのも時間の問題だろう。

「……こうなったら……」

キルファが呟く。フードの下で、紫の瞳が怪しく輝く。

「ダレット、ちょっと剣貸して」

言うなり、自分でダレットの剣帯の金具をいじり、スリの早業で長剣を鞘ごと外す。

「おい……」

ダレットの抗議はこれ際無視。

すぐ側には、石造りの家がある。閉まった窓の部分だけ木で出来ていることを確認すると、そこに思いっきり剣を突き込んだ。

ばんっ！ と、大きな音がする。一瞬びくつとするが、この状況で音を殺しても意味がない。

別に、窓にはまっている木を割るつもりはない。が、窓に取りつ



けられた金具が衝撃で壊れ、だらしなく半開きになった。

キルファは身軽にその窓の中に身を躍らせる。家の住人の悲鳴が聞こえるが、これもまた無視。

「ほら！ さっさと行くわよ！」

ダレットが窓から家に侵入する頃には、キルファはもう住人の間をすり抜けて、入り口に向かっていた。

「ああああ……俺は騎士だったのに……何で家宅不法侵入なんかやってるんだろう……」

ぶつぶつ言いながらも、キルファの後を追って走る。路地で男たちが喚いているのが聞こえてきた。

「勝手に退職してきたんでしょ？ 今更とやかく言わない！ それに、先に毒なんて盛ってくれたのはこの街の連中なんだからね！」  
「ばたばたと走りながらキルファがしっかりと突っ込みを入れる。」

「しかしお前、結構やり方が乱暴……」

「悪かったわね！」

条件反射的にキルファは怒鳴った。

最初は出来るだけ、街の住民を傷つけないように逃げ出そうとしていたのだが、そうもいかなくなってきた。

人数が違いすぎる。それに、全員が全員、自分たちの後を追って走っているわけではない。

目の前に、いきなり村の子供が現れる。横を向けば、そこにも腰の曲がった男がいる。

次第に、二人は包围されていた。

仕方なしに、目の前を強行突破し、通りすがりにダレットが当身を加えて気絶させたりもしてみるのだが、焼け石に水程度の効果しかない。まさか、街の住民相手に剣を抜くわけにもいかない。

なおかつ、今何処を走っているのかも分からない。元々知っている道も、城門とく大熊亭との間の道だけなのだ。何処に向かえば街の外に出られるのかも、見当もつかない。夜のことなので、街を囲

んでいるはずの城壁は見えない。

「……ねえ、あれって」

走りながらキルファが、目の前にあるものを指す。

「……城か？ それにしては……」

ダレットが言った。

街の中心、もしくは周囲の城壁の一部に隣接して、領主の城があるのが普通だ。王都ラインガルドの場合は、街の中心に王城と政治関係の施設が存在していた。その周辺は、街でも一番栄えている場所であるのが普通だ。

が、今日の前に見えている城……もうかなり近づいている……は、荒れ放題になっているのが遠目にもはっきりと見える。城壁と同じように石垣は崩れ、蔦がびっしりとその周りを覆っている。

到底、領主が住んでいるようには見えない。しかし、領主、もしくはその代官が不在の街というのは聞いたことがない。

何か、理由があるのだろうか……

その様子からして、城は無人だろう。人がいる気配というものがまったくくない。

「……………」

後ろには何人もの気配が迫っている。いくらダレットでも、相手が素人の人間でも、手に余る人数だ。

「ああもうっ！ どうにでもなれ！」

捨て鉢なセリフを吐き、二人は城の中に駆け込んだ。

城の門もまた、守り手もないままに開け放たれていた。

門の中に飛び込む。以前は季節ごとの花が咲き誇っていたであろう庭も、荒れ果て、雑草が生い茂るままになっている。

置かれた女性の彫像が、半分砕け散ったまま、悲しげな瞳をこちらに向けていた。

「……こりゃあひどいな」

「昨日今日放置されたわけじゃないわよ、この様子だと」

しかし、ゆっくりと周りを観察している暇はない。建物の中に駆けこむ。

「よっ……と！」

ダレットが、全体重を載せて城の扉を押す。

ぎいいいい……っ、と重い音を立てて扉はゆっくりと閉まった。

完全に閉まったことを確認し、門をかけたところで、ようやく二人は安堵のため息をついた。

「……あー、助かった……」

「でもこれで終わったわけじゃないわよ。ここから脱出しないといけないんだから。まあ……しばらくは入って来れないと思うけどね……」

この城の入り口が、他にもないはずはないのだ。

携帯用ランプの明かりを点ける。ぼんやりと、城の内部の様子が見えた。

「……これはまた……」

ダレットが呆れたような、感心したような声を漏らす。

城の外と同じように、内部もまた、荒れ果てていた。シャンドリアは床に落ちてその欠片を撒き散らし、絨毯は……明かりがランプだけなので、色ははっきりしないのだが……あちこちが破れたままになっている。飾られていたらしい美術品も、砕けてただのがらく

たと化している。他も似たようなものだ。

「ちょっと大変だけど。入り口を探して、封鎖したほうがいいわね」  
今いる場所は城の例に漏れず、玄関を兼ねた大広間であるようだった。肌に伝わる感覚からして、かなり広い空間だ。ちょっとした舞踏会なら出来るかもしれない。

「まあ……やるしかないか」

外から見た限りでは、この城はそんなに大きなものではない。辺境ということを考えれば、仕方のないことかも知れなかったが。

壁に沿って移動し、入り口の扉を閉めては、その前に近くの彫像やら壺やら、とにかく大きめの家具を置く。数回そんな作業を繰り返し、ようやくこの大広間だけは封鎖することが出来た。この広間の向こうに何の部屋があるのかは、まったく確認していない。

「これで一周……か」

ダレットが呟き、今度こそ大きくため息をつく。

キルファも疲れた様子で、床に座り込んだ。壁にもたれたまま、目を閉じる。

「……疲れたか？」

「そりゃあ、ね。一日山の中を歩き通して、それで夜中にひたすら全力疾走だもの。疲れてない方がおかしい……」

「少し寝てていいぞ。俺が番をしてるから。まづくなったら起こす」  
そういうわけにはいかない。あんたも疲れてるでしょう。

そう言おうと思ったのだが、強烈な睡魔に襲われ、キルファは座り込んだままかすかに寝息を立てた。

「さて……」

ダレットは剣を手にすると、キルファの側に座り込んだ。

「ん……」

目覚めは意外と爽快だった。朝の日差しが、上方の窓から差し込んでいる。

「朝、か……」

目をこすり、キルファは呟く。

「……起きたか」

横からダレットの声がした。鞘ごと剣を外し、それを抱えてキルファの横に座り込んでいる。眼の下に隈ができていた。

「ちよつと……もしかしてあれから全然寝てない？」

「ああ……」

さすがに眠いのか、口元に手を当てて欠伸を嚙み殺している。

「……大丈夫？ あんたも少しは休んだほうが……」

「いや。何とかなるだろ。昔は三日三晩睡眠なしってこともあったしな」

「……何をやってたの、一体？」

少々気味悪そうに、キルファが訊いた。

「いや、剣の稽古なんだけどな。師匠が、やたらと変な練習ばかりさせて……戦いに時間は関係ないとか言って。それで三日、ぶっ通しで剣を振ってた」

「何だかよく分からないけど。凄いお師匠様ね」

「……凄かったんだよ。色々な意味でな」

ダレットが、半ば呆れたような顔でため息をついた。

ダレットの剣の師匠については、元傭兵ということ以外には何も聞いていない。どんな人物か、少々興味があつたが……今尋ねるようなことでもあるまい。

「さてと、とりあえずこの城を探検でもしてみるか……」

ダレットは物憂げに言うのと、のろのろと立ち上がった。

「どうなってるのかしらね？ この城」

キルファが気味悪そうに辺りを見回す。夕べ、確認したことと大差ない。そこら中に埃が積もり、贅を尽くした調度品はことごとく放置され、ただのがらくたと化している。

床の絨毯の上には大量に埃が積もり、上の窓には高級品である色ガラスが嵌めこんであつたが、割れて欠片が下にばらまかれている。「しかし、誰もいないってのもよく分からない話だよな」

広間の奥、夕べ封鎖した扉を開けながら、ダレットは言った。

「この領主が実は城に住むとまったく落ち着かない貧乏性で、普通の家に住んでここを放置したとか」

「いや……辺境の領主が王都に住みついて領土をほったらかし、って話はよく聞くが。貧乏性はないだろ」

「……冗談だったんだから、少しは突っ込みを入れるとかしてよね」のんびりとダレットが扉を開ける。何のためらいもなしに二人は足を踏み入れ……

「うっ……」

思わず硬直した。

広間とは対照的に、そこは小さな部屋だった。特に調度品は見当たらず、鎧などが置かれているところからして、常駐の兵士の詰め所と言ったところだろうか。

「うわ……」

たまらず、キルファがマントの裾を口元に当てている。ダレットも、手で口を覆った。

腐臭。

何かが……部屋の奥に積み上げられている。どう考えても、この腐臭の発生源はそれだ。

「……酷いな」

ダレットが呟いた。こみあげる吐き気と、疲労を必死にこらえている。

部屋に積み上げられていたもの。それは、人間の遺体だった。

半ば白骨化した遺体が四体。年齢などはいまいちはっきりしないが、着ている物と鎧からしてこの城の兵士だ。いずれも胸元が大きくえぐられている。

「何なんだ、この街は……住民が追いはぎで、城には死体が放置、か」

「そうね……それに」

キルファが何か言いかけて、黙った。

「それに？」

「いや……何でもないわ」

キルファにしては珍しく、それきり話を打ち切った。

「この様子だと、他の場所もこんな感じかもね……どうりでこの城、人がいないわけだわ」

ため息をつく。

「……どうする？ 他の場所も行ってみるか？」

「似たような事になってる気はするけどね……どうせ外に出ても、また街の人間と追いかけてことになるだけだもの。どっちもどっちと言ったところかしらね」

「城に、都合よく抜け道でもあってくれたら一番話は早いんだがな」

「……あんだ、その都合のいい発想は止めておいた方がいいわよ。最悪の事態になったときに立ち直れなくなるから」

キルファが嘆息して言った。

「……出来れば、埋葬してやりたいけどな、この遺体」

「あたしたちだけじゃ無理ね……街の人間に言ったらどうにかなるかもしれないけど。まあ、話が出来たら、だけどさ。」

死んだ人間の心配をしてる場合じゃないしね、今は。一歩間違ったらあたしたちも仲間入りだわ」

「まあな……」

どこかやる気のない顔をして、ダレットは奥の扉を開けた。

「……あいつら、城の中に入りよった」

初老の女性……<大熊亭>の女主人である……が、朽ち果てた城を見上げ、呆然と呟いた。

「逃げるつもりが、かえって危険に飛び込んでしまうとはな。間拔けな話だ」

「まあ、これでわしらが手を下す必要もなくなった、というわけか」  
キルファとダレットを追いかけていた人間が集まって、がやがや

と言いつ合っている。

「大体だな、あんたがちゃんと最初に成功してれば、わしらがこんな手間のかかる真似をすることもなかったんだ」

中年の男が、女主人に責めるような視線を向けた。

「私はちゃんと料理にサブリアを仕込んだよ、いつもと同じようにね。でも、ちっちゃい方が見事にぶちまけちゃった」

「……最初から気付かれてたんだ。それであいつら、逃げ出そうとした」

「冗談じゃない、逃げられたらこっちが殺される」

一同は、城に怖れるような視線を向ける。

「大体、いつもいつも実際に手を下すのは私だ。それで失敗したからって私を責める。冗談じゃない」

女主人が口を尖らせて言った。

「……まったく、いつまでこんなことが続くのか……」

誰かがぼつりと言う。それきり、一同は沈黙した。

一階を一通り調べ……大体予想通りだった……二人は、二階に上がった。

「上に上がったからって、どうにかなるの？」

「さあ……」

ダレットも、脱出の当てなどない。ただ、何もしないのも不安だから動いているだけだ。身体を休めておいた方が良さのかもしれないが、不安が先に立った。

「まあ、強いて案を言うなら、夜になるのを待って抜け出す……つてくらいか」

「また昨日と同じことをやるの？」

キルフアが、げっそりとした顔で言った。

「……本当に。どうしろって言うんだ、まったく」

ダレットが疲れきった顔でぼやく。

昨日、外から確認した限りでは、この城は三階建てだ。ただし、



昨日一晩立て籠もった大広間は三階まで吹き抜けになっている。

「多分、二階も下と同じような感じだろうな。領主の謁見の間なんでは最上階にあると思う。定石通りなら」

「……ってことは、また死体と御対面かしらね……」

二人とも、もう、何のために城の探索をやっているのか分からなくなっている。

扉が、物憂げな音を立てて開いた。

「……なあ、一ヶ月くらいここにいたら、街の人間もいることを忘れてくれないかな」

二階を一通り探索し、死体のなかった部屋に腰を下ろしてダレットはぼやいた。

「あんたって、何でいつもいっつも現実味のない発案をするのかしらね。食料はどうすんのよ」

二人のいる場所は物置らしかった。埃だらけの椅子を引っ張り出し、キルファは腰掛ける。これも、元々は高級品だったのだろう。

「さすがに腹は減ったな……」

昨日の夜、あの宿屋で食べたのが最後だ。毒が入っていたのが一品だけで良かったとつくづく思う。キルファが懷から携帯用の干し肉を取り出してかじった。ダレットもそれに習い、乾燥させた穀物の粒を取り出した。

水はない。城の何処かには井戸があるのだろうか、外に出てまで探す気力は沸いてこない。

ダレットはしばらく黙って口を動かしていたが……やがて、動かなくなった。目を閉じて、座り込んだままだ。

「……ダレット?」

キルファがダレットの顔を覗きこむ。ダレットは子供のようにあどけない表情で、小さく寝息を立てていた。

「……寝てるわ。やっぱり疲れてたんじゃないの」

キルファが苦笑する。強がってはいたが、これだけ緊張状態が続

いて疲労しないわけがない。しかも、昨日から寝ていないのだ。

「まあ、寝かせておいても大丈夫かしらね……街の人間は追ってくる気配はないし」

呟いてから、不審げな顔をする。

この城が荒廃しているのは、この街の人間も知っているはずだ。城の様子がおかしければ、入ろうとする人間もおかしくはないのに、大量に死体が放置されたままになっていた。しかも、城門は開け放たれていた。入れなかったはずはない。

そして、自分たちが入り込んだことも知っているはずだ。しかし、一晩以上経っても、追って城の中に入り込んでくる気配はない。大広間だけは昨夜自分たちが入り口を封鎖したが、あんな簡単なバリケードなど、人数がいればどうにでもなる。

「……それに」

キルファは、不審な点を指折り数えた。

「あの……死体の様子」

最初の部屋にあった遺体は、どれも大きな傷があった。どう見ても、他の誰かが故意に付けた傷だ。

「疫病やなんかじゃなくて、殺した何者かがいるってこと。……まあ、当たり前か」

自分で言うってから、黙り込む。今までのことを考える。何か、違和感がある。この一連の出来事の、共通点――

思い出せそうで思い出せない、そんな感覚。

何かが……頭の中で、きらめいた。一瞬だけの光。しかし、それは確かな手触りを持っている。

「……そうか」

知らず知らずのうちに、キルファは呟いていた。

「多分……間違いない」

顔が青ざめていくのが、自分でも分かる。跳ねるように椅子から立ちあがると、まだ寝たままのダレットの肩を揺すった。

「起きなさい！ 今すぐここから逃げ出すわよ！」

とにかく、城の外に出なければ。街の人間が追いかけてこようが知ったことか。

「ん……？ 何なんだ……？」

キルファの剣幕に、ダレットは寝惚け眼をこすりながら起き上がった。

『ほう……賢明だな』

人間ともエルフとも違う、あくまでも異質な声。それを聞くものはいない。ただ、誰もいない広い空間に、波紋のようにゆっくりと響き渡る。

『逃げ出そうとするか。まあ……それも良かろう。クズ同士でせいぜい殺し合うがいい』

低く、くぐもった音が響いた。声の主は笑ったつもりらしい。

目の前には、二人の人間の様子が浮かび上がっていた。目の前にいるわけではない。が、映像は、少々揺らいでいるだけで何ら遜色ない鮮明さを見せている。

エルフの言うところの、補助魔法＜望遠＞。光を湾曲させ、任意の位置で結像させることによって、遠くのものを見ることの出来る魔法である。

基本的な使い方は肉眼では見えない遠くのものを見ることだが、呪文を追加して調整し、光の軌道を曲げてやれば、たとえば階段の下のことでも手に取るように分かる。無論、建物の構造を熟知していないと無理だが。

声の主が使っているのは、それとほとんど同じ原理の魔法であった。

『まったく、下らん……』

声は、途中で沈黙に変わった。映像では、二人の人間……若い男とフードを被った子供……の姿が映し出されている。

何故、子供がずっとフードを被っていたのかは分からない。が、ふとした拍子にそれが外れた。

『……………!』

銀髪がこぼれて、きらきらと光を反射する。だが、髪の色はどうでもいい。問題は……

『紫の眼……』

声の主は、ゆらりと立ちあがった。そして、ゆっくりと歩き出す。歩くたびに、ずん、ずん、と足音がした。

『まさか、こんな所で見ることになるとはな。いや、そもそも存在するとは。』

……見つけたからには……』

殺す。

それは、低い声で……研ぎ澄まされた刃のような響きを持った声で、言った。

「……何か、嫌な予感がするわね」

キルファが、フードを被りなおしながら言った。不安そうに上を見上げる。

「お前、こんな時くらいフードを外しておけばいいのに」

ダレットが呆れ顔で言った。彼女はほとんどの場合、深くフードを被っている。跳ね上げているのは、ダレットと二人で山道を歩いているときくらいだ。無論、紫の瞳を隠すためである。

「まあ……いつ、街の連中が突入してくるか分からないしさ」

生まれてから今までの間に身につけた、彼女なりの防衛策なのだろう。現在の大陸の状況では、ハーフが安心して暮らせるところなどありはしない。

ダレットもそれは分かっている。だから、それ以上は何も言わなかった。

ずん、と異様な音がした。上の階からだ。ぱらぱらと、埃が落ちてくる。

「……何なんだ？」

ダレットが眉をひそめて上を見上げる。

次の瞬間。  
目の前に、黒い影が落ちてきた。

上の階の床が抜けた。

二人とも、すぐには理解できなかった。大量の石の欠片や埃と共に落下してくる黒い影を、呆然と見ているだけだ。

咄嗟に顔を覆う。舞い上がる埃を払いのけ、その向こうにあるものを見て、二人は愕然とした。

「な……」

二人の呟きが見事に重なる。

黒い影が、一瞬、笑った気がした。三つある眼が、ぎらりと光る。

『逃がさん』

今まで聞いたこともない、異質な金属質な響きを持った声で、それは言った。

その頃には、舞い上がって視界を邪魔していた埃もおさまり、異様なその姿があらわになる。

巨大な体軀を、黒く艶やかな毛並みが覆っている。全体の印象は、羽根の生えた狼とでもいったところか。だが、四本の足は長く、先端には鋭い爪が生えている。背から伸びる羽根は、蝙蝠のものによく似ていた。

口からは牙が覗き、目は三つ……普通の狼と同じ場所に二つ、額に一つ……ある。ごたまぜのような印象を受けたが、その姿には、不思議な均衡と美しさがあった。

「これって……」

「魔物……って奴かしらね」

キルファは呟きつつ、じりじりと後ろに下がる。が、すぐに置いてある古い机にぶつかり、後ずさるのを止める。目の前の巨軀が落下してきた衝撃で、狭い部屋の壁は崩れ、置いてあったものが片っ端から吹っ飛んでいる。

魔物。目撃例は多数あるのだが、一向にその正体が掴めない、得

体の知れない生き物をまとめてそう呼ぶ。極端な話、新種の動物でも、王都の学会が承認するまでは『魔物』扱いなのだ。

だから、目の前の生き物と魔物と呼ぶのは正しいだろう。正しいが……間口が広すぎて、推測しても何の意味も持たない。

実際、目の前にいるものは、二人が今まで見てきた世界から大きく外れたものだった。

『魔物……か』

だが、それは、キルファの呟きに反応した。

『貴様等から見ればそうだろうな。だが、私から見れば、貴様等が魔物だ。』

所詮……相容れぬもの同士は、お互いを罵るしかない』

淡々と魔物は言う。血の色の瞳が、悲しげに輝いた。

ただの動物とは違う。明らかな知性を宿している。キルファは、ますます分からなくなった。

三つの瞳がキルファを睨み据える。足をがたと震わせながらも……キルファは大声で怒鳴った。自分の中の恐怖を誤魔化すかのように。

「訊きたいことが山ほどあるわ」

『ほう……?』

魔物が爪と牙を使えば、ダレットとキルファなど、一瞬にして殺せるだろう。おそらくはそれを知っているせいだろう、魔物はキルファの言葉に律儀に応える。

「まず、城のそこかしこにあった死体は……あんたが殺したの?」

『そうだ』

魔物は即答した。

どの死体にも、抉ったような傷があった。腐敗が進んでいたのはっきりしなかったのだが、魔物の爪でやられたと考えれば、辻褄は合う。

「何でそんなことを」

横からダレットが非難めいた口調で言う。

『それは勿論……邪魔だったからだよ』

にやり、と魔物が笑った気がした。

「じゃあ……ここの領主も、もしかして、もう……死んでるとか」

魔物は黙って、その爪で、一緒に落ちてきた石の山を指差した。

石床の残骸に埋もれるように、二つの死体がある。一つは男、もう

一つは女。今までの死体とは一線を画した豪華な衣装を着ていた。

おそらくは、この街の領主と、その夫人だろう。二人とも、とう  
の昔に死んでいたのだ。

「二つ目に訊きたいことは……あんたの存在を、街の連中は知って  
たのね？」

「……どうということだ？」

魔物より先に、ダレットが聞き返した。

「街の連中がここに入ってこなかったからよ」

横のダレットを振り向くでもなく、キルファは断言した。

「この城の様子がおかしいことは知ってるはずなのに。外から見ただけのあたしたちでも気がついたくらいだしね。でも死体が放置されたままだったし、あたしたちが逃げ込んだことを知ってもここまでは追ってこなかった。

つまり、こいつを恐れて近づかなかったわけ。違う？」

『御名答』

「あたしも……気付くのが遅かったわ」

キルファが苦々しげに言った。

「少し考えれば分かることだったのに。そのせいで逃げ遅れてしまった……」

キルファが唇を噛む。

「それでさっき、急いで逃げ出そうと言った訳か」

「そういうこと。まあ、あの時はまだ犯人がこの城にいるんじゃないかって思っただけで、まさか魔物だとは思わなかったけどね」

キルファが肩をすくめた。

「でも、城の人間が殺されたことを知ってたのに、何で街の人たち



は逃げ出したり、近くの街に助けを求めなかったんだ？」

「さあ……って、まさか」

キルファが、魔物を睨みつけた。

「まさかとは思うんだけど。街の人間に、旅人の料理に毒を盛らせたのも……あんた？ ……だとしたら、何でそんなことをしたのよ？」

街の連中の様子……街ぐるみで脱走しようとした二人を追いかけてきた手際を見ても、毒を盛ったのが初めてではないことは想像がつく。

目の前の殺人犯が人間やエルフならば、情報の漏洩を避けるために旅の人間を殺させたとも考えられた。だがこの魔物には、そんな理屈は通用しないだろう。人間が寄ってたかったところでどうにもならないのは証明済みだ。

城の内部の人間を全滅させることが出来た魔物だ。やろうと思えば、街を全滅させるくらいことは出来ただろう。

それなのに、敢えてそれをせずに城にこもっていた理由。それが分からない。

『そうだ。頭の回転が速いな』

「あんたに誉められても嬉しくないわよ」

苦々しげにキルファが言う。

「しかし何でまた、そんな面倒くさいことを」

魔物はキルファだけを見据えていて、ダレットは眼中に入っていないようだった。そのせいか、幾分、気楽な口調でダレットが訊く。

『復讐だよ』

何処か悲しげに……魔物が言った。

『全員、私が殺すことも出来なくなかったがな。こんな辺境の街を一つ潰したところで、どうにかなるわけでもあるまい。』

だったら、人間同士に殺し合いをさせるのも一興。それだけだ』

「一興って……そんなことで！」

ダレットが声を荒げる。

街の人間を脅し、ここから出て行くことを禁じ……何も知らない旅人が毒を盛られて死ぬのを、街の人間が手を汚すのを、この魔物は笑って見ていたのだ。

「この……外道が！」

ダレットはたまらず、腰から長剣を抜く。今にも斬りかかろうとするダレットを、キルファは静かに制した。

「止めておきなさい。そんな剣一つじゃどうにもならないわ」

『賢明だな』

魔物が笑う。

「……それで。訊きたいことはあと一つ」

『言ってみろ。期待に添えるかどうかは分からんがな』

「あんた……あたしたちをここから黙って出してくれる気、ある？」  
静かに、キルファは言った。言いながら心持ち後ろに下がり、懐に手を伸ばす。冷たい金属が手に触れた。

『不可、だな』

言って魔物がにやりと笑った、その瞬間。

ごう！

部屋の中を強風が吹き荒れる。置いてあった家具が片っ端から吹っ飛んで壁に激突した。

「うわっ……きゃあああっ！」

ダレットは辛うじて耐え切ったが、体重の軽いキルファは踏みとどまれなかった。あっさりと吹き飛ばされ、石壁に激突する。

「キルファっ！」

「くあ……」

風が収まったのを見計らい、ダレットが慌てて駆け寄る。頭から叩きつけられたのか、意識がないようだ。内臓も打ちつけたようで、額に脂汗が浮かんでいた。

「くそっ！」

キルファを軽々と抱え上げると、ダレットはくるりと背中を向けて部屋から飛び出した。今までいた部屋は大して広くはない上、動

くの邪魔になる家具も多い。

逃げ出すというのが最善の選択ではあったが……あの魔物がそれを許してくれるとは思えない。だったらせめて、剣を振るのに障害のないところに移動しなくてはならない。

キルファの言う通り、自分の長剣が魔物に通用するのかははなはだ疑問ではあったが。

二階の通路を疾走する。階段を見つけ、急いで駆け下りた。

一階の大広間。そこだったら、多少動き回れるくらいの広さがあるはずだ。後ろから魔物が追ってくるのが分かる。恐怖で萎えそうな身体を、叱咤しながらダレットは走った。

「はあ、はあ……」

ようやく一階にたどり着くと、絨毯の上にキルファを降ろす。まだ、動くのは苦しいようだ。

彼女をかばうように前に出ると、長剣を構えた。

ずん、ずん、と足音が響く。ゆっくりとした足取りで、魔物はダレットの目の前にやって来た。

「くっ……」

剣を持つ手が震える。今まで見たこともない相手。果たして、自分の剣など通用するのだろうか？

だが。

「はああああっ！」

不安の一切を振りきるように、ダレットは魔物に斬りかかった。

『無駄だ』

振り下ろされた刃は、爪とぶつかって甲高い音を立てた。

魔物は、そのまま剣を受け止めた腕を振る。爪と噛み合っていた長剣も巻き込まれ、ダレットはバランスを崩した。

そこを狙って、ぶん、と風を切って爪が迫る。ダレットはほとんど曲芸のような動きでそれを避けた。

「あ……危なかった……」

冷や汗がどっと出てくる。そのまま後方に一回転すると、剣を構え直した。

『止めておけ。貴様など、何の役にも立たん』

「黙れっ！」

魔物の嘲笑を聞き流し、再び突っ込む。が、結果はさっきと同じだった。その鋭い爪であっさりを受け止められる。爪を叩き折るどころか、衝撃を受けた腕も大して気にはなっていないようだ。

魔物はもう片方の腕を振る。鋭い爪を、今度は避けきれなかった。後ろに跳ぶが、爪が身体をかすめる。

「ちっ……」

服が切り裂かれ、右腕から血が流れる。大して深い傷ではない。ダレットは無視することにした。目の前の敵に集中すれば、この程度の痛みなら誤魔化せる。

剣を構え直そうとする。が、後ろに退がったダレットを、魔物はその巨体からは想像できないほどの敏捷さで追っていた。

『失せろ』

爪を突き出す。辛うじて剣でそれを受けるが、受けた剣ごと吹っ飛ばされる。大きく吹き飛び、床を数回転がってやっと止まった。それでも剣を手放さなかったのは立派と言わねばなるまい。

「ちっく……しょう……」

よろよると立ちあがる。床の絨毯のお陰で、叩きつけられても動けなくなるほどのダメージは受けなかった。だが、小さく咳き込む。『……しつこいな。黙っておれ、貴様は』

なおも剣を構え直すダレットを見て、魔物が呆れたように言う。爪では無理だと察したのか、異質な声は何やら呟く。ダレットには、何を言っているのかが分からない。が、この状況には既視感があった。

(……まさか！)

『大気よ・切り裂け』

魔法言語による呟き。ダレットには意味不明の言葉と共に、魔物の周りを風が取り巻く。それはすぐに不可視の刃と化し、ダレット目がけて走る。

(魔法！)

以前にエルフの村で食らった、攻撃魔法<風刃>。それとほとんど同じものだ。だが、こちらの方が数段、規模が大きいようだ。

(……避けきれない！)

まったく刃が見えない。剣で切り払うことなど不可能だ。

ダレットは顔を強張らせた。背筋を冷たいものが通り抜ける。

『開門！』

背後から、涼やかな声が響いた。次の瞬間、魔物を取り巻いていた風は一瞬にして消え失せる。

蒼い光。キルファの魔法消去だ。

「って、大丈夫か？」

「そう見えるの、これが？」

キルファはまだ床に倒れたままだ。顔だけダレットの方を向いている。まだ、先程の激突のダメージが消えていないらしい。

キルファは、小さく咳き込む。息をするのも苦しいようだ。

「いや……」

ダレットは肩をすくめると、魔物に向かって再び剣を構えた。

『ふうむ……<白紙>の魔法か。面白い。久々に見たわ』

魔物が、口を歪ませる。おそらくは笑ったのだろう。

＜白紙＞の魔法。通常の魔法は、『場』、つまり世界法則に呪文を上書きし、その書き換えによって通常では有り得ない効果を生み出すものだが、消去魔法は、上書きされた呪文を消し去ること、相手の魔法を無効化する。それはつまり、『場』を白紙に戻すと言うことだ。

(……久々に見た?)

床に転がったままで、キルファは首を傾げる。

危ないところで命拾いしたダレットは、また魔物に斬りかかる。ダレットにはこれしか攻撃手段がない。キルファの援護が望めない以上、自分でチャンスを作り出すしかないのだ。

『魔法を見たからには、ますます貴様の相手などではおれん。いい加減、黙っておれと言っている』

魔物が一気に駆け出す。爪こそ避けたものの、巨体から繰り出される衝撃までは殺しきれず、ダレットはまともに弾き飛ばされた。今度こそ、床に転がったまま起きあがる気配はない。

『ふん……』

魔物はダレットを一瞥して冷笑すると、キルファの側に歩み寄った。

『無様だな、小娘』

言うなり、魔物はキルファの襟元に爪を引っかけ、持ち上げた。狼のような容姿でありながら、その動作は変に人間じみている。キルファには抵抗するだけの力がない。なす術もなく宙吊りにされる。フードが外れ、銀の髪があらわになる。苦悶の表情を浮かべながらも、キルファは目の前に迫った魔物を睨みつけた。

『紫の目か。まさか、再び見ることになるうとはな』

血色の瞳に睨みつけられ、キルファは目を見開いて硬直した。瞳孔がきゅっと収縮し、一瞬、恐慌状態に陥る。

「何だって……」

苦しい顔のまま、キルファは呟く。

「目の色が紫だからってそこまで言われなきゃならないのよ……あたしが決めたわけじゃないわよ、こんなもの。文句があるなら親に言ってよね！……まあ、両方とももう死んだけどさ」

『私も、この容姿を選んで生まれてきたわけではない』

先程一瞬だけ見せた、悲しげな顔……多分、そうだろう……をしながら、魔物は言った。

『貴様や私だけではない。誰も、種族を選んで生まれることなど出来はしないよ。その中で、生きるしかない。生まれた以上……種族にとらわれて生きるしかない』

淡々と魔物は言った。だが、すぐに瞳が怪しく輝く。

『だから……貴様には、我々の恨みをまとめて受けてもらう。せいぜい、苦しみ抜いて死ね』

キルファの細い首に、魔物の太い腕が巻きついた。そのまま、ぐいと締め上げる。魔物の目に、狂喜の色が浮かんた。

爪を突き立てれば、華奢な少女など一瞬にして殺せる。それをしていないということは、あくまでなぶり殺しにするつもりらしい。

「くうっ……あ……」

宙吊りの状態のキルファにはなす術がない。

『どうした？ 御自慢の魔法を使って反撃したらどうだ？』

嫌味な口調で魔物が言う。が、キルファが声を出せるはずもない。息が詰まる。苦しい。誰か――

ぞぶりと異様な音がした。

『……貴様……』

魔物が、苦々しげに言う。キルファを締め上げていた腕に、長剣が突き刺さっていた。魔物は面白くもなさそうにキルファを放り出す。腕から解放され、足元に落ちて転がった。

ダレットが、おぼつかない足取りで立ちあがっていた。間に合わないと見るや、自分の長剣を投げつけたのだ。

「だ……ダレット……」

魔物の足元で咳き込み、キルファがうめく。顔だけ、上を見上げ

ている。よろよると、ダレットは魔物の側に歩いていく。

『よくもやってくれたな……と言いたいところだが。痛くも痒くもないわ。それに、もうお前になす術はない。ほれ、貴様の武器はここだ』

腕に刺さったままの剣を抜こうともしない。

実際、その通りだった。唯一の武器を投げつけてしまったダレットに、もう攻撃の手立てはない。飛礫つぶてのような、暗器は幾つか隠し持っていたが、あれはあくまで人間用の、それも不意打ちにしか使えない代物だ。そんなもので魔物に対抗できるとは思えない。

『貴様……この娘の何なのだ？』

面白がるように、魔物が訊いた。

「……………」

『ふん……よくは分かんが、まあいい。そこで黙って見ておれ。』

貴様もすぐに殺してやる』

まだ足元に転がったままのキルファに目を落とす。しばし、黙って見ていたが、何か思いついたように、腕から剣を抜いた。その腕の傷口からは、剣が突き刺さったにもかかわらず、まったく血は流れていない。ダレットの長剣を握る。太いその腕には、あまりにも不釣り合いではあったが。

『終わりだ。せめて、仲間の剣で殺してやる』

にやり——と魔物が笑う。剣が、真下に向かって走った。

自分に迫ってくる剣。それが、やけにゆっくりと見えた。

(死ぬ……？ あたし……)

ぼんやりと、そんなことを考える。意識だけがやけに冴えていた。

(……………！)

意識が跳ね回る。狭い箱の中で、もがくように。

(冗談——じゃない！)

思うように身体が動かない。いくら焦って、逃げ出そうとしても、身体が言うことを聞かない。そこに、何か別の力を感じた。引きず



られるようにして、自分の身体が動くのが分かる。

がんっ。

鈍い、くぐもった音がした。

『……余計なことを！』

魔物が舌打ちするのが聞こえた。

「ダレット……」

咄嗟に自分を引き戻すと同時に、まっすぐに振り下ろされた剣の腹を拳で叩き、軌道をわずかに逸らしたらしい。剣は、自分のすぐ横に突き出されていた。

「うあ……」

今更ながら、冷や汗がどっと出てくる。少しでもダレットが遅れば、自分は串刺しになっていた。

「……………」

ダレット自身も、何回も打ちつけられたせいで、動くのが苦しいのだろう。キルファのように倒れこせないが、苦悶の表情を浮かべている。

『邪魔を……するな！』

言うなり、キルファに爪を向ける。無造作に、腕を振り下ろした。咄嗟にまたダレットが飛び込み、彼女をかばうように前に出る。

ざく、と言う音がする。ダレットの左肩が見る見るうちに紅く染まった。致命傷にはほど遠いが、剣を握るのに障害となることは否めない。

『……健気だな』

魔物も、この執念には呆れたような声で言った。

『出来損ないが、自分の身を呈してまで庇おうとするか。所詮、出来損ないにはそれくらいしか出来んだろうがな』

言って冷笑する。

「……出来損ない？」

反対に、ダレットとキルファは訳が分からないと言った顔をした。出来損ない。時々聞く言葉である。だが、それは人間とエルフの

どちらでもないと言う意味で、ハーフを指す。間違っても、人間であるダレットを指して言う言葉ではない。

「……どうということ？」

キルファが呟くが、魔物もそれに答える気はないらしい。

『その執念に免じて、先に殺してやる。あの娘の死ぬところだけは見ないで済むぞ』

笑って、ダレットの剣を放り出す。絨毯に受け止められて軽い音を立て、剣は転がった。だが、ダレットが取りに走れる距離ではない。手にして構え直す前に爪の一撃が来る。

(……どうする?)

二人が同時に考える。が、ダレットは立っているだけで精一杯、キルファはまだ倒れこんだままだ。

魔法を使えば、キルファに消去されることは魔物も承知している。だから、その爪をもってダレットを殺そうとした。

巨体に似合わない敏捷さで、ダレットに迫る。連続して繰り出される爪を、ダレットは辛うじてかわしている。その体術こそ、大したものなのかもしれないが……攻撃手段がないのは先程から変わっていない。

それを見ていることしか出来ない悔しさを噛み締めながら、キルファは考える。何処だ? この魔物の弱点は……

「……………」

ふと、引っ掛かることがあった。

得体の知れないものを総称して、魔物と呼ぶ。だから、魔物を定義することなど出来ないのだが……

生き物でなくとも、いかにも恐ろしい姿……今、目の前にいるような……をしていれば、魔物と呼ぶかもしれない。言いかえれば、美しい姿を……自分たちと似た姿をしていれば、人間、あるいはエルフはあっさりとそれを認めるかもしれない。

そんなものを以前、見たことがあった。得体の知れない存在。……だが、美しく、儂い存在。

それと、あの魔物が同じものだったとしたら。

「くっ……」

渾身の力を込めて立ちあがる。少し動くだけで視界が歪むが、それは無理矢理無視する。

ふらふらと、魔物に向かって歩いていく。魔物も気付いてはいるはずだが、ダレットがちよこまかと逃げ回るのに腹立っているのか、今はキルファを構う様子はない。

腰の後ろからナイフを抜く。それを低く構えると、キルファは駆け出した。

「馬鹿！ 無茶だ、よせっ！」

ダレットが叫んでくるのが聞こえる。その通りだ。たええこれが命中したとしても、魔物は大してダメージなど受けないだろう。ダレットの長剣が刺さっても、平気で動いているのだから。

魔物が苦笑いをしたような気がした。キルファのナイフを、避けようともしない。

ずぶり、と手応えがある。意外にあっさりと、ナイフは魔物に突き刺さっていた。

『……それで、どうする？』

魔物が、嘲りを込めて言った瞬間。

『開門！』

あらん限りの大声で、キルファは叫んだ。

『き……さま……』

魔物の声だけが響き渡る。

蒼い光が朽ち果てた大広間に満ち溢れる。その光はあくまで静かだった。

そう。まるで……鎮魂歌のように。

ざあつ……と砂が崩れるような音を立てて、魔物の黒い身体が霞んだ。徐々に輪郭がぼやけ、黒い影が小さくなっていく。

「……………」

キルファは魔法消去を発動させると、また床に倒れた。その顔は苦しそうだが、安堵と勝ち誇ったような笑いが浮かんでいる。

『何故……』

徐々に消え失せながら、魔物が訊いた。

「この魔法消去……＜白紙＞の魔法ね。もう、呪文は失われた魔法なのよ。エルフにも、知っている者は誰もいないの。」

あたしがこの指輪を手に入れたの……たまたま見つけた遺跡なのよ。ずっとずっと昔に造られた」

魔物は、キルファが何を言わんとしているのかが分からないようだった。

「でも、あんたはこれを見て……久々に見た、なんて言った。おかしいわよね。もう、生きているエルフは誰も知らない魔法を、あんたは見たことがあるなんて。普通じゃ考えられないわ。だとしたら……最低限、あんたは、その遺跡ができたときからいたってことになるわよね。」

それで。この指輪の側に、光でできた幻影がいたの。この指輪を守っていたらしいんだけどね。最深部にいたし、それは遺跡が造られたときからいたんだと思うわ。

その幻影……正体はあたしも分からない。けど、光だけの姿で喋

っているなんてもの、魔法としか考えられなかったのよ。原理はまったく分からないけど。まあ、昔の＜天人＞の技術かもね。

＜天人＞がいた時代から今まで、ずっと生きていられる生き物なんていないわ。だから……あんたも、あの幻影と同じ、何らかの魔法によって生み出された、もしくは維持されている存在なんだと思っただけど。

……どうやら正解だったみたいね。魔法を失ったら、消える……魔法を見上げ、にやり、とキルファは言った。

「それで。あたしも、訊きたいことがあるんだけど。……いい？」  
『何だ……？』

その姿と同じく、徐々に、魔物の声も小さくなってきている。

「あんた……何者なの？」

『大方、貴様の推測と違くないよ』  
魔物がかすかに笑った気がした。

「本来は存在しないもの。魔法という邪道の力で生き延びる、生き物とも呼べない哀れな存在……それだけだ」

魔法。世界法則を書き換える技術。――世界の本来の在り方を歪める、邪道の技術。だからこそ、この力は『魔』法と呼ばれるのだ。  
「……あんたを創ったのは、誰？」

『貴様等の言う、＜天人＞に滅ばされたものだ。貴様等が何と言うのかは知らん。知りたくもない』

「……＜魔人＞のこと？」

『貴様等はそう呼ぶのか。如何にもあの連中の末裔だな。自分に都合の悪いものは全て『魔』扱いか。』

……もう、私の主人はいない。遥か昔に死んだ。主人の種族も、全てな。道具たる私だけが残った。

それでも……憎しみは残る。それが私自身の意思かも分かんが。だから、復讐をしたただけだ。たとえば、それがどんなに無駄でも分かっている……な』

ふうっ……と、息を吐いたようだった。もう、ほとんど黒い身体

は霞となって消えうせている。

「そう。」

でもね……もう、眠っていいの。戻りなさい。あんたの主人の元に」

『そうだな……』

それが、最後だった。ざあ……っと黒い砂が崩れ、有り得ないはずの風に舞って散った。

＜天人＞と＜魔人＞の伝説。大陸に生きるものなら誰もが知っている、昔話。

ずっとずっと昔。大陸には、＜天人＞と呼ばれる種族と＜魔人＞と呼ばれる種族がいた。二つの種族は、大陸の覇権を賭けて激しく争った。長い、長い間。

考えられないほどの時間が流れ……最終的に、天人の勝利で争いは幕を閉じた。魔人の王は滅ぼされ、大陸に存在した魔人も全て滅んだ。

それから、天人の時代が始まる。そのはずだった。

が、天人種族は、勝利もつかの間、突如、歴史の舞台から消え去る。数々の伝説と遺跡だけを残し、天人は何処かへ消え去った。

そして、その代わりに大陸に現れたのが、人間とエルフという種族だ。

二つの種族は、互いに争いと支配を繰り返し……そして、現在に至る。

しばらく、二人とも黙っていた。何も動くものはなく、時だけが静かに流れる。

「……なあ」

ダレットが口を開いたのは……それから、相当時間が経ってからだった。

「何だったんだろうな……一体」  
ぽつり、とダレットは言った。

「さあ。あたしも分からないわよ」

キルファがまだ寝転がったまま言う。ぼろぼろの絨毯だったが、今は極上の布団に思えた。

遺産の指輪と同様、遙か昔から存在していた＜魔人＞の造り出した魔法。言うなれば、あの魔物もまた『遺産』なのだ。＜天人＞が遺したのではなく、＜魔人＞が遺した。

遙か昔の争いの残骸。

「ただ……あたしたちは、生きていられた。それで良いんじゃないの？」

「そうだな」

ダレットが、のんびりと笑った。ゆっくりと起きあがり、転がったままの長剣を拾って鞘に収める。

「今度こそ、死ぬかと思ったな」

はあ、とため息をついた。

「まさか、あんたが剣を投げるとは思わなかったわよ。得物を手放すなんて、考えなしにも程があるわ、まったく」

「いや、あの時はお前がやられると思ったから……」

ダレットはぽりぽりと頭を掻く。今になって、ずきずきと腕と肩の傷が痛みだしてきた。

「ま、感謝だけはしておくわ。……ありがとう」

キルファは言って、柔らかく笑った。

「よっ……と」

「もう動けるのか？」

「何とか、ね」

足取りはおぼつかなかったが、それでも何とか立ちあがる。ふらふらと、城の入り口に向かった。

「そういや……街の連中がいるのよね、外」

キルファがうんざりした顔で言った。

「あの騒ぎの黒幕はさっきの魔物なんだろ？ そいつを倒したって言えば、大丈夫じゃないか？」

「……それもそうか」

二人は顔を見合わせて笑うと、重い扉を開けた。

「……出てきた」

中年の男が、唾然として言う。街の人間は、城の前に集まっていた。相当にあの魔物を恐れていたのだろう。

街の人間が、手にしていた武器を構える。まだ、「旅人を殺せ」という命令は消えてはいないのだ。

「……もう、この城には何もいませんよ」

ダレットがそれだけ言うと、街の人間の表情が一瞬にして安堵に変わった。

「……助かった？ 助かったのか？」

「おお……！」

「助かった！ 俺たちは助かったんだ！」

群衆が、一斉に歓声を上げる。隣にいるもの同士、肩を叩き合い、あるいは抱き合う。街を支配していた恐怖からの解放を、心から喜んでいいるのだ。

ダレットはそれを見て嬉しそうな顔をしている。フードの下キルファの表情は、街の人間には見えていない。

「いなくなったと言うことは……あなた方が倒した、と言うことですか？」

群衆の中でも、ひときわ年を取った男が尋ねた。周りの様子からして、この男が町長らしい。領主が亡くなったあと、街の行政を仕切ってきたのだろう。

「ええ……まあ」

ダレットが答えると、街の群衆の歓声が変わった。

「あなた方が……？」

しばらくは疑わしそうな顔をしていたが、やがて、ひときわ大きな歓声に変わる。

「……ありがとうございます。これで……これで、街も平和にな



ります」

男が、群衆を代表して言った。

「……はあ」

ダレットが照れくさそうに笑い、横のキルファを振り返る。そこで、怪訝な表情を浮かべた。

「……………」

キルファは無言だ。相変わらずフードを被っているのですが、その表情ははっきりしないのだが――何となく怒っているような気がした。

「……キルファ？」

おっとりとした声で問い掛ける。

「……ちよつと。まさかあんた、ここで終わりにするつもりじゃないでしょうね？」

ダレットの服の裾を引き、小さな声でキルファは言った。

「……どういふことだ？」

キルファはそれには答えず、群衆の中から知った顔を見つけて話しかけた。

「お婆さん。昨日は、美味しい料理をどうも」

キルファは嫌味な口調で言った。その顔を向けたのは、＜大熊亭＞の女主人だ。女主人は、露骨に無然とした表情をした。

「……まったく、もう少しで毒入り料理を食べさせられるところだったわよ。もしあたしたちがあれを食べてたら、魔物はまだ生きていて、お婆さんはまだあれを怖れなくてはならなかったんでしょね」

群衆にも聞こえるように、キルファは大声で言った。ダレットが横から制止しようとするが、キルファは無視する。

「街の皆さんも、大勢で追いかけてくれたし。お陰で、城に逃げ込む羽目になって死ぬような思いをしたわよ」

淡々とキルファが言う。街の人間もさすがに気分を害したようだ。「……嬢ちゃん。何が言いたいんだ、え？」

中年の男が、苛立った口調で言う。

「別に、城に勝手に逃げ込んだのはあたしたちだし、そこにいた魔物を成り行きで倒したからと言って、それを感謝されるいわれはないのよ、あたしたちにはね。

けど……謝ってもらう権利はあると思うわ。『殺そうとして済みません』ってね」

言って、フードの下で嫌味に笑った。

「それは……」

男が口籠もる。

「あの魔物に脅されたから、とでも言いたいんでしょ？ でも実際そうだったとしても……あんたらが人殺しをしていたのはまぎれもない事実よ」

フードの下から、キルファの鋭く切れ上がった目が見えた気がした。

「……それは、そうだが、しかし……」

「魔物に脅されて言われる通りに人殺しをしておきながら、いざそれがいなくなると被害者面して、自分たちは悪くない、とでも言いたげな態度を取る。

それが気に入らないって言ってるのよ。笑わせないでよね」

「だったらどうすれば良かったんだ！ あの化け物に全員殺されていれば良かったとも言うのか？」

男が勝ち誇ったような声で言った。確かに、その通りだ。でも……

「化け物、か」

キルファが、何処か自嘲気味に笑った。

「魔物を倒して、あんたらを救ったのが、実は同じく化け物で、あんたらを助けるつもりなんて毛頭なかったら……どうする？」

「……どうということだ？」

「一つ、面白いことを教えてあげましょうか」

キルファは言うど、被っていたフードの端に手を掛けた。

「あんたらがさっき感謝した奴の正体」

ぱさりとフードを跳ね上げる。よく見えるように、手で前髪を

押さえて見せる。

少女が何を言わんとしているのか。それを群衆はすぐに悟った。

「……紫の目！」

「てめえ……ハーフ……？」

「見ての通りよ」

冷然とキルファは言った。

「街を襲った魔物を倒したのはただのハーフ。得体の知れない存在、憎んでも憎みきれないエルフとの混血児……まあ、これも魔物と言えらるかもね。」

どう？ 街に侵入してきた魔物がいるわよ。全力で、倒したら？」  
目の前に佇むのは、あの異形の巨体ではない。ただの華奢な少女だ。一撃で、あっさりと砕け散りそう。

男が、ぐっと手にした斧……作業用のものである……を握り締めた。振り下ろせば、少女の頭蓋などあっさりと叩き割れるだろう。

「……で。思い出させてあげるけど。あたしたちはこの城にいた魔物を倒してる。つまり、あの魔物より強いってことよね。」

あの魔物は、城の人間を全滅させた。だったら、あたしたちにも……あんたらを殺すくらい力はあるかもしれない。

さて、どうしようかしらね。あの魔物と同じように……旅人を殺せ、とでも言いましょうか」

群衆が凍りつく。キルファが鼻で笑った。

「……ま、それは冗談だけどさ。あたしはともかく、この男は正真正銘の人間だしね」

淡々とキルファは言い、氷の刃のごとき視線で群衆を見据えた。

「確かに、あんたらが生き残るためには仕方がなかったかも知れない。それは否定しないわ。」

でも、罪は罪。それだけは確かなこと。あんたらのやったことは、他の街の領主に通告しておく。相応の罰を覚悟するのね」

「あ……」

男ががっくりと膝をつく。他の人間も似たようなものだ。

「もし、あんたらが脅迫を言い訳にして罪を認めようとしなかったら……その時は容赦しないわよ。さっき言ったことが冗談じゃ済まなくなると思いなさい」

キルファが、ふうっとため息をついた。

「さて。ダレット、とつとどこんなどころから離れましょ。行くわよ」

言い捨てて、さっさと群衆に背を向けて歩き出す。呆氣に取られていたダレットは、慌ててその後を追った。

「ああ……一つ忘れてたわ」

キルファはふと立ち止まり、群衆を振り返る。

「城にある遺体。せめて、ちゃんと埋葬してあげなさい」

一瞬だけ、キルファの瞳の色が和らいだようだった。遺体の埋葬。それはある意味で、自分の罪の確認作業とも言えた。

群衆はただ立ち尽くしている。何時の間にか、二人の姿は消えていた。

「……しかし、凄い剣幕だったな」

ヨールンの街を離れてしばらくしてから、ダレットが口を開いた。  
「まあね」

キルファが、苦々しげな表情で応じる。

「あの連中を見てたら、何だかむしろ腹が立って」

それはまあ、横で見ているれば分かる。が、何故あれだけのことを言っただけなのか、それまでは分からなかった。

キルファはいつも通りにフードを深くかぶり、俯いている。どんな表情をしているのかはまったく分からない。だが……

「……泣いてるのか？」

「まさか」

思わず思いつきを口にしたダレットに、キルファは苦笑して答えた。ばさりとフードを跳ね上げ、ダレットを見上げる。確かに、涙は浮かんではいなかった。

だが、代わりに見え隠れしているものがある。瞳の奥の、無明の闇。夜明けの光などまったく見えない、泥沼の思考の片鱗。

「……何？」

ダレットがじっと自分を見ているのに気付いたのか、キルファが首を傾げる。ダレットが何でもないと言っていると首を振ると、キルファは心なしか視線を逸らした。

「――ねえ」

ぼつり、と呟く。

「罪の定義って、何なんだろうね」

罪の定義。悪の定義。……正義が正義たる所以。

それを明確に言える者は存在しない。しかし、人々は正義にすがろうとする。悪を憎む。

「……あんた、前は騎士だったじゃない。正義を護る、お偉い『騎士様』だったんでしょ？　だったら答えて。その定義って、何なのよ？　少なくとも、あんたはどう考えて騎士なんてやってたの？」

唐突なキルファの言葉に、ダレットは黙り込むしかなかった。

ダレットが騎士を志した理由。それは、到底誇れるようなものではない。単純に剣を握るのが好きだったことと、どうにかして独り立ちしなくてはならないという焦燥感からだ。

正義。騎士たる理由。……そんなことを、昔の自分は考えたか？

「……………」

ダレットは相変わらず黙したままだ。キルファはそれに苛立ったのか、ぎりっとダレットを睨み付ける。壮絶なその表情に、ダレットは思わず顔を強張らせた。

キルファが何を思っているのかを言い出したのかははつきりしない。街での事件が契機になっていることだけは間違いないだろうが……この少女は、一体何を背負っている？

「あ……」

何か、沸き上がってきた言葉があった。その感覚には覚えがある。以前……一番最初に彼女に出会ったときにも、ふと沸き上がった感

覚だ。

「俺もそんなものは分からない……でも、一つだけ言えることがあるとしたら」

言葉を選びながら、ダレットは続ける。

「人間は、決して完全な存在じゃない。エルフも……ハーフもな。一人一人は弱くて、脆い。間違うこともあれば、罪を犯すこともある。誰かを傷つけることもある。」

罪を犯して良いと言っているんじゃない。それはお前の言う通り、認めなくてはならないことだ。

「……誰でも……誰にだって、生きていく権利はあるさ。生きていれば、楽しいことも、嬉しいこともある。そんな思いをすることは……出来るんじゃないかな」

罪を背負いつつも生きることが、ただ幸福だとは思わない。死に逃げた方が余程楽だと思うようなこともあるのだろう。それでも……生き続けると言う事だけは、今存在する自分たちに、たった一つ平等に与えられた権利だ。

「……そうね」

しばらく経ってから、キルファはそれだけぼそりと呟いた。自分の右手を見つめ、ぐっと拳を握ってみる。己の力を確かめるように。「現に……今、あたしはこうやってここにいる」

その呟きの意味までは、ダレットは理解出来なかった。

今までも、これからも当てなどはない旅だけれど。今、こうやって自分は生きていられる。それだけは、たった一つ確かなことだ。この、分からないことだらけの世界の中で。

「……………」

キルファはもう一度拳を握り締めると、足早に歩き出した。ダレットが慌てて後を追うのには構わず、歩みを進める。

——大丈夫。大丈夫だから。

そう、自分に言い聞かせる。

大陸の中核を成す都市、王都ラインガルド。

その象徴たる王城の中を、一人の男が歩いていった。

小柄な体躯に纏う豪華な衣装は、彼が国の重要人物であることを物語っている。人の良さそうな……しかし老獪な笑みを常に振りまき、華麗な装飾が施された城の内部を、何の違和感もなしに歩みを進めていた。だが。

顔には出ていなくとも、身体からは深い疲労の色がにじみ出ている。背中は心なしか曲がっているし、やたらとため息をついている。以前からの知り合いが見れば、「どうしました、髪が白くなりましてな」とでも言った事だろう。息子たちと同じ栗色だったはずの髪は薄くなり、白いものがめっきり増えた。

「はあ……」

男……ゴフセフ・コルフォースは、城の会議室にたどり着いたところで、また大きく息を吐いた。これから、普通の人間が聞いたら頭を抱えそうなほどの量の仕事をこなさなければならぬのだが、まるでやる気が沸いてこない。とんでもない間違いをやらかしそうで、思わず仮病でも使って帰ろうか、などと思う。

これだけ彼が頭を抱えている理由は無論……突然行方知れずになった末息子のことである。

以前、王都で起こったちょっとした政変。話としては、將軍の一人が公金横領をやらかしたただけだったのだが……何の因果か、その騒ぎに末息子の名前が挙がってしまった、何を思ったか、いきなり息子——ダレットは姿を消してしまった。

親として、息子が心配でないわけがない。だが、宰相の立場からしてみれば、下手に戻ってこれると面倒なことになる。仕方なしに、地方領に嫁いだ娘……ダレットの姉たちに通達を出し、極秘に搜索してみるのだが、ダレットが都合良く娘の居場所に姿を現す

わけもなし、手がかりはまったくなかった。手詰まりだ。

長男、ジェラルドも自分のつてなどを使って聞き込んでみているようなのだが、そちらも大差ない。彼なりに弟を心配してはいるようだが、何せ表情にまったく感情を出さない男であるため、時々自分の息子ながらその神経を疑いたくなってくる。

ある意味、ゴフセフの一番の悲劇は……愚痴を聞かせられる相手がいないことかもしれない。

「はあ……」

ため息をつくのは昔からの癖だ。あまり恵まれた出生とは言えなかったためだが、それにしても最近ひどい。

重々しい扉を開け、広い部屋に入る。時間が早かったのか、まだ誰も来ていなかった。小さく首を傾げると自分の所定の席に着く。そこで、また大きく息を吐いた。

「ふむ……」

少々、考え込む。

あの騒ぎの発端は、將軍の公金横領をカシユラル・レストラードが発見しようとしたことだった。変わり者で有名な軍部の＜戦女神＞だが、とにかく容赦のない女性だ。まだ二十歳そこそこだが、その手腕は疑う余地がない。

切れ者のカシユラルのことだ、自分に仕掛けられた策略程度はあっさりと見抜いていただろう。だが、ダレットとはそれまで何の関係もなかった。そのダレットが突拍子もない行動に出た後も、カシユラルは何の行動も起こしていない。彼女の性格からすれば、ダレットの追跡くらいはしてもおかしくなさそうなものの、だ。

それはつまり……

（案外……事情を知っているのはカシユラルの方なのかもしれない）  
そこまで考えついでから歯噛みする。どうして、今まで気付かなかったのか。

もしかしたら意味がないかもしれない。だが、確認だけはしておきたかった。



まだ会議まで時間があるのを幸い、外に出る。そうして、小走りに別の部署に向かった。

「ん……？」

自分の執務机に山積みになった書類の中から、カシユラルは小さな紙片を引っ張り出し、首を傾げた。

「手紙……？ 命令の通達ではないが……」

数行、何かが走り書きしてあるだけだ。どうやら、先ほど部屋から退室した部下が、書類の間に挟んでいたらしい。

一瞬で目を通し、差出人の名前に眉をひそめる。ゴフセフ・コルフォース。この国の宰相だ。

幾つか、尋ねたいことあり。申し訳ないが、明日の夜、当家を尋ねていただきたい。

内容はそれだけだった。カシユラルは首を傾げる。

ゴフセフは宰相の地位にある人物だ。自分に用があるのだったら、召還命令の一つで事足りる立場である。こちらは軍部の將軍補佐でしかないのだ。つまり、私的な用件ということだが……今、そんな事柄などあっただろうか？

(……ああ)

少し考え込んでから納得した顔をした。ゴフセフの息子、ダレットのことだ。おそらく、自分が何らかの事情を知っていると思ったのだろう。それは正解なのだが。

コルフォース邸を会見場所に指定したのは、単にカシユラルが宿舎に住んでいるから、というだけだろう。ゴフセフは単に自分の家に招いただけのつもりだろうが、カシユラルには少々敷居の高い場所であった。

とは言っても。

カシユラルとて、ダレットの居場所など知るわけがない。行方不明になる、と言っていたのを聞いただけである。あとは、一人の少女が行動を共にしていたことくらいだ。

紫の瞳の……ハーフの少女が。

「ふむ……」

それこそ、こちらの方が事情を聞きたいような話だ。何がどうなったら、帝国騎士とハーフの少女……それも、どう考えても堅気ではない……が繋がるのか。まあ、ダレットを見ていたら、何があってもおかしくないような気はしたが。

「……………」

ゴフセフに説明すべきことを頭の中でまとめかけたところで……カシユラルは最大の問題に気付き、珍しく顔を引きつらせた。

「……………」

カシユラルはじっと目の前を凝視していた。親兄弟の仇でも目の前にいるかのような表情で、心なしか、その額には汗が浮かんでいる。

が、彼女の目の前にあるのは別に仇でも何でもなかった。

宿舎の中の、カシユラルの自室。飾り気などまったくなく、戸棚が一つとベッド、あとは机しかない部屋で、カシユラルは机に載ったものを見て頭を抱えていた。

机の上には、小さな瓶が数個。彼女にはまったく意味が感じられない装飾が施され、人工的な芳香が漂っている。早い話が化粧品だ。いつからあったのかも覚えていない。おそらく何処かで押しつけられた物だとは思うのだが、今まで使うことなどなかったため、棚の隅に押し込んで忘れていたのである。

カシユラルは貴族の姫君などではなく、叩き上げの軍人だ。格好を整える程度のことはするが、別に着飾る必要などなからう、と開き直っていたため……それに、そんなものなど必要がないほどの美貌である……本格的な化粧品などまったく縁がなかった。だが、今回もそう開き直って良いものか、彼女でも判断がつかかねた。

軍服の着用は、あくまで公務の際に限られる。私的な用件だから、軍服を着るわけにはいかない。となれば、私服ということになる。

女性の私服、それも礼服となれば、ドレスしかないわけだが……  
着方がまったく分からないのである。化粧の仕方も同様だ。

そんなわけで、化粧品と、似たような経緯で部屋にあったシンプ  
ルなドレスを引っ張り出し、ひたすら頭を抱えていたのであった。  
何せ、軍服以外で今まで着ていたものと言ったら、下着と安物の  
男物の服だけである。単に「動きやすいから」というだけの理由な  
のだが、こんなもので宰相の家を訪れるわけにはいかない。

（……こんなつまらんことで）

そう。つまらないことだ。そう思うのだが……無視するわけにも  
いかない。プライドが許さない。しかし、何だってこんなことでひ  
たすら悩まなくてはならないのか。これでは＜戦女神＞の名前が形  
無しだ。別に自分から名乗った二つ名でもなかったが。

「うーん……」

ほとんど意地の勝負である。何と張り合っているのかは、いまい  
ち自分でも分からなかったが。

ゴフセフも、城の何処かに自分を呼び出してくれば良かったの  
だ。思わず他人に責任転嫁してから、自己嫌悪におちいる。

（……あああああ）

どれくらい、悩んでいただろうか。気が付けば、もう夕刻である。  
指定されたのは夜。いつまでもうじうじと悩んでいるわけにはいか  
ない。

カシユラルはもう一度、穴があくほど机の上を凝視し――

「……むう……」

うめき、諦めきった顔でため息をついて立ち上がった。

その夜。

コルフォース家は古くからの名門だから、客人を招くことも多い。  
だが、その夜訪れた人物に、家の人間はことごとく驚きをあらわに  
した。

自分に注がれる好奇の視線に、カシユラルは内心、暴れ出しそう

になっていた。

(……やはり、慣れない真似はするものではないな)

冷や汗が流れ出る。これなら、一人で大勢の敵を相手にしている方がまだ気楽だ。

このドレスという代物。とにかく動きにくい。スカートの長い裾は邪魔なだけだし、意味の分からない装飾があったり、そのくせ動くたびに引かかる。

さんざん悩んだ末、カシユラルが恥を忍んで相談を持ちかけたのは、宿舎の調理場で働いている中年の女性だった。別段親しいわけでもないが、顔見知りの女性と言ったらそれくらいしいなかったのだ。

カシユラルの話に、その調理場のおばさんは、まず呆氣にとられ、それから大笑いし……その後、ようやく本題に入ってくれた。素地が良いせいだろう、やけに楽しそうにドレスを着せて化粧をしていたものだ。「何だって、普段は着飾らないんですか。こんなにお綺麗なのに」という言葉に、「必要ないからだ」とカシユラルが淡々と答えたところ、呆れたようにため息をついていた。

まあ、それはともかく。はつきり言って窮余の策だったが、とにかくカシユラルを「貴婦人」に仕立て上げることにだけは成功していた。何も知らない自分でやるよりはましだったろう、とカシユラルは自分に言い聞かせた。

それでも、自分に注がれる視線の正体が分からない。何かおかしかっただろうかと思うのだが、尋ねるわけにもいかず、自分では何処かまずいのかも分からない。刀は持ってきていないが、こんな状況が続けば素手でも暴れ出すかもしれないな、と漠然と思った。

だが。事態は、彼女の思惑とはまったく違っていた。

貴族の夫人や姫君は大勢見たことがある。だが、これほどの美人など滅多にいない。誰もが一瞬その姿に見惚れ、それから慌てて動き出す。

(女というものが、いつもこんなものを着ていなければならないと

したら……差別だな。理不尽極まりない」

屋敷の中に案内されながら、カシユラルは内心そんなことを思っていた。

「ああ、堅苦しい礼は抜いてくれ。こちらが招いたことでもあるしな」

宰相を前に深々と頭を下げるカシユラルに、ゴフセフは静かに言った。そうして、席に座るように促す。

「見違えたな。あの＜戦女神＞とは思えない」

カシユラルを前にして、ゴフセフは苦笑して言った。職務上、それほど関わりのある二人でもなかったが、面識くらいはある。ゴフセフにしても、今までは軍服で歩き回っているカシユラルしか見たことはない。

「……そうですか」

まだ冷や汗をかいたまま、カシユラルは呟くように言った。必死に動揺を隠そうとしているため、人形がぱくぱくと口だけ動かしているように見える。

大抵の状況には耐えられるように訓練されているが、こんな状況は想定していない。事態がややこしくなっても、まさか宰相をぶん殴って逃げるわけにもいかない。

カシユラルの苦悩に気づいているのかいないのか、ゴフセフは静かに口を開いた。

「私はそれほど無駄話が得意でもない。だから、簡潔に訊く。あなたの事だから、用件くらいは察しているだろう。……何か、知っていることがあったら教えてもらえまいか？」

ひたりとカシユラルを見据え、ゴフセフは静かに言った。カシユラルは内心、安堵のため息をつく。これなら、それほど気負わずに済む。

カシユラルとて、それほど何かを知っているわけでもない。それを手短に話す。

聞き終わると、ゴフセフは大きくため息をついた。

「あの馬鹿息子……」

ぼそりと、それだけ呟く。

「申し訳ありません。私の不足のせいで」

「いや、あなたのせいではない。かといって、誰のせいとも言えないがな」

言って、乾いたユーモアの混じった笑みを浮かべる。何かを達観したような口調に、妙に似合っていた。

「だが正直、為す術がないのも確かだな。エルゼシア領ならともかく、他の地方領に入られると探しようがない。あの息子のことだから、どうせ、見つからないようにと言って地方領に入ってしまったている気がするしな」

ゴフセフは苦笑する。カシユラルも同感だとも言うように、小さく頷いて見せた。

この大陸では、並立時代には人間の国も幾つもあった。建国戦争後、それらを統合してエルゼシア帝国が成立したわけだが、元国王と言う立場を尊重し、非常に地方領主の権限が強い。完全な地方分権だ。帝国の国王と言えども、直接統治しているのは元々自分の領土だったエルゼシア地方領だけなのである。

他の地方を探すとすると、そちらの地方領主への協力要請が必要になる。が、宰相がそんな弱味を見せるわけにはいかない。ゴフセフの妻は前国王の妹だから、現国王とダレットは一応は従兄弟の間柄になる。そんな人間が騒動の挙げ句に行方不明になったなどとは、口が裂けても言えるわけがない。

呆れ返ったようなため息をつくゴフセフを見て、カシユラルは小さな感慨を覚えていた。

（……親とはこんなものなのかな）

カシユラル自身は、親の……家族の記憶といったものがほとんどない。生まれ故郷もかすかに覚えているだけだ。

唯一、覚えていることと言ったら……

「……………」

カシユラルは小さくため息をつく。軽く頭を振って、記憶をうち消した。そうして、話題を変える。

「ジェラルド・コルフォース卿の姿が見えませんが……何処か、出かけられたのですか？」

世間話のような口調で尋ねる。カシユラルの言葉に、ゴフセフは少々面食らったようだった。無駄話などまったくしない人物だと思っていたのだろう。

「ああ、あれはまだ城から退出していない。また誰かに噛み付いているのではないかな」

カシユラルもそうだが、ジェラルドもかなり容赦のない性格をしている。少しでも間違ったことを言おうものなら、徹底的に相手を論破してしまう。一度弱点を突つかれると、誰でもしばらく立ち直れなくなるほどのものだ。

ゴフセフと違って、ジェラルドはそれほど高い地位にあるわけでもない。だが、その性格から上層部からも恐れられていることは確かだった。厄介払いしたくても、父親が宰相となればそれも出来ない。

「もう少し加減を覚えんと、あれはあれで問題がある。……まったく、両極端な兄弟だな」

言って、ゴフセフはまた苦笑して見せた。

「地方領、か……」

ゴフセフが呟き、ふとカシユラルに向き直った。

「エルフの居住地域は、あちこちの地方領に散っている。小規模な反抗は消せるわけがないが……メルセリア地方領だったか、かなり反発が大規模で、手に負えなくなってきたというのは」

各地の警衛兵の統括は軍部の管轄だ。自分の職務に関する質問に、カシユラルの目が鋭く切れ上がった。

「はい……規模もそうなのですが、動きが組織的です。ただの反発とは訳が違う。中枢を見極めないと、大規模な反乱になりかねませ

ん」

事態としては、メルセリア地方領の片隅で、エルフが近くの間人間の街と争っているだけだ。だが、その動きを見てみれば、他の地域の摩擦とは訳が違うのが分かる。その場凌ぎではなく、明らかに誰かの指示の元での、統制の取れた動きだ。

「だが、軍部の上層部は特に本腰を入れるつもりはないようだな」  
「数の力押しでどうにかなると思っていますようです。ですが、エルフには魔法という能力がある。分断してきたからこそ、今まで人間はそれを押さえてこらえたのに……」

カシユラルが顔をしかめた。無能な自分の上司に、思わず心の中で毒づく。

魔法というのは強力である代わり、呪文の詠唱という制限が付きまとう。そのため、魔導士には接近戦を担当する戦士が同行するのが基本だ。言い替えれば、戦士さえ制圧してしまえば魔導士は役に立たない。だから、帝国はエルフを小人数に分断・監視し、数で戦士を叩けるような体制を取ってきた。

「分断してきたものを崩されては、また時代が逆行するだけになるか」

エルフと人間の、並立の時代。それぞれが力を持ち、削り合いを続けてきた時代。

「私も少し、軍部に圧力をかけてみる。だが、実際に動くのはあなた方だ。軍部の本領発揮だ……よろしく頼む」

「了解しました」

ゴフセフの言葉に、カシユラルが＜戦女神＞の笑みを浮かべた。着飾るよりも、壊し潰しの方が自分の専門なのだ。

——自分には、それしか出来ることがないから。

「……これ以上、あの馬鹿息子が厄介事に首を突っ込まないように祈るだけだ、今はな」

ゴフセフが、自嘲気味に笑いながら言った。

「親の性でな。……情けないとは思うが、どうしようもない。心配



くらいはしても良いだろう」  
言って、ゴフセフは笑う。

カシユラルもかすかに微笑んで見せた。

「え？ こっちに行くんじゃないの？」

山道の分かれ道で、キルファは珍しく素っ頓狂な声を上げた。

目の前で、道は二つに分かれている。長かった山越えもそろそろ終わり、右に行けばシクルスという大きな街があるのだ。キルファは当然そちらに行くものだと思っていたのだが、ダレットは何を思ったか左に向かって歩き出したのだ。左に行けば、まだまだ山道が続くことになる。

「まあ……ちょっと用があつてな」

ダレットの言葉は歯切れが悪い。

「ふうん……？」

キルファは首を傾げたが、やがて何か思い出したように言った。

「そーいやあんた、王都を出たときもまっすぐにこっちに来たわよね。最初から、ここに来るつもりだったの？」

エルゼシア地方領と隣接した地方領は幾つかあるが、ダレットは何も躊躇うことなく今まで通ってきたルートを選んだ。確かに、王都を離れるにはそれが最短だったので、キルファも今まで特に疑問を抱かなかったのだ。

「まあな」

ダレットはそれだけ答えた。言つて、すたすたと歩き出す。いっになく無愛想な態度に、キルファは少々腹が立った。

「ちょっと。何の用があるのか、それだけでも答えなさいよね」

早足で追いつくと、後ろの襟を背伸びして掴んだ。いきなり転ぶということもなかったが、引っ張られてダレットは足を止める。

「……一人、探している人がいるだけだ」

振り返って、ダレットは答えた。

「ふうん……どんな人？」

キルファは何気なく訊いただけだったが、ダレットは眉を寄

せて何やら考え込んでいる。

「……どしたの？ 別に変な質問でもないでしょうが」  
不思議そうにキルファが尋ねる。

「……いや。そういうわけじゃないんだがな……」

ダレットは、何処か疲れたような声音で言った。

「まあ……会えば分かるだろ。どう説明していいか分からん」

「どんな人なのよ、一体……」

いつになく口数の少ないダレットに、キルファも少々不安になった。

道の途中に、ラグズという村があった。人間の村であるが、かなり小さな村だ。以前立ち寄ったヨールンの街のような荒廃した雰囲気こそないものの、村人は、よそ者らしい二人にあまりいい顔をしなかった。

キルファは当たり前だと大して気にもしていなかったが、ダレットはどう言ったものか考え込みながら村人に尋ねた。

「済みません、この近くに、レガード・ストリクトと言う人はいませんか？ 五十歳くらいの男の人なんですけど……」

おっとりとした口調で訊く。少しでも村人の不安を和らげようというダレットなりの努力なのだが、隣りにフードを深く被った怪しさ満載のキルファがいては、何の効果もない。

「さあ。知らないね。少なくとも、この近辺にはいないよ」

話しかけられた中年の女性は、露骨に迷惑そうな顔をして答えた。

「おかしいな、また名前を変えたのかな……」

ダレットは首を傾げて考え込んでいる。

「……名前を、また変えた？」

横からキルファが言葉尻を捉えて訊くが、ダレットの耳には入っていない。名前をしょっちゅう変える人間とは、一体何者なのだ？ 「それじゃあ、単にこの近くに住んでいる、中年の男というのは聞いたことがありますか？」

心当たりがあるらしい。女性はしばらく思い出すように額に手を当てて考え込んでいたが、やがて顔を上げて言った。

「ほら、あっちの方……シャロンの山の中に、一人で住んでいる男がいたはずだよ。普段は自活しているらしいんだけどね、時々、山で獲った獲物を持ってくる。それをここで服とか、そんなものに代えてまた戻ってくんだよ。」

何してるんだらうね、あんなところで一人でさ」

多少は気を許したのか、世間話の口調で女性は言った。

「……もしかして、いつもフードを被ってませんか？　ほら、この子みたいに」

ダレットは、言って傍らのキルファを指差す。

「ああ！　そう言えばそうだよ！」

女性はぼん、と手を叩いた。

「いやさ、どんな時でもそれを外そうとしないから、一体何をやらかしたんだらうって皆で話してたんだよ。何だかやたらと目つきも悪いしさ、どっかで重い罪でも犯して脱走してきて、ここに隠れるんじゃないかって。ほら、シクルスは大きい街だから、常駐の兵隊さんもいるでしょう？　そこに知らせた方が良いつて、何回そんな話になったか」

ぺらぺらと女性は喋り出す。それを横目で見ながらキルファは訊いた。

「ねえ、間違いないの？　その人に」

「ああ……多分。行ってみないことには断言は出来ないけどな」

小声で言う、女性に向き直る。

「有難うございました。それで……大体の場所は分かりますか？」

「うーん……何時の間にかここに来てるから、はっきりした位置は誰も知らないんだよ。けど、村長だったら、もう少し詳しい場所くらいは知ってるかも」

「そうですか」

ダレットは女性に礼を言うと、その場を後にする。キルファが、

首を傾げながらその後を慌てて追った。

「うーん……かなり上手く誤魔化してあるみたい。あたしじゃ、よく分からないわね」

目の前の木々を見ながら、キルフアが髪を掻き上げて言った。

村長から示された大雑把な地図を手に、二人は再び山の中に入っていた。少なくとも、歩いてそんなにかかる場所ではないというのが、唯一の頼みの綱だ。

今まで進んできたのは、旅人たちが踏み固めてできた山道だ。だが、今歩いているのは文字通り、山の中である。木々がうっそうと生い茂り、かなり足場も悪い。無論、それくらいはどうにでもなったが……道が見えないのだ。

たとえ山の中でも、人が通ればそれなりの痕跡は残る。しかも、村の人間の話だと定期的に降りてきていると言うから、目印の一つも残っているだろうと思っていたのだ。それを辿っていけば、目的地にたどり着けるとも。

しかし実際は、獣が歩いたらしい跡は幾つもあるのだが、人間が残したらしい跡はまったく見つからない。山の中の生活にある程度慣れているキルフアでも、見分けがつかないのだ。

村長から言われた通りの方向に進んではいるものの、とんでもない方向に行っている、これでは自分たちでは分からない。最悪、山で遭難ということも有り得る。

「参ったな……」

ダレットが頭をかきむしる。栗色の髪がぐしゃぐしゃになるが、これはいつものことだ。

「一旦戻って、もう少し詳しい事を聞いてみた方が良いかしらね？都合良く、村に降りてきてくれるとは思えないけど……」

キルフアが言って何気なしに近くの低い木を覗き込み……そして、眉をひそめた。

「糸……？ 何なのよこれ……罨？ それにしても……」

草の陰に隠れるようにして、巧妙に足首ほどの高さに糸が張られている。かがみ込んでそれを観察し、キルファは呟く。

首を傾げるキルファとは対照的に、ダレットの顔が一瞬にして引きつった。

「動くな！」

声そのものが気合であるかのような叫び声。キルファがびくつきして動きを止める。

「……どうしたってのよ？」

「多分、これと同じものが近くにもある。絶対、糸を切るなよ」

言って、ダレットは慎重に足元を確認しながら、ゆっくりと前に進む。キルファもそれに習いながら、なおも尋ねた。

「……だからさ。何だったの？ これ」

「罨だよ。糸を切ったら、爆発が起こるか矢が飛んでくるか分からん。とにかく、気をつけて……」

言いながら、もう一本糸を発見して、慎重にまたいで通り抜ける。

「爆発とか矢が飛んでくるとか、何だかやたらと物騒なんだけど……。大体、この罨を仕掛けたのって誰なのよ？ ……ってもしかして、あんたが探してる人？」

「……ああ。これで間違いなくなったな……。多分、もう近いな」  
前を見据えながらダレットが言う。

「でも、何のためにこんなものを仕掛けてるのよ？ こんな山奥に」

「泥棒避けじゃないかな……」

やや、ダレットは自信なさげだ。

「泥棒避けって、こんなところに？ ……いや、爆発だの矢だの食

らったら、間違いなく死ぬと思うんだけど……泥棒」

「そういう人なんだよ」

キルファは、ダレットが疲れたようにため息をつくのを見て、それ以上訊くのを止めた。何だか怖い。

「はあ……」

二人とも罨の回避に気を取られて、話をする余裕はない。どれく

らい、進んだだろうか。

「あ……やっとなった」

小さな山小屋を見つけ、キルフアが嬉しそうに声を上げる。ダレットが顔を強張らせるが、遅かった。

だん！

キルフアの側の木に、矢が突き刺さる。刺さった木が半分ほど碎けているのを見て、キルフアは硬直した。

矢の形状からして、射手が弦を引く弓ではない。機械仕掛けで弦を巻き上げて矢を発射する、弩アルバレットと呼ばれる武器だ。その威力は、まともに当たれば人間の頭蓋骨など簡単に粉碎してのける。

「下がってろ！」

ダレットが長剣を抜きながら前に出た。

小柄な人影が走り出てきたのだけが見えた。その人影とダレットの剣が噛み合う音を聞きながら、キルフアは後ろに下がった。

ラグズの村の女性が言っていた通り、全身をマントに包んでいて顔もはつきりしない。見るからに怪しい。人のことを言えた義理ではないのだが、それはその際棚に上げておく。

「何だつてのよ……？」

とことん怪しい格好に、山の中で自活し、ついでに家の周りは買だらけ。これで何者なのかと疑わない方がおかしい。

それに、仮にも帝国騎士をやっていたダレットと知り合いらしいということが一番腑に落ちない。ダレットの昔話はあまり聞かないが、王都から出たこともそうなかったはずだ。王都の中をあんな怪しい人間が歩いていたら、まず警衛兵が飛んでくる。

「……………」

無意識のうちに一步後ろに下がる。

ふと——その足が何かに引っかかった。

さっきの糸。

「しまっ……」

後悔してももう遅い。それでも咄嗟に受け身を取ったキルファの頭上を、爆風が通り過ぎていった。

爆発音は、ダレットの耳にも届いていた。

「キルファ……?」

心配にはなるが、振り返っている余裕はない。人影が、再び剣を手に突っ込んできたからである。

「くっ……」

それを体さばきでかわし、下からすくいあげるようにして斬り付ける。その一撃は、上から叩き落された。

キルファが見ていれば気がついただろう。ダレットとこの人影は、剣を使う動きが似過ぎている。

まるで……同じ師に学んだかのように。

そのせいで、膠着状態に陥っている。お互いの一撃はことごとく防がれ、決定打とはならないでいる。

「はあ、はあ……」

打ち合うのは何合目だろうか。いい加減、息が上がってきている。ダレットは一旦退がると、剣を構え直した。

対して人影は、疲れた様子も見せず……表情はよく分からないのだが……また斬りかかってくる。

それを受けたところで、ダレットは一瞬体勢を崩した。人影が微妙に力の方向をずらしたのである。

ダレットが慌てて体勢を立て直そうとしたところに――

「がっ……!」

腹に拳が叩きこまれた。たまらずに後ろに吹っ飛び、転がる。

「げほっ……」

地面に転がったまま身体を曲げて咳き込むダレットに、人影はゆっくりと歩み寄った。

「ふん……」

足元のダレットを一瞥し、人影は悠然たる動作で剣を鞘に収めた。



「久々に会ったから少しは上達しておるかと思えば……相変わらるか。情けない限りだ、この馬鹿が」

大仰に嘆息して見せる。が、

「……そうでもないですよ」

まだ転がったままで、ダレットはにやりと笑った。

それに合わせるかのように、人影の被っているフードが、はらりと一部裂けた。初老の男の、猛禽のように鋭い視線があらわになる。吹っ飛ばされる瞬間に、突き出されたダレットの剣がフードをかすめたのだ。男は面白くもなさそうに横目でそれを見ると、ダレットの腹をつま先で軽く小突く。

「ふん……ただの悪あがきだろうが。腕はともかく、執念だけは一人前になったか。とにかく、いつまでも転がっていないでさっさと起きろ」

「まあ……最近、立て続けに死ぬような目にあってますからね」のろのろとダレットは立ちあがった。ぱたぱたと埃をはたいているところに、声がかかる。

「あー……何かもう話は終わったみたいだけどさ。結局、その人、何なの？」

キルファである。爆発でも食らったのか、片足をひきずりながらこちらに歩いてくる。

「ああ……」

ダレットは深くため息をついて言った。

「俺の師匠だよ」

「はあ？」

キルファは、ぽかんと口を開けた。

「……師匠？」

キルファの間の抜けた声だけが響いた。それきり、誰も喋らない。風と、葉のざわめきだけが聞こえる。

「ああ……俺の剣の師匠だよ」

言って、ダレットは疲れたようにため息をついた。

「お師匠様？ ……何か、前に話は聞いた気はするけど……」

とは言っても、キルファがダレットの師匠について知っていることはそれほど多くない。彼女が聞いたのは、ダレットがぼつりと漏らした一言二言くらいである。

「確か、もう故郷に帰ったとか何とか」

それをキルファに教えたのはエルザである。ただ、エルザもそれ以上のことは言っていなかった。単に知らなかっただけなのか、言いたくない理由でもあったのか。

「……って、ここが故郷？ こんな、誰もいないところ……」

キルファは首を傾げた。

「それは単なる言い訳だよ……いつまでも俺の面倒は見ておれん、だ」と

ダレットは、言って横目で傍らに立つ男を見た。

「確か、そう言いましたよね。俺の家から出るときに」

「まあな。それはともかく、何なんだ、その子供は。お前の連れか？」

「そんなものですよ」

ダレットの横をすり抜け、男……ダレットの師匠はキルファの目の前に立った。

「人の家を訪ねる時にはせめて、顔くらい見せるものだろう。そう習わなかったか？」

キルファはしばらく躊躇して黙っていたが、男の視線に耐え兼ね、

やがて渋々と言った様子でフードを外した。

銀色の髪と、紫の瞳があらわになる。キルフアは無然とした表情で男を見上げた。

「……生憎と、きちんとした礼儀作法を身につける機会はなかったもので」

男を睨みつけながら、キルフアは皮肉めいた口調で言う。

「ふん……」

男はしばらくキルフアの瞳を見据えていたが、やがてきびすを返して小屋に向かって歩き出す。

「どういう風の吹き回しだ？ お前が、ハーフの子供なんぞを連れてやって来るとは。数年間、まったく音沙汰のなかったお前が」

ダレットに背中を向けたまままで訊いた。

「……まあ、色々ありまして」

ダレットは適当に言葉を濁す。男は面白くもなさそうにそれを聞いていた。だが。

「まあいい、入れ。茶くらいはある」

若干、和らいだ口調で言う、小屋の中に姿を消した。

「ねえ、ほんつとうにあの人、あんたのお師匠様なわけ？ ひたすら怪しい人に見えるんだけど……」

小屋に入ろうとするダレットを捕まえ、キルフアは小声で訊いた。家の周りには罫を仕掛け、客人にはいきなり斬りかかり、ついでにずっとフードを被ったままだ。これで信用しろと言う方が無理な話である。

「……だから、ああいう人なんだよ。そうとしか言いようがない」  
ダレットはまたため息をつく。

「ま、いいけどさ。それと、一つ訊きたいんだけど。あたしを見て、少し怯えたような感じがしたけど……何なのかしら」

それはダレットも気付かなかった。間近で見えていたからとも言えるが、キルフアは他人の様子に敏感なところがある。おそらく、そ

のせいだろう。

「さあ……それは俺も知らないな。俺も、そんなに詳しく知ってるわけじゃないし」

ダレットも首を傾げた。

「ところでさ。何であんた、いきなりお師匠様のところに来る気になったわけ？」

「まあ、それはそのうち分かるさ」

ダレットはそれきり話を打ち切ると、小屋に入った。

「……俺たちは一応、客じゃないんですか……？」

黙々と作業をしながら、ダレットは訊いた。がたがたと戸棚をあさり、ついでにやかんを火にかける。

「茶くらいはある、って聞いたんですが」

「茶があるとは言ったが、淹れてやるとは誰も言っておらん。師匠に茶を淹れさせる弟子が何処にいるか」

言って男はふんぞり返る。ダレットはそれ以上何も言わず、作業を再開した。ちなみにキルファは何も言われていないので、座ったままダレットを眺めている。手伝う気は毛頭ないらしい。

キルファは半ば呆れたような顔で、小屋を見回した。

おそらくこの男が自分で建てたのだろう、木造の小屋の造りは雑で、あちこちにがたがた来ている。外から見ても、冗談抜きで傾いていた。木の板はあちこちが剥がれかけているし、棚とは名ばかりの板の集まりも、一部が壊れて中のものがはみ出している。

粗末な生活はお馴染みだったが、それにしてもこれはひどい。よく生活してられるものだ、と感心すらしてしまう。

「あの……」

沈黙に耐え兼ね、キルファはおずおずと口を開いた。

「あの、家の周りの罨って、何の意味があるんですか？ ……来るのに、ものすごく手間取ったんですけど」

嫌味な笑いを浮かべながらキルファは尋ねた。まだ、爆発を食ら

ったときの足が痛む。

「単なる趣味だ」

男は身も蓋もなく言い切る。キルファは思わず椅子からずり落ちそうになった。

「趣味って……」

「だから言っただろ。こういう人なんだよ」

横から、ダレットが諦めきった口調で言う。何だか怖くなって、キルファはそれ以上訊くのを止めた。

沈黙が……正確には、ダレットが慣れない手つきで茶を淹れる音だけが響く。キルファは、さっきから思っていたことを訊くことにした。自分だけが何も事情を知らないようなので、少々苛立っている。

「何で家でもフードを被ってるんですか？ ……外さないんですか？」

それは、さっき自分も嫌味混じりに注意されたことに対する皮肉だった。が、男はフードの下で苦笑する。

「嬢ちゃんのために被ったままにしてあるんだが。……見たいか？」

男の言っている意味が分からず、キルファは眉をひそめた。

「つまりだな、こういうことだ」

躊躇う様子もなく、男はフードを跳ね上げる。

「……………」

キルファは小さく呻き声を上げ、口に手を当てた状態で固まった。

人間とエルフ。よく似たこの二つの種族の違いは、魔法が使えること、それと……耳が尖っていることである。長く尖った耳。それはエルフ族の証であり、誇りでもある。

だが。

目の前にいる男には……耳がなかった。

耳朶があるべき場所には、引きつった傷跡があるだけである。刃物で両方の耳を切り落としてもしたのだろうか。鼓膜を潰さない限

り聴力は失われはしないが、音を集める働きのある耳朵をなくしてしまったのでは、かなり音が聞き取りづらくなっているだろう。

「あ……」

呆氣に取られてそれを見ているキルファに、男は苦笑して話しかけた。

「女子供が見て楽しいものではあるまい。見た奴らの大半は氣絶するからな。……嬢ちゃんは平氣なようだが」

「……見慣れてましたから。以前は」

スラムにいた頃は、殺傷沙汰など日常茶飯事だった。当然、傷を負った人間を見ることが多かった。死んだ人間もいれば、生き残った人間もいたが。

「それ……」

訊きたい事は山ほどあるのだが、驚きと呆れで声が出てこない。

「これを見せたら、大半は逃げ帰るからな。それでは生活にも困る仕方がないので、こうしている」

男はひょいと肩をすくめた。が、鋭い眼差しといかつい顔つきにはどうにも似合わない。

「はあ……それって、何かの事故か事件で……？」

どう見ても、刃物でできた傷だ。誰かが手を加えなければ、こんな風にはならない。

「いや、事件でも何でもなし」

男は質問に答えはするが、説明をする気はないらしい。どう尋ねたらしいものか、キルファも思案した。

「じゃあ……誰なんです？ 耳を、その……切り落としたのは」

尋ねたところで、キルファはダレットの言葉を思い出した。確か、傭兵であったと言っていたか。その時かもしれないが……何にしても、耳を切り落とす意味がわからない。

「自分でやったんだよ」

横から、ダレットが言った。乱暴な手つきで茶を淹れている。

「え……？」

一瞬、ダレットの言葉を理解できず、キルファは動きを止めた。

「自分で、わざわざ傷をつけた……んですか？」

ただの切り傷とは違う。切り落としてしまえば、二度と元には戻らない。それを、一体何故？

「そうだ。……余計なことを言いおって」

ダレットからカップを受け取り、男はダレットを苦々しげな顔で睨んだ。

「まずい」

男は茶を一口すすって言う。キルファものん気な仕草で口をつけたが、確かに、美味しいとはお世辞にも言い難い。ダレットが適当にやったこともあるだろうが、茶葉もあまり質の良いものではないようだ。それは、この場所を考えれば仕方のないことではあったが、ついでに、カップにもひびが入っている。

「茶の淹れ方を教わった覚えはありませんから」

ダレットは文句を馬耳東風と聞き流し、自分も座ると茶をすすった。この小屋にある椅子は二つ。うち一つは主人が当然のように座り、予備の椅子はキルファが占領している。仕方なしにダレットは、ベッドとは言い難い、干草の上に布をかぶせただけの寝床に腰掛けしている。

「口先だけは達者になりおって」

男が苦笑いした。

「まあ、俺も幾つか訊きたいことはあるんですけど。……今は、何と名乗っていらっしゃるんです？」

ダレットがため息をつきながら訊いた。

「名前が分からないお陰で、探すのに苦労しましたよ。その特徴的な外見がなければ無理だったでしょうね」

「余計なお世話だ。名前なんぞどうでもいいだろうが。……ヴァルレッド・モデラート、だ」

そのやり取りを聞いていて、ようやくキルファは、男……ヴァルレッドの名前をまだ聞いていないことを思い出していた。やたらと

個性的な人物なので、すっかり失念していた。自分でも不思議なのだが。

「それじゃあ、あんたがラグズの村で訊いてた、レガード・ストリクト……だっけ？ あの名前って一体何なの？」

「昔、俺の家に居候してたころの名前だよ。俺も本名は聞いてないんだよな、正直なところ。……でも、これが偽名だってことだけは確か。そうですよね？」

言って意味ありげにヴァルレッドを見た。

「何で、偽名って分かるわけ？」

「そりゃそうだろう。どう考えても、姓は持っていないはずだからな」「はあ？」

まるで謎かけだ。キルファは首を傾げて考え込んだ。

姓を持たない。持つことを許されない。それが当てはまるのは唯一、エルフだけだ。ということは、つまり……

「エルフなの？ この人……」

「そういうことだ」

ダレットがにやりと笑って言った。

キルファは開いた口が塞がらない。

ダレットは間違いなく人間だ。その知り合い、しかも師匠と言うのだから、ヴァルレッドも当然人間だろうと思いきんでいたのだ。何故エルフだと言う事に気付かなかったのか。それは無論、エルフの特徴たる長い耳を持っていなかったからなのだが。

「って、もしかして」

キルファはぱん、と手を叩いた。

「もしかして、自分で耳を切り落としたのって……エルフか人間かを、分からなくする、ため？」

「そういうことだな」

今度は、ヴァルレッドが頷いた。何処かに自嘲を含んだ笑いを浮かべている。

「あとは魔法さえ使わなければ、エルフだとばれることもない」



耳という特徴を消し去ってしまえば見た目では区別がつかないほどに、人間とエルフという種族は似ているのだ。外見だけでなく、体内の構造もよく似ているから、キルファのような混血児も時には生まれるのだ。

「何だって、そんな……」

自分の種族を分からなくする。二つの種族が対立するこの大陸において、それは自殺行為とも言えた。どちらにも所属していないとなれば、まったく他人の庇護を受けられないどころか、両方から憎しみをかうことになる。ハーフたるキルファは、そのことを痛感している。だから……あつさりと自分の種族を捨て去ってしまえるこのヴァルレッドと言う男に、腹が立った。

「ちよつと、人間を見てみたくなってな。しかし、この姿のままでは追い返される。それで、こういう手段を取った」

ヴァルレッドはしれつと言つてのける。キルファは、ぐつと拳を握り締めた。

「嬢ちゃんが怒るのも無理はないがな……今の、この状況の方がおかしいとは思わんか？ 人間だのエルフだのと言ひ合い、戦争までするとはな。馬鹿馬鹿しい茶番だよ」

キルファは黙って唇を噛み締めた。

そう、思ったことはある。だがそれは、もし二つの種族が争っていなかったら、自分は苦い思いをせずに済んだのではないかという期待に過ぎない。間違っているのか正しいのか、そこまで考えられる高尚さは自分にはない。

もし、ヴァルレッドの言う通り、間違っていたとしよう。だとしたら、自分が今まで味わってきた思いは……一体何だったのだ？

「おかしいか、そうじゃないかなんて……誰も、分からないわよ」  
ぎりつと歯を食いしばりながら、それだけを絞り出すように言った。

「そうだな」

ヴァルレッドは、初めて優しげに笑いながら言った。

「誰も、そんなことは分かりはしない。それは、その通りだ。

だが……それを考える価値はあるとは思わんか？ 答えを見つけないのが目的ではなく、考えようとすることにはな。

嬢ちゃんは多分、この大陸でも数少ない、種族なんて枷に囚われないで生きられる存在だ。だからこそ……考えてみてくれ。どうやったら、嬢ちゃん自身が幸せになれるのか、をな」

「……………」

キルファは黙ってヴァルレッドの話を聞いていた。

考えたこともなかった。他の誰でもない、自分自身のために何が出来るかなど。他人のために生きてきた覚えはないが……常に、周りに支配されていたような気がする。それはもっぱら、憎み、蔑むような視線だった。

それでも。何か、出来るかもしれない。

そう考えれば……少し、気持ちが軽くなったような気がした。

(……そうか)

唐突に、キルファは理解していた。ダレットが、この人物の元を訪れた理由。

自分が会いたかったのではない。おそらくは……キルファを、会わせたかったのだ。この風変わりな人物に。

じろりと横目でダレットを見ると、彼はそ知らぬ顔で茶をすすっていた。

夜。

月と星の光が森に暗く影を落とし、獣の咆哮が低く長く響く。そんな、魔の時間。

「くう……」

キルファは穏やかな寝息を立てている。屋根の下で眠るのは久々なので、安心したのか、早々に寝入ってしまった。しかし。

ランプの頼りない明かりを間にはさみ、師匠と弟子は向き合っていた。炎が揺らめくたびに、顔に落ちた影がうごめく。そんな、お互いの表情も分からないような状態だった。

「どういふことだ。お前がいきなり、こんなところに押しかけくるとは。騎士になると言っていたが……辞職でもしたか？」

「ええ、まあ」

ダレットはあっさりと言った。

「しばらくは仕事をしてたんですけどね……段々、疲れてきたというのか、肌に合わなかったというのか。そこに結婚話を持ち出されて、ついでに下らない陰謀にも巻き込まれて、これ幸いと家出を」

まるで他人事のように語るダレット。対してヴァルレッドは、苦虫を噛み潰したような顔をした。

「この大馬鹿者が。一旦決めたことを投げ出し、尚且つ、家を飛び出してきただど？ 親父殿と兄貴はどうした。それとあの……お前の世話係。エルザ、と言ったか」

ダレットの母親は早くに亡くなっている。だから、小さい頃からダレットの面倒を見てきたのはエルザだった。訓練の度に怪我をするダレットを見て、毎日のようにヴァルレッドに噛み付いていたものだ。

「特に何も言ってませんけど。まあ、大体想像はつきますが」

あの頑固と馬鹿正直を絵に描いたような父と兄のことだ。周りにひたすら謝り倒しているに違いない。そこまで考えて、ダレットは少々罪悪感を覚えた。今更手遅れだが。

「だから言っただ。お前にあんなお堅い役目なぞ勤まらん、とな」  
ヴァルレッドが苦々しげに言う。

六年前に、当時十六歳だったダレットは王宮騎士団の入団試験に合格し、叙勲を受けている。試験の直前、ダレットとヴァルレッドの二人はさんざんに言い合ったものだ。

貴族の家で、家督を継げる子供は一人だけ。年齢的にも資質を見ても、それは兄、ジェラルドに決まっていた。だから、次男であるダレットは自力で地位を得なくてはならない。

自分で功績を挙げて爵位を賜るか、軍に入るか、王宮騎士団に入団するか。政略結婚の道具として養子に行くのでなければ、選択肢はこんなものだ。その中で、ダレットは最も難関である王宮騎士団の道を選択した。

当時としては正しい決断だったろう。貴族として他の人間と政治の場で対等に渡り合う能力はなかったし、道具など死んでもごめんだ。だが、ヴァルレッドだけが執拗に反対したのだ。「お前には無理だ」と。

話し合い……最後には真剣で斬り合いまでやったが……は決裂、ヴァルレッドはずっと滞在していたコルフォース邸から去った。直後に入団試験があったのだ。

ダレットがヴァルレッドの言葉が正しかったことを思い知るのは、それから数年が経った後のことである。

「やったことの取り返しはつかん。今更とやかく言ってもはじまらんが……二度とこんな情けない真似はするな。それだけは肝に銘じておけ」

諭すようにヴァルレッドは言った。子供の頃のように、ダレットは黙って話を聞いている。

「今度はこっちから訊きますけど……今は何をやっていらっしゃる

んです？　こんな、山奥で」

「何もせん。ただ、生きてるだけだ……それも、最近は面倒になつてきたがな」

ため息をつく。その姿が妙に年をとって見えたのは、ダレットの気のせいだっただろうか。無論、別れてから六年も経っているのだから、その分老いていて当たり前なのだが。

「何だか、変わりましたね。昔は、さんざん俺をしごいてくれたのに」

唐突に、小さい頃の記憶が蘇る。以前はコルフォース家の屋敷に居候しながらダレットに剣を仕込んでいたのだが、その修業というのがまた変わっていたのだ。

貴族の息子として剣は当然のように仕込まれたが、教え方が過激で、情け容赦なく真剣を振り回してくれたものだ。新しい技を教えるにしても、何の説明もなしにいきなり技をダレットを実験台に仕掛けて見せ……無論、真剣である……、寸止めで硬直しているダレットにやってみろ、などと言うのが常だった。

普通の貴族が習うものとしては、剣は必須としてあとは騎乗、弓、槍といったものくらいなのだが、ヴァルレッドはそれに加えて徹底的に体術を教えた。これも教え方は似たようなもので、ダレットは何回骨を折ったか分からない。曲芸のような軽業までやらされた。

あと、よく分からないものとして、不眠不休で動く訓練だの、水中に長く潜っている訓練だの……

「……よく死ななかったもんだ」

思い出しているうちに段々虚しくなってきた、ダレットはそれ以上考えるのを止めた。

「そのお陰で今、こうやっていられるんだ。感謝しろ」

ヴァルレッドは無意味にふんぞり返る。確かに、騎士団の中でもずば抜けた力を持っていられたのは、この男の指導の賜物なのだが。「それで？　家を飛び出して、何をやっているんだ」

「何ということもないですけどね。ぶらぶらと旅をしていますよ。何

回も死ぬような目に遭いましたけど」

「死ぬような目？」

「盗賊の群れには出くわすわ、城に住み着いていた魔物は成り行きで倒す羽目になるわ。まあ……どれだけ王都が平和だったか、ってことでしょけどね」

この旅に出るまで、ろくに王都から出たこともなかったのだ。自分のいた世界の狭さを思い知らされる。

「ふん。まだ若いんだ、少々死ぬような目に遭うくらいの方が良い」「簡単に言いますね……」

ダレットは苦笑した。

「師匠が若い頃はとうだったんです？」

ダレットも、師匠のことについて深く知っているわけではない。本名すら知らないのだ。ただ、何回か傭兵であった頃の苦労話を聞かされたことはあった。

「若い頃……か」

ヴァルレッドは、何故か自嘲気味に笑った。

「お前の連れてきた、あのハーフの子供。……何処で会ったんだ？」

唐突にヴァルレッドは話題を変える。多少面食らいながらも、ダレットは律儀に答えた。

「王都の繁華街ですよ。その……盗賊をやっていた彼女に、俺が狙われまして。ただ、その後偶然もう一回会って、ちょっと色々あったもので」

「盗賊か……まあ、そうだろうな」

世間から認知してもらえないハーフが、まっとうに生活しているわけもない。唯一方法があるとしたら、この師匠のように山にでも引きこもってしまうことだが、まだ十四歳の子供には無理な話だ。「何故いきなり、そんな子供の面倒を見ようと思ったんだ？」

「さあ。何故でしょうね」

今考えても、よく分からない。ただ、「これでは駄目だ」、と直感的に思っただけだった。キルファのため、などと言うつもりはな

い。もしそう言ったら、彼女は「偽善などごめんだ」と言って去っていくだろう。

「……何で、いきなり？」

ヴァルレッドがキルファを見て怯えていた、とキルファ自身が言っていた。そのことだろうか？

「俺は……この子供の前に、もう一人だけハーフを見たことがある」「はあ……」

ヴァルレッドが何を言いたいのかわからず、ダレットは適当に相槌を打つ。が、単なる昔話でないことはその真剣な表情から察することが出来た。

ハーフは、滅多にいるものではない。人間とエルフが、お互いを極度に嫌っているためだ。だが別に、若い男女は周りの意向に沿って恋愛をするものではない。何にでも、例外というものは存在する。

「お前……この子が、魔法を使うのを見たことがあるか？」

「魔法、ですか？」

キルファの使うく白紙の魔法には、ダレットも何度も助けられている。だが、サリクスらエルフの様子を見ている限り、あれはかなりの変わり種と言えるようだ。彼女自身が、原理が分からないと言っていたのだから。

他のエルフと同じような、その場で呪文を唱えて発動させる魔法については、少なくともダレットは見たことがない。いや、キルファがそんな魔法を使えるのかすら知らない。魔法に関する知識は豊富に持っているようだが。

そうダレットが言うと、ヴァルレッドは何処か安心したような顔をした。

「……そうか」

「あの、ハーフは……魔法を使えるんですか？」

魔法は、エルフ族にのみ許された技術だ。半分はその血を引いているとはいえ、使えるのかどうか。

「使える。……少なくとも、俺が会ったもう一人はな。」

だが、ただ使えるだけなら問題はないのだが……」

何かを含んだ物言い、ダレットは怪訝な顔をした。

「……何なんです？」

「俺が知る限り、通常のエルフなんぞよりもよっぽど強大な魔法を使いこなすのだ。半分に血が薄まっているのにも関わらず……な。

理由は俺も知らん」

「……………」

ダレットは下を向いて考え込んだ。

キルフアが、やたらと魔法に関して詳しいのは知っている。ドラウイダの村で会った、麻薬中毒の男の正体を見抜いたのはキルフアだった。魔法を使うときにしか用のないらしい、魔法言語の読解も出来た。だが、彼女自身が魔法を使おうとしたところは見たことがない。

単に自分には使えないとでも思っているのか、それとも、知っていて使う気がないのか。しかし、あの城で魔物と出会い、死ぬような目にあっても使おうとしなかったところを見ると、前者なのかもしれない。

「……俺も、キルフアのことはよく知りませんから。あまり昔のことを話したがらない奴ですし。無理ありませんけどね」

そう言って、ダレットは肩をすくめた。

「そうか……ならいい。知らないようなら、この子供にはこの事は言うな」

「……………」 何でです？」

これから旅を続けていて、前と同じような目に遭わないとも限らない。その時には、キルフアが魔法を使えるとしたら強力な力になる。元々、魔法に関する知識は持っているのだから、問題ないと思うのだが。

「あまりにも、強すぎる力だからだよ」

ヴァルレッドはそう言って嘆息した。

「俺が初めてハーフを見たのは、まだ若い頃だ。傭兵をやって……



そう、一番力のあった頃だな」

戦士としての絶頂期。ヴァルレッドの力を考えれば、それこそ、大陸でも指折りの戦士だったことだろう。長剣に加えて魔法すら使いこなすのだ。

「そのハーフは、まだ若かった。この子供より少し上と言ったところか。華奢な体格の男でな、女のような顔立ちをしていた」

ほっそりとした、中性的な魅力を持った男だった。紫の目が、その美貌に映えて美しかった。だが……

炎上する街。ヴァルレッドの記憶にあるその少年は、常にそんな凄惨な情景の中に佇んでいた。

「その男は、完全に世の中を憎んでしまっていた。だからだろうな……復讐、だったのだと思う」

空恐ろしくなるほどの無表情で、ヴァルレッドは昔話を始めた。

久し振りに再会した師匠の、いつもと違う様子に戸惑いながらも、ダレットはそれに聞き入った。

三十年前。

エルゼシア帝国が成立してから二十年が経過していた。ようやく各地の反乱も収まり、平和な時代が始まろうとしていた。

そのはずだったのだ。だが……

「今も、その男の名前は知らん。どんな風に生きてきたのかも、何も……な。出会ったのは、燃え上がる街中だった」

ヴァルレッドはそう言って深くため息をついた。鋭い眼差しに、深い疲れの色が見える。

シクルスの街。昔から栄えていた大きな街だ。当時、傭兵として各地を移動していたヴァルレッドは、たまたまそこに滞在していた。シクルスは人間の街だから、エルフであるヴァルレッドは、入るのにかんがりの制限がある。だが、傭兵となれば話は別だ。

その頃、あちこちの街が一瞬にして廃墟となるという事件が多発していた。火災や爆発によって徹底的に潰されている。連続して起こっていることから、明かに人為的なものだと思われていたが……一つ、腑に落ちないことがあった。

被害にあっている場所に、共通項が見当たらないのだ。人間の街でもエルフの村でもお構いなし。帝国という機構にエルフが反乱を起こすというのは度々ある話だったが、それならばエルフの村まで襲う理由はない。

当然、人々は恐慌状態に陥った。早々に荷物をまとめて逃げ出そうとする者もいたが、何処に逃げて良いのか分からない。完全な無差別攻撃だったせいだ。結局、街、村毎に自衛策を取るしか方法はなかった。ヴァルレッドがシクルスに滞在していたのも、こんな理由からだったのである。

「それは、聞いたことがあります……ええと、何事件と言ったかな」  
ダレットはこめかみに手を当てて考え込んだ。元々、歴史の成績

はあまり良くなかったのである。

帝国建国以来、最大の惨事とされているので、ダレットでもその話は聞いたことがあった。父が、当時の苦労話をやたらと聞かせてくれた気がする。

「事件というほど小さいものでもなかったがな……襲われた村や街の数は十を超えた」

「……………」

さすがにダレットも顔を引きつらせた。小規模な戦争並みだ。

「……それで、どうなったんです？」

ヴァルレッドは、グラスに注いだ酒を一口飲むと、話を続けた。不幸にも、ヴァルレッドがシクルスにいたときに、街が襲われたのだ。

「明らかにあれは、魔法による被害だった」

ヴァルレッドは断言した。

美しかった町並みは炎に包まれ、人々の悲鳴が辺りを支配していた。それに加えて、爆発音が断続的に聞こえてきたのだ。魔導士でもあったヴァルレッドは、それが魔法による爆発であると看破した。消火活動を放り出し、爆発音の聞こえる方面に向かったヴァルレッドの前に……その男はいたのだ。

爆発によって、大きく抉られた地面。積み重なる瓦礫と、人々の悲鳴……だが、そんな凄惨さに男……まだ少年と言える年齢だった……は侵食されていなかった。炎の紅が少年の顔を染めていたが、佇む少年の姿は一枚の絵のように美しかった。

「場違いな情景だと思ったものだ。惨事の犯人があの子供だと、すぐには理解出来なかった」

慌てふためく人々とは対照的に、あまりにも静かだったその少年に、ヴァルレッドは一瞬、呆気にとられたが……次の瞬間、更に啞然とした。

少年の瞳が、鮮やかな紫色をしていたからである。

人間とエルフの混血児は、皆、紫の瞳を持って生まれてくる。大

陸に住む者の常識だ。当然、それをヴァルレッドも知っていたが、見るのは初めてだったのである。

「それで……師匠が倒したんですか？ その少年を」

のんびりとした顔で、ダレットが尋ねた。ヴァルレッドの強さは、彼が一番よく知っている。

「いや。呆然としている間にいなくなっていた」

ヴァルレッドは身も蓋もなく言う。ダレットは椅子からずり落ちそうになった。

「だが、目撃者は俺の他にも大勢いたからな……犯人がハーフであることは間違いなかった」

今まで襲われたのは、もっぱら小さな村だった。夜に襲撃が行われたこともあって、その姿を見たものはほとんどいなかったのである。

悪夢のような一夜が明け……シクルスの街の人間は、その惨状に愕然とした。

市街地はもっぱら火災による被害だけだったのだが、被害が大きかったのは街の中心部だった。領主の城は爆発によってただの瓦礫の山と化し、領主夫妻は殺されていた。

街の中心的な部分、政治や軍備の拠点が集中的に壊されていたのである。その象徴とも言える領主夫妻は、わざわざナイフでとどめを刺されていた。魔法を使えば城ごと潰すことも可能だったのに、二人だけは直接手を下されていたのだ。

「それって……」

「あの少年が憎んでいたのは、人間、エルフ……そんな大陸の仕組みそのものだった、そういうことだろうな」

爆発の跡を目の当たりにしたヴァルレッドは、戦慄を隠せなかった。

石造りの頑丈であるはずの建物が、まるで鉄槌で叩かれたかのようにな残な瓦礫となっていたのだ。どんなに優秀なエルフの魔導士でも、成し得ないほどの威力である。

「俺には、魔法の威力の限界ってよく分からないんですけど……」

「魔法は確かに強力な力はあるが……所詮、ただの道具だ。理屈もあれば限度もある。いくら何でも、一人では建物を一つ潰すことなど出来ん」

「はあ……」

いくら聞いても自分には分からないような気がして、ダレットは考えるのを止めた。そういうもの、として理解しておいたほうが良さそうである。

「まあ……結局、何の役にも立たなかったからな。あの後、街を早々に追い出された」

シクルスの街から出たヴァルレッドは、あのハーフの少年の影を追いつけた。当時の彼に、名声欲がなかったと言えば嘘になるが……それよりも、気になることがあったからである。

「何と言えばいいのか。あの紫の瞳が……泣きそうな子供のように見えてな。そうだ、怒られて泣き出す寸前のような」

あの凄惨な光景と、その犯人の子供のような表情の差が、どうにも解せなかったのだ。探してどうする、などと考えるでもなく、ただヴァルレッドは少年を捜し求めた。

ヴァルレッドに頼るまでもなく、帝国も犯人探しに血眼になっていた。しかも、ハーフという決定的な特徴が明らかになったのだ。間もなく少年は発見され、追い詰められる。

「たった一人の男、しかも子供を、何十人もの騎士の精鋭が取り囲んでいた。笑い話だが……それだけ、人々は恐怖していたからな。仕方のないことかも知れん。

だが……」

少年の放つ強力な魔法の前には、人間の騎士たちは成す術がなかった。あっけなく吹き散らされ、逃走する羽目になる。

「御大層な銀色の鎧を着けた男がいたがな、歩くことも出来ずに這って逃げていったぞ。何と言ったか……スフォルテンド、だったかな」

「スフォルテンド？ ああ……」

もう引退しているが、騎士の中の騎士と言われた男だ。面識こそないが、ダレットもその存在は知っている。

「まあ、不甲斐ない連中は置いておいて、だ」

ようやく所在を確認して追いついたヴァルレッドが見たものは、成す術もなく倒れる騎士たちの姿だったのである。

「……ひでえな」

長剣を手にしたまま、ヴァルレッドは呆然と呟いた。

シクルスの街と同じ惨劇。爆発によって大穴をあけ、煙を立ち上らせる大地。倒れ伏す騎士たちの姿……

そして。あの時と同じように、その真中にはあの少年がいた。爆風に髪をなびかせ、瞳に静謐な色をたたえている。

それが、理解出来なかった。これだけの惨劇を引き起こしておきながら、何故、そんなにも静かでいられるのだ？

「てめえ……」

食いしばった歯の間からうめくヴァルレッドに、少年は子供のような目を向けた。

「あなたは……何なの？」

無邪気とすら言える笑いを浮かべ、少年は訊いた。にっこりと笑うその顔は可愛らしさすら感じられたが、それは悪魔の微笑だった。

「そうか、あなたはエルフか。なら……死んでも構わないね」

にっこりと、少年は宣言した。

浮かべた笑いはそのままに、少年は軽く右手を上げる。澄んだ声で、呪文を詠唱するのが聞こえた。

爆発音と共に、衝撃がヴァルレッドを襲う。が、彼も修羅場を何回もくぐり抜けてきた傭兵だ。咄嗟に魔法の障壁を展開し、同時に体勢を整えて何とかやり過ごした。

「ぐっ……」

それでも、完全に防御できたわけではない。衝撃の大半は受け流

したものの、大きく吹き飛ばされ、地面を数度転がる。

「畜生……がっ……」

ヴァルレッドはよろよろと立ちあがる。目の前には、相変わらず静かに笑う少年の姿があった。

「てめえ……何のために、こんなこと……」

愚問だと思いつながらも、ヴァルレッドは訊いた。答えを待つでもなく、剣を構え直す。この少年は丸腰だ。剣が使える間合いにまで入り込めれば……

「何のために、だって？」

ヴァルレッドの耳に、少年がおかしそうに笑うのが聞こえた。子供のように、けらけらと笑っている。

「当たり前じゃないか。こんな連中、死んで同然だよ。でも誰もやらないから、僕がやっているだけ」

誇らしげに笑う。まるで、かけっこで一等賞を取った子供のよう  
に。

「死んで当然、だど？」

ヴァルレッドはぎりつと歯を食いしばった。

「てめえみたいなガキに、そんなことを言われる覚えはねえ」

打ち付けた身体のおちこちが痛かったが、気力で無視し、剣を向ける。少年は、ヴァルレッドが剣を持っていることに初めて気がついたようだった。

「あなたも、僕を殺しに来たってわけ？ でも無駄だよ。悪役は、正義の味方には絶対に勝てはしないんだ」

伝承に語られる英雄譚の再現のように、少年は高らかに言って笑った。

「笑わせるな。てめえが、正義の味方だ？ ふざけんじゃねえぞ」  
言うなり、ヴァルレッドは少年に向かって走る。剣で斬りつけようと  
するが、間合いに入る前に再び少年の魔法を食らい、あっさりと  
吹き飛ばされた。

「僕は正義の味方だよ。その証拠に……あなたは僕に勝てないじゃ

ないか。そこに転がってる騎士たちもさ」

正義の味方云々はさておき、今の自分では齒が立たないことだけは確かだった。また斬りつけようとしても、同じ結果に終わるだけだろう。自分の魔法など、この少年に比べれば子供だまし程度の力しかない。

「僕は、悪者をやっつけるんだ。格好良いだろう？」

無邪気に少年は笑った。

(……………?)

ここに至って、ヴァルレッドは一つの疑問を持っていた。他に方法も思いつかず、とりあえず尋ねてみる。

「おい、てめえの言う悪役ってのは……どいつとどいつだ？」

「……………？」

少年はきょとんとした顔をした。

「……何を言ってるんだ？ 人間と、エルフだよ。当たり前じゃないか」

一瞬だけ、少年の目を狂気の色がよぎった気がした。紫の瞳が怪しく輝く。

(やっぱりな)

それは、人間の街とエルフの村の両方を襲ったことから明らかにだったが……改めて少年の口から聞くと、まるで死刑宣告のような響きを持って感じられる。

「じゃあ、何で人間とエルフが悪役だって言えるんだ？ 言ってみろ」

にやり、とヴァルレッドは笑って言った。かすかに、この泥沼から脱出する手立てが見えた気がした。

「だってそうだろう？ 皆、僕をいじめるんだよ？ 僕は何もしてないのに。僕は何も悪くないのに。」

だから、あいつらが悪者だ。悪者は、正義の味方をいじめるものなんだよ」

どうだ、言い返してみろ……そんな顔で、少年は笑った。



「……………」

ヴァルレッドは黙って拳を握り締めた。

紫の瞳を持った、人間とエルフの混血児。双方の血を引きながら、どちらからも認められない存在。この少年がかつてどれだけの思いをしてきたのかは、エルフの自分には見当もつかないが……

「てめえが、自分をいじめる俺たちを悪役だと言うのなら……俺たちにとっては、てめえが悪役だ」

食いしばった歯の下から、ヴァルレッドは言った。

ヴァルレッドの言葉を、少年は理解していない。

「てめえが今までに潰した街……その生き残りにしてみれば、何の理由もなしに知り合いや家族、家を壊したてめえは、悪者以外の何者でもねえだろうな。」

貴様が理由のない迫害を悪だと思うなら、向こうもまったく同じ事を思っているはずだ」

ようやくヴァルレッドの言葉の意味を察したのか、少年の笑顔がかすかに揺らぐ。

「……でも！ 先にいじめたのはそっちじゃないか！ だから、僕は……」

ヒステリックに少年は喚く。今まで自分を支えていた論理の崩壊の予感。それはすなわち、自我の崩壊であった。

「確かに、そうだろうな。だが、結局はてめえのやったことも、俺たちと同じだ。つまり、俺たちを悪役だと罵っておきながら、自分も自ら悪役に成り下がっていたんだよ、てめえは。」

自分が憎んだから、滅ぼそうとした。……それだけなんだろう？」  
疲れたように、ヴァルレッドは言った。深く、ため息をつく。

一方、少年は滑稽なほどに表情を変えていた。自信に満ちた笑顔は完全に消え失せ、泣き出しそうな子供のような顔をしている。

「そんな、僕は……」

がたがたと足が震える。地面に膝をつく少年に、ヴァルレッドは静かに歩み寄った。

長剣を振り上げる。その姿は、さながら死刑執行人のようであった。

「僕を……殺すの？」

目に涙を浮かべて、少年は訊いた。だが、ここで動揺するわけにはいかない。つとめて冷酷な顔で、ヴァルレッドは言った。

「結局、てめえのやったことは……自分の気に入らないものを壊そうとしただけだ。何が正義の味方だ、悪役だ。そんなもので、自分を誤魔化しやがって。もう少し、現実を見やがれ」

「あ……」

少年は答えない。答えられない。ただ、がたがたと震えているだけだ。それは殺される恐怖からなのか、それとも……

「……………！」

剣が一閃した。狙い変わらず、剣は少年の身体を切り裂く。

血が噴き出す。返り血を、ヴァルレッドは避けようともせず全身に浴びた。

「……………」

少年はあっさりと地面に倒れる。何を言おうとしたのか、唇が小さく動いたが……言葉は聞き取れず、そのままこと切れた。

華奢な少年の身体を、ヴァルレッドは黙って見下ろしていた。手にした長剣の血を拭い、鞘におさめたのは、どれくらい時間が経った後だろうか。

「許す、とは言わない。謝る気もない……」

ぽつり、ぽつりとヴァルレッドは呟いた。他に。他に何か道はなかったのだろうか？　こんな、結末の他に――

「……もう一つ、付け加えておいてやるよ」

改めて少年の遺体を見下ろし、ヴァルレッドは言った。

「この世界に、正義の味方なんぞいやしねえよ。いるのは……罪人だけだ」

呟くヴァルレッドの手は、少年の血で真っ赤に染まっていた。

「……確か、あの事件は騎士団が解決したとか聞いたんですが」

「ああ、わしはさっさとその場を離れたからな。後で気がついた騎士どもが、勝手にそういうことにしたんだろう。まあ……お偉い騎士様が、あつという間にやられて伸びていたとあっては、示しがつかないからな」

ヴァルレッドはそう言って苦笑した。元、『お偉い騎士様』だったダレットが何とも言えない顔をする。

「お前が連れてきた子供を見たとき、正直、ほっとしたよ。あの子は、まだその少年のように全てを見捨てた目をしていないからな……」

自分の寝台を占領して眠る少女を、ヴァルレッドはかつて見たこともないような優しげな眼差しで見つめた。

「せいぜい、大事にしてやれ。よくは言えんが……大した子供だよ。あの子は」

「言われなくてもそうしますよ」

ダレットもかすかに笑う。

「……力、か」

不意に、ヴァルレッドが皮肉な笑いを浮かべた。

「俺もお前も、強くなろうとして必死にやってきた。その子供も、本人が気付いているかはともかく、強力な力を持っている。」

だが……」

ヴァルレッドは言葉を切り、ダレットの目を見据えた。

「これだけは覚えておけ。力というのは、常に諸刃の剣だ。他人と同様に、自分をも傷つけられる代物だからな。刃は常にどちらにも向いている。」

強力な力を持っているからとて、それが本人にとって幸運だとは限らん」

剣。魔法。どちらも強力な力だ。誰かに勝つための力。……だが、それを使いこなすには己にも勝たなくてはならないのだ。自分自身の弱さ、欲望、恐怖。

己に勝たなくては、身に宿した力はそのまま自分に跳ね返ってくる。

「……はい」

真剣な面持ちで、ダレットは頷いた。

「しかし、師匠が昔話をしてくれるとは思いませんでしたね」

ダレットは酒をちびちびと飲みながら言った。元々、父と揃って下戸なのだ。兄はもっとひどく、下手に酒を飲ませると手に負えなくなる。

「まあな。……俺も年をとった」

一気に酒をあおりながら、師匠は苦笑した。ふと緩んだその顔が、一瞬にして引き締まる。

ダレットがヴァルレッドを振り向く。彼もまた、同じ表情をしていた。その視線が小屋の外を示す。

この小屋を、幾つもの気配が取り囲んでいる。野生の獣……山犬か何かだ。

「この近く、師匠の仕掛けた罠があるんじゃないですか？」

「あれは一度突破されたら終わりだ。……昼間、お前やあの子供が歩いてきた匂いでも嗅ぎ付けたのだろうよ。……まったく、余計な手間をかけさせおって」

嘆息しつつ、ヴァルレッドは立ち上がった。側に置いておいた剣を掴む。ダレットもそれに習った。

放って置くわけにはいかない。小屋に山犬を突入させるわけにはいかない。簡単に餌になるほど、彼らは弱くはなかった。

「あまり音を立てるなよ」

普段と変わらない動作で扉を開けつつ、ふとヴァルレッドが言った。

「……はあ。何ですか？」

「あの子供が目覚めます」

言いつつ、横目で今だにぐっすりと寝ているキルファを示し、ヴァルレッドは肩をすくめた。ダレットは一瞬ぼかんとし、それから

苦笑する。

「――分かりました」

以前は、間違ってもそんな言葉など口にはしなかった。これが、六年間の変化だとしたら……ヴァルレッド自身の言うとおり、年を取ったのかもしれない。ただ、何処か照れ臭そうなのは昔と同じだ。「さて……」

ダレットは小屋の壁を背にして、ヴァルレッドの隣で長剣を構えた。

昔を思い出す。毎日さんざんにしごかれたが、それが今の原点となっている。

「あまり情けない真似はするなよ。あいつらの前に俺がお前をぶっ飛ばす」

隣から聞こえてくる師匠の言葉に肩をすくめ、ダレットは前に踏み込んだ。

「それじゃあ。お世話になりました」

ダレットは師匠に向かって頭を下げた。

次の日の朝。再び旅立とうとする二人を、ヴァルレッドは見送るでもなく、背中を向けて椅子に座っている。

「……とっとと行け。用も済んだろう」

無愛想に答えるヴァルレッド。二人を振り返る様子もない。

ダレットは元々慣れているし、キルファも一日一緒にいたせいで、少しはこの男の性格を理解している。

要は、照れくさいのだ。

「師匠も、お元気で」

「当たり前だ。そうそう簡単に死んでたまるか」

二人は、ヴァルレッドが苦笑した気がした。弟子に心配されたら終わり——ということか。

「それじゃあ、まあ……と、最後に」

ダレットが何かを思いだしたような顔をした。

「そろそろ、聞かせてくれてもいいんじゃないですか？ 本当の名前」

ダレットの言葉にヴァルレッドは沈黙した。ややあって呆れたように言う。

「聞いてどうするんだ。別に何か役に立つわけではないだろう」

「そうですね。結構、気になってたんですよ」

六年前。師匠に去られて、本名すら聞いていなかったことをようやく思い出し、随分と落ち込んだものだ。実際、今の今までは忘れていたが——

「ヴァレル・ハルバースタム、だ」

ヴァルレッドがぼそりと呟くように言う。殊更にぶっきらぼうな口調に、横で黙って話を聞いていたキルファは苦笑した。

この様子だと、六年前までに名乗らなかったのも、単に照れ臭かっただけなのかもしれない。

「それじゃあ……お元気で」

ダレットは軽い口調で言う、背を向けて歩き出した。

数年振りの再会にしてはあっさりしたものだ。キルファが少々呆れたような顔をする。

「……嬢ちゃん」

躊躇いつつも歩き出そうとしたキルファに、ヴァルレッドが声をかけた。

「周りが何と言おうが、嬢ちゃんと思う通りにやれば良い。その目の色……見てくれなんぞを気にする必要はない」

「……はあ」

唐突な言葉に、キルファはただ戸惑うだけだ。ヴァルレッドは立ちあがると、キルファに歩み寄った。

皺だらけの手で頭を撫でる。無骨なその手は、何処か心地良かった。ダレットの手とよく似ている。

「……綺麗な目の色だな」

言って、にやりとヴァルレッドは笑う。キルファもつられて、かすかに微笑んだ。

「じゃあな。俺より先にくたばっても、葬式には行かんぞ」

それはつまり、生きていろ、というはなむけの言葉。ダレットはその素直でない物言いに苦笑した。

しばらく会わなくとも、この師匠は師匠だ。変わってなどいない。ダレットは森の中に向かって歩き出す。キルファが、慌ててその後を追った。

「……なんか。変わった人だったわね」

森を抜けながら……相変わらず、罨を回避しながらなのだが……キルファは言った。

「だから言っただろ。説明できん、って」

「そうだけどさ。ところでさ、何であの人、あんたに剣を教えたの？」

どう考えても、ダレットとヴァルレッドが出会ったのは、ヴァルレッドが自らの耳を切り落としてからだろう。人間の街からろくに  
出たこともなかったダレットと関わるには、それしかない。

「……まあ、色々」と

ダレットは言葉を濁した。説明したくないと言うよりは、どう説明して良いのか分からないといった風情だ。空を睨んで考え込んでいる。

「俺と一緒に兄さんと姉さんたちも習ってたけどな。まあ……兄さんは必要以上にやる気はなかったみたいだったが」

ダレットは何かを懐かしむように言う。まだ、昔を懐かしむような年齢ではないはずなのだが。久々に師匠の顔を見たせいかもしれない。

「……でも、元々は傭兵でしょ？　こう言っちゃ何だけど……よく

宰相様が、息子や娘の師にそんな人を付けたわね」

傭兵を活計たすきの道に選ぶ者というのは、誰もが相応の事情を持っているし、身元もはっきりしないような者が圧倒的に多い。流れ者として、犯罪者と同視する人間も少なくないのだ。

「ま、親父も実利主義だし。役に立たないようなものよりは良いってことだったんじゃないかな」

貴族の子弟が武術を学ぶのは、主に護身のためである。見た目だけの武術など、万が一の際には何の役にも立たない。それは、ダレットも騎士団時代に痛感している。

「ふーん……」

キルファもどちらかというと実利的な考え方をする方なので、それで納得したようだ。ダレットが何処か遠くを見つめてしまっているのも、それ以上は何も言わず、黙って歩みを進める。その時。

どんっ、と遠くから、鈍い爆発音が聞こえた。

「ねえ……これって」



「どう考えても、師匠の仕掛けた罠だな」

二人で顔を見合わせる。

「……どうする？ 行ってみる？」

「そうだな……」

ダレットも頷いた。また罠を回避しながらになるので、たどり着くのに時間が掛かる。

こんな木の密生している場所で火を使ったら、大規模な山火事になりかねない。ヴァルレッドが、炎の発生しない代物を使っていることを祈るだけである。

「うわー……凄いわね」

木々は爆発にさらされ、枝葉が吹き散らされていた。キルファが半ば呆れたような顔をする。以前に一回、自分も引っ掛かったのだが、直撃しなくて良かったと遅れ馳せながら思う。

「でも……罠が作動したってことは、引っ掛かった奴がいるって事よね」

「かなり周到な代物だからな。動物でも引っ掛かったかな……」

二人で、あちこちを覗きこむ。その時。

「……誰が動物だ。誰が」

横から恨みがましい声がした。何処かで聞いた声だ。これは確か……

「って、サリクスっ？」

キルファが素っ頓狂な声を上げる。以前に出会ったエルフの巨漢は、ぼろぼろの服を着て転がっていた。

どうやら、罠に引っ掛かってしまったのはこの男らしい。

「何て間抜けな……」

キルファが呆然と呟いた。この男の実力と勘を考えれば、引っ掛かりそうになどないのだが。

「悪かったな、間抜けで。嬢ちゃんも結構言ってくれるよな」

サリクスは戦斧を杖のようにして、よろよろと立ちあがった。一流の戦士も、これでは形無しである。

「……何でお前がこんなところにいるんだ」

ダレットが呆然として訊いた。確か、エルフの村……ドラウイダという名前だったか……で別れた筈なのだが。

「いやまあ、盗賊も何とか撃退できたしな。いつまでもあんな小さな村にいるのも暇だし、いっちょ、俺もあちこち歩いてみようかと思っただけだ。」

それだったら、嬢ちゃんたちと一緒に行くのも面白いかと思ってよ。追ってきた。

ダレットはともかく、嬢ちゃんは目立つからな。探し回るのはそう難しくなかった」

優男という以外の印象に乏しいダレットに比べ、いつも深くフードを被っているキルファの姿はそれなりに目立つ。旅人がフードを被っているのはそう珍しいことでもなかったが、子供が旅をしていることなど滅多にないからだ。

「……罠にはいはい引掛かる奴なんかと一緒にいたら、こっちが迷惑するんだけど」

心底迷惑そうにキルファが言った。以前に少々関わっただけの男をあつさり信用できるほど、キルファはお人好しではない。

「悪かったな。しかし、何なんだよ、この森。悪質というか……執念すら感じるぞ、この罠の数には」

「……だってさ。ダレット、弟子として一言どうぞ」

「趣味だったからなあ、新しい罠を開発するのが。夜遅くまで起きてるようだから覗いてみたら、火薬の調合をしてたり隠し武器を作っていたりすることがよくあったな」

遠くを眺め、しみじみとダレットは言った。

「……何回も訊くようだけど。どう言う人なのよ、あんたのお師匠様」

「見て分かったろ」

ダレットはため息をついた。

「歴戦の傭兵というよりただの変人よね、もう……」

キルファもため息をつき……それ以上考えるのを止めた。

「何だかよく分からねえが……」

一人取り残されたサリクスは、何処か哀愁を漂わせていた。

「まあいいか。さっさと抜けようぜ、こんなところ」

サリクスは言っただけで歩きだす。よほど懲りたのか、地面を睨みつけるようにして罫を避けながら進んでいた。

「ちょっと、勝手に決めないでよね……」

誰も、一緒に行つて良いとは言っていない。キルファが慌てて遮ろうとするが、サリクスはもうかなり前に行つてしまっている。

残りの唯一の頼みの綱、ダレットを見上げる。あまり当てになる気はしなかったが。

「ねえ、何とか言わないと……」

「何でだ？」

ダレットは心底不思議そうに言う。キルファは、思わず眩暈など起こしそうになった。

「ま、大勢の方が面白いじゃないか。強いことは分かってるし、いい奴だったし」

「だから。あんたの判断基準で行ったら、世の中に悪人なんていないわよ」

キルファは深々とため息をついた。これでは、説得など出来ない。キルファ自身は、大勢で行動するのには基本的に慣れていない。

むしろ、人間、もしくはエルフの集団には恐怖すら覚える。それは、今までにさんざん襲われてきたからだが……

「俺たちもさっさと行くぞ」

ダレットもすたすたと歩いてしまったのを見て、キルファは諦めたようにため息をついた。

「……まあ、良いか」

以前なら、何が何でも反対したことだろう。が、それでも構わないと思えたのは何故だっただろうか。

自分でもよく分からない。が、にっと笑うと、キルファは慌てて

二人の後を追った。

ぶん、と空気をえぐり抜いて長柄戦斧ハルバードが疾る。

水平に振り抜かれた長柄戦斧は、その軌道上にいた狼を二匹まとめて真っ二つに断ち割った。

その横では、ダレットが長剣をすくいあげるようにして斬り付ける。それは確実に、彼に迫っていた狼の息の根を止めていた。

狼の群れの真っ只中で武器を振るうダレットとサリクスとは対照的に、キルファは一步後ろに下がっていた。二人の背後から、すり抜けるようにして投擲用ナイフを投げつける。無造作な手つきだったが、それは正確に狼の眉間に命中した。

「はあ……」

ナイフを手にながら、キルファは深くため息をついた。疲れきった、という様子である。

「何であたしたちはこんなことをやってるんだろう……」

呟いてみても、答えてくれるものはいない。目の前でキルファに背を向けている二人は、武器を振るうのに夢中になっている。

「何が悲しくてこんな狼の真っ只中で、ねえ……」

キルファは再びため息をついた。

彼女ら三人の周りには、狼の死骸がごろごろと転がっている。全部、三人が退治したものなのだが。

ぼやいているうちに、もう一匹が向かってくる。まるでやる気のない表情でナイフを投げつけ、それが最後の一匹であることを確認したところで……とうとうキルファはぶちっ、と自分の頭の中で何かが切れた音を聞いた気がした。

通称——堪忍袋の緒。

「あああああ、もうっ！」

キルファの大声に、二人が何事かと振り返る。

「何だってこんな狼退治なんてやらなきゃならないのよっ！」

一線を超えてしまったようなキルファとは対照的に、ダレットはひたすらのんびりと、長剣を鞘に戻しながら言った。

「まあ……仕事として引き受けたんだし。それで報酬も貰えるし、村の人も助かるんだったら良いじゃないか」

そう言うダレットの顔は、いつも通りの脳天気さである。狼の返り血を大量に浴びているのだが、まるでその凄惨さに侵食されていない。

「……そうよ。そうだったわ」

キルファの頭から、もう数本ネジが弾け飛ぶ。サリクスが一瞬顔を引きつらせるが、ダレットは目を丸くしただけである。

「あんたが！ 勝手に仕事なんて引き受けてくるから悪いのよおおっ！」

大空に向かい、キルファは再び絶叫した。

話は、数時間前に遡る。

キルファ、ダレット、いつの間にか加わっていたサリクスの三人は、ようやく山を抜け、エルゼシア地方領を抜けてメルセリア地方領に入っていた。平野が続く地域である。

大きな街はなく、エルフや人間の小さな村が続いていた。人間とエルフが入り交じった三人組に村人があまりいい顔をしなかったが、それでも野宿の回数が減ったのは有り難い限りだった。傭兵などは、ごくまれに人間とエルフが組んでいることもある。

ただ……あまり問題は起こしたくないので、必要がない限り、自分の種族と違う場所には近づかないようにしていた。どちらにしてもややこしいのはキルファだったが。

そんなわけで、たまたま人間の小さな村の近くを通ったため、ダレットが食料の調達に向かったのである。ただ食べ物を手に入れてくるだけなら問題はなかったのだが、のんびり村の人間と世間話をしていたダレットが、ある話を聞いてきたのだ。

「何だか最近、狼に立て続けに襲われてるらしくてな。結構被害が

出てるらしい。まあ、大した作業じゃないし、報酬も貰えるって言うから……」

「それで。あたしたちに何の相談もせずに、狼退治を引き受けて来たって訳ね」

キルファが呆れ顔で、ため息をつきながら言った。

村の外でダレットの帰りを待っていた二人が聞いたのは、急な仕事の話だったと言うわけである。

「大体、あたしたちは何でも屋をやってるわけじゃないのよ？　そりゃ無駄遣いは出来ないけどさ、まだ結構金はあるんでしょ？」

王都から抜け出してくるときに、ダレットは家からかなりの金を持ち出している。王宮騎士団というのは高給取りだが、ダレットは金を使うようなことがあまりなかったから、手持ちはかなり多かったのだ。

王都を飛び出した後も、野宿が多かった上に節約していたので、それなりに金は残ってはいるのである。ちなみにダレットは金銭感覚にうといので、財布を握っているのはキルファだ。もっとも、彼女もスラム時代の感覚が抜けないため、節約し過ぎの感があるのは否めなかったが。

万が一の時……武器が壊れたら、それこそ命に関わる……のためにも、無駄に使える金などはなかったが、その場で短期の仕事を引き受けなければならぬほど、切迫した状況でないのも確かなのだ。「まあ、そうなんだけどな。困ってるみたいだったし……」

「あ・の・ね・え。別にあたしたちは、人助けするために旅してるわけじゃないのよ。ま、特に目的がないのも確かだけどさ。」

何でわざわざそんな面倒臭いこと……サリクス、あんたもなんか言ってるって」

「俺もなあ、何で人間を助けなけりゃなんねえんだって感じだな。出来ればやりたくねえなあ」

サリクスは実にエルフらしい意見を述べた。キルファは別に人間だろうがエルフだろうが関係ないのだが、それ以外はまったく同感

である。

「うう……もう引き受けたことだしなあ……それじゃあ、俺一人で何とかするか……」

ぶつぶつとダレットは呟いている。その顔がまるで捨て犬のような表情をしていることに気付いた時点で、キルファとサリクスは揃ってため息をついた。

「……分かったわよ」

「俺たちも付き合えばいいんだろ……」

口々に呟き、うなだれる。対照的に、ダレットはぱっと顔を輝かせた。

「そうか！ 手伝ってくれるか、それじゃあ早速」

にこにこ笑いながらダレットは狼がいるという森に向かって歩き出した。

啞然としてそれを見送りながら、サリクスはキルファに向かって苦笑した。

「しかしまあ……あれじゃあ、嬢ちゃんも苦勞するな」

「そりゃーもう。まったく、毎回毎回変なことに首突っ込んで……」  
キルファは重々しくため息をつく。

「おい、二人ともさっさと行くぞ」

そこに、ダレットの間延びた声が聞こえた。

「はあ……」

二人は揃って、また大きくため息をついた。

まあ、そんなわけで。

急に引き受ける事になった仕事に、やる気満々なのはダレット一人で、他二名はまるで意欲などなかったのだが……

「まあ、それにしても、だ。俺はそんなに難しい仕事じゃないって聞いた気がしたんだけどな」

長柄戦斧から丁寧に血糊を拭き取りながら、サリクスはぼやいた。横では、キルファが黙って狼の死骸から刺さったナイフを回収して



いる。戦闘というのは、終わった後も結構手間のかかるものである。繊細な武器である刃物は特に、だ。

「そうよねえ……あたしたちは一言も、狼を追ってこんな奥にまで入り込むことになるとは聞いてなかったわ」

キルファの言葉に、サリクスが重々しく頷く。

村人が「あっちの方から狼がやって来る」と指し示した方向に向かい、三人は森に入ったのだが、肝心の狼は姿を現さない。それも当たり前の話で、餌があることが確実な村はともかく、広い森の中で狼にすぐに出会えるわけもない。しばらく森の中を探索し、ようやく狼の集団を見つけた頃には……村からかなり離れてしまっており、その日のうちに戻れる距離ではなくなっていたのである。

「何だか……お前ら、二人して俺に当たってないか？」

ダレットがうめく。

「当然の責任の所在を追及しているだけよ」

キルファが冷ややかに断言した。サリクスはあさってを見つめてしまっている。

サリクスと一緒に行動するようになった当初は、何かにつけて文句を言っていたキルファだが、最近はそういうこともなくなっている。本人は否定するだろうが、意外と気が合っているのかもしれない。

ダレットはそう思うと、自然と笑みが浮かんでくる。しかし、

「そこで一人でやにやしてないで。で、これからどうするのか考えなさい」

再び、淡々とキルファに言われて肩をすくめた。

「どうするって言ってもなあ……一晩、ここで過ごすしかないんだろ？」

頭を掻きながらダレットは言う。

「そうなんだけどね……」

あっさりと言われて、キルファもそれ以上は何も言えずに黙りこんでしまった。そして、またため息をつく。

「まあ、非建設的な意見もまとまったところで……今日のねぐらでも探すか」

サリクスの一言で、一同はのろのろと動き出した。

ダレットとサリクスがまだ寝ているのを確認してから、キルファはこっそりとその場を離れた。

結局野宿……しかも、狼が大勢いるらしい森の中……になったので、順番で焚き火の番をすることになったのだが、最後の番はキルファだった。早めに起きて番をしているうちに夜が明けたので、二人は少し遅くまで寝かせておくことにして、キルファは目的地に向かった。

「……………」

小さな小川にたどり着くと、キルファはごそごそと着ている物を脱ぎ出した。要するに、水浴びをしたかったのである。

ばしゃん、と音を立てて水の中に身体を沈める。今は暖かい時期であるが、朝から水に入ると少し冷たい。だが、それも悪いものではなく、意識にまわりつく眠気が吹き飛ぶ程度のものだ。

「あー、気持ち良い」

ばしゃばしゃと、子供のように川の中を泳ぐ。水の中での無重力の感覚も開放感の一因だったが……誰もいない場所では、人目を気にしなくていいのが一番心地良かった。

紫の目はともかく、銀色の髪も街中ではそれなりに目立つ。人間にしるエルフにしる、この大陸では全体としては濃い色の髪をした者の方が多い。ダレットにしても髪は栗色だし、サリクスも琥珀のような茶色がかかった金髪である。キルファのような、色の薄い髪は滅多に見かけない。

人目を出来るだけ避けたいキルファとしては、自分の髪の色があまり好きではなかった。

「……………」

少々沈鬱な気分になって、キルファは水に揺らぐ自分の身体を見

下ろした。

白い肌は滑らかではあったが……その身体の腺は、まだ女らしさとは無縁である。子供だから仕方のないことではあるのだが。

「まあ、女らしくても意味がないけどさ」

一人ごちる。

（どうせ、こんな目の色じゃ普通には生きられないんだから……）  
さすがに、その後の言葉は飲み込んだ。

普通に生まれて、生きて、誰かと結婚して……そんな『普通』の生き方は、キルファにはあまりにも遠いもののように思えた。今、側にいてくれる二人も、いつまでそうしていられることか。

（結局、一人だもの。あの時からずっと。あたしは……）

考えを追い払うように首を振り、水の中に身体を沈める。

涙が浮かんだような気がしたが、水に混じってしまっただけで分らなかった。

一方、その頃。

「ん……」

日が高く上ったことを感じ取り、ダレットは眠い目をこすりながら起きあがった。隣では、まだサリクスが熟睡している。

「何だ、もう朝じゃないか……。キルファ、起こしてくれたって良いと思うんだが……」

ぶつぶつと文句を言いながら寝袋代わりにしていた外套を羽織り、そこで、はたと気付いた。

側にいるはずの少女の姿が見当たらない。キルファがいたはずの場所は、もぬけの殻である。

「どっかに食料調達にでも行ったかな……」

頭を掻きながら立ちあがる。きよろきよろと周りを見まわしてみたら、キルファの姿は見当たらない。

「……おかしいな」

ここに至ってようやく、ダレットは異変に気付いた。慌てて、足

元のサリクスをたたき起こす。

「おい、キルファが見当たらないんだが……何処に行ったか、思い当たるところがあるか？」

「んー……お前が知らねえもん、俺が知るわけ……」

サリクスも、目をこすりながらのろろと起きあがった。

「嬢ちゃんがいねえ？ 川に水浴びにでもいったんじゃねえか……？」

正解である。

「だいいいが……」

ダレットはなおも心配顔だ。

「まあ、心配しなくても大丈夫だろ。ほんと保護者だよなあ、お前」  
サリクスが苦笑しながら言った。

だが、心配無用とはいかなかったのである。

「そろそろ戻るか……」

しばらく水につかって汗も流したので、キルファはばしゃばしゃと陸に上がった。水滴を拭き取り、服を身につける。

旅に出たときにダレットに買ってもらった……もとい、買わせた旅装束だったが、使い込んだような跡がついてきている。裾は所々すり切れているし、色も日に当たって褪せてきている。

（もうそんなに経ったっけ……？）

首を傾げる。あの王都での事件が、昨日のことのように思い出せる。確かに王都を出た後もあちこちで事件に巻き込まれたのだから、その分時間が経過しているのは当然なのだが。

少々感傷的な気分になりながら、服を着終わったその時。

「……………！」

キルファは表情を強ばらせた。身体中がざわっと粟立つような感覚。

（殺気！）

それも生半可なものではない。今までに出会ったどれよりも強烈

な気配だった。

がさりと遠くの草が揺れた気がした。同時に、その影から黒い何者かの影が見え隠れしている。

「何なの、あんた！」

叫ぶより速く、投げナイフを抜いて投げつける。方向と速さは完璧。キルファは命中を確信した。

それでも、念のためにナイフを構えたまま、ゆっくりと近づくが。

「……何もいない……？」

見えたと思った黒い影は、跡形もなく消えうせていた。キルファが放ったナイフだけが、幻でなかったことを物語るがごとく、側の木に突き刺さっている。

「気のせい……じゃないわよね」

なおも注意深く辺りの気配を探り、何もいないことを確認した時点でキルファは安堵のため息をつき……それから、首を傾げた。

「……何やってるの、あんた？」

夜営場所に戻ってきたキルファは、呆れたように言った。

「……………」

ダレットが、目を丸くしてキルファを眺めている。しばらくその体勢のまま固まってから、ようやくダレットは機械仕掛けの人形のようにぎくしゃくと動いた。

「いたのか」

ややあって、ぼつりと言う。

「いるわよ、何だと思ってたんだか。……それはいいんだけどさ、何をやってたわけ、あんた？」

ダレットは長剣を鞘ごと外し、それで茂みの中を突ついていた。狩りで小動物でも探しているような風情である。

「いや……お前の姿が見えないから、探してたんだが」

「あたしは兎か何かか……？」

真剣な顔で答えるダレットに、キルファはうめくように言った。

その頬から、つうつと汗が一筋流れる。

ぎぎいっと音がしそうな動作で、傍らで様子を眺めていたサリクスを見上げる。サリクスはそ知らぬ顔で、携帯用の水筒から水を飲んでいた。

「……止めて、頼むから」

ダレットを指差し、キルファは心底疲れたように言った。

「いやあ。見てた方が面白かったもんでな。嬢ちゃんがなくて気が動転してたからな、こいつ」

サリクスはひよいと肩をすくめて笑って見せた。いつもの軽薄とも思える笑いに、その動作が妙にはまっている。はまりすぎていて、役者の演技に近いものすらあった。

「まあ……ご飯でも食べましょうか」

これ以上話しているとどんどん疲れがたまっていくような気がして、キルファは話題を逸らすと作業に取り掛かった。

携帯用の干し肉と野草を煮込んだもの、少々のパン。近くの村で食べ物を調達できたので、いつもよりは豪勢な食事だった。

「何か変なものがいた……？」

パンを齧りながら、ダレットが首を傾げた。キルファから先程の出来事を聞かされ、それだけをぼつりと反芻する。

「狼なんかじゃなくて？」

「違う……と思う。体型が違ったみたいだし、狼だったらあたしをすぐに襲ってきただろうから」

狼にも、キルファが非力な少女であることは理解出来るだろう。格好の獲物であることも。

「まあ、それもそうか……」

三人が揃って首を傾げる。

「……………」

先程感じた恐怖が蘇ってくるような気がして、キルファは身体を震わせた。尋常な殺気ではなかった。

「……何かに似ていたとか、そんな思い当たるものは？ まったく見当がつかねえか？」

硬い顔をしているキルファに、サリクスが語りかける。

「さあ……見当もつかないわね。——いや」

キルファが顔をしかめる。苦いものを無理矢理飲み込んだような表情をする。

しばらく黙ってから、重々しく口を開いた。

「似てるものがあるとするれば……あの、魔物」

ダレットの顔色が一瞬にして変わった。

以前、辺境の街の城で出会った異形の存在。強大な力を持った魔物。

それと同じものが、また目の前に現れたというのか？

「……ちよっと待て」

ダレットの顔が滑稽なほどに引きつる。以前、魔物に出会ったときは、キルファもダレットも死にそうな目にあっている。正体を見抜いたせいで、辛うじて切り抜けたが……

「また、あれと同じような目に遭えと……？」

「あたしに言わないでよ、あたしもあんなもんに二度と遭いたくないわよ！」

戦慄したような表情のダレットに、キルファが苛ついた口調で言い返した。

「あー、さっぱり事情が分からないんだが。魔物って、前に何かあったのか？」

唯一、サリクスだけがのんびりとした表情で訊いてくる。考えてみれば、サリクスに以前の事件をあまり詳しく説明していない。

ざっとキルファがヨールンの街での顛末を話すと、さすがにサリクスも顔をしかめた。

「なかなか、非常識な奴だな」

「非常識って言うのかしらね……」

おおむねさわやかだった朝食は、一気に沈んだ雰囲気となった。三人とも黙々と料理を口に運んでいる。相変わらず、一番食べる量が多いのはキルファだったが。サリクスとは体重が倍以上も違うはずなのだが、それだけの量が身体の何処に入るのか、ダレットは首を傾げた。

「まあ、あたしの意見としては。さっさとこの森から抜けるしかないんじゃないかしら」

「まあな、とつとと逃げるか」

食べ終わった頃に、キルファが言った。サリクスもそれに頷く。が、ダレットだけが難色を示した。

「あんた、死ぬ気……？」

キルファが、得体の知れないものを見るような目でダレットを眺



めた。しばらく一緒にいるが、いつまで経ってもこの男の行動はよく分からない。

「いや、だって……村の人に、村が襲われてるから何とかしてくれ、って頼まれたんだし。魔物が本当だとしたら、狼より厄介なんじゃ」「だ・か・ら。今度こそ死ぬって言うてるでしょうが。そんな親切で自分がやられてたらどうしようもないわよ」

「でも、もしかしたら前みたいに、その魔物が狼を操ってるとか」指を立ててダレットは言った。そこに、サリクスが冷ややかな視線を向ける。

「……どうやって操ってると思うんだ？」

「いや、魔法か何かで」

「あんた、魔法が何でも出来ると思ってるでしょ」

キルファが、大仰にため息をついた。

「何回も説明したと思うんだけどさ、魔法ってのは奇跡でも何でもなくて、れっきとした技術なのよ。法則も制限もある、ね。」

生き物の身体っていうのはほとんどもなく構造が厄介だから……まあ、もしかしたら出来ないこともないのかもしれないけど、あまりにも膨大な情報を処理することになるわ。それには、生き物の身体の仕組みが完全に分かってないと無理。

あんた、この身体が何からできてるか、言える？」

キルファはダレットの目の前に自分の手を突き出して見せる。白く華奢なその腕を見つめ、ダレットは苦笑して首を横に振った。

生き物の身体に起こる生理現象も、完全に理屈が解明できたのなら魔法で操作することも可能なだろうが、現時点ではそれは望むべくもない。しかも、生き物の意識を、つまり脳の動きだけを操ることなど絶対に不可能だ。

ダレットの説が本当だとしたら、動物使いがやるように狼を手なづけることだろうが、元々強大な力を持った魔物がわざわざ狼を仕込む理由などない。自分で襲いに行けばいいことだからだ。

以前に出会ったものは街の人間を脅迫していたが、あれは、単な

る余興と魔物自身が言っていた。

「まあ、そういうわけで、だ。狼とは関係ないだろうと思うぞ、俺も。」

嬢ちゃんの説明で全部言われて、俺の出る幕がねえんだよな。前から不思議に思ってたんだが……嬢ちゃんは何処で魔法に関して教わったんだ？」

サリクスが尋ねる。人間社会では魔法に関する研究などまったく行われていない……軍部には、エルフの使う魔法の効果を示したものがあらしいが……ため、考えられるのはエルフから教わったということだけなのだが。

「まあ、あたしも半分はエルフだしね」

適当に答える。その表情が一瞬、暗く沈んだのを見て取ったのか、サリクスもそれ以上追求するのを止めた。

「あたしの情報源はこの際どうでもいいとして、とにかく、この森をさっさと抜けるわよ。前回みたいに魔物に追っかけられないうちにね。村の連中には……黙っとけば何とかかなるでしょ」

「それって詐欺じゃあ……」

「つべこべ言わない。死にたいなら話は別だけどさ」

キルファとサリクスはさっさと荷物をまとめている。この際、ダレットの意見を聞いているわけにはいかない。二人が歩き始めてしまったので、ようやくダレットも諦めて後を追った。

「この森、抜けるのにどれくらいかかるかしらね？」

「昨日、結構奥まで来たからなあ……昼過ぎまでには抜けられると思うんだけどな」

「現在位置は分かってるの？」

「昨日、所々に目印を付けておいたから、それを追えば戻れるんじゃないかと思う」

三人とも、無意識のうちに足を速めている。必要以上の会話をするでもなく、ただ黙々と足を進めた。

「……………!」

しばらく歩いたところで、三人は同時に足を止めた。ゆっくりとした、しかし隙のない動作でそれぞれの武器を抜く。長剣と長柄戦斧とナイフ。

ごうっ！

突如として強風が吹き荒れる。枝葉が激しく鳴り、吹き散らされた葉で視界が遮られる。何とか三人はそれに耐え切り……同時に、立っていた場所から全力で跳び退いた。

かかっ、と近くの木に何かが突き刺さる音が聞こえた。舞い散る葉の中に金属のきらめきを見つければ、今ごろ全身を射抜かれていた。

「逃げる……のは無理よね、もう」

大きな木の後ろに隠れ、顔だけ出して警戒しながら……キルファは一人ごちた。

「……あいつか？ 魔物って」

同じく、別の木の後ろに退避しながら、サリクスが隣のダレットに囁く。

「うーん……前に会った奴とは随分と形が違うが。気配はかなり似てるな」

すたすたとこちらに向かって、気軽さすら感じさせて歩いてくるもの。先程の強風が、そして全身から発散している殺気がなければ、こちらも気安く話しかけたかもしれない。

全身の黒だけは見覚えがあったが……その姿は、人間、もしくはエルフとほとんど変わらなかった。全身に鎧を纏っており、顔すらも兜で隠している。表情ははっきりしない。額から突き出た角のよくな飾りだけが、見慣れない様相だった。

風変わりな黒い鎧を着た騎士、そんな表現が似合いそうな姿だった。ダレットのものとよく似た長剣を手をしている。剣もまた、刀身は黒く塗りつぶされていた。

大仰な鎧を着ているにも関わらず、身軽な動作でそれは三人に近づくと、気安く言った。

「さて。ようやくここまで来てくれた事だし。これから僕に殺されてもらうよ」

人間らとほとんど変わらない声。子供のように甲高く、舌足らずですらある。

姿こそ人間やエルフとさほど変わらないが……これだけは断言できる。自分たちの同類では、決してない。となれば、やはり、魔物とでも呼ぶのが自然だろう。

「ねえ……このメンバーの中で、疫病神って誰？」

横の二人を半眼で眺め、キルファがうめくように言った。

「ねえ……この中で、疫病神って誰？」

キルファの多分に現実逃避が混じったうめきは、森の中に恨みがましく響いた。

「俺は違うからな」

真っ先に反論したのはサリクスである。

「お前らが前に魔物に遭ったとかいうときは、俺はまだ一緒にいなかったからな」

言って大仰に頷き、一人で納得している。まあ、正論と言えば正論であった。

「……となると残りは……」

キルファとサリクス、二人でじっと一人を見つめる。それは無論

「俺か……？」

ダレットは二人にじとーっと睨みつけられ、思わず一步後ずさった。

「消去法で行くとそうなるな」

「確かに、毎度毎度しょうもないことに首を突っ込むのってあんたよね……」

キルファとサリクスは呟くと首を同時に縦に振った。

「そういうわけで、疫病神はあんたに決定」

キルファが重々しく断言する。話から置いていかれた魔物は、少々寂しそうな顔をしていた……のだろう、多分……が、やがて淡々と突っ込んだ。

「まあ、誰が何だろうといいけどさ、疫病神を任命したところで何の意味があるの？」

子供の声で呆れかえったように言われると、三人とも何やら腹が立った。確かにただの現実逃避なので、馬鹿にされても仕方ないの

だが、よりにもよって絶体絶命の原因に言われるとは。

「少しは気がまぎれるのよ」

キルファがいつもの『無意味に偉そうな口調』で言う。魔物もそれ以上は何も言わず、黙って肩をすくめた。

前回出会った魔物とは違い、今、目の前にいる魔物は姿と言い動作と言いい、妙に人間くさい。何か理由があるのか、それは分からなかったが。

「ふーん。それなら僕も今度やってみようかな……」

とりあえず、僕もそろそろ本題に入りたいんだけど。良いかな？」  
「永久に却下」

キルファが即答する。ダレットとサリクスはと言えば、ただ黙ってやり取りを聞いているだけだ。

「いや、さすがにそれは僕としてもわざわざ出てきた意味がないしさ、止めて欲しいんだけど……」

「嫌。子供は家にでも帰りなさい」

キルファが言ったその瞬間。魔物は腹を抱えて爆笑した。

「子供、子供ね。こう見えても僕、君らの何百倍も生きてるんだけど……」

僕が子供だったら、君らは何なんだろうね？」

「知らないわよ、あんたの方が時代錯誤もはなはだしいのよ。えんえんと年も取らずに生きててさ。」

あんたの方が年上っていうなら言い換えるわ。老人はどっかに隠居して茶でもすすってりゃ良いのよ」

さっきと言っていることが違うが、それはキルファも魔物も気にしないことにしようだ。

「うーん……まあ、今までは悠悠自適な隠居生活を送ってたんだけどねえ。どうしても許せない奴を見つけたもんで、ほら、死に花を咲かせるってやつで、ぽっくり逝く前に少しは働こうかと」

魔物はぱたぱたと手を振って、軽い口調で言った。

「……ちなみに訊くけど。どうしても許せない奴ってのは誰？」

キルファの魔物を見る目の中に、刃のような鋭さが混じる。

「それは無論、君だよ……確か、キルファ、とか言ったっけ？」

フルフェイスの兜の下で、魔物がにっこりと笑みを浮かべた気がした。

「……何であたしの名前を知ってるの？」

キルファは、身体の後ろでナイフを握り締めながら言った。心持ち、後ろに下がる。

「僕の同類が君たち……君と、その茶色い髪の人に会ったときに聞いてたんだよ。あいつはやられちゃったみたいだけどね。」

基本的に、僕らは意識を共有してるから。同調も出来るし、得た知識を他の個体に回すこともできる」

それと同じことが出来る魔法に、キルファは心当たりがあった。

「＜幻話＞……」

ぽつりとその名前を呟く。サリクスも、それを聞いて納得したというような顔をした。ダレットだけが、訳が分からないと言った表情をしている。

「何だ？ それ……」

のん気な顔で、首を傾げた。無論、剣を油断なく構えたままで、である。

「長距離の通信なんかに使われる魔法よ。どんなに離れてても一瞬で情報……意識のイメージを送れるって代物なの。」

まあ、詳しいことは後で説明するから。覚えていればね」

「ふうん、今はそんな使い方をしてるんだ」

魔物が、興味津々と言った口調で言った。

「僕らの場合は、同系列の個体は常に接続しあってるような状態だからね。まあ、皆まとめて意識を共有してるといっても過言じゃない。今では随分数も減っちゃったけど……それでも、他の奴が見たものは僕も知ることが出来る。普段は鬱陶しくて仕方がないんだけど、たまには便利な代物だよな」

キルファは黙って、嵌めた指輪を見下ろした。かつて存在した、

＜天人＞と呼ばれる種族が作り出したもの。今では失われた技術。この指輪にしても、今日の前にいる魔物にしても、現在では考えられないほどの魔法技術だ。

これが、＜天人＞と＜魔人＞の生み出したものなのか？

「……その接続が嫌なら外せば良いじゃないの」

「それが出来れば苦勞はしないよ。もしそれが出来たら……もっと楽だったかもね」

魔物の口調に、かすかに皮肉が混じった。

「僕は所詮、作られた道具だからね。ある部分を除いては、自分では制御部分に干渉できないんだよ。困ったことに。……まあ、それについて今更どうこう言う気はないけどさ」

お手上げだとも言うように、魔物は両手を上げて見せた。

「……それで、そろそろ本題に入ってもいいかな？　これだけ無駄話をしたんだ、いい加減覚悟は出来たよね？」

すうっと言葉に刺が混じる。

「いや……肝心なことを聞いていないわ」

キルファは、魔物に無造作にナイフを向けた。無論、これで倒せるとは思っていない。単なる意志表示だ。

「あたしがどうしても許せない理由は？　まさか、前の奴の敵討ち、なんてことは言わないわよね？」

「うーん、まあ、それもあるけど」

あっさりとキルファの言葉を否定する。

「僕を作り出したひとたちの、敵討ち……かな？　君のその目の色……あいつらと同じなんだよ！」

最後は、感情の爆発となった。

『炎よ・その炎熱をもて……』

呪文。それを察した瞬間、キルファは左手を突き出して唱えた。

『開門！』

蒼い光が辺りを包み込む。魔物の目の前に生まれかけていた炎は、まるで時間を巻き戻すかのように、空間の隅に押し込まれて消滅し



た。

「前の奴が見たものを知ってるってのなら……当然、これも知ってるはずよね。わざとなの、それとも忘れてたの？」

キルファが鼻で笑って見せる。それと同時に――

「はあああっ！」

ダレットが走る。魔物の動きの止まった隙を見逃さず、斬りつけた。

「おっと！」

魔物は楽しそうな声を上げると、手にした剣でそれを受ける。甲高い金属の悲鳴が響いた。

「言っとくけどなあ、俺もいるんだぞっ！」

ダレットと魔物が剣を合わせた瞬間、サリクスが横から長柄戦斧を振るう。魔物に、避ける術はないはずだった。

が。

ぐにやりという音が聞こえてきそうな感触。手にした長柄戦斧が鎧に食いこむが……鎧はまったく傷ついていない。長柄戦斧に逆らうでもなく鎧は曲がり、その弾力をもって長柄戦斧を緩やかに弾き返した。

「なっ……？」

「別にさあ、あなたたちの鎧と同じ材質でできてるはずもないんだよね」

能天気な魔物は言った。ダレットと剣を交えながら。

「それは身体も同じことであって。そんなもので僕に傷をつけられるとでも、本気で思ってる？」

きんっ、きんっ、とダレットは立て続けに剣を打ち込む。それを全てかわし、あるいは受けながら、魔物は嘲笑うかのように更に言葉が続ける。

「あなた、剣の腕は大したものだけどさ……それが通用するのって、あくまで君らの同種だけなんだよ。僕と君らとでは本質的な部分が違うんだから。君らが僕を傷つけようとしても思ったら、別の方法を

考えなきゃ」

言って、無造作に剣を押し込む。その力に耐え切れず、ダレットは辛うじてそれを受け流すと後ろに下がった。大きく肩で息をしている。

「要するに、俺たちはただのお遊びで付き合ってもらってるだけ……ってわけだな」

荒い息のまま、ダレットはうめくように言った。

「そういうこと。一瞬で吹っ飛ばしても良いんだけどさ、それだとあまりにも美学ってものがないなあ、って。それに、この森も一緒に壊しちゃうしねえ」

魔物はからかうような口調で言う。

「そういうわけだから。そろそろ本気を出したら？」

ゆっくりと、魔物はキルファの方を見た。

「……本気、ね」

言いながらゆっくりと、左手を上げる。

『開門っ！』

あらん限りの大声で叫ぶ。蒼い光が、魔物を包み込んだ。

「あんたの弱点は知ってるのよ！ 年寄りさつさと世代交代しなさい！」

キルファが叫ぶ。だがその表情が、すぐに怪訝なものに変わった。

『――顕現』

魔物が呟くと同時に……一瞬にして、蒼い光が消え失せる。魔物は、まだ平気な様子で立ったままだ。

「同じ手を二度使うのはただの馬鹿だと思うけど？ それとも、それしか芸がないの？」

ぴしり、ぴしり、と兜にひびが入る。兜の欠片は地面に落ちる前に塵と化して宙に舞い、やがて、その顔があらわになった。

びっくりするほど整った、少年の顔だった。太陽の光をそのまま封じ込めたかのような金色の髪、同色の瞳。完璧すぎて、かえって作り物のような印象を与える。

兜の飾りだと思った額の角は、まだ彼の額に残っていた。昔話に登場する『鬼』のように、額から一本の角が生えている。それだけが異様だった。

にっこりと魔物は笑う。

「かなりの力だね……僕の障壁でも、ちょっとは通してしまった」  
言ってあらわになった顔を撫でる。金色の髪を適当にいじりながら、魔物は続けた。

「これは＜障壁＞の魔法って言って、僕の特技。ちょっとは自慢なんだよ、うん。」

『場』と自分の間に障壁を形成して、魔法の影響を排除するものなんだよ。君の＜白紙＞の魔法も例外なく、ね。

まあ、これを使っていると、自分も他の魔法を使えなくなるのが難点かな」

信じられないと言う顔をしているキルファに、魔物は懇切丁寧に解説する。

特殊魔法＜障壁＞。魔法によって存在しているこの魔物は、常に『場』の一部を変質させてその存在を維持していることになるが……この魔法は、自分の周りの『場』にいわゆる『壁』を形成するものだ。身を守る殻とも言えるその壁によって、その存在を白紙化されるのを防いだのだ。

よって、キルファやサリクスはこの魔法を使っても意味がない。この魔法が守れるのは、あくまで変質した『場』の一部であり、魔法そのもののなのである。魔法によって生み出され、維持されている魔物にしか意味はない。

ある意味で、この＜障壁＞の魔法は、キルファの＜白紙＞の魔法と対になるものである。魔法を護る魔法と、一切合切消し去る魔法。この魔法があるから……この魔物は、キルファの＜白紙＞の魔法の存在を承知の上で、姿を現したのだ。

「どうしろってのよ……」

呆然として呟くキルファ。切り札だった消去魔法を潰されては、

キルフアには成す術がない。

「それじゃあ、まあ。そろそろ僕の出番ね」  
にやりと魔物が笑い、剣を振りかざした。

「魔法を使うと君に消去されそうだから……まず君から行こうか。そうしたら、他の二人はまとめてやれるしさ」

「俺たちは十把一からげかい」

横でサリクスが不満げに言うが、自分の長柄戦斧が通用しないのは先程証明済みだ。ダレットもそれは同じである。

「くっ……」

ナイフを握り締める。が、先程、ダレットと平気な顔をして剣で戦っていた相手だ。自分では通用するはずがない。

ダレットとサリクスには頼れない。この二人に出来るのは、せいぜいが邪魔立てすることくらいだ。

（あと、手段って言ったら……）

必死に考えを巡らせる。すると――

「……………！」

今でも目に焼き付いている情景。血と炎。地獄があるとすれば、まさにその再現だと言える一コマ……

脳裏に鮮やかに描き出された紅を振り払うように、キルフアは首を振った。その様子に、魔物がかすかに首を傾げる。

「……………？ 何だったの？ まあ良いや。どうせ関係ないし。それじゃあ」

無造作に……しかし信じられない速さでキルフアとの間合いを詰めると、剣を横薙ぎに振る。考えるより先に、生存本能でキルフアは後ろに跳んでいた。

同時に突き出したナイフが、辛うじて追ってきた剣を弾く。手が痺れる感覚に、キルフアは顔をしかめた。ナイフと長剣では重さが違いすぎる。正面から受けなかったせいで、辛うじて叩き折られるのだけは避けた。

しかし、後ろに跳んだ状態からキルフアが体勢を立て直す前に、

魔物は彼女を追って前に踏み込んでいた。間合いを引き離すことが出来ない。きんっ、と第二撃を受けられたのは奇跡でしかなかった。しかし、今度こそ体勢を崩して地面に倒れこむ。足元に転がるキルファに、魔物は冷然と剣を振り上げた。

「よせっ！」

そこに、横から飛び込んできた影がある。長剣と長剣がぶつかり、甲高い音を発した。

ダレットだ。

「だからさ、あなたが僕を倒す手段ってないんだよ。魔法を使えないでしょ？ その姿からすると。僕は、あなたとは存在の仕方が違うんだから」

「だからって、ただ見ていられるだけでいられるか！」

続けざまにダレットは長剣を繰り出す。剣の腕ではほぼ互角に見えたが……その他の手段という点で、二人は決定的に違っている。

「サリクス！」

ダレットと魔物が剣戟を繰り広げているうちに何とか離れ、キルファはサリクスの元に駆け寄る。サリクスは、呆然と二人の争いを眺めていた。

「ぼーっとしてるだけじゃなくてさ。何かあいつを倒す手段とか思いつかない？」

お手上げ、とでも言いたいのだろう。サリクスは苦笑しながら両手を上げて見せた。

「長柄戦斧は通じない、俺の魔法は初歩の初歩だけ、嬢ちゃんの消去魔法は防がれる。具体的な方法としては何も思いつかねえな」

ひょいと肩をすくめて見せる。

その間にも、ダレットと魔物は激戦を繰り広げている。

そして。

「……………っ！」

鏑迫り合いの状態から全体重を押し込まれ、ダレットは後ろに重心がずれる。そこに足払いをかけられ、派手に転倒した。

「がつ……」

鳩尾に剣の柄頭を叩きこまれ、ダレットは苦悶の表情で身体をくの字に曲げる。ダレットは鎧の類を身につけていない。相当苦しいはずだ。

「これで、少しはおとなしくなるでしょ」

対して、魔物は涼しい顔で言った。倒れたダレットを軽く蹴飛ばすと、キルファを振り向く。

「……野郎、俺たちは完全に遊んでやがるな」

「まあ、僕としても余計に仕事をする理由はないしね。とりあえず標的はその子だけだしさ、君らはどちらでも構わないんだけど……どうする？」

にっこりと、無邪気さすら感じさせる笑みで訊いてくる。

「まあ、黙って見てるわけにはいかねえよな。一応、旅の連れだし」サリクスは獣のような獰猛な笑みを浮かべると、長柄戦斧を構え直した。キルファをかばうように前に出る。

「君らも無駄なことをするよねえ……まあ良いけどさ。大した手間ってわけでもないし、どうせ暇だし」

魔物も、手にした黒い長剣を握り直した。

「どうしろっての、この状況……」

「いやあ、どうにもならないだろうね」

キルファの呻き声に、魔物は律儀に相槌を打つ。その親切さに、思わずナイフを投げつけたくなった。が、やっても何も意味がないことに気付き、すぐに諦める。

向こうには、鳩尾を強打されたダレットが倒れ、すぐ下には同じく一瞬にして倒されたサリクスが転がっている。二人とも死んではない。死んでいないだけだが。

動くことなど、それも自分を助けることなど到底無理だ。

もつとも……たとえ動けたところで、どうにもならないのは証明済みなのだが。

（今まで、いかにこの二人に頼ってたかってことよね）

自嘲気味に笑う。自分より遥かに高い戦闘能力を持つ二人。頼っていたつもりはないのだが、いざ戦闘となると、大体前線で武器を振るっていたのはこの二人だ。自分とは言えば、魔法を消去するか、背後からナイフを投げていただけだ。

（自分でどうにかするしかない。いつもずっとそうだったのに。そのはずなのに……）

周りに、仲間が誰もいない。それがどれほど頼りないか、今になって思い知らされる。

「僕もけっこう暇だしね……少しは遊んであげてもいいよ。でもさ、さっさと終わらせた方があなたのためだと思うんだよね。」

僕はどちらでも構わないけど。どうする？ 選択は君がするとい  
い」

「あたしに選択権を与えるのが親切だとも思ってるの？」

「いや別に。僕はそんな偽善者面は嫌いだしさ。ただ純粹に、訊きたいだけ」

「答えは一つだけよ。……とっとと消えなさい！」

叫ぶと同時に、＜白紙＞の魔法を起動させる。魔物が＜障壁＞の魔法を起動するより先に消去出来ればと思ったのだが、さすがにそれは甘かったようだ。

先程と同じように、蒼い光が一瞬にして消え、魔物は平然として立っている。少しは効いたのか、鎧の一部が塵となって消えるが……全部消そうと思ったらどれくらいのかの力が要るのか。

「頭の良い子だと思ってたけど……案外、学習能力がないね」

「余計なお世話よ」

のんびりと言う魔物に、キルファは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「ついでに言えば、答えになってないような気がするんだけどね。さっきの答え」

「だから。あんたがとっとと失せなさいって言ってんのよ。それ以外に何があるって言うのよ」

「それは、さすがに却下……だね」

一方にあるのは余裕、もう一方は焦り。キルファは忙しく口を動かしながら、じりじりと後ずさっていた。

たとえ自分のナイフが全部命中したとしても、この魔物には大して効果がない。何故なら、魔物は魔法によってその身体を維持しているものなのだから。魔物を形成する魔法そのものを消すか、魔法によって具現し、その身体を構成する物質を残らず消し去るしか方法はない。

「どう考えても、無理……」

呟く。絶望もしていないし、諦めもしていない。だが、理論的に考えてみた結果、出た答えがこれだ。

魔物は、小さい動作で首を傾げた。

「無理、ねえ……。そんなはずはないと思うんだけどなあ。そんなにあっさりとやられたら、僕の御主人たちの立場はどうなるのか」  
青空を見上げ、こめかみを掻きながら考え込む動作をして見せる。



ややあって、ぽん、と魔物は手を叩いた。

「……もしかして、何か理由でもあるの？ それとも知らないの？」  
何が、とはキルファは訊かなかった。言わんとしていることはすぐに理解した。

だから、動揺する。

びくん、と一瞬身体が震えたのを魔物は見逃さなかった。目を丸くし、そして苦笑する。

「何があったのかは訊かないけどさ……君、そのままだと死ぬよ？」

「殺そうとしている本人が何を言ってるんだか」  
相変わらず、苦い表情のままキルファは答える。

「……まあ、そうなんだけど」

「あんた、何がやりたいのよ？ のこのこ出てきて、ダレットとサリクスを殺すでもなくあたしだけに固執して。憎いとか言ってた割には遊んでるみたいだしさ。」

前に会った、あんたの同類もそんな感じだったわね」

「だから、その目の色だよ。僕らが敵と認識していたものと同じ色だからね。それはつまり、君も敵ってことだ。……とは思うんだけど。」

今、君を消しても、もう何の意味もない。僕にそういう認識を埋め込んだ人たちは、もういないからね。

だから……どうしようかなあ、と僕も悩んでるんだよ」

「全然悩んでる風に見えないんだけど」

キルファはじろり、と睨む。

「あんたを創ったのは、あたしたちの言うく魔人>よね？ でも、く魔人>が対抗していたのはく天人>のはずよ。どっちももういないけど。」

あたしは……そりゃ、人間でもエルフでもないわ。その証がこの目の色なんだから。

あんたの話を聞いてると、天人種族とあたしの見た目がまったく同じ、みたいに聞こえるんだけど」

「……知らなかったの？」

魔物は目を丸くする。とにかくよく表情の変わる少年だ。それが無邪気な子供のようで、似合ってはいるのだが。……魔物と知らなければ。

「知らないわよ、そんなこと。＜天人＞については全然分かってないしね。

それにしても、よ。たまたま目の色が同じってだけで付け狙われるなんて、こっちにはいい迷惑よ、止めてもらえない？ あたしは、あんたらを滅ぼした天人種族じゃない」

断言する。

「そう……正確には、違うのかもしれないけど。でも、僕たちから見たら、同類だよ。

だって、そうなるように仕組まれてたんだから。でも……僕らの予定から行くと、君は予定外の人物なんだよ。ただ邪魔なだけじゃなくて、僕らの狙いを外す可能性すらある」

「……………」

訳が分からず、キルファは首を傾げた。この魔物が何を知っているのか、何を言わんとしているのか、見当がつかない。

遙か昔に滅んだと言われている天人と呼ばれる種族。自分との接点は、唯一、左手にはまっている指輪だけであるはずだった。

(……………)

そこまで考えて、ふと思い出した。

天人に関して、その存在は確実と言われていながら、実態がまったく分からない理由。

遺跡はあちこちに発見されても、その中に入れないのだ。

だが。たまたま見つけた遺跡に、自分たちはあっさりと入ることが出来た。内部にいた番人も、自分たちを攻撃しようとはしなかった。

それこそが……天人と関わりがあるという証拠だとしたら？ 無論、どんな関わりかは見当もつかないが。

唐突に黙りこんだキルファを、魔物は面白そうに眺めた。

「何か思い出した？ 何があったのかは知らないけど、でも、まったく知らないわけでもなかったんじゃない？ その＜白紙＞の魔法からして。

それともう、エルフとか呼ばれてる連中は使えないんでしょ？

確か」

「……よく知ってるわね」

「年寄りは出て行かなくても世間のことには詳しいもんだよ」

言って浮かべて見せた笑みが、妙に歳を経たもの特有の落ち着きと、同時に枯れた雰囲気を持っていたのは何故だったのか。

「でもね……昔の連中が何をやったのかは知らないけど。今生きているあたしたちには何の関係もないのよ。

何度も言うけど。さっさとここから立ち去ってくれない？」

「君は関係ないかもしれないけどさ、こっちはこれだけのために生きてるようなものだからねえ。

それを否定されるのは……受け入れられないね」

閃光。

魔物が無造作に伸ばした右手から、強烈な光がほとぼしる。

『開門っ！』

キルファも左手を突き出して唱える。一瞬にして閃光は消え去ったが、その時には魔物が目の前に迫っていた。

（しまった！ 今のは陽動……）

ナイフで受けている余裕はない。本能的にキルファは地面に転がる。横薙ぎに振るわれた剣は、風を切りながら頭上を通り過ぎた。「しかしまあ、冗談みたいによく避けるよね。君が身軽ってのもあるだろうけど……」

言いながら、地面に剣を突き立てるようにして第二撃を放つ。ごろごろと転がってこれも避けるが、いつまでも通用するわけもない。「……………っ！」

キルファは仰向けに転がったまま、右手で突き下ろされる剣の腹

を横に叩いて払う。右手が少し切れるが、気にしている余裕はない。重い長剣は、キルファのすぐ横に突き刺さった。魔物が剣を引き抜いている間に、もう何回か後ろに転がってから跳ね起きる。

「しぶといねえ……君も。冗談みたいな手を使う」

「そう簡単に殺されてたまるものですか」

キルファは肩で息をしながらにやりと笑う。咄嗟に剣を手で払えたのは、以前にダレットが同じようなことをやったからだ。そのお陰で、キルファは危ないところで刺されるのを免れている。

（どうする……どうする？）

こうして、いつまでも逃げられるわけもない。たとい自分一人はどうにかなくても、まだ倒れたままの二人をどうする？

さっきからずっと前に進まない思考。いつまでたっても出口が見えない。

「……………！」

考え込んでいる間にも、魔物が再び突っ込んでくる。今度はナイフで受け、弾く。数回繰り返しているうちに、すぐに腕がしびれてくる。

「くっ……っあっ！」

軽い音を立て、ナイフがキルファの手から離れる。重い剣撃を何回も受けたせいで、手の皮は破れかけているし、感覚もなくなってきた。

懐から投げナイフを抜く。しかしこれでは、長剣を受けることなど不可能だ。だが、丸腰ほど不安なこともなかった。

歯を食いしばりながらナイフを構えるキルファを、魔物は面白そうに眺めた。

「大したものだね……その精神力は。でも、その根性は認めるけど、それだけじゃどうしようもないよ？」

「言われなくても分かってるわよ」

自分でも、このままでは倒す算段などないのは分かっている。どんどん追い詰められていっているのも。だが……ただ殺されるのだ

けは御免だ。理由も何も分からないままで。

理不尽な理由で命が危うくなる。こんな状況は、前にも経験したことがあった。

「いつまで逃げられるかな？」

楽しそうに言いながら、魔物が滑るように間合いを詰める。元より、投擲用に作られたナイフで受けるつもりはない。上から振り下ろされた剣を全力で跳んで避け、同時にナイフを投げつける。だが、これはあっさりと外れて近くの木に突き刺さった。

後ろに下がるキルファを、長剣が執拗に追いかける。キルファに迫る剣は……足元を狙っていた。

「……………っ！」

もう一度後ろに跳ぶ。だが、無理な体勢からの移動で、大きくバランスを崩した。

魔物はそれ以上追わず、長剣をその恐るべき臂力でもって投げつけた。これ以上、ちょこまかと逃げられるのを避けるためだろう。射剣術と呼ばれる、傭兵などが使う特殊な技だ。手に持って使うべき剣を投げつける、ある種の外道技だが、ダレットも以前にこれを使ったことがある。

肩に担ぐような構えから放たれた剣は、真っ直ぐにキルファに向かって走る。

(……避けられない！)

抵抗もここで終わりか。

キルファは観念して、思わず目を閉じた。

ぞぶり、と異様な音がした。

肉が切れる音であるのは即座に理解した。だが……襲ってくるはずの痛みはまったくくない。痛みすら感じないほど、一瞬でやられてしまったのだろうか？

キルファは不審げに、だが恐る恐る目を開けた。

その目が、大きく見開かれる。目の前に立つ大きな人影。

「だ……」

ダレットだ。

観念した瞬間、何かに横から突き飛ばされたのは覚えている。だが……何故ダレットがここにいるのだ？

「……………」

ダレットは、尻餅をついているキルファの前で、ゆっくりと……そこだけ時間の速度が遅くなったかのように地面に倒れる。その腹が、真っ赤に染まっている。

「あ……」

何も言葉が出てこない。出てくるのは、言葉にならないうめきだけだ。

キルファと魔物の間を塞ぐようにダレットは倒れている。その腹からは大量に血が流れているし、完全に意識を失っているようだ。魔物も、この捨て身の行動にはびっくりしたのか、目を丸くしている。

「これはまた……」

キルファの後ろに突き刺さった剣を引き抜くでもなく、ただ面白そうに眺めている。彼には、ダレットの行動はただの自殺行為として映らなかった。

キルファが、よろよろと立ちあがる。かくん、とダレットの横に膝をつき、倒れた身体に触れる。だが、まったく反応を示さない。大量に血を失ったせいで、その顔は蒼白になっている。

「……ダレット？」

自分を庇って、これだけの怪我を負った。

キルファの、その思考はあっさりと状況を把握していたが……感情がそれを受け付けない。ぼんやりと心の中で呟く。

（何？ 何が起こったの？ 何が……）

何も分からず、虚ろな瞳のまま、自分の両手に目を落とした。  
「……………」

目が大きく見開かれる。瞳孔が急に明るいところに飛び出した猫

のように、きゅっと収縮する。

「あああああああ……」

自分の紅く染まった両手を見つめたまま、キルファは呆然とうめいた。

紅い。紅い。紅――

「……………あああああああ……」

紅……血と、炎の色。終わらない悪夢。かつての罪の証。

罪は罪として永遠に残る。永遠に、罪人を責め立てる。情け容赦なく、冷徹に。ずっとずっと。

だから。

「……………あああああああっ！」

罰を恐れる罪人のように。赦しを乞う咎人のように――  
キルファはただ、叫ぶしかなかった。

視界が紅く染まる。世界の全てが紅い海に沈む。

（やめてやめてやめてやめて……）

昔の記憶。永遠に続く紅い回廊。

がちがちと歯が鳴る。拳を指が白くなるほど握り締めて、それなのに身体から力が抜けて地面に膝をつく。いつの間にか、目の端に涙が溜まっていた。

「……どうしたの？」

からかい半分、嘲り半分に魔物が声をかけてくる。だが、そんなものは耳には入っていなかった。

手のひらにべっとりと血がついている。自分のものではない、他人のもの。

自分のせいで傷を負った者の――

「ああああああああ……」

言葉が頭に浮かばない。言いたいことは山ほどあるのに、それは浮かんでは消える泡のようなもので、はつきりとした形を為さない。  
（ねえ、どうして……）

――こんなことになったの？

『この、おぞましい出来損ないが。裏切り者の娘が！』

『君のその目の色……あいつらと同じなんだよ！』

人間とエルフの混血児。その証拠の紫色の瞳。そのせいだと言うのだろうか？

（でも、そんなものはあたしの責任じゃない。あたしが望んだんじゃない。生まれたときからこの姿だったもの。……あたしは悪くない！ 悪くないじゃないの！

それなのに。ねえ、どうして？ 皆、あたしばかりを責めるの？）

何度も何度も心の中で叫ぶ。  
けれど。



傷を負ったのは、血を流して倒れているのは自分ではなく、ダレットだ。

ダレットがどうして、こんなに傷つかなければならないのか。その理由があるとしたら……

「……………」

キルファは呆然として自分の両手を見つめた。

「う……」

サリクスはうつすらを目を開けた。

「よく寝た……わけはねえよな」

頬に触れる、土の冷たい感触が心地良かったが、ここで昼寝をしていた記憶などない。必死で記憶をたどる。

あの子供のような姿をした魔物に、大口を叩いて……そして一瞬で間合いを詰められ、腹を強打されたところで記憶が途切れている。おそらく、そこで気を失ったのだろう。

まだ鈍く痛みが残っているから、それほど時間は経ってはいないのだろうが……

「ちつくしょう……どうなってやがる……」

呟き、身体を動かして様子を見ようとする。まだ身体が痛む。

ごそごそと身体をずらし、上を見上げると、銀髪の少女の姿が目に入った。キルファだ。

「……………」

目の前にいるのは確かに見慣れた少女だが……様子がおかしい。白を基調としているはずの服には紅い染みがいくつもできているし、地面に膝をついている。何やら、自分の両手を見つめているようだ……その手も、真っ赤に染まっている。

「あああああ……」

無意識に絞り出すような、呻き声はその時間こえた。

「……嬢ちゃん？」

のっそりとその場に起きあがって、サリクスの顔が表情が凍った。

キルファのすぐ側にダレットが倒れている。地面に大量の血が流れ出して血溜まりを作り、ぴくりとも動かない。

そして。

おそらくはダレットの血だろう、真っ赤に染まった両手を見つめたまま、キルファが呆然としている。がたがたと震えながら何かを呟いているが……その目の色が尋常ではない。

虚ろな目で……おそらくは何も映してはいない。血の紅から、目を逸らすことが出来ない。

その紫の瞳は、ただ真紅のみを映していた。そこから離れることが出来ない。

「くそっ……」

ダレットが重傷を負っているのはここからでも分かる。出血からして、放っておいたら間違いなく死ぬほどの怪我だ。それに加えて……理由は分からないが、キルファの様子までがおかしい。

慌てて跳ね起きる。その勢いのままで、二人の側に駆け寄った。

「これはまた……揃いも揃って、しぶといね、君らは本当に」

魔物が何やら言ってくるが、この際無視。特に攻撃してくる様子もなく、ただ面白そうに様子を眺めている。

「おい、嬢ちゃん？」

駆け寄ったサリクスにも気付いていないのだろう、虚ろな瞳で、魅入られたかのように血に染まった手から視線を逸らさないキルファを、サリクスは強引に肩を揺すった。それでも、キルファは何も反応を示さず、ただ為されるがままになっている。

「ちっ！」

頬を軽く平手で叩くと、ようやくびくんと身体が跳ね上がり、サリクスを見上げた。

「あ……」

そこで初めてサリクスに気付いたようだ。虚ろだった瞳に、ようやく光が戻る。

「何があった……って、見れば分かるな」

側に倒れたダレットを見て顔をしかめる。完全に意識を失っているようで、その顔は蒼白になっている。かすかに息はしているようだが、それだけだ。

「何でダレットがこんな大怪我……」

ダレットは真っ先に気絶していたはずなのだが。自分が気絶しているうちに復活したのだろうか？

「その子を庇って自分がやられたんだよ」

横から陽気な声で、魔物が解説してくる。その口調に嘲りの色を嗅ぎ付け、サリクスは憎々しげに魔物を睨みつけた。

「成る程な」

どうりでキルファが茫然自失としているわけだ。誰よりもまず自分を責めるような性格のこの少女なら、自分のせいで相棒が重傷を負ったとなれば、決して自分を許しはしないだろう。

「おいっ！」

魔物の言葉に、再び愕然としていたキルファを慌てて引き戻す。

「ねえ、あたしが、あたしが……やった……？」

呆然と流れ出る血を見つめたまま、キルファが呟く。その瞳は、再び何も映さなくなっている。

「ダレットが大怪我をしたのはあの野郎のせいだ！ 嬢ちゃんのせいじゃない……」

サリクスはぼん、とキルファの頬を叩く。正直、気が引けたのだが、こうでもしないと正気に戻りそうもない。

しかし、キルファはサリクスの言葉に何の反応も示さず、まだ何やら口の中で呟いている。

「あたしが……あたしが悪いの……？ あたしは、いちゃいけなかったの……？」

「……………」

ここにきてようやく、サリクスはキルファの異変に気付いた。急に自分を失ったようになったのは、ただ、ダレットが自分を庇って怪我をしたからというだけではない。

そう考えなければ、彼女の言葉に脈略が通らない。

しかし、ここでそれを追及することも出来ないし、何より目の前にはまだ魔物が立ちはだかっているのだ。

「……どうしろってんだ！」

腹から血を流しながら倒れるダレットと、呆然としているキルファを前にして、思わずサリクスは毒づいた。

全てに覚えがあった。

大地を染め上げる紅い血、横たわる身体。目の前に立ちはだかる黒い人影。

また、前と同じだ。

理不尽な状況で自分が殺されそうになって、そのせいで他の誰かが傷ついて。

「ああああ……」

完全に生気を失ったダレットの前で、キルファはぼんやりと記憶を反芻した。

自分は死にたくはない。けれど、そう思うたびに他の誰かが傷つくとしたら。

それでも……生きていたい、と思っても良いのだろうか？

ダレット。

何を考えているのか、いまいちよく分からない。いつもとんでもない行動に出て、自分は頭を抱えている気がする。馬鹿みたいにお人好しで、人をはらはらせる。

それでも。この男の隣にいて、自分は嬉しかった。楽しかった。

それだけは確かだった。

それなのに。

他でもない自分のせいで、生死に関わる怪我を負わせてしまった。

(……あたしが)

さっき、必死になって抵抗などしないで、さっさと殺されていれば。あの黒い剣の前に倒れていれば。

分かっていたことではないか。自分が抵抗するたびに、他の誰かが傷つく。そうして、自分がどうしようもない悔恨を抱え込むことになる。

（死んでいれば……よかったの？）

けれど、いくら思っても現実是不変ならない。自分は傷一つ負わず、ダレットが重傷を負って倒れている。厳然たる事実。

血塗れの手がぱたり、と落ちる。ぼんやりと呟く。

「ねえ……」

誰も答えてはくれない。それでも、口にせずにはいらなかった。「あたしは……どうすれば良かったの？」

誰に問いかけているのか。何を問うているのか。それすらも分からなかった。

長柄戦斧は先程気絶したときに落としたままだ。ほとんど丸腰に近い。

必死で考えを巡らせ……立ち上がると、サリクスは後ろに突き刺さった黒い長剣を引き抜いた。先程、魔物が投げつけたものだ。

刀身に赤い血が付いている。ダレットのものだと即座に気付き、サリクスはぎりつと歯を噛み締めた。

「なんつう重い剣だ」

魔物は、自分の武器が取られたにも関わらず、面白そうにその様子を眺めている。その子供のような姿に似合わず、黒い剣はあまりに重かった。日頃長柄戦斧を振り回すサリクスだから辛うじて扱える、というくらいの重量がある。

見た目で重さを判断していたのだが、さすがに魔物の持ち物である。常識が通用しない存在であることを改めて思い知らされる。

「あなたもその子も、本当に頑張るよねえ……感心するよ。例外はその人間の男だけか。わざわざ自分から剣の前に飛び込んでさ」

重い剣を辛うじて構え、サリクスは鬼のような形相で魔物を見据える。気の弱い者ならばそれだけで倒れたかもしれない。

だが、相手は前時代の遺物とも言える存在だ。鋭い視線など通用しなかった。

「馬鹿と言うか健気と言うか。僕には理解出来ないけどね……」

魔物はひよいと肩をすくめて見せた。両手を前に伸ばし、軽く振る。手首が瞬時に変形し、湾曲した短い刃が生えるように現れた。

「別に、それだけが武器ってわけでもないからね。元々、僕自体が兵器だからさ。こういったものは満載してる」

これまた黒い刃を、自慢げに見せながら言ってくる。

「ちっ……」

使い慣れない武器で、いつまでも対抗できるわけもない。瞬時に殺されていないだけ奇跡だと言えばそれまでだが、ダレットは放って置いたら死ぬであろうし、キルファは——まだ虚ろな瞳をしたままだ。このままでは、すぐに全員殺されて終わりだ。

「嬢ちゃん……いや、キルファ！」

二人の前で剣を構え、サリクスは背中に庇った少女に向けて怒鳴った。

「ずっとそこで黙ってても、ダレットは死ぬただぞ！ 助けたいんだったら、自分がどうすれば良いか考えろ！」

決然とした響きを持って、その言葉は響き渡った。

そうだ。

自分が生きるか死ぬか、そんなことは大した問題ではない。

この男……ダレットは助けなければ。自分のせいで傷を負わせた、それは事実だ。だから、これ以上、自分のせいで苦しめるわけにいかない。

（どうする……？）

ずっと動きを止めていた思考が回り始める。

ダレットは重傷だ。このままでは間違いなく出血多量で死ぬ。えんえんと消去魔法を連打して、倒れるのを待つなどという手は使えない。一撃で決めなければ。

(……一撃?)

それはつまり……魔物を圧倒するほど強力な魔法。手段はそれしかない。

目の前に見えていた、紅い炎の迷路。それが不意に途切れ……出口が見えた気がした。

長く暗い夜が明けて、光が見える。ぼんやりとした、暁の光。

何だろうと構わない。自分の意地、過去、そんなものよりも、今は一人の人間を優先する。そう決めたのだ。

虚ろだった瞳に光が戻る。

瞳に強い意志の光を宿し……キルファはすっと立ちあがった。

『秩序と混沌の支配者よ・姿なき世界の王者よ・我・汝に請わん・汝が力・仮初めなれど・我に与えん……』

キルファは涼やかな声で呪文を唱える。先程までの迷いはもう何処にもない。

『場』に溶け込んだ意識が、呪文によって世界法則が変わっていくのを感じ取る。少しの間だけ、自分はこの場を思うがままに支配できる。

『光よ・我が軍の先達となれ・その力もて・我が軍を導きて・道を開け・我が前の・敵を滅せよ……』

朗々と呪文は続く。

魔物もサリクスも、キルファから発せられている圧倒的な力に、ただ啞然とした。

使える魔法の強さは、魔導士の『場』への干渉力に比例する。この論理で言えば――キルファは、常識外れな干渉力を持っていた。魔物の端正な顔が滑稽なほどに引きつる。常に『場』に干渉している状態の彼は、キルファが圧倒的な力で『場』を支配していることを、正確に把握していた。

<障壁>など、この力の前には紙ほどの役にも立たない。物理的な力でも、おそらく自分の身体は耐え切れない。

……死ぬ？　ここで自分は死ぬのか。

この期に及んでも、冷静に状況を把握している自分を、魔物は自嘲気味に笑った。

目の前の少女も、男も、死ぬことを必死に否定した。だが、自分は、いざ死ぬと悟ってもまったく言っていないほど恐怖を感じない。これが、生き物として生まれたものと、道具として魔法で生み出されたものの差なのか。

（そうか……）

キルファを攻撃するでもなく、妙に納得した顔で、魔物はキルファを……完成していく必殺の魔法を眺めた。

『我が意に従い・今こそ……』

前に伸ばした両手が白い光を発する。最初はかすかだったこの光は、徐々に強くなり、目を開けていられないほどにまぶしくなる。

キルファは目の前に立ちはだかる黒い魔物を見据えた。鮮やかな紫が、その姿を捉える。

『凱旋の道を――』

勝利の道を。生き残る道を。共に生き、歩こうとする道を――

『ひらけえええええっ！』

次の瞬間。

閃光が辺りを支配した。

閃光。そして轟音。

咄嗟にサリクスが出来たのは、目を閉じて耳を塞ぐことだけだった。そうしていなければ、圧倒的な光量と音量に、器官をやられていたことだろう。

「……………！」

頭上を風が吹き荒れているのが感じられる。身体を伏せ、叩きつける突風に耐えながら……ふと、サリクスは足元に倒れているはずのダレットと一緒に吹き飛ばされていないことを祈ったりした。



まあ、それはないだろうが。何しろ、魔法を起動させたのはキルフアだ。

攻撃魔法＜凱旋＞。光の大砲で目の前のものを全て薙ぎ払う大技だ。そのあまりの力のために、普通のエルフでは一人では起動出来ず、数人で分担してやっと使える魔法である。かつては攻城戦にも使われたほどの威力なのだ。

それをキルフアは……一人で軽々と起動してみせた。

「冗談だろ、おい……」

やっと光がおさまったのを感じ取り、サリクスはこわごわ目を開けた。そして、目の前のあまりの状況に、片方の眉だけが跳ね上がる。さぞ笑える顔になっているだろう、と一人ごちた。

目の前に生えていたはずの木々は片っ端から薙ぎ払われ、文字通り、一直線に道ができていた。あの光球が通った軌道なのだろう。道の先が見えないことに気付き、今更ながら冷や汗がどっと噴出してくる。

助かった、と素直に喜ぶことは出来ない。これだけの力が存在すること。そのこと自体に、サリクスはただ恐怖した。

「成る程ね……」

凄惨な状況に似合わない、陽気な声がした。あの魔物だ。

さすが、と言うべきなのだろうか。魔法の直撃を食らったにもかかわらず、まだ立っていた。だが、その黒い鎧が、身体が、額の角が、徐々に塵と化して崩れていく。

「それが君の力、か……まったく、あの連中を思い出すよ……」

これで……ようやく、終われる……かな……」

ふわり、と笑う。その笑顔のままで、魔物は完全に黒い塵となって散った。

「終わった……か」

サリクスが安堵のため息をつく。しかし、キルフアはまだ強張った表情をしたままだ。

「伏せてっ！」

キルファが悲鳴のように叫んだ瞬間……  
大爆発が起こった。

『開門っ！』

咄嗟に左手を突き出し、唱える。

蒼い光と白い閃光がぶつかり合う。二つはせめぎ合い、お互いの形を変えながら揺れ動く。

キルファはぎりつと歯を食いしばって消去魔法を維持した。ややあつて、蒼い光が閃光を包み込むように動き、白い光が段々小さくなっていく。

魔物がいた位置で起こった爆発が収まっていくのを確認し、キルファは今度こそ安堵の表情をした。

「まったく……飲み込まれる寸前だったわ」

爆発は、消去魔法が一瞬でも遅ければ、三人を巻きこんでいただろう。

「いなくなったならなったでこんなおまけが付いてくるんだから、本当に始末に負えない連中ね……」

呆れたようにため息をつく。そこに、サリクスがおずおずと尋ねた。

「なあ……何だったんだ？ 今の」

「反動よ……あの魔物を維持していた魔法の」

魔法は、世界法則を書きかえることで発生する。が、『場』にも、本来あるべき姿に戻ろうとする性質があり、結果、書き換えたものが元に戻されるまでの時間が、魔法の起動している時間ということになる。

そして、『場』を書き換えて魔法を発生させる際、また起動した魔法が『場』によって押し戻される際に、反動とでも言うべき不具合が発生する。通常はほとんど感じ取れない程度のものなのだが、魔物を生み出すほどの高度で複雑な魔法となるとそうはいかず、爆発を引き起こしてしまったのだ。

対処方法はなく、＜白紙＞の魔法でようやく還元出来るものである。

「成る程な……」

サリクスが納得している横で、キルファは倒れたままのダレットに触れ、様子を確認する。

「……どうだ？ 嬢ちゃんできるか？」

キルファには、相当の医療や薬物に関する知識があるが……

彼女は黙って首を横に振った。

「死んではいけないけど……それだけね。あたしじゃ手に負えないわ。何処か、ちゃんとした治療が出来るところに連れてかないと」

二人は顔を見合わせて考え込んだ。

うつすらと目を開けると、少女に黒い刃が迫っているのが見えた。正確に、切っ先は銀髪の少女を狙っている。

（駄目だ……駄目だっ！）

狭い檻の中でもがくように、心の中で絶叫する。

慌てて跳ね起きる。矢のように、咄嗟に少女の前に飛び込み、彼女を突き飛ばした。次の瞬間、腹に猛烈な痛みを感じ……

（……無事だったか）

最後に、一緒にいた少女が無傷でいるのを確認し……そこで、意識は途切れた。

「う……」

男は全身から汗を流して苦悶している。うなされてでもいるのか、時々何かを呟き、顔をしかめている。

栗色の髪が、汗でべっとりと額に張り付いている。丁寧に汗を拭いながら、少女は心配そうに男の顔を覗き込んだ。

まだ若い男だ。二十歳を幾つか過ぎたくらいだろうか。優男と言える容貌で、割と整った顔形をしている。長身の割に痩せているが、よく見れば筋肉がしっかりとついているのが分かる。それでもいかつさを感じないのは、この甘い顔立ちのせいだろう。

こんな辺境には珍しい、何処か洗練された雰囲気を持った青年だ。まあ、重傷を負って倒れているところしか見ていないから、実際のところは分からないが、この想像は間違っていないだろう。

少女は側の小さな机の上に置かれた短剣に目をやった。今まで少女が見たこともない、豪華な装飾が施された短剣。実際に刃物として使えるのかどうかは疑問だったが、これにはそれ以上の意味がある。

「どうだ？ シェルタ、その人の様子は」

そこに、もう一人の人間が入ってきた。少女……シエルタノート・トゥールーズの父親だ。

「うん、まだ目を覚まさない。何だかやたらと苦しそうだし……大丈夫かな」

「まあ……腹にあれだけの怪我をしたら、ちよつとやそつとじゃ目を覚まさないだろうな。だがまあ、コツフェルの爺さんは命に別状はないって言ってたし、あと数日もしたら目を覚ますんじゃないか？」

「……あのよぼよぼの爺さん、本当に大丈夫なの？ この間さ、ラスツイがあ爺さんに薬をもらったら、余計に頭が痛くなったとか言ってたけど」

少女が口を尖らせて言った。

コツフェルの爺さんと言うのは、この小さな村のただ一人の医者である。辺境では医者というのは貴重な人材だったが、どうにも最近、ボケてきたのもつばらの評判である。シエルタが心配するのも無理はない。

「まあ……元々は名医だった人だし、他に医者もないしな。信じるしかないだろうさ」

汗だくで苦しんでいる男の様子を見ている限り、本当に大丈夫なのかと叫びたくなるが、腹を大きく切り裂かれていた男を治療したのはあの老人だ。それに、自分にはまったく病氣や怪我の知識はない。しぶしぶながらシエルタは父親の言葉に頷いた。

「ま、しばらくは看病してるしかないだろうな。済まないがもう少し、様子を見てくれ」

父親はそれだけ言って部屋を出ていった。後には、シエルタとベッドで眠りつづけている男だけが残される。

「ふふ……」

何処か楽しそうに、シエルタは男の看病を再開した。重傷で発見された男の手当てを最初は嫌がっていたシエルタだったが、基本的に人の世話をやくのが嫌いではないのだろう。

「ごそごそと額に当てていた布を取り替えながら、シエルタはふと呟いた。

「そう言えば……まだこの人の名前も知らないんだよね、わたし」  
この村に來た時から意識を失っていたから、当たり前前の話ではあるのだが。それなのにこれだけ熱心に男の看病をしている自分が、シエルタには何処か誇らしく思えた。

村の側に広がる、森の中。

キルファも、サリクスも、疲れきった顔で座りこんでいる。二人とも黙ったままで、重苦しい沈黙が立ちこめていた。

「……大丈夫かしらね……ダレット」

ぼそりとキルファが呟く。木に背中を預けたまま、動く気力もないらしい。

「多分な……村の連中がちゃんと連れていったみたいだし。まあ……嬢ちゃんの作戦勝ちっていったところか」

「何の勝負よ……」

二人ともまるで覇気のない口調でやりとりする。その雰囲気はやけに暗く、そこだけ頭上に黒い靄もやが立ちこめているようにも見える。事情を知らない者が見たら、一歩後ずさるかもしれない。

「後は、あの村の連中に任せるしかねえな。しかし、意外だったな……嬢ちゃんがあんなことを言い出すんだから」

「あたしの手には負えなかったもの……あそこで大見得を切っても、何の意味もないでしょう……」

「まあ、そうだけどな……」

また二人揃ってため息をついた。

話は数時間前に遡る。

魔物を倒した後、重傷で意識を失ったダレットを前に、二人は頭を抱えていた。

「駄目ね……あたしの手には負えない。……と言うより、こんな森

の中じゃ治療なんて出来ないわ。ちゃんとしたところに連れてかないと。何処か、一番近い村に……」

そこまでキルファが言ったところで、二人は揃ってぱん、と手を叩いた。

「ダレットが狼退治なんかを引き受けてきた村……あそこは人間の村だから、どうにかなるかも」

「急いで戻って……間に合うか？ 多分、数時間はかかるぞ？」

「応急手当をして、ぎりぎりってとこね。ま、普段剣振り回してるから、普通の人間よりは頑丈だと思うけど。とにかく、急がないと……」

ダレットの腹に手際良く包帯を巻きながら、キルファが言う。サリクスがひよいとダレットの身体を抱え上げ、歩き出しながら思い出したように言った。

「けど……俺はエルフ、嬢ちゃんはハーフときた。そこにダレットを連れていっても、最悪の場合、追い出されるだけじゃねえか？」

エルフやハーフを人間は嫌悪している。それは時に、彼らと一緒にいた人間すらも範疇に含まれることがある。たとえ重傷を負った者であっても、それは変わらない。

ダレットだけならば、あるいは大丈夫かもしれない。けれど、口論をする時間が命取りになる。怪我人の前で、あれこれ言い争いをしている時間はない。

目の前の命を助けることよりも、時に種族間の感情が勝る。キルファにはむしろそれが情けなく思えた。だが、ここでその是非を論じている暇などない。

「要するに、あたしたちの存在がばれなきゃいいんでしょ？ だったら……何とかなると思うわ」

「どうするんだ？」

「……これよ」

キルファは荷物の中から、やたらと派手な装飾が施された短剣を引っ張り出して見せた。

応急手当に巻いた包帯を外す。一気に血が溢れ出てくるのを、キルフアは泣き出しそうな顔で見ていた。だが、作業をする手を休めることはない。

横では、サリクスがごそと別の作業をしていた。森に生える木々や草に、人が歩いてきたような跡をつける。

先程取り出した短剣を、適当にダレットの懷に押し込む。目立たないように、何気なく。

森の中に転がしたダレットから離れるように、二人は木の陰に隠れる。

「それじゃ、お願い」

キルフアが囁く。サリクスが無言で首肯し、小さく呪文を唱えた。どんつと音がして、小規模な爆発が起こる。サリクスが威力を絞ったく爆呪＞を起動させたのだ。

爆発は、森の土を少々、上に吹き上げる程度の威力しかない。だが、村の側で起こした爆発の物音は、村人を呼び寄せるには十分のはずだった。

ダレットを、行き倒れの怪我人のように見せる。キルフアが提案したのはこれだった。

だから、ここまでダレットが自力で歩いてきたかのように偽装し、手当てした包帯を外して他人の痕跡を消した。最後に近くで大きな音を立てて、村人に『行き倒れ』を発見させれば良い。

よくよく考えれば、爆発の側で倒れている人間が切り傷を負っているのだから、不審なところだらけなのだが――キルフア曰く、「普通の人間だったら、血まみれの人間を見た時点でそこまで考える余裕なんてなくなるんじゃないかしらね」だそうだ。

あとは、ダレットが不審な人間として追い出されないかどうかだった。それはあの短剣が解決してくれるはずだった。

二人は駆け寄ってきた村人に見つからないように、こっそりと様子を見がう。村人の慌てたような叫び声が段々遠のいていくのを確認し、ようやく安堵のため息をついた。



「なあ……ところで、あの短剣何なんだ？」

周りに誰もいないことを確認してから、サリクスはキルフアに尋ねた。

「ああ、ダレットの話だと、騎士の身分証明の印章なんだって。あの村人がそれに気付けば……悪いようにはしないでしょ」

騎士の叙勲を受けたときに下賜される、王宮騎士団の印章。殺傷力はまるでない、儀礼用の短剣だ。王宮騎士団は王の直轄の近衛兵だから、印章には当然、王家の紋章が彫りこまれている。帝国の人間なら、それに気付かないものはいないだろう。

「……騎士だったのか？　ダレットって……」

あまり物事に動じることのない男だが、さすがに、サリクスがびっくりした顔をする。帝国騎士が、何だってこんな辺境をふらついているのか。

「あ、知らなかったんだ。確かにあたしは言った覚えはないけど。ま……『元』騎士ね。家出してきたから」

キルフアが肩をすくめて見せた。

狼が出ていると聞いて、自分からその退治を引き受けてくれた男が、血まみれで帰ってきた。小さな村は、蜂の巣をつついたような騒ぎになった。

「とにかく、手当てを……誰か包帯貸せ、包帯。それと、コッフェルの爺さんと呼んで来い！」

「トウールーズ！　お前ん家は宿屋だろ、一部屋貸せ、そこに運ぶ！」

「分かった！」

こんなやり取りが交わされた後。ダレットは宿屋の一室……一番上等な部屋に運び込まれ、辛うじて一命を取りとめることが出来た。かなりの出血だったが、元々鍛えている身体であるから何とか耐え抜くことが出来たというのが、男を診察した爺さんの弁だ。

運んでいるうちに、何やら懷から転がり出てきたものがあった。

滅多にお目にかかれない、金や宝石で細工された短剣だ。

「なあ……これって」

拾い上げた男が、そこに彫りこまれた紋章を見た途端に顔色を変えた。

「……王宮騎士団の紋章、だな」

数人の男たちは顔を見合わせ、そして申し合わせたかのように寸分違わぬ動作でダレットを見下ろした。

「……騎士様だったのか？　この人」

「間違いないだろう……これを持ってるんだから」

一瞬、あたりは静寂に包まれ……次の瞬間、一同は揃って騒ぎ出した。

「……どうする？　俺たちが狼がどうの、なんて言ったから大怪我をしたとなったら」

「それより、何でこんな辺境に騎士様がいるんだ？」

「誰だよ、狼がどうのなんて話、聞かせた奴！」

しばらく好き勝手に喚きたてた後、慌てて駆けつけて来た村長が、ひととき大きな声で怒鳴った。

「ええい、とにかく！　くれぐれもそそのないようにすること！」

「……はい」

一同はまた揃って頷いた。

周りのそんな騒ぎなど知るよしもなく、ダレットは意識を失って眠りつづけていた。

目の前にぼんやりと人影が見えた。

「ねえ、大丈夫……？」

その姿が尋ねてくる。まだ少女の声だった。

色の薄い髪。青みがかった目の色。これは。この少女は……

「……キルファ？」

記憶にある、特徴的な容姿を持った少女の名前を呼ぶ。自分が最後に見たもの。――必死で護ろうとした少女。

無意識のうちに少女に手を伸ばす。が、その手は届かなかった。身体に力が入らず、腹に強烈な痛みを感じ、すぐに引っ込めざるを得なかった。

「……ああ、まだ駄目だよ。動いたら……痛いでしょ？」

少女がのんびりと言ってくる。記憶にある声とは違うことに、少し経ってから気付いた。

（キルファじゃ……ないのか？）

ぼんやりと思う。今になってようやく、視界がはっきりしてきた。自分を覗きこんでいた少女の姿が、徐々に輪郭を現す。

見覚えのない少女だった。歳はキルファより少し上と言ったところか。だが、変に大人びたところがあるキルファに比べて、純朴な雰囲気がある。闊達な性格がそのまま顔に表れているような、そんな印象があった。

一見、キルファに似てはいたが……髪はよく見れば白っぽい色をした金髪だし、瞳も深い青だ。銀髪はともかく、紫の瞳など、滅多にいるものではなかったが。

「……ここは？」

動くと腹が痛むので、首だけ動かして周りを見た。何処かの家の一室だろうか。木造の家で、窓からは明るい日差しが差し込んでいるし、自分が寝かされているのは柔らかいベッドだ。

自分は確か、森の中にいたはずだ。それなのにどうして、こんなところにいるのだろうか？

「ここは、わたしの家。……まあ、宿屋の一室だけだね。

かなり大きな怪我だったらしいけど……もう大丈夫だって。傷が治れば、動けるようになるって爺さん……じゃなかった、お医者さんが言ってた」

怪我。その言葉で、ようやく記憶がはっきりとしてくる。

森の中で、一緒にいた少女を庇おうとして、咄嗟に飛び込んだのは覚えてる。そして、腹に強烈な痛みを感じて……そこから記憶がない。おそらくは気を失ったのだろうが。

（そうだ。あいつらは……キルファとサリクスはどうした？）

動かない身体にもどかしさを感じながら、必死に二人の姿を探す。自分の記憶の中ではついさっきまで一緒にいたはずの、仲間たちの姿は見当たらない。

「なあ……あの二人はどうした……？」

ぼつりと尋ねる。が、少女は首を傾げたただけだ。

「ああ……あのね、わたしの名前はシエルタノート・トゥールーズ。シエルタでいいから。」

それでね、あなたの名前は？」

嬉々として少女……シエルタは尋ねた。この、予期せぬ訪問者に興味津々と言った感じた。

「……俺は……」

状況は訳が分からないが……とりあえず死ぬのだけは免れたことだけは確かだった。

頭が動かない。意識がぼんやりとして考えがまとまらない。それ以上考えるのを止め、ダレットは柔らかい枕に顔をうずめた。太陽の光を浴びた布の、いい匂いがした。言いようのない安心感を感じる。

「俺は……ダレット。……ダレット・コルフォース」

それだけ言うと……ダレットは再び意識を失った。

あれから三日が経っていた。

ダレットの様子は知る術がない。おそらく、無事だとは思うのだが……それでも、不安は掻き消すことが出来ない。

「……………」

キルファは泣き出しそうになるのを必死にこらえ、自分の膝に顔をうずめた。

「大丈夫。大丈夫だよね……あの馬鹿が、そうそう死ぬわけもない……………」

自分に言い聞かせるように呟く。だが、胸に巢食う黒い想像は、簡単には消えてくれない。血の海に沈むダレットの姿が、振り払っても追い払っても浮かんでくる。

（やめて……やめてやめてやめてっ！）

目を閉じて、耳を塞ぐ。だが、紅い幻像から逃れることが出来ない。映像を見せているのは自分自身なのだから、結局のところ、自身の気の持ちようなのだと分かってはいる。分かってはいるのだが……………

生き物というのは、そう都合良くはできていないのだ。理解はしても、あっさりと納得など出来ない。

「……嬢ちゃん？」

サリクスが心配そうに覗きこむ。肩に担いだ長柄戦斧に、兎が二匹ほど括り付けられている。長柄戦斧の他に、特殊弓を手に入っていた。

二人は、ダレットが治るまで村の側の森に潜んでいることにしていた。下手に人間の村に近づこうものなら、それだけで騒ぎになるからだ。そのため、出来るだけ人間に見つからないように生活していかなくてはならない。かなり厳しい状況だった。

地図から、近隣にエルフの村もあることが分かっている。ずっと森の中で自給自足は無理なので、サリクスはそこから食料を調達してくるつもりでいた。

しかもそれに加えて、キルファはずっと塞ぎこんでいる。無理からぬことではあるのだが。

ありていに言って、キルファの顔色はかなり悪かった。相当の精神疲労に加えて、ろくに食べ物か喉を通らないのだ。そこらの野草で料理を作りはするのだが、決して自分では食べようとしなない。

ぴたぴたと頬を叩くと、ようやくキルファはサリクスを見上げた。「……あのなあ、嬢ちゃん。このままだと、ダレットじゃなくて嬢ちゃんがくたばっちまうぞ?」

サリクスは、呆れたようにため息をつきながら言う。言葉に機械的に反応し、のろのろとキルファは立ちあがったが……その目はまだぼんやりしたままだ。

その様子を見て、サリクスはがりがりとう頭を掻きまわった。(……ったく、どうしろってんだ! ダレットは様子が分からない、嬢ちゃんは完全に参っちゃってる……)

目の前で、ぼんやりとキルファが動いている。が、携帯用の鍋に獲って来た兎を丸ごと入れ、ついでに兎に直接火を点けようとしているのを見て、慌ててサリクスは駆け寄った。

「ちよっ……ちよっと待てっ! 俺の今日の収穫を無駄にする気かっ!」

常に人間が来ないか気を配りながら、野生の動物を仕留めるのは結構な苦勞だった。それを消し炭にされたのではたまったものではない。

キルファの手から火種を取り上げる。しかしそれでも、キルファはぼんやりとしてされるがままになっている。

「はあ……」

いつまで、こんな状態が続くのか。サリクスは思わず運命というもの呪いたくなった。

(……ちくしょう! とつと復活して戻って来い、あの大馬鹿っ!)

心の中で絶叫する。

その頃。

「げほっ、げほっ……」

「ちよっと、大丈夫っ？」

傷の後遺症で高熱を出しながら、病人食を食べさせてもらっていたダレットは盛大に咳き込み……腹の痛みにのたうち回っていた。

その夜。

キルファが寝てしまったのを確認してから、サリクスはその場を離れた。ちなみに、少々長い間、森にいないのはならないのが分かっているので、二人は適当な洞穴を見つけてそこを本拠にしている。奥まったところにあるから、村の人間も簡単には気付かないはずだった。

月明かりが、夜の森を照らし出している。足場の悪い場所ではあまりにも頼りない光源ではあったが、サリクスは気にも止めずに足を進める。

「さて……」

サリクスは目を閉じ、ずっと意識を集中した。口の中で何かを小さく呟く。

呪文詠唱完了。補助魔法——＜幻話＞起動。

長距離間の通信を行うこの魔法は、双方が同時に魔法を起動することで成立する。融通は利かないが、その分、力の弱い者でも簡単に起動できるという長所があった。魔導士としては三流のサリクスでも、辛うじて使いこなすことが出来る。

手順は問題ないはずだった。

が……突如として、魔法に乱れが生じる。頭の中を無理矢理驚搦みにされるような感覚と共に、起動していたはずの魔法は消滅した。どんな魔法でもずっと起動していることなど不可能だが、それを早回しにされたかのような感覚だった。

「なっ……」

思わず目を開ける。蒼い光が辺りに満ち溢れているのを見て取り、サリクスは顔を引きつらせた。

後ろに気配を感じた。振り向かなくても分かる。キルファが、＜白紙＞の魔法を起動させたのだ。

たん！ と側の木にナイフが突き刺さる。無論、サリクスの力なら、二本目のナイフを投げつけられるより先にキルファを倒すことも可能ではあったが……

「……………」

サリクスは、黙って両手を上げた。それから、ゆっくりと振り返る。

目の前には、瞳に静謐な色をたたえたキルファが立っていた。鮮やかに輝く銀色の髪と、その上に光る同色の月。それはまさに、絵にもなりそうな光景ではあったが……

全身から発散する殺気と両手に握った投げナイフが、全てを台無しにしていた。

「……説明してもらいましょうか」

無表情のまま、淡々とキルファは言った。その瞳から、さっきまでの茫然自失の色はまったく見えない。

「こんな夜中に、こそこそと＜幻話＞を起動する理由を。それと、何処と通信していたのか」

サリクスは答えない。黙って苦笑し……腰から予備に吊っている短剣を引き抜いた。

きんっ、と澄んだ音が響き渡る。続けざまに二度。

キルファが放ったナイフを、サリクスが叩き落したのだ。

「……………っ！」

接近戦では勝負にならない。キルファは身を翻すと、森の中に駆け込んだ。サリクスが追って来るのを確認し、キルファは身軽に木の枝に手を掛けると、その上に飛び乗った。

木の枝の上を走って移動する。常人離れた身軽さと平衡感覚を



持ったキルファにしか出来ない芸当だ。これならば、サリクスの短剣にやられる確率はかなり下がるはずだった。臂力は問題にならないが、身軽さならばキルファの方に分がある。

下を疾走するサリクスに、続けざまにナイフを投げつける。手加減などしていない。出来る相手ではないことは、キルファも重々承知している。

が、ナイフは全て叩き落された。サリクスが立ち止まり、こちらを振り向く。

「……………！」

鋭い、何かが風を切る音。それは、キルファの頭のすぐ側を通り抜けていった。

下を見れば、サリクスが短弓を手にしている。部品次第で、様々なものを撃ち出せる特殊弓だ。昼間、兎を獲るのに彼が使用していたものである。

（しまった……）

サリクスが、特殊弓を腰に携帯したままであったことを失念していた。この男は、長柄戦斧を主力として使っているものの、多彩な武器を使いこなすことが出来る。

今の一撃が外れたのは、暗い森の中で狙いが付けにくかったからだ。それはこちらも同じなのだが。

「どうする？」

自分に向かって呟く。接近することは自殺行為、飛び道具は相手も持っているときている。基本的な戦闘能力では遥かに向こうが勝る。

（……仕方ないか）

キルファは全力でサリクスとの距離を取る。木の枝を伝って疾走し、サリクスの姿が見えなくなったところで飛び降りた。

弓で狙われないように木の陰に潜りこみ、やおら大声で呪文を唱え出した。

『秩序と混沌の支配者よ・姿なき世界の王者よ・我・汝に請わん・

汝が力・仮初めなれど・我に与えん・空と大地を渡りしものよ・風よ・精霊よ・我が意に従え……」

＜風刃＞の呪文である。それは、サリクスも気付いているはずだった。そして……キルファの魔法の威力は、彼も目の当たりにしている。

だから、サリクスは全力でキルファを追いかけている。彼女が呪文を唱え終わるまでに追いつき、倒さなければ倒されるのはサリクス自身だ。

『剣ユナと化せ・刃と化せ……』

声と気配を頼りに、サリクスは森の中を疾走した。白い服を着た、小柄な影が見える。

走りながらサリクスは弦を引いた。様々なものを撃ち出せる特殊弓だが、今は小さな鉄塊を撃ち出せるように設定してある。

『鋭利なるその身をもって・敵を切り裂け！』

弦が引かれるのと呪文が完成するのは同時だった。涼やかな声に一瞬遅れて、鉄塊が風を切って走る。

（相打ちかっ！）

背筋に寒いものが走る。だが。

がん、という硬い音が夜の森に響いた。

サリクスを襲うはずの不可視の風の刃は、いつまで経ってもやってこない。無駄と知りつつも身構えたサリクスだったが、ややあって、不審げな顔をして首をひねる。

「……………」

そこで……サリクスは、首筋に冷たいものを感じた。

「動かないで」

キルファはサリクスにナイフを突き付けたまま、その刃に勝るとも劣らぬ冷ややかさで言った。

「……まんまとはめられた訳か」

「そういうことね……」

後ろからナイフを押し当てられ、今度こそサリクスは両手を挙げて降参した。

そのまま、先程自分が狙った影、白い姿を見て苦笑する。そこには……大木に、キルファが普段着ている白いマントがナイフで留められていた。

昼間ならまず引っ掛からなかっただろうが、何せ暗い森の中である。咄嗟に、白い影を見てキルファと判断してしまったのだ。

キルファは、一旦サリクスの視界から逃れると、大声で呪文を唱えてサリクスを呼び寄せながら、マントを素早く外して自分の身代わりとしたのだ。そして、その側に身を潜め、サリクスの後ろに回りこんだのである。

サリクスがもう少し冷静だったならば、声が聞こえてくる方向が違うことにも気付いたのだろうが……魔法を起動される、とサリクスが焦ったのが最大の敗因だった。キルファもそれを狙って、わざわざ呪文だけを大声で唱えてみせたのだが。

たとえ呪文を唱えても、『場』への意識の接続がなければ魔法は起動しない。それを逆手に取ったわけである。

「は……はははっ！」

サリクスはいきなり大声で笑い出した。キルファが、何か不気味なものを見たような顔をする。

「大した嬢ちゃんだよ、本当に！ 完全にやられたな……」

「……お褒めの言葉をいただいたのは嬉しいんですけどね」

キルファが無然とした顔で言う。

「そろそろ答えてもらいましょうか。さっきの質問に」

淡々としたその言葉に、サリクスは黙って肩をすくめて見せた。

「……いつから気付いてた？」

木に背中を預けて座りこみ、サリクスは悠然たる態度で言った。

「ほとんど最初からよ」

油断なくナイフを突きつけながら、キルファが無表情に言う。しかし、その目は刃のようにサリクスを見据えている。

「あたしも、エルフってのがどんな連中なのか、少しは知ってるのよ。やたらとプライドが高くて、人間を毛嫌いしている……昔、負けたのは事実だと思うんだけど。それに加えて、異様に集団心理が強い。狭い世界で生活してるから仕方ないけど。」

だから、村を出るなんて事は滅多にないはずよ。あるとすれば、何かをやらかして追い出された時くらい。……例外はあるにしても、旅に出るなんて簡単に許されるはずがない。しかも……あんたは、村での様子を見る限り、ずば抜けた使い手だったんでしょ？ そんな奴があっさり村から出られるなんて、思えなかったのよ。

ダレットの例もあることだし、家出なんて可能性もないわけじゃなかったけど……それほどの考えなしにも見えなかったし、ね」

「それはどうも」

サリクスはおどけた口調で言った。

「まあ、それで。はつきり言って、最初に警戒してた理由はあたしの偏見だったと思うけど……ちよつと警戒してたら、こそそこそく幻話>なんて使ってるんだもの。あたしたちと一緒にってから、何回も通信してたでしょ？」

まあ、ダレットは気付いてなかったし、馬鹿正直に信用してたみたいだから、どうしようかと思ってたんだけどね……特にあんたは何かする様子もなかったし。どっかところこそ通信する以外に」

言って、キルファは一瞬皮肉めいた笑みを浮かべて見せた。

「まあ、今ここにはダレットはいないし。今のうちに訊いておこう

かと思って」

「それで、寝たふりをして見張ってたわけか……」

大したもんだな、ダレットのことでさんざん落ち込んでるかと思  
ってたら、きっちりそれも見越してやがる」

ダレットの名が出て、キルファは一瞬眉を寄せた。

「あの馬鹿は、ほんと、一生治らないのかしらね……。剣の前には  
飛びこむわ、怪しい男は馬鹿正直に信用するわ」

二人は揃ってため息をついた。

「怪我はそのうち治るだろうけどなあ……。あれは無理だな、多分」  
サリクスが苦笑して言った。

「まあ、ダレットの話はこれくらいにしておいて。

あたしの想像だけど……。あんたは多分、監視者ってところでしょ？  
ただ単にくっついて様子を見張ってるだけ。そうでもなければ、  
今まで一緒にこのこ行動していた理由がないし」

「御明察」

サリクスが笑う。

「それじゃあ……。あたしたちを見張ってるように命令したのは、誰  
？」

「一つ訂正。俺が見張ってるように命令を受けているのは、嬢ちゃ  
んだだけだ。ダレットに関しては、特に何も言われてはいないからな。  
俺にこんなことを命令したのは……。村の爺さんたちだよ」

「長老格の連中ね」

エルフの村は、非常に閉鎖的な世界である。他のエルフの村との  
交流は帝国によってかなり制限されているし、人間と馴れ合うわけ  
もない。当然、村の中で指導者的な立場にいる者が存在し、絶対的  
な力を持つようになる。

「あたしたちが村の盗賊騒ぎに関わった後に、言われたの？」

「嬢ちゃんたちが来てから何日か経ってからだったかな。あれこれ  
顔付き合わせて話してたみたいだったが、いきなり『あの娘を見張  
れ』ときた。それで追いかけて……。まあ、こうなったわけだな」

何故自分がエルフに目を付けられるようになったのか、その理由は訊かなくても分かった。

暴走した魔導士を止めるために、キルファは村の真っ只中で〈白紙〉の魔法を発動させている。村のエルフたちも、それを目の前で見ていたはずだ。

自分たちが必殺と頼む力をあっさりと無効化する魔法。それは脅威以外の何者でもないだろう。しかも、今は失われているとされる遺失魔法なのだ。目をつけるのも当然である。

「ああ……だから関わりたくなかったのよ、エルフ連中になんて」  
今更ながらキルファはぼやいた。当時もキルファは関わりないことを主張したのだが、ダレットが突っ走ったせいで、結局キルファも首を突っ込むことになった。

「……悪かったな。エルフ連中なんか、で」  
サリクスが自嘲気味に笑った。その顔に、キルファが一瞬のけぞる。

「で、それで急いであたしたちを追いかけてきたわけね。途中であたしたちは結構足止めを食ってたし、追いつくのは簡単だった……」

「そういうことだな」

サリクスはあっさりと頷いた。

「それで。〈幻話〉で通信してたのは？」

「村の魔導士だよ。言っておくが、俺が報告してたのは現在位置だけだ。それ以外のことは言っていない……まあ、言うこともねえけどな」

「あたしを追跡して、どうするつもりなのかしらね？」

「さあな……だが、爺さんたちの独断ってわけでもなさそうだった。他のエルフの村と〈幻話〉やら何やらで、あれこれ話してたみたいだった」

「……他の村？」

キルファが眉をひそめる。〈幻話〉の魔法に距離制限はなく、理論上は大陸の何処とでも通信が可能だ。無論、通信の相手となる魔

導士の存在が前提となるが。

帝国の目を盗んで、魔法でエルフ同士が通信することがあるのは、キルファも知っている。だが、どうにも組織的な動きのように聞こえた。

「……それと。あと二つだけ訊いていい？」

手にしたナイフを握り直しながらキルファは言った。

「ここで、あたしにべらべらとそんなことを喋って良いわけ？ それとも、嘘だからあっさりと喋ってるの？」

金属の柄に巻いた、薄皮の感触が手に馴染む。使い込んだものだけに、ある手触りだ。

「……別に良いんじゃないか？ 嬢ちゃんに喋るなどは一言も言われてないからな」

サリクスはあっさりと云ってのける。張り詰めていた緊張感が一気に失せ、思わず身体が横に傾く。

「あ……あのねえ……」

傾いた身体と氣力を何とか立て直し、キルファはうめくように言った。

「こういう奴だと分かってはいたつもりだけどさ……」

口の中でぶつぶつと呟く。横でサリクスが何か言いたげな顔をするが、キルファは無視する。

「それと。質問はあと一つだけ……」

もしここで、あたしがこれを捨てたとしたら……あんたはここから立ち去る？」

キルファはゆっくりと、左手を上げる。指に嵌めた蒼い石の指輪を、演技でもするように引き抜いて見せた。

＜白紙＞の魔法の指輪。これを失えば、キルファは遺失魔法を使うことは出来ない。サリクスもそれは承知しているはずだ。

「嬢ちゃんたちに再会した時に、俺が言ったこと……嬢ちゃんは嘘だと思ってるみたいだが、半分は本当だよ。」

爺さんたちが、俺を指名したわけじゃなかったからな。誰か一人

行け、って言うんで、俺が手を挙げたんだからな」

つまり、サリクス自身にも、村を出たいという思いがあったのだ。そして、キルファとダレットに対する好感も。

「要するに。出て行く気はないってわけね」

キルファが息を吐きながら言った。握っていたナイフの柄からゆっくりと手を離し、腰の後ろに差した鞘に納めた。

「そういうことだな……実際、ダレットと嬢ちゃんは見てて飽きないからな」

サリクスが不意に何かを思い出しでもしたのか、かすかに吹き出した。

「……何よ。何か不気味、それ」

「いやまあ、前に嬢ちゃんの姿が見えなくなったときのダレットなんか、無茶苦茶笑えたぞ。袋の中とか茂みの中ばかり搜してたからな。よっぽど気が動転してたんだろうな」

「あたしは檻から逃げ出した珍獣か……？」

思わずこめかみを押さえ、キルファはうめいた。

「……とまあ、俺についての話はこれくらいでいいか？」

不意に、サリクスが真面目な表情になって言う。

「まあ、今のところはね」

キルファが、やや無然とした顔で応じた。今の話が本当だと言う保証もなかったが……それを追及する切り札も手元にはないのだ。

不審なところがあつたら、それからでも遅くはあるまい。

（無理にでもそう思っておくしかないわね）

そこまで考えて、ようやくキルファは納得したような顔をした。

「……とまあ、俺もべらべらと喋ったことだし。ついでに、今度はこっちから訊いてもいいか？」

サリクスが尋ねる。

「質問によるわよ」

キルファが淡々と応じる。何が言いたいのかは知らないが、あまり真面目に答えるつもりはなかった。



「嬢ちゃん、自分が魔法を使えることは最初から知ってたんだろ？  
……それなのにどうして、あそこまで追い詰められなけりゃ使わなかったんだ？」

魔物を、一撃で倒した魔法。確かに、最初から使っていれば話は簡単だった。それは分かっている。しかし……

「……………」

キルファは黙りこくり……両の拳を握り締めた。

「出来れば、一生使いたくなかったわよ……こんなもの」

キルファはうめき、大きく息を吐いた。

「あの時も……傷を負ったのが自分自身だったら使わなかったと思うわ。だけど……大怪我をしたのはあの馬鹿だった。

自分のせいで死なせたとなったら、さすがに寝覚めが悪いからね

……………」

ぽつり、ぽつりと言う。

「……使いたがらないわけは？」

サリクスが静かに訊いた。

「……どうしても言わなきゃ駄目？」

「どうしても、とは言わねえけど……言いたかないが、ダレットが大怪我をした理由の一つは、嬢ちゃんが魔法を出し惜しみしてたせいだと思うぞ。

それに罪悪感を感じてるなら、……言った方が少しは落ち着かねえか？」

諭すようにサリクスは言う。

正直な話、キルファが昔、どんな思いをしていたのかには興味がなかった。むしろ、エルフたる自分にとっても耳が痛いだけである。相当、辛い思いをしてきたのであろうから。……ダレットに出会うまでは。

だから……今、敢えて尋ねたのは、キルファのためという意味合いの方が強かった。簡単に話すとは思えなかったが、少しは彼女の

心が軽くなるような、そんな気がした。

キルフアは黙って考え込んでいる。

ややあつて……観念したように、大きく息を吐くとサリクスに背中を向けた。

紅い炎。血。そして……エルフ族。

それと種族を同じくするものが、今、目の前にいる。

それなのに。どうして話す気になったのか。それは、自分自身にも分からなかった。

「……ハンザって村の名前、聞いたことがない？」

唐突にキルフアが訊いた。サリクスは、慌てて記憶を辿る。

「確か、王都……ラインガルドに近いところだったよな？ エルフにとつちや辺境ってんで、名前くらいしか知らねえが……」

そこで、サリクスは何かを思い出したように手を叩いた。

「そうか、何で聞いたことがあるかと思ったら、二年くらい前に変な事件があったんだ。大火事とか何とか……」

そこまで勢い込んで言い、サリクスははっとした顔でキルフアの顔を窺った。後ろを向いているから、無論表情は分からないが、キルフアは自分の膝を抱いて顔をうずめている。泣いているように見えた。

「あたしはね、二年前までそこにいたの。母親がエルフだったから」  
淡々とキルフアが語る。二年前から自分を苛んできた罪の意識。  
もう、流す涙など枯れ果ててしまったような気がする。

「父親は？」

キルフアの母親がエルフとなれば、父親は人間であるはずなのだが……

「死んだってさ。あたしが生まれる前に」

それだけ言い、思い出したようにキルフアは付け足した。

「村の連中に袋叩きにされて、ね」

確かに、今大陸を支配しているのは人間だが、エルフの村においては、通りかかった人間に暴行を働くことなど日常茶飯事だ。数の多い方が正義、と言うより、単に憂さ晴らしをしているだけなのだろう。

「……………」

エルフの中で生きてきた者として、その様子をはっきりと思い浮かぶだけに、サリクスは眉根を寄せて、情けないとでも言いたげな顔をした。だが……そんな種族に自分も属していることは事実なのだ。

「まあ、顔も知らない父親だから、実感がないけどね。生まれたときには、もう母さんしかいなかったし」

サリクスの考えを見透かすかのように、キルファが言った。

「一つだけ……言っちゃ悪いが、よく嬢ちゃんの母親も無事だったな。ついでに、嬢ちゃんも」

人間の子供を身籠った女など、エルフにしてみれば裏切り者ではない。まして、閉鎖された一つの世界であるエルフの村でのことだ。良くて村から追い出されるか、悪ければ人間の男諸共殺される可能性すらある。実際、彼女の父親は殺されているのだ。

「殺せなかったのよ。あの連中は、母さんを。……母さんは村で一人の医者だったし、ついでに優秀な魔導士だったから」

辺境の小さな村では、医者……ほとんどの場合、薬師も兼ねるが……は得難い人材だ。それに防御力となる魔導士を兼ねていたとなれば、キルファの母親は村にとっては貴重な存在であつたろう。裏切り者として殺すのは簡単だが、失うものはあまりにも大きい。

「それで、辛うじて殺されるのだけは免れた、ってなわけか」

「そういうこと。まあ、母さんはともかく、あたしは生まれてすぐに殺せって意見が多かつたらしいけどね。母さんが必死に粘ったお陰で、何とか今まで生きてるけど」

キルファは他人事のように淡々と言う。その凄惨さすら感じられる無表情に、サリクスは思わず背筋が寒くなるのを感じた。

「で、まあ。村の連中からはさんざん言われたけど、何とか生活してたのよ。母さんの仕事を手伝ったりして」

サリクスはふと思いついたことがあって、手を挙げる仕草をして尋ねた。

「もしかして……嬢ちゃんがやたらと薬について詳しくったりするのは……母親に教えられたのか？」

「そりゃーもう。徹底的に叩きこまれたわ。母さんにしてみれば……何か役立つ技術を身につけておけば、命が助かることもあると思っただけでしょうね」

母親に仕込まれたのは読み書きから始まり、医療技術、薬草に関する知識、そして魔法理論と言ったところだ。辺境の者としては、母親はかなりの教養を持っていた。

周りのエルフたちからは避けられていたが、それなりに平和な日々だった。――二年前までは。

「でも……二年前に、母親も死んでね」

元々、病弱と言うわけでもなかったのだが。キルフアが生まれてからというもの、心も身体も休まる日がなかったのだろう。

「二年前か……」

サリクスも、思わず顔が強張るのを感じていた。

二年前。

自分を必死に護ってくれた、母親のエレナが死んだ。

その時の記憶はあまりない。死というものが、あまりにあっさりとしていて。苦しむでも泣き喚くでもなく、静かにエレナは逝った。医者として、自分の死期をある程度悟っていたのかもしれない。だが。

最後に母はこう言ったのだ。

「ねえ……キルフア」

枕元で呆然としている自分に、エレナは静かに手を差し伸べた。

「あなたの父親のような人がいるんだから、人間だって悪い人ばかりじゃないかもしれない。本当はそんなものは関係ないのよ。私は無理だったけど、あなたならその束縛をはね除けられるかもしれない。

だから、別の場所に行きなさい。そうして……別の道を探してみ  
て」

その直後に起こることを、予見したかのような母親の言葉だった。

「母さんが死んで……村の知り合いもいたし、何とか葬式の真似事みたいなことだけはやったのよ。ぼうっとしていてあんまり覚えてないけど」

特に何かやったわけでもない。ただ静かに、母親を見送っただけだ。

「父さんと一緒にしてくれ、とは言われてたんだけどね……あたしじゃ無理だったわ。何しろ、父さんは墓もないらしいし」

キルフアは肩をすくめるような動作をして見せた。

「で、その後。母さんが死んでしまえば、あたしが村で生きている必要はなかった。何しろ、母さんの機嫌取りのためにあたしを殺さ

ないでいたようなものだったからね」

エレナを村に繋ぎ止めるために、キルフアは村にすることを許されていた。唯一の命綱がなくなってしまえば、後は始末されるだけだった。

「な……」

サリクスは言葉も出ない。だが、それは確かな現実味を持っていた。キルフアがいたというハンザの村も、サリクスがいたドラウイダの村も、実情は似たようなものだろう。

「しかしまあ……葬式が終わるなり、村の男が連れ立ってあたしを殺しに来るとは思わなかったわ」

子供一人を始末するのに、屈強な男が八人ほど。確実に期すというよりは、結託して罪の意識を薄めるためだったのだろう。

当時十二歳だったキルフアが、抵抗できるわけもない。咄嗟に逃げ出したは良いものの、あっさりと追い詰められた。

死にたくない。

想いはそれだけだった。

「それで……咄嗟に呪文を唱えた。その後の結果は……想像がつくでしょう？」

母親に魔法言語や魔法理論など、知識は叩きこまれていたものの、使ったことなどなかったのだ。半分だけしかエルフの血を引いていない自分が、使いこなせるわけもないと思っていたせいだ。母親が、何故か使用を厳禁していたのだ。具体的には、『お前には無理だ』としつこく言い続けられた。

だから、呪文を唱えたのは効果を期待してのものではなかった。もしかしたら逃げてくれるかもしれない、少しでも魔法が発動するかもしれない、そんな破れかぶれの行動に過ぎなかった。

だが。

咄嗟に唱えた＜風刃＞の呪文は予想以上の効果を発揮し、村の男

私たちは一瞬にしてただの肉の塊と化して転がった。

「……………」

キルファの魔法の威力はサリクスも目の当たりにしている。味方だと分かっている、思わず戦慄を覚えたほどの力だ。

その魔法を食らったらどうなるか……考えなくても想像がつく。

「……………っ！」

キルファも、その時の情景を思い出したのか、泣き出しそうな顔で唇を噛み締めた。自分の膝に、頭を押し込むように深くうずめる。「そこから後のことは……正直、よく覚えてないのよ。ただ、気がついたら、村が燃え上がって……周りには、血まみれの死体がいっぱい転がってた」

その真っ只中で、自分は呆然と立ち尽くしていた。

見覚えのある顔が、頭だけになって恨めしそうな目で自分を見ていた。自分が死んだことに気付いてすらいないのか、今にも殴りかかってきそうな表情で死んだ者もいた。胴体で綺麗に二等分された死体もあった。それから……

「……ああああ……」

キルファはがたがたと震えだし、頭を振った。だが、あの恨めしそうな目は、今でも自分を見ている気がする。血と内臓をぶちまけた死体が、ずるずると自分に向かって動いてきそうな気がする。

「……………」

サリクスも、惨劇の場を想像して唇を噛んだ。だが、慰めるような気にはならない。事情はどうあれ、この少女がやったことは間違いない事実だ。

肯定はしない。けれど……否定も出来ない。

二人とも、ただ黙っていた。重苦しい沈黙だけが、場を支配する。だが……キルファが魔法を使いたがらなかった理由だけは分かった。

魔法と、かつての惨劇が頭の中で結びついてしまっているのだ。魔法を使えば、また惨劇を引き起こすのではないかと言う危惧が、

常に頭から離れないのだ。

それは、正しいのかも知れないが。

以前は魔物に向けて魔法を使ったが、今度エルフや人間に対して使わない保証はないのだ。

ふうっとキルファは息を吐いて肩を落とし、サリクスの方に顔を向けた。心なしか顔が青ざめているような気がしたが、いつもの彼女の表情に戻っている。

「……それだけよ。あたしは燃えてる村から逃げ出して、王都……ラインガルドに潜りこんだ。そこで、スラムでつい最近まで生活してたわ。ちゃんとした盗賊なんてやってね。

まさか、あちこちを旅することになるなんて思わなかったわね……

……あの頃は」

ダレットとの出会い。ただの偶然に過ぎなかったが……それが、全てを変えたのだ。

キルファは言葉少なに語ったが、その過去にどれだけの想いがあったのか。サリクスには想像もつかなかった。

ただ、呆然と話を聞いているだけである。

「さて……あたしをどうする？」

皮肉と自嘲が混じった笑みを浮かべ、キルファは不意に尋ねた。サリクスは一瞬戸惑う。

「何にせよ、あたしは大量虐殺の犯人ってことには変わらないわ。どうする？ 同族の仇って言ってあたしを殺す？ それとも、あなたの親分のところに連れて行く？」

……むしろ、その方がいいのかもね。ずっとうなされるのも、いい加減疲れたわ……」

キルファは一瞬、遠い目をした。優しいが、哀しい色。

「俺にはそんな権利はないからな……だがまあ、正直な話、あつさりと許せるほど俺も人格はできてない。

だから……取引と行こうか」

サリクスの言葉に、今度はキルファがきよんとする。



「俺も、嬢ちゃんに弱みを握られてるからな。逆もまた然り、だ。だから、それを相殺するってのはどうだ？」

俺のことを嬢ちゃんはばらさない。その代わり、俺も黙っておく。……まあ、双方聞かなかったことにするってことだ。

これならどうだ？」

にやり、とサリクスは笑う。ややあって、キルファもつられるように同じ笑みを浮かべた。

「そうね。」

……その条件に乗ろうじゃないの」

聞かなかったことにするというのと、聞かなかった、では大きな差がある。実際は、そう都合良くもいかないのだろうが――何故か、キルファはそれで気分が軽くなるような気がした。

それでいいではないか、と思えたのは何故だっただろうか。

（まあ……実際は、嬢ちゃんの方が有利なんだけどな）

表情には出さず、サリクスは心の中でぼやいた。

（何しろ、嬢ちゃんに何かあったらあの男が黙ってないから……全力のダレットはさすがに俺でも相手は出来ねえだろうしな。

まったく……）

思わず、含み笑いが漏れる。キルファが不気味そうな顔をしたが、サリクスは気付いていない。

（とんだ騎士を従わせたお姫様だよ、本当に！）

その銀髪の姫君は、眉をひそめてサリクスを眺めている。

「……ねえ、何か変なこと考えてない？」

「いや、別に」

なおも気味悪そうに尋ねるキルファに、サリクスはそらっとぼけて笑って見せた。

「御飯持ってきたよー」

「ああ……有難う」

何処か間延びしたシェルタの言葉に、ダレットは柔らかく笑って

応じた。何とかベッドで起き上がれるようになったので、ゆっくりと渡されたスープを受け取る。

適度に冷まされたそれに口をつけながら、ダレットは考え込んでいた。

シエルタから聞いた話だと、自分は三日ほど意識を失っていたらしい。出血がひどかったとかで、まだ動く頭がくらくらする。

森に倒れているのを村人が発見して連れて来たと言うのだが……

(……どうなったんだ？ あの二人は)

銀髪の少女と、巨漢のエルフの姿が頭をよぎる。一緒にいた、仲間。

倒れていたのは自分だけで、他の者の姿はなかったらしい。自分が魔物の剣の前に飛び込んだときには、確かに一緒にいたのだが。

(確か、キルファを突き飛ばして……サリクスは倒れていた？)

一旦気絶させられた自分が意識を取り戻したときには、サリクスも似たような状態で倒れていた。自分と似たような方法で倒されたらしかったが。

自分は、キルファを庇った時点で重傷を負って動けなくなっていた。もしサリクスも動けなくて、最後にキルファ一人になってしまっていたとしたら。

キルファが、一人で魔物と対峙していたとしたら。

(……………！)

キルファが……魔物に倒されていたとしたら。

からん、と手にしたさじが落ちる。横でシエルタが慌てて拾うが、顔面蒼白のダレットは気付いていない。

話の辻褄は合うのだ。キルファも、サリクスも魔物に殺されてしまったとしたら。重傷を負った自分だけが後で意識を取り戻して、無意識のうちに村の側まで歩いて来たとしたら。

「なあ……シエルタ」

呆然としつつも、ダレットは尋ねた。

「俺が倒れていた場所……確かに、俺が自分で歩いて来たのか？」

ずっと意識を失うほどの怪我で」

シエルタは首を傾げて少し考え込んでいたが、ややあって首を縦に振った。

「そうだと……思う。父さんの話だと、周りに血が付いた跡とかひきずったような跡があったって言うから」

思わず拳を握り締める。力が入らない自分の身体が、これほどものかしいと思ったことはなかった。

（まさか……まさか！）

自分の思い違いであって欲しいと思う。だが、状況はあまりにも残酷だった。

「ちよっと、ダレットさん？ ……顔色が悪いよ？ ほら、まだ無理は出来ないんだから、寝てなくちゃ」

ようやくダレットの異変に気付いたシエルタが、強引にダレットを寝かしつけた。

枕に頭をうずめたまま、なおもダレットは不吉な想像を振り払えないでいた。

「……まったく、あの爺さん、人使いが荒いんだよなあ……」

シエルタはぶつぶつと言いながら村の外に出た。すぐ側に広がる広大な森に足を踏み入れる。地面はでこぼこしている上、木の根などが這っていて、慣れない人間ならすぐに転びそうだが、さすがに生まれたときから森の側で暮らしているシエルタはそういうことはない。すたすたと森の内部に入る。

狼がよく出没するので、「深入りはするな」と言われているが、シエルタは気にする様子もなく、どんどん奥に進んでいく。馴染みのある場所故か、警戒する様子すらない。

それが、時には命取りになるとも知らずに。

がさがさと足音がした。

（……誰か来た？）

気配はもう近い。今から逃げ出したら、かえって見つかる可能性がある。一瞬の躊躇のあと、キルファは近くの木にすると登った。身軽なキルファは、あっという間に高い枝に到達する。

キルファが避けるのと入れ違いに、人間が姿を現した。キルファは、音を立てないように上から観察する。見つかったらどう対処したのか、必死で考えを巡らせる。

眼下にいるのは、まだ若い女だった。キルファよりは少々年上であるようだが。割と珍しい、色の薄い金髪をゆるめの三つ編みにして束ねている。銀髪の自分もあんな風に見えているのだろうか、とふと思った。

簡素な服からして、村の人間だろう。上にいるキルファに気付く様子もなく、少女は座りこむと側に生えている草を覗き込んでいる。（まいったわね……通り過ぎてくれたら問題はなかったのに）

これではキルファは動けない。少女がいなくなるまで、木の上で息を潜めていなくてはならない。だが、元々忍び歩きの類は得意としている分野だ。それほど難しいことでもないので、キルファは野次馬気分で少女を眺めていた。

少女は、地面に生えている草をあれこれ抜いては首を傾げている。何かを探しているような風情だ。

（何をやってるんだか……）

やたらとのろのろした少女の動作に、キルファが呆れかけたその時。

「ああもう！ 何処にもないじゃないか、エリオファルなんて！」  
少女がやつ当たりのように怒鳴り散らすのが聞こえた。

（……エリオファル？）

キルファは咄嗟に記憶を探る。エリオファル。確か、森や山でよく見られる植物なのだが、薬草としても使われる草だ。滋養強壮や血を作る作用があるとか何とか、母親から聞いた気がする。キルファはその形状は知っているものの、使ったことなどはなかったが。（血……か。ちょっと待って。あの女、どう見ても村の人間よね？）

ダレットは、腹を切り裂かれて大怪我を負って村に運ばれた。当然、かなりの出血のはずだ。そして、あの少女が探しているのは怪我人に与える事の多いエリオファル。

（もしかしたら……）

あの少女が探しているのは、ダレットのための薬草かもしれない。となれば、最低限、まだ死んではないということか？

「良かった……」

知らず知らずのうちに、言葉が漏れる。キルファは慌てて口を押さえ……そして、大きく息を吐いた。全身から力が抜けていくような気がする。安堵の笑みが浮かんだ。

（まあ、勝手な推測だけどね）

安堵の笑みは、苦笑に変わった。勝手な推測だけで、決め付けてしまうわけにも行かないだろうが……あながち間違いでもないだろう。この推測は。

安堵と同時に、ふと、キルファは目の前の名も知らない少女に嫉妬を覚えた。今まで、ダレットが怪我をするたびに、文句を言いながらも治療していたのはキルファだった。彼女しか医療に関する知識がないから当然なのだが……その居場所を奪われてしまったような気がした。

そして、そんなことを思う自分に対する嫌悪も。

あの時、自分の力ではどうしようもなかった。だから、わざわざ森に放置するなどという手段を取ったのだ。少しでも確率の高い方に賭ける事にして。

そして、自分はその賭けに勝った。それで良いではないか。結果、自分の思い通りになったのだから。

そのはずなのだ。理論上は。それなのに……

（あたしの身勝手さなのよね、こんな風に思うのは。結局のところ……）

分かっている。ダレットが大怪我をしたのは、自分を助けようとしたせいだ。だから……ダレットを助けるのもまた、自分でありた

かったのだ。

だが、現実にはそれは不可能だった。そして、自分がいたかった場所にいるのが、おそらくはあの少女だ。

「……………」

本当に、自分がやりたかったことは何なのだ？ ダレットに助かって欲しいと思っっているのか？ 自分はただ『ダレットを助ける自分』でありたかっただけはないのだろうか？

そして、それは……ダレットのためなどではなく、ただ単に自分の自己満足に過ぎないのではないか？

「何だかね……」

どんどん落ち込んでいく思考。自己嫌悪に陥ってしまうような気がして、キルファはそれ以上考えるのを止めた。だが……前から時々思っていたことではあるのだが。

一番最初に出会ったとき、ダレットに自分はこう言った。『そういうのを何て言うか知ってる？ 偽善、って言うのよ』と。結局、自分もそれと同じではないか。

人のためと、自分のため。その境界線は、一体何処にあるのか。

（……………）

気が付けば、眼下の少女はまだ、葉草を探して頭を抱えていた。どうやらまるで見つからないらしい。

キルファもさすがに焦ってきていた。いつまでも息を潜めて考え込んでいるのも嫌だし、いつ見つかるとも知れないのだ。

出来れば、とつとと目的を果たして帰ってもらいたいのだが。

（どうしたものかしらね……）

キルファが思わず頭を抱えて考え込んだ時。

遠吠え。そして殺気。

反射的に、キルファは身構えていた。

高い位置にいるキルファは、即座に状況を把握していた。  
狼だ。

やや遠い場所から、狼が二匹ほど、少女を狙っている。今はじりじりと距離を詰めているようだが……一気に走り出したら、一瞬にして少女に喰らいつくだろう。

しかし、今だに少女はそれに気付いていない。元々狼が出ることは分かっていたはずの森に一人でのこのこ入り込むこと自体が愚の絶頂だが、ここまでくると、その脳天気を殴り倒したくなってくる。

襲われることなどないとたかをくくっていたのかどうかは知らないが、これでは襲われたとしても自業自得であつた。

(さて……どうしたものか)

本来なら、キルファに助ける義理などないのだが。

この少女がもし襲われて村に帰らなければ、村の人間たちは当然疑問に思うだろう。大勢で森の中を捜し始めたら……キルファとサリクスも見つかってしまう可能性がある。今、住処にしている洞穴には食料の蓄えなどが山積みになっている。そこから、不審な人物の気配を感じるのは難しくない。

結局のところ。森で変な騒ぎを起こされると、こちらにも害が及ぶ可能性があるのだ。

はあ、とキルファはひそかにため息をついた。

いつもいつもこうだ。気がついてみたら、柄にも合わない親切をする羽目になっている。それで喜ぶのは、おそらく今寝こんでいるはずの男だけだろう。

キルファはごそごそと懷をあさる。取り出したのは、いつもの投げナイフではなく、太い針だ。その先端は、黒く染まっている。

暗殺などに用いられる針である。急所さえ知っていれば、人間な

ど針一本で殺せる。本来なら猛毒を塗って使うのだが、今塗られているのは即効性の睡眠薬である。元々が、以前に盗賊をやっていたときに使っていたものだから、毒を塗る必要などなかったのだ。

狼は段々距離を詰めてきている。そろそろ、一気に少女に襲いかかるうとする頃だ。

「いけるかしらね……」

投げナイフなら絶対の自信があるが、投針は最近触ってすらいない。それに、キルファのいるのは高い木の枝の上だ。普段とは状況が異なる。

（お願いだから吠えたりしないでね……）

指の間に針を挟み、手首だけで勢いをつけて放つ。かすかなきらめきだけを残し、鋭く尖った先端は眼下に消えた。

そして。

「ふう……」

キルファは安心したといった表情で手を下ろした。その下で、針の突き刺さった狼が地面に伏せ、ぴくりとも動かない。葉が即座に効いたようだ。正直、暴れられたらどうしようかと思っていたのだが。

「意外に使えるかも……これ。今度もう少し研究しようかしらね」

予備に手にしていた針を眺め、キルファは思わず呟いた。刺さっただけでそれなりに相手に傷を負わせられる投げナイフと比べて、投針は急所に当たれば一発だが、外せば大して効果がない。だから、今まで使おうとはしなかったのだが、やりようによっては剣よりもずっと強力な武器となる。

（それにしてもねえ……）

狼から少し視線を逸らせば、のん気に薬草採集に精を出す少女の姿があった。もう少しで死ぬところだったなどとは、つゆほどにも思っていないらしい。

（あそこまで鈍感な人間も珍しいわね、ほんと）

実際のところを言えば、キルファやダレット、サリクスの方が敏



感過ぎるだけなのだが。そうとは気付かず、キルファは呆れた顔で苦笑した。

「ああ、俺もそんなことがあったな」

その夜。キルファから愚痴混じりの話を聞いたサリクスは、思い出すようにそう言った。

「まあ、俺は人間と会ったわけじゃけどな。狼を見つけて、こいつらが村に行ったらまたややこしいことになるなー、と思って、退治する羽目になった」

狼が出るから、と村人が恐れて森に近づかなければ問題はないのである。だが承知はしていても、森の資源は必要不可欠だ。人間が入ってくることもままある。

「あたしの想像だけどさ……この森に狼が出るのって昔からなんじやないかしらね？ 村の連中もそれを知ってるから、ほいほいと入ってくるわけで。」

それなのにさ、あの馬鹿……」

ちよつと狼が出る、と愚痴を聞いただけで退治を引き受けてしまふのだから、考えなしを通り越してただの馬鹿である。

「そうだろうな……多分」

サリクスも頷くと、疲れたとでも言うようにその場に寝転がった。「何だか、結局ダレットの思い通りになってる気がするな……何だかってあいつが寝てる間に、俺たちがせつせと狼を潰さなきゃなんねえんだ」

「言えてるわ、それ……」

キルファも苦笑する。

「ま、そのツケはあとでたつぷりと払わせてやれば良いさ。とにかく、ダレットが無事らしいってのは分かったんだろ？ 心配なもの分かるけどな、今度は嬢ちゃんの方が倒れちまうぞ。」

……たまにはちゃんと寝ておきな」

サリクスの言う通りだった。キルファ自身に自覚はないのだが、

ダレットと離れざるを得なくなってからと言うもの、どうにも寝つけず、寝てもうなされてすぐに跳ね起き、キルファはろくに寝ていない。

そのお陰で顔色はやたらと悪いし、目の下に隈が出来ている。以前のようにぼんやりとはしなくなっているが。

「ん……」

珍しく、キルファは後ろの岩の壁にもたれりと、目を閉じた。すぐに、すうすうと規則正しい寝息を立て始める。

普段はやたらと大人びた言動をする少女だが、寝顔だけは歳相応である。むしろ幼くさえ見えるその顔を、サリクスは面白そうに眺めた。

「……………」

夢でも見ているのか、何やらキルファは呟いている。言葉にならないそれを耳にして、思わずサリクスは苦笑した。

思いがけない訪問者が村にやってきてから、二十日以上が経過していた。

その客……ダレットは徐々に回復してきている。最初の怪我のひどさを見ているシェルタなどはその速さに驚いたものだったが、普段から鍛えている者は基礎的な体力が違うらしい。これは、コッフエルの爺さんの弁である。

まだ動き回することは制限されていたが、意識は取り戻しているし、ものも普通に食べられるようになっている。

生まれ育ったこの村から出たことのないシェルタには、王都で育ち、あちこちを旅してきているダレットの話は面白かった。最初は帝国騎士だというダレットに遠慮していたのだが、ダレットがあまり身分にこだわらない性格だと分かると、あれこれと質問攻めにし、ダレットを疲れさせてしまってから慌てて謝るなどということもあった。

ただ……一つ気になるのは。

やたらと出てくる、「キルフア」と言う名前。話からすると、一緒に旅をしていた人物らしいのだが、シエルタが「どんな人？」と訊くと、決まって話を逸らしてしまうのだ。

変わった響きの名前ではあったが、女だということは分かっている。ダレットが女性と一緒にいた、と言う事だけでも十分に腹立たしかったが、何故ダレットがその女性について言いたがらないのか。「むう……」

考えているうちに段々腹が立って、少々膨れっ面でダレットの使った食器を片付けていると、ダレットが真剣な表情で何やら考え込んでいるのが目に入った。自分と話しているときの優しい表情とはまるでかけ離れた、切羽詰った者の顔だ。

「どうしたの……？」

シエルタが尋ねる。ダレットはシエルタの言葉にも気付かない。繰り返してシエルタが言うのと、ようやくダレットは顔を上げた。

「ああ……」

いつも通りに笑って見せるが、その顔は無理しているようにしか見えない。

何か、自分に隠してでもいるのだろうか？

(……話してくれても良いのに。ずっとわたしは一緒にいたんだし。頑張って世話してたのに……そんなに、信用なく見えるのかなあ?)

シエルタが怒ったような顔になったのをダレットは見取り、何を考えているのかも察していた。

(……大丈夫、だよな)

それは一種の賭けだったが。何もしないでいるのが、一番いいことのように思えた。

「シエルタ。一つだけ、頼んで良いか？」

真剣な眼差しで自分を見つめるダレットに、シエルタは思わず頷いて見せながらも、思わず好奇心で胸が高鳴るのを感じていた。

「一箇所、見てきてもらいたい場所があるんだが……」

「見てきてもらいたい、場所？」

シエルタは首を傾げる。旅人であるはずのダレットが、何処か曰くつきの場所でもあるのだろうか。

「森の奥だ。多分、歩いて相当かかる……あの森は狼が出るはずだから、無理にとは言わない。むしろ、止めた方がいいかもしれないが……」

ダレットはざっと場所を説明した。言うまでもない。あの、魔物と対峙した場所である。

「そこを見てきて、どうするの？」

「そこがどうなっているか、知りたいだけだ……」

さすがに、その後の言葉は飲みこんだ。だが、シエルタは表情からあつさりとそれを察知する。

シエルタにしろダレットにしろ、考えていることがすぐに面に出る性質であった。

「そこをわたしが見てきて、どうなるの？ ……探しているものでもあるの？」

確かに、探しているものはある。出来れば見つかって欲しくはないものののだが。

「ねえ？ 何を探してるのか分からないと、わたしも困るんだけど」意地の悪い口調で、シエルタは言った。じつと半眼でシエルタに睨まれ、ダレットはどうとう観念した。

このシエルタと言う少女が、信用に値するか。賭けではあったが……ダレットは信じることにした。しばらく面倒を見てもらっている限りでは、大丈夫だと思えた。

「二人、探している人がいるんだ……」

それだけを、絞り出すように言う。シエルタは、唐突な言葉に戸惑いながらも、続けて尋ねた。

「ふうん？ そこに行けば見つかると思うの？ ……どんな人？」

当然来るであろう質問。これが、ダレットの悩みの種だった。普通なら困ることも何もないのだろうが、いかんせん……

「二人のうち、女の子の方は、シエルタより少し年下くらいだ。小

柄で、銀髪を肩の上くらいで適当に切っている。多分、白っぽい服を着てると思うんだが。

それから、もう一人は俺と同じ年くらいの男だ。かなり背が高い。茶色っぽい金髪……琥珀色とでも言うのか、そんな髪で、柄の長い戦斧を担いでると思う。

まあ、二人ともかなり特徴的だから、見れば分かると思うんだが……」

「まあ、そうだよ。銀髪なんてかなり珍しいし」  
シエルタは脳天気な顔で頷いた。

本当は、もっと分かりやすい特徴があるのだが。特に、銀髪の少女の方には。

しかし、言っているいいものか。もし喋ったと知られたら、少女はかんかんになって怒り出すだろう。まあ、それはどうでもいいのだが……

少女が今までひた隠しにしていたものを、ここで自分があっさりとばらしているものか。  
だが。

「……まだ何か隠してるでしょ」  
シエルタに睨まれ、ダレットはどうとう観念した。済まん、と心の中で呟く。

「……それから、女の子の方は、紫の眼をしている」  
シエルタの顔が凍りついた。

紫の瞳が何を意味するかくらいは、シエルタとて知っている。知っているから、呆然と呟いた。

「……ハーフの、子なの？」  
「ああ……」

ダレットは苦々しく頷いた。  
人間なら何とも思わないのだろうか。ハーフと知ただけで、皆驚き、或いは露骨に嫌悪の顔をする。エルフにもそれは言えるが、少なくとも彼らには同族がいる。

「もう一人は？」

動揺を押さえ、シエルタは何とか尋ねた。だが、頭はぐるぐると回っている。

「男の方は……エルフだ。耳が長いし、尖っているから、一発で分かる」

「は？」

今度こそ、シエルタは訳が分からなくなった。この、王都から来たという騎士が。この青年が、ハーフや、ましてやエルフと連れ立っていたと言うのか？

エルフは恐ろしい敵。そう、教え込まれてきた。実際、人間とエルフの歴史は争いだらけだったのだが。

それなのに、正義を護るはずの騎士が、エルフとハーフ？

「……シエルタ」

呆然としているシエルタに、ダレットはため息をついて語り掛けた。

「エルフだのハーフだのと言っても、少々見た目や力が違うだけだ。人間と、ほとんど変わらない。考え方ややっていることも、な。

まあ、自分と違うものをそうすぐに信じろとは言わないが……それでも、何の理由もなしに忌み嫌うのはいけないことだよ」

諭すようにダレットは言う。

ダレットの言っていることは正論だ。正しすぎるほどに正しい。だが。だからこそ……ダレットは気付いていない。

彼が期待するほど、人間やエルフの心というものは強くはないのだ。正論を聞かされたからとて、あっさりと理解できるはずがない……いや、理解はしても納得など出来ない。

誰もが、一人でいるのを恐がる。自分の弱さを知っているから。だから、同じ者同士で集まり、力を足し合おうとする。

同じ者同士で集まるにはどうしたら良いか。一番簡単な方法は、自分と違うものを見つけることだ。違うものを一緒に忌み嫌うことで、自分たちの結束を確認する。その違いは、能力であれ、考え方

であれば、容姿であれ……何でもいいのだ。とにかく、自分との違いがあれば。

その自衛行動を、責められる者などいないだろうが——確実に、傷つく者が生まれるのだ。それだけは確かである。

「……………」

シエルタは黙ったままだ。彼女自身はエルフに会ったことすらないが、エルゼシア帝国の建国戦争があったのは五十年前だ。まだ、生きている者もいる。老齢の元兵士たちから、シエルタはエルフへの恨みをさんざん聞かされてきている。

右足を失った老齢の男が言ったものだ。「あの連中だけは決して許さねえ。魔法を使えるからって威張りやがって、殺されるかと思っただ。俺は足をやられたが……仲間も、家族も、皆あいつらにやられたんだ」……と。

その老人はもう死んだが……死ぬ直前まで、エルフへの恨みを言っていた。だが、老人は想像すらしなかっただろう。エルフも、老人とほぼ同じようなことを言っていることに。

シエルタも、想像すら出来なかった。ただ、エルフへの恐れと憎しみだけがあった。

そして、その混血児。種族を裏切った者の子供。ハーフへの憎しみは、ある意味、エルフに向けられるものよりも大きかったかもしれない。

何故、エルフを忌み嫌うのか。それを考える者などいない。ただ、憎しみだけが膨れ上がり、受け継がれる。

普段は純朴な少女が、エルフの話となると、憎しみと怒りに染め上げられた表情をする。人間の自分には、優しい、素直な笑顔を見せるのに。ダレットはむしろ悲しくなった。

「頼む、シエルタ」

うめくようにダレットは言う。シエルタは複雑な表情をしてたが……ややあって、ようやく首を縦に振った。

「怖いのは分かる。信じられないのも……だが、俺の仲間として探

してきてくれないか？」

生きているか死んでいるかだけでも。その言葉は、さすがに言えなかった。あの二人が死んでいるなどとは思いたくない。

シエルタには悪いが……彼女への依頼が徒労に終わることが、一番良いのかもしれない。あの場所に、「死体があった」などと言われるのは御免だ。

シエルタはなおも考え込んでいる。エルフは信用など出来ないが、この騎士は信用できる。多分、自分を信用しての依頼なのだ。それならば……

「……父さんたちには、黙っておいた方が良いんだね？」

エルフたちが近くにいるかもしれない、などとは。

シエルタの言葉に、ダレットは泣き笑いのような顔で応じた。



ダレットから借り受けた短剣を手に、シエルタは森の中に入った。この森には小さいときから何度も入っているし、馴染みのある場所だが、さすがに最深部までは行ったことがない。昔から度々狼が出るので、危険とされていたからである。

ダレットから短剣……無論、騎士として下賜されたものとは別である……を借りて来てはいるものの、正直、どれほど役に立つのかは怪しいものだ。刃物を扱うことはあっても、武器として訓練を受けたことなどあるわけがなかったからである。

ダレットは別に長剣を持っていたから、普段はそちらを使っているのだろう。短剣は予備として持っているものらしい。

シエルタはダレットの剣技など見たこともないのだが、騎士への先入観から「とてつもなく強い」と決め付けていた。……その割には、大怪我をして倒れていたが。

それはさておき。

両親に適當なことを言って森に入ってから、数時間が経っている。場所はダレットからあれこれと説明を聞いているので、大体見当が付く。

そろそろ、着くと思うのだが。

「エルフと、ハーフかあ……」

ふと呟く。

エルフについてはさんざん聞かされてきたので、その存在自体はよく知っているものの、まだ見たこともないのだ。好奇心がないわけではなかったが、恐怖がどうしても先立ってしまう。

尖った耳を持つ種族。得体の知れない、魔法を使いこなす連中。サリクスやキルフアら、実際に使える者にしてみれば、魔法とて単なる技術であったが、まったくその原理が理解出来ない人間にしてみれば、胡散臭い奇跡にしか過ぎない。

しかも、その魔法に、人間は昔から苦しめられてきているのだ。恐がらない方がおかしい。シェルタは、まったく魔法を見たことがない。

「大丈夫、だよ。多分……」

何の根拠もなかったが、とりあえずシェルタはそう思っておくことにした。

「ん……？」

特にやることもなく、森の中で暇を持て余していたキルファは、ふと遠くに目をやった。

何しろ、ダレットが回復したと分かるまでは森から動けないのだ。それでいて村の人間に見つかったらまずいことになるというのだから、面倒くさい話である。ただ、「狼が出没する森」であるので、村人があまり奥まで入ってくることはなく、キルファとサリクスはあまり気を使っていなかったが。

キルファの視線の先を、人影が通り過ぎて行く。今いる場所はかなり村から離れているはずなのに、である。

それに、人影は小柄だった。大人の男ではあるまい。女か、それとも子供か……

「どこの馬鹿よ、まったく」

警戒と好奇心が入り混じった顔で、キルファは人影を追った。その顔が、すぐに不審に変わる。

遠くを歩く人影には、見覚えがあった。白っぽい金髪の女。顔まではよく覚えていないが、間違いない。この間、狼に襲われたことにも気付かずに薬草取りをしていた女である。

おそらくは……負傷したダレットに何らかの関わりがあるであろう女。

「自殺志願者とも言うのかしらね、あの女……」

軽口を叩きながら、キルファは考え込み……きびすを返すと小走りに駆け出した。

「なっ……」

言葉も出ない。

森の中で、シエルタは呆然と立ち尽くした。

ダレットに教えられた場所である。そのはずだ。しかし、これは

……

地面が、一直線に抉られている。通り道にあったであろう木々は吹き飛ばされ、あるいは消し去られてもしたのか、焼け焦げた木屑だけが残っている。

まさしく、森に突如として道が現れたような光景だった。

しかし、シエルタが何よりも戦慄したものと言えば。

「……地面が、ここだけ違う……」

シエルタは思わず地面にしゃがみこむと、大地を手で撫でた。その感触は、冷たく滑らかだ。陶器を触っているような感覚である。土の、あのざらざらとした感覚はない。

超高熱で、土を構成している鉱物が溶けて固まったのだ。もっとも、高熱にさらされたのは表面だけで、また一瞬だったため、大地の表面だけが殻のように固まった状態になっている。

「何なんだろう、これ……」

もっとも、シエルタにそんな理屈が分かるだけでもなく、彼女はただ啞然としている。

固まった地面の上には、多少土ぼこりが載っているだけである。

つまり、この異常な地面が造られてからそう経っていないと言う事だ。時間が経てば、風で土の中に埋もれてしまう。

少し前。この森で、何があった？

「……ダレットさん、よね」

言ってから、ぱん、と両手を打ち合わせる。ダレットが倒れているのも少し前だ。

「そう言えば……」

ふと、シエルタは思い出した。村に重傷のダレットが担ぎ込まれ

たどさくさで、何時の間にか忘れていた話なのだが。

「あの日、なんか遠くで爆発みたいな音が聞こえたとか何とか」

その音で慌てて飛び出したら、ダレットが倒れていたのである。後で調べてみたところ、確かに森の中に土砂が吹き飛ばされた跡があったそうのだが、原因はとうとう分からずじまいだったはずだ。

謎の爆発。異変が起こった地面。こんな現象を起こせる存在……それは、ただ一つだ。

「魔法……」

呟いてから、もう一度光沢を放つ大地を見つめ、シエルタは戦慄する。

これだけの力があるのか。こんな、信じられないようなことが……

「でも……訳が分からない」

シエルタが眉をひそめて呟いた、その時。

がさり、と言う音がした。

「誰っ！」

シエルタはびくっと肩を震わせ……それから、ゆっくりと振り返った。

「やっぱり、ダレットが何か言っていたみたいね？」

陰から金髪の少女……とは言っても、キルファよりは年上らしいが……を覗きこみ、キルファは囁いた。

「らしいな。そうでもなければ、ここに真っ直ぐは来ねえだろうしな」

同じく、小声でサリクスが言った。

二人とも、遠くから少女の様子を窺っている。本人に気付かれないように、二人でずっと後を追ってきたのだ。

キルファは小柄な上、忍び歩きに長けているからそれほど問題はなかったが、サリクスはやたらと大きい体躯に加え、これまた巨大な長柄戦斧など担いでいるものだから、いつ見つかるかと冷や汗をかきっぱなしだった。はつきり言って、ここまで見つからなかった

のは、ひとえにあの少女がやたらと鈍いからと言うことに尽きる。  
追跡も、楽なものではないのである。

これほど苦勞して、追ってきた理由はただ一つ。ダレットのことを知っているようであれば、様子を聞き出そうと思ったのだ。それが無理でも、彼女の行動から何か嗅ぎ付けられるかもしれない。

普通なら問題はなかったのだろうが、また種族間の悪感情が邪魔をした。下手に顔を見せれば、質問する前に逃げ出される。何しろ、キルファはハーフ、サリクスに至ってはどこから見てもエルフだ。しかも、見るからに凶悪そうな長柄戦斧を担いでいる。

かと言って、いつもキルファがやるようにフードをすっぽり被ってみても、これはこれで怪しい。ただの通行人なら変な目で見られるだけだろうが、あれこれ聞き出そうと思ったら、余計な警戒心は障害になるだけである。

そんなわけで、跡を付けたはいいものの、二人はどうしたものかと顔を見合わせた。

その時。

「誰っ！」

少女の甲高い声がした。相当驚いたらしく、びくびくと脅えた表情でこちらを見ている。

「……どうする？」

「まあ……もう隠れるのは無理だろ、どう考えても」

こそこそと会話をしてから、二人は揃って肩をすくめた。

「……何か、余計に事態が悪化した気がするわね……放つといった方が良かったかしら？」

「それは結果論だろ。じゃあねえさ、こうなったら」

「ダレットと言いあんだと言い、何で男ってこうも発想がお気楽なのかしらね……」

ぶつぶつと言いながら、キルファは木の陰から足を踏み出した。

白っぽい服を着た少女。琥珀色の髪で、長柄戦斧を担いだエルフ。

少女の方は深く被ったフードで顔を隠しているが、その隙間からこぼれているのは銀髪だ。

間違いない。ダレットが言っていた二人だ。

……とは即座に理解したものの。

「こっ……来ないで！」

シエルタは悲鳴のように叫ぶ。短剣を鞘から引き抜き、前に突き出す。本人にしてみれば構えているつもりなのだが、サリクスとキルフアから見れば、ただ手にしているのと何ら変わらない。

「あー……別に、君をどうかする気なんぞないから、少しは落ち着いて……くれねえよな」

サリクスがなだめようとするが、シエルタはますます恐慌状態に陥るだけである。それも当然だ。

サリクスが肩に担いでいるのは、刃が剥き出しの長柄戦斧なのだから。

「いやあの、せめて、その物騒な短剣だけでも降ろして欲しいんだが……」

「あんたが言っても何の説得力もないわよ」

キルフアが横でため息をついた。

「その長柄戦斧をどうにかしない限りね……」

もっとも、サリクスは長柄戦斧などなくとも素手であっさりと人間を絞め殺せそうな体格をしているため、たとえ長柄戦斧を降ろしてもシエルタを説得するのは無理だと思った。

キルフアはまた小さくため息をつくど、すたすたとシエルタに向かって歩き出した。その行動に、がたがたと震えたままのシエルタががむしやらに短剣を振り回す。

ぶん、と切っ先がキルフアの顔をかすめた。銀色の髪が一房、斬られてはらりと舞い落ちる。きらきらと、髪が日光を反射して光るのが見えた。

「……よっと」

キルフアが短剣の切っ先を避け、身を翻した次の瞬間。

短剣は、手品のようにシエルタからキルファの手に移っていた。シエルタは、自分の手に短剣がないことにすぐには気付かなかった。拳をなおもキルファに向かって振り降ろし、それから空の手を見つめて絶句する。

一方、キルファは淡々と……今しがた、短剣をもぎ取ったことなど何とも思っていない様子で、話を続ける。

「あの男……あんな物騒な武器を持っても、あんたを殺す様子なんてなかったでしょ？　つまり、あたしたちは即座にあんたに危害を加える気なんてないの。」

そういうわけだから。……少しは話を聞いてくれない？」

短剣を手で弄びながら、キルファは視線でサリクスを指し示した。それから、嘆息する。

「……なんつうか。俺より嬢ちゃんの方がよっぽど物騒なんじゃ……」

あまりに物騒な説得の言葉に、サリクスが呆れ顔で呟く。キルファはそれを意に介する様子はなかったが。

「この短剣、女子供が使うには大きすぎるわね。どっかから借りたんだろうけど……素人は安易に振り回さない方が身の為よ」

キルファは手にした短剣を見て言ったが……不意に、眉を跳ね上げる。

「……どこかで見覚えがあるわね、これ……」

やや大振りであるという他には大して特徴もない短剣だったが、確かで何処かに見たものだ。自分が使っているものではないから、となると……

ダレットが普段使っている長剣。それと対にでもなるように形が似ているのだ。思い出してみれば、わずかに施された装飾や柄に巻いた薄皮にも見覚えがあった。

「……そりゃそうでしょ」

今まで俯いて黙っていたシエルタが、不意に口を開いた。

「ダレットさんから借りた物だもん、これ……あなたたちのことも

聞いてるんだから、わたし。

琥珀みたいな色をした髪のエルフと、銀髪のハーフがいるって」  
キルファの唇の端が一瞬、おかしい形に歪んだ。フードに隠されているので表情ははっきりしないが……顔を引きつらせたらしい。

「案の定……と言いたいところだけど。」

何だってあの馬鹿はこうも、折角の計画をおじゃんにしてくれるのかしらね！ 要するに、全部喋ったってことね、あんたに」

キルファは苛ついたように喚くと、フードを跳ね上げた。知られているのなら、別に隠す必要もない。

不機嫌そうな眼が、シエルタを睨み据えている。その瞳は聞かされていたとおり……鮮やかな紫だった。

知ってはいたものの、初めてハーフを目の前にしたせいで、シエルタは不思議そうにキルファの顔を見つめている。

自分より年下らしいのだが、妙に大人びた、冷たい雰囲気のある少女だ。そして。

（うう……可愛い）

その顔立ちには、シエルタでも認めざるを得ないほどに端正だった。紫……忌み嫌われる色の大きな瞳と、月光を封じ込めたかのような銀髪が、鮮やかな色彩を生み出している。

愛らしい顔立ちなのだが、その眼光は刃のように鋭い。それが違和感を生み出さないのは少女の雰囲気故だろう。

しばらく呆然としてキルファの顔を眺めたシエルタは、ふと横の男に目をやった。琥珀色の髪と、同色の瞳をしている。軽めの微笑を浮かべて、面白そうに二人の様子を眺めていた。

「いやー、嬢ちゃんも人気者だよな。会う奴って皆、嬢ちゃんの顔をじーっと見るもんね」

にやにやと笑いながらサリクスが言う。

「嬉しくないわよ、そんなもん」

半眼で睨みつけながら、キルファが言った。普通の人間やエルフにしてみれば珍しい色の瞳だが、彼女にしてみれば、生まれた時から



ら当たり前のことなのだ。それを興味本位で凝視されるのだから、まったく迷惑な話である。

サリクスの言葉に、シエルタはようやく我に返った。  
しかし。

「……………」

何やら、気まずい沈黙が流れる。お互い、言いたいことは山ほどあるのだが、何処から、どちらから話したものか分からないのだ。雰囲気能耐えかねたのか、ややあって、サリクスがのんびりと口を開いた。

「あー、黙ってるのもなんだから、とりあえず自己紹介でもしとくか。

俺がサリクスで、そっちの嬢ちゃんがキルファ……キルファ、何だっけか？」

「キルファ・インシード」

場違いに軽いサリクスの言葉に、キルファが苦々しげに応じた。

「わたしは……シエルタ。シエルタノート・トゥールーズ」

シエルタがぼそりと言う。

到底和やかとは言えない対談は、こうして始まった。

シエルタは黙って目の前の二人を見つめていた。

ハーフの少女と、エルフの青年。今まで、見たこともない種族だ。

(……そのはずよね。でも……)

内心、シエルタは首を傾げていた。

確かに、二人とも耳は長く尖っているが、違いと言えばそれだけだ。何も変わらない。姿も、雰囲気も……おそらく思考も。

キルファと名乗った少女が、何やら青年……サリクスと言ったか……に囁いている。多分、この状況をどうしようか、などと言っているのだろうが。

何処か軽薄な笑いを浮かべているサリクスに比べ、キルファは警戒心を剥き出しにした子猫のような表情をしている。それがまた、しっくりとはまっているのだが。

「ねえ……」

一人のけ者にされているような気がして、シエルタはおずおずと話しかけた。

「あなたたち、ダレットさんの知り合い……なんでしょ？」

「まあね」

キルファが頷く。その表情にかすかな敵意を感じ、シエルタは顔をしかめた。この少女に、何か気に障るようなことでもしたのだろうか？ ……まあ、人間を警戒するのは分からないでもないが。

「だったらさ、今まで何処にいたの？ ダレットさん、あれだけの怪我をしてたんだよ？ 知り合いだって言うなら、何で放っておいたの？ あの人、一人で村の側に倒れてた。父さんたちが見つけないかったら、どうなってたと思ってるの！」

最後は、自然と強い口調になった。

最初の、ダレットの怪我のひどさを見ているから尚更だ。はっき

り言って、出血多量で死にかけの状態だった。案外回復は速かったが、それにしても、放っておいたらどうなっていたことか。

それなのに。この二人は、一体何をしていたのだ？

「……今までずっと森にいたわよ」

キルファはそれだけ答えた。そのお陰で、シエルタは一回狼から助けられているのだが、口にはしない。恩を着せるのも嫌だし、言い訳と思われるのも癪だ。

「だったら、何で……」

何で、あれだけの怪我をした人間を放っておいたのか。

「何で、あたしたちが何もしなかったのかって聞きたいんでしょ？」

キルファは、何もかも見透かしたような顔でため息をついた。疲れきったとでも言うような表情をする。

「そうに決まってるでしょ？ わたしがずっと、看病してたんだから……」

そうシエルタが言った瞬間、キルファの眼が猫のように切れ上がる。さっきは漠然としか感じられなかったが、今ははっきりと敵意が見て取れる。

紫の瞳に暗い炎が宿る。きっと睨み据えられ、シエルタは思わず一歩後ずさった。

「……とりあえず、聞きたいんだが」

キルファの険悪な雰囲気をもものともせず、横からサリクスがのんびりと言った。

「あの大馬鹿は……ダレットはとりあえず無事なんだな？」

「……まあね」

何が大馬鹿なのかはよく分からなかったが、シエルタはそれだけ答える。もう大分回復してきているが、それをこの二人に話すのは腹立たしい気がした。

ダレットは、あれだけこの二人のことを気にかけていたのだ。それなのに、この二人は何もしていなかった。だから、せいぜい心配でも何でもしていればいいのだ。

「そう……良かった」

キルファが呟き……初めて警戒を解いた、柔らかい表情をした。緊張が一気にほぐれたように、安堵の表情でかすかに笑う。

大きく吐いた息が、彼女の心労を何よりも物語っていた。それは、シエルタも察することが出来た。

しかし。

「……そんなに心配なら、自分でどうにかすればよかったじゃない」「出来るものならそうしたわよ!」

口を尖らせて言ったシエルタに、キルファは想像以上の剣幕で応じた。一瞬だけ緩んだ表情は、また険しいものに逆戻りする。

「……本当なら、そうしたかったわよ」

キルファが、うめくように言った。

ダレットが怪我をしたのは自分をかばったせいだ。こうやって、どれだけ自分を責めたことか。しかも、安否を確認することすらも出来ないのだ。

「だったら何? ああやってほったらかしにしておいた方が良かったとも言うの?」

シエルタが言う。意地の悪い笑みを浮かべて。

「……あたしじゃ、手の付けようがなかったのよ。」

自分でやるって意地を張るのは簡単だけどね、それで助からなかったらどうやって責任を取るって言うの?

自分の意地と責任感のために、人一人殺すわけにはいかないでしょう!」

キルファが叫ぶ。彼女はシエルタやサリクスよりは遥かに多い知識を持ち合わせている。だから……自力ではどうしようもない現実を、誰よりも理解していた。

「だったら、せめて……側にいるとか出来たでしょう!」

言いかけて少し引っ掛かるものを感じたが、シエルタはそれに気付かず叫び返す。

「だから! 出来るものならそうしたって言ってるでしょっ!」

キルフアが、尚も大声で喚いた。

最初から和やかな雰囲気とはいかなかったが、こうなるとほとんど子供の喧嘩である。完全に話から置いていかれたサリクスは、所在なげに虚空を見つめている。

「何で出来ないのよ！ それだけのことが……」

思いつめた表情のダレットが、一瞬頭をよぎる。

シエルタの言葉に、キルフアの顔色が変わった。陰悪さはそのままだが、泣き出す寸前の幼い子供のような、そんな色が混じる。

「……そうよ。たったそれだけのこと……」

でもね……」

キルフアはきつとシエルタを睨み据えた。

「それだけのことが出来ないのは……あんたらのせいじゃないの！」  
シエルタの胸倉を掴みかねない勢いで、キルフアは怒鳴る。シエルタは一歩ずつ後ずさっているが、背中が大きな木に当たり、そこで下がるのを止める。

「……わたしが、村の人たちが、何をしたってのよっ！」

先程振り回した短剣はキルフアの手にある。拳を握り締め、シエルタも負けじと怒鳴る。

「……分からないの？」

キルフアが、嘲るような表情をした。自分より年下の少女とは思えない、老獪さすら感じさせる顔。

「人の目の色を見て、さっき短剣を振り回してくれたのは何処の誰だったかしらね」

キルフアは意味ありげに笑う。そこでようやく、シエルタはキルフアの言わんとしていることを察した。

「あ、けど、でも……」

怪我してる人がいたら、誰だって助けるわよ、村の人だって、わたしだって」

「人間だったら、ね」

キルフアが鼻で笑う。

「それが人間……だけ、だったらそうだろうけど。」

まあ、ダレットが大怪我をしていたとしても、よ。その隣に、あたしやサリクスがいても、同じ結果になったと思う？　隣にエルフがいても、何も躊躇わずに助けようとしたかしらね？」

「……そんなことない。そんなことは……」

シエルタは呟く。本当は大声で怒鳴ってやりたいのだが、自信のなさがそれを許さない。

自分がエルフだからと言ってあからさまに差別するような人間だとは思いたくなかった。しかし、実際に自分はさつき、二人を見るなり短剣を向けるという行動を取っているのだ。

自分のやったことを見せ付けられてもまだ、否定し続けることは出来なかった。

自分だけではない。おそらくは、村の人間たちも同じではないだろうか。

いつも感じている優しさ。それが向けられるのは、あくまで同族だけだ。村の中だけで生きている分には、それでも問題なかったのだが。

キルファは、シエルタの動揺にとどめを刺すように言った。

「あんたが何をどう思おうと、信じていようと勝手だけど。それだけじゃ済まない現実を、あたしはずっと見てきたの。この瞳の色のお陰でね」

そう。

自分は人間の優しさを信じていたいけれど……それが、現実。自分も含めた。

この少女が、一体何を見てきたのか。それには、自分には想像もつかないこともあるのだろう。安穏と村で生活していた自分には。

キルファの妙に大人びた、疲れたような雰囲気の原因が、ようやく分かったような気がした。

それでも。

たとえばそれが現実だろうと、キルファのやったことは、シエルタ

にしてみればダレットに対する裏切りだ。どれだけ心配していたかを知っている。

「ねえ……」

シエルタは、ふと話題を変える。さっきからずっと疑問に思っていたことを問いただしてみる。

「この何だか変な地面も、あなたがやったの？　ダレットさんは、何であれだけの怪我をしたの？　それから、村の側で起こったっていう爆発は？」

一気にまくし立てる。自分の動揺を隠すかのように。シエルタ自身は自覚してはいなかったが。

「……っ！」

キルファは黙って唇を噛む。下を向き、手にしたままのダレットの短剣を強く強く握り締める。

放っておけば自分自身を刺しかねない気がして、慌ててサリクスが横から短剣を取り上げた。それを、無造作にシエルタに向かって放り投げる。

「うわっ！」

自分に向かってきた短剣を慌てて避ける。澄んだ音を立てて地面に落ちたそれを、シエルタは首を傾げながら拾った。

キルファは、尚も空の拳を握り締めている。その泣き出しそうな顔は、さっきよりずっと幼く見えた。

沈黙が、場を支配する。キルファが俯いて唇を噛み締めていることに、シエルタはひそかに優越感を覚えた。さっき、さんざんに論破されたから余計にだ。

ややあって、サリクスがぼん、とキルファの頭を軽く叩いた。子供をあやすように頭をくしゃくしゃと撫でてやると、キルファの表情が若干和らぐ。

「ええと……シエルタ、って言ったよな、そっちの嬢ちゃんは。」

君の話だと、ダレットと面識があるんだろ？　だったら、俺とこの子が近くにいることだけは伝えておいてくれないか？」

見る者を安心させ、或いは不安にさせるような軽い笑いを浮かべ、サリクスは言った。これだけ険悪になった雰囲気を軽くあしらえるところは、この男の特技と言えるかもしれない。

軽薄とすら思える笑いをいつも浮かべている男だが、その実、考えるべきことは考えている。はつきり言って、一番何も考えていないのはダレットだ。

「……さて。そろそろ戻らないと、お互いにまずいことになるだろう？ この森は何かと物騒だしな。そういうわけで、手土産」

サリクスが、再びシエルタに向かって何かを放り投げる。今度は、無造作にシエルタはそれを受け取った。何かの包みだ。

「俺はよく知らねえが、この森、即効性の睡眠作用のある胞子を出すキノコがあるらしいんだな、このキルフアの話だと。その包みだよ。ま、護身用くらいにはなるだろう」

キルフアとサリクスなら狼の一匹や二匹、どうということはないが、戦いに関しては素人のシエルタにとっては致命的だ。元々、投針の威力に気を良くしたキルフアが採集してサリクスに渡しておいたもののだが、シエルタの方が有効活用出来るだろう。

「……どうも」

シエルタがそれを受け取ったことを確認すると、サリクスはキルフアの背を押してさっさとさびすを返して去っていく。そのあっけなさに、シエルタはしばらく呆然としていた。

ややあつて、呟く。

「何だか、よく分からない二人組だったわね」

結局、一方的に罵られただけで、自分の疑問は何一つ解決していない。だが。

「絶対、変。あの子……キルフアの様子」

森の中を歩きながら呟く。

何かあるのだ。ダレットの怪我と、キルフアには。それと多分、あの固まった地面にも。

今度会うことがあるかは分からないが、もし会ったら徹底的に問



いただきしてやろう、とシエルタは決心していた。

家に帰り着いた頃には、もう薄暗くなっていた。

「ただいまー」

のん気に住居兼宿屋の扉を開けたシエルタは、父親の切羽詰った表情に迎えられることになった。

「シエルタ！」

一言叫び、それから露骨に安心したような表情を浮かべる。シエルタは呆氣に取られて、父親の顔を見つめた。

「……どしたの？」

「シエルタ、お前何処に行ってたんだ？」

「……側の森の中」

思わず、シエルタは本当のことを言ってしまう。その言葉に、父親は再び愕然とした顔をした。

「今、隣のばあさんに聞いたんだが、あの森に何者かが潜んでいるらしい。直接見た奴はいないらしいんだが、誰かが歩いた跡があったり、狼の死骸が転がったり、不審なことが立て続けに起きてるらしいからな。」

おそらく、盗賊か何かだろうってことだ。だから、お前もしばらくあそこには出入りするな」

「……分かった」

今しがた、その不審者に会ってきたとも言えず……ダレットに口止めされている……シエルタは、ただ父親の言葉に頷いた。

（……森に潜んでいるのがエルフとハーフだって知れたら、多分、盗賊の場合より大騒ぎになるのよね）

ふと、そんなことを思う。人間は、とにかくエルフを毛嫌いしているものだ。

感情はどうあれ、あの少女の言っていたことは事実だ。それだけは、間違いないように思えた。

満月が、頭上で静かに光っている。

「……………」

キルファは木の幹に身体を預け、瞑想でもするかのように目を閉じて考え込んでいた。

「おーい、嬢ちゃん」

下から声がかかる。キルファは面倒くさげに眼下の人影を見下ろした。サリクスだ。

「夜に木登りは止めた方が良くないじゃねえか？ 木の上で考え込むのが趣味ってなら別に止めはしないが」

今、キルファがいるのは太い枝の上だ。身軽な上に小柄だから、登って枝の上に座りこむのに苦労はしない。

「木の上で考え込むのが趣味なのよ。放っというて」

半眼でサリクスを睨みつけると、また暗い夜の森に視線を移した。別に木登りは趣味ではないが、何となく一人になりたかったのだ。

サリクスもそれは分かっているのか、それ以上は何も言わず、側の焚き火の横に寝転がると目を閉じた。

キルファはそれを見届けると、ぼんやりと遠くを見つめる。村のある方角だ。

「……………」

怪訝な表情をすると、目をこすり、再び一点を凝視した。彼女の視力は並だが…………見間違いではない。

「松明…………かしらね」

木々に隠れてちらちらとしか見えないが、遠くに紅い点が見える。幾つもの点が、線のように並んでいる。

夜と紅い炎。この組み合わせは二年前から苦手だったが、確認しないわけにはいかない。

滑るように木から降りると、寝入ったばかりのサリクスを叩き起こした。そして、今見たばかりのものをざっと説明する。

サリクスも、怪訝な顔をした。

「あたしの想像だけど、村の周囲の柵に沿って火を焚いているんだ

と思うわ。だとすれば……」

「夜襲の警戒、だな」

サリクスの言葉に、キルファも頷いた。

「……どういふことか、確認くらいしておく？ 直接姿を見られた覚えはないけど、あたしたちの気がつかないところで見られてたって可能性もあるし」

「俺は毒蛇になる可能性の方が高いと思うんだがなあ……」

サリクスが頭を掻きながら言う。

「それより、あのシエルタって女が何か言ったって可能性が一番高いと思うんだけど……」

シエルタの名を出したとき、一瞬キルファの顔に敵意にも似た陰しさがよぎった。サリクスはそれに気付いたが、表情には欠片も出さない。

「それは……ないと思うけどな」

サリクスは、シエルタという人間をある程度冷静に観察している。少なくとも、面と向かって話をした者を密告するような人間には見えなかった。もっとも、人間だったら、の話なので、エルフの自分にどれだけ当てはまるものは定かではないが。

とにかく、ダレットの名を出しておいたのは間違いではなかったと思う。

「そうかしらね？」

キルファは、尚も苦々しげに言った。どうしてシエルタにそんな敵意を向けるのか、キルファ自身は気付いていないだろう。サリクスは見抜いているから、ただ苦笑した。

へらへらと笑っているサリクスに、キルファは苛立ちをあらわにする。サリクスにくるりと背を向けると、すたすたと歩き出した。

「……とにかく、様子だけ見てくるわ。まずそうだったらすぐに戻る」

言うなり、マントを翻して駆け出した。サリクスは、それを苦笑して見送る。

「何だかなあ……。俺だけのけもんにされてる気がするな。気のせいじゃないかもしれねえが」

サリクスはしばらくキルファが駆け出した方向を見つめていたが、やがて、長柄戦斧を手にとると歩き出した。

暗い森を、満月と赤々と燃える松明が照らし出している。が、圧倒的な闇の前に、光はささやかな陰影を生み出す力しか持たなかった。

森は重苦しい黒に塗りつぶされ、動物たちの鳴き声が尾を引いて響き渡る。普通の人間なら、まず逃げ出すような不気味さだ。

だが、それは普通でない者にはかえって好都合だった。月明かりだけを頼りに、キルファは夜の森を疾走する。足元はほとんど見えなかったが、無様に転ぶこともない。夜の行動には慣れているからだ。

ややあつて、唐突にキルファは木の陰に身体を潜めた。ひよこつと顔だけ出して、様子を窺う。

村の男たちの姿は間近に見えていた。話し声もはっきりと聞こえる。

「……しかし、何処の馬鹿だろうな、こんな辺境の村をいきなり襲うってんだから」

「しかも、森に潜んでるんだろ？ 下手したら、狼に食われちゃうぞ」

「盗賊なんてのはクズだが……今度ばかりは同情するね。もし食われた死体が転がってたら、墓石くらい立ててやるか」

「止めとけ、止めとけ。そいつらが馬鹿なだけさ。俺たちが何かしてやる義理なんざねえ」

おおむね、話の内容はこんなものだった。他には、他愛もないような無駄話を延々と繰り返している。それでも、森に警戒の視線を向けることは忘れなかったが。

（……成る程ね）

いきなり村が警戒を始めた理由は、おおむね理解できた。やはり、気付かないうちに存在が見つかってしまっていたようだが、盗賊と

勘違いしているらしい。無理もない話ではあったが。

（別に、狼にあっさりとやられはしないけど……少々厄介かも知れないわね。身動きが取りにくくなる）

森に警戒を向けられてしまったては、村に近づくことすらままならない。ダレットはおろか、あのシエルタと接触することすら出来なくなるだろう。

まして、近くの街から警衛兵を呼ばれては、余計に厄介だ。人間の村の側にエルフが潜んでいたとなれば、即刻逮捕されてしまう。逮捕されたら最後、難癖を付けられて処刑も有り得ないことではない。人間は、とにかくエルフの数を減らしたがつているのだから。

（ダレットが気付けば……上手く誘導してくれるかもしれないけど）  
ダレットは王宮騎士団の一員だ。辺境の警衛兵よりよっぽど高い地位にある。彼が何か言えば、村人たちもあっさり納得してくれるだろう。が。

（あの馬鹿が、そこまで考えが回るとも思えないのよね……）  
息を殺しながらも、キルファはため息をついた。

（とにかく。あたしの用はこれだけね。後は、さっさとサリクスの所に戻った方が良いわね）

結論を出し、キルファがまたこっそりと立ち去ろうとしたその時。  
「……何かいるぞ！」

男の一人が、慌しく叫ぶのが聞こえた。キルファは一瞬、身体を強張らせた。心臓が飛び出さんばかりに跳ね上がる。

（嘘っ！）

かつて、気配を殺した自分に気付いたのはただ二人、ダレットとカシユラル・レストラードだけだ。こんな辺境に、彼女ほどの使い手がいるとは思えなかった。

「……………」

動くのを止め、注意深く様子を窺う。男たちの視線は、何やら別の方向に向けられているようだった。

（何だか分からないけど、好都合ね。今のうちにさっさと逃げ出す

としますか……)

見張りたちの視線が逸れた瞬間を狙い、身を低くしたまま音も立てずに走り出す。が、すぐに立ち止まる羽目になった。

「盗賊が出た！ 村から増援を呼んで来い！」

「何人だ？」

「今のところ、一人しか見えない。偵察か何かじゃないか？」

こんな怒号が聞こえた。そして、とどめの一言。

「武器だ、武器を持って来い！ あの野郎、何か持ってやがる……分かった、長柄戦斧だ。それも、かなり大きいな」

「全員、武器になりそうなものを持って来い！ 一気に取り囲むぞ！」

(……長柄戦斧？)

キルファの知っている限り、長柄戦斧を持っていて、尚且つこの近くに出没する可能性のある人物はただ一人。エルフの巨漢。

(……何考えてるのよ、あの馬鹿ああああっ！)

まさか怒鳴り散らすわけにも行かず、キルファは心の中で絶叫した。そして毒づく。

(男って、どうしてどいつもこいつも考えなしなのよっ！)

別に男に限った話ではなく、彼女の近くにそういった人物が集まっただけの話なのだが。そんなことに今気付いても何の意味もない。

(……どうする？)

キルファは一瞬、考えを巡らせ……

「放つところかしら」

思わず本音が口から漏れるが、それが正解のように思えた。下手に自分が手を出すより、ここは、サリクスが一人で切り抜けてくれるのを待つのが得策だろう。サリクスなら、素人が寄り集まったところでやられたり捕まったりするようなことはないはずだ。

相当森の奥に引っ込まなければ村人の追跡から逃れることは出来ないだろうが、ここで村人と接触するよりはいくらかましなはずだった。

サリクスには気の毒な話だが、キルフアが一人で方針を決定したその時。

うおおおん、と森の奥から音が聞こえた。いや、声だ。狼の遠吠え。

（嘘でしょっ！）

キルフアは再び絶叫する。渾身の魂の叫びは彼女の心の中で反響し、幾重にも重なって頭に響いた。ぐわんぐわんと、側で警鐘をならされているかのようだ。

前からは人間。後ろからは狼。

キルフアは、今ほど自分が不運だと感じたことはなかった。

（どうしろってのよっ！）

絶叫するのにも、そろそろ疲れてきていた。

「……何だか騒がしいな」

のん気に柔らかめのパンを齧りながら、ダレットは呟いた。首を傾げて、窓の外に目をやる。

腹の傷はもう大分治っているのだが、シエルタがベッドから離れることを許さないのだ。お陰で、今だに身体だけ起こして食事をしている。

「何だか、森に変な連中がいるとかで。交代で見張りをすることになったみたい」

ダレットの横で、ややトーンを落とした口調でシエルタが言った。どう言っているのか分からず、とりあえず父親の言葉をそのまま真似てみる。

「変な連中……？」

ダレットが首を傾げ……そして、何かに気付いたような表情をする。それが何なのか、シエルタはすぐに悟った。

本来なら、言うべきなのだ。その連中が、ダレットの探していた仲間だと。さっき、自分がそれを確認してきた、と。

だが、小さいときから叩きこまれてきた、エルフへの不信感はそ



う簡単に拭い去ることは出来ない。あの二人が何者なのか、いまいち信用できない。

それに。

ダレットは元々は旅人だ。いずれ、この村を出ていってしまうのは確かなのだろうか……ダレットとあの二人を会わせることで、その時期が早まってしまっているのではないか。そんな不安にかられていた。村という閉鎖された世界の中だけで生きていたシエルタにとって、この突然の来訪者の与えた影響は大きかった。優しく、格好良い王都の騎士。出来るならば、ずっと一緒にいたい……シエルタ自身、明確に自身の感情を把握していたわけではないが、そんな想いが確かにあった。

だから……

(……ごめんなさい！)

内心、謝罪の言葉を繰り返しながらも、シエルタはそれ以上の言葉を食べ飲みこんだ。

ダレットは、思いつめたような様子のシエルタにまた首を傾げたが、その想いに気付くこともなく、黙ってまたパンを齧った。葉草を混ぜ込んであるらしいそのパンは、かすかに苦い味がした。

小さい頃、風邪をひく度に苦い葉を嫌がったことを思い出した。エルザが必死で説得するのだがダレットはまったく聞き入れず、兄姉にまで睨み付けられながらやっこの思いで飲み干したような記憶がある。

基本的に人の世話を焼くのが好きなのだろう、シエルタは何かとダレットに構っている。頼みもしないのに水は持ってくるし、毎日三度は様子を伺いにやってくる。

無論、ダレットの方が年上なのだが、ちょこまかと動いているシエルタは、故郷の姉を思い出させた。自分が一番年下だったから、姉たちには何かと構われたものだ。兄は呆れたような顔をしていたが。

そんなことを考えながら……隣で、暗い顔をしているシエルタに

まったく気付かず、パンを齧っていたダレットは、どたどたという足音に眉をひそめた。

「……親父さんか？」

足音の間隔と音から判断する。案の定、ばたん！ と扉を開けて飛びこんできたのはシェルタの父親だった。

「……どうしたの、父さん？」

シェルタが、やや面食らったような表情で訊く。思わず立ちあがっていた。

「見張りの連中がさっき呼びに来てな、盗賊が出たらしい。わしも行って来る」

こんな小さい村のことだから、戦力になる大人の男性は全員狩り出されているらしい。

「あの……俺も行きましょうか？」

ダレットが言った。意識不明で運び込まれてから、村の人間にはずっと世話になっている。ここで、少し恩を返しておくのも悪くないだろう。

「駄目よ、まだ治ってないんだから」

立ちあがりかけたダレットを、シェルタが慌てて制した。服の裾を引っ張り、ベッドに引き戻す。

父親はそれを確認すると、また部屋の外に駆け出した。

「盗賊って……さっき言ってた、変な連中か？」

「多分……」

ダレットが不安げに窓の外を見る。シェルタの父親の前では言えないが、村の人間は全員戦いに関しては素人だ。盗賊の中に少しでも腕の立つ人間がいたら、どうなることか。

「大丈夫だと思う。ああ見えても、父さんは結構腕っぷしは強いし」  
シェルタがぎこちなく微笑んで言ったが、ダレットはなおも心配そうに外を見ていた。

ここで逃げ出すのは簡単だった。が、自分たちがいなくなっ

まったら、村が狼に襲われてしまう。

ダレットがまだ動けない以上、まともな戦力は村にはいないだろう。寝ているダレットが狼にやられてしまうなどということも、怪我の治り具合によっては有り得ないことはない。

よって。

キルファたちは、村人の追跡をかわしつつ、狼を撃退するなどという離れ業をやらなければならなくなっていた。

「あんたねえっ！ 何考えてんのよおっ！」

サリクスに追いつき、何はともあれ今までの苛立ちを全部ぶつける。が、この男にまったくこたえた様子はない。

「いやあ、嬢ちゃんを追ってきたはいんだが、村の連中に見られちまって……」

「当たり前でしょっ！ 村人総動員で見張ってるところに飛びこむ馬鹿が何処にいるのよ！」

「俺の目の前」

「あたしは元々、こっちが本業だから良いの！」

本業かどうかは知らないが、とりあえず、王都では盗賊をやって生計を立てていたのは確かだ。

「大体あんたは、そんな馬鹿でかい図体してるんだから目立つに決まってるでしょうが！」

「いや……目立つ云々に関しては嬢ちゃんにとにかく言われる筋合いはないような」

「一々人の揚げ足を取らないでよ！」

傍で聞いている分には漫才にしか聞こえないやり取りをしながら、二人は狼がいるらしい方向に向かって疾走する。キルファも、もう姿を隠すのは止めている。その分追っ手が増えているような気がするが、どうしようもない。

ただ一つだけ幸運なことがあるとすれば、遠くから見られただけなので、エルフの特徴たる長い耳に気付かれていないことだった。気付かれたら、この騒ぎが数割増になるであろうことは明白だ。

「狼が何匹いるか、見当が付くか？」

サリクスが訊いた。数によっては、二手に分かれざるを得ない。

「正確には分からないけど、一匹や二匹って訳でもないと思うわ。それに……」

「それに？」

「……狼って、鼻が物凄く効くわよね」

キルフアは、引きつったような笑いを浮かべて言った。

「それってつまり……」

「あたしたち、前に何匹も狼を倒してるでしょ？ もし、それを狼が知っていて……あたしたちの匂いが覚えられてたら」

「俺たちを敬遠して、村に向かう可能性があるってことか」

「そういうこと！」

二人は、揃って足を止めた。

後ろには、あの村がある。そして。

「……………！」

二人は顔を見合わせた。背後から……動物の咆哮と、悲鳴が聞こえたような気がする。

「……今からでも、逃げ出すのは遅くはないと思うわ」

キルフアが神妙に言う。サリクスも、重々しくそれに同意したが。

「はあ……」

二人は深く深くため息をつき……今まで来た方向に向かって駆け出した。

悲鳴がまた聞こえた。見張りに立っていたであろう男の叫び声だ。

「もう少し早く気付くべきだったわ！」

キルフアが走りながら舌打ちした。

運が良かったのか悪かったのか。

不審者が森に在るとの報告を受けて、夜間の見張りを強化したその日に、狼の群れが襲ってきたのだから。

とりあえず、村の人間への警告だけは早くに行うことが出来た。

夜の森に、金色の点が幾つも見える。二つずつ並んだそれは……無論、狼の目の輝きだ。

狼が度々出没する場所であるため、村は頑丈な柵で囲まれている。ある程度の高さがあるから、簡単には飛び越えられないはずだった。だが、外壁の庇護を受けられるのは、あくまで村の内部にいた場合だ。

森に潜んでいたらしい盗賊が発見され、かなりの人数が森に入っ  
てしまっている。相当にすばしこい連中らしく、まだ捕獲すら出  
来ていない。

狼の標的となったのは、その盗賊の追っ手となった村人たちだっ  
た。

「ひっ……」

中年の男が、金色の瞳に魅入られたかのように硬直する。手には  
武器として農作業用の鎌を手にしていたが、振り回すことなど出来  
はしない。

男の中にあるのは恐怖。それだけだった。思考が麻痺し、考える  
ことも動くことも出来ない。

「ああああ……」

がたがたと膝を震わせ、思わず死を覚悟したその時。

夜空に、銀光が閃いた。

ぎゃん、と狼の悲鳴が聞こえる。

「……………?」

男は、恐る恐る目を開ける。

目の前には、今にも飛びかからんばかりの表情で息絶えた、狼の死骸が転がっていた。胴体に二本、ナイフが突き刺さっている。どちらも正確に急所を撃ち抜いていた。

投げナイフの技というのは、男も見たことがあった。旅芸人が時々見せる芸だからだ。だが、村にそんな芸当が出来る者などいなかったはずだ。

男は首を傾げる。が、悠長に悩んでいられる状況でないことは明白だった。我に返り、きびすを返して逃げようとする。

そこに。

「そこどいて！」

甲高い声と共に、横から、何やら白いものが飛び出してきた。男を軽く突き飛ばすと、その前に入る。男には目もくれず、眼前の狼に集中しているようだった。

「……誰だ？」

訳が分からず、男はただおろおろするだけだ。白い人影は切羽詰った口調で更に怒鳴る。

「いいから、とっととそこから離れて！ 足手まといになる！」

少女のものらしい、高い声だった。白いマントを羽織ったその身体……何故だか、しっかりフードまで被っている……も、相当に小柄だ。誰だかは皆目見当がつかないが、そんな子供に足手まとい呼ばわりされては引き下がれない。

「お前、何者……」

思わず怒鳴りつけるが、少女……だろう、多分……は聞く耳持たず、懷から何かを取り出した。そして、それを目の前に迫った一匹に向かって投じる。

先程と同じ、投げナイフだった。銀光は、狼の目と喉笛に正確に突き刺さる。飛びかかろうとしていた狼は、そのままの体勢で地面に倒れた。自分が死んだことにすら気付いていないだろう。それほど、少女の技は鮮やかだった。

ようやく、男も悟った。先程の狼を倒したのは、この小柄な少女

だ。

「いいからさっさと逃げなさい！ 村に戻れば、どうにかなるですよ！」

少女は、更に男に怒鳴りつける。その男ばかりではなく、近くにいた村人たちは、大体が突然の侵入者に啞然としている。

が、うちの一人が気付いた。

「てめえ、何で村の事を知ってる？ ……何者だ、一体！」

少女が舌打ちするのが聞こえた。『余計なことを言ってしまった』  
とでも言いたげな風情だ。

「何でもいいから、とつとと逃げる！ 死にたくなかったらね！」  
更に狼の一匹を屠りながら、やけになって少女が怒鳴る。投げナイフは遠距離にまで対応できるため、今のところ、狼に襲われて負傷した村人はいないようだった。

まだ狼の気配はあるが、投擲の間合いにまでは入ってきていない。少女がナイフを指の間に挟み、油断なくあたりを窺う。

がさっ、と横手で音がした。

横手から、狼が突っ込んでくる。前方に意識を集中していた少女は、一瞬反応が遅れた。

その場にいた全員の顔が引きつる。

（……間に合わない！）

村人たちが視線を思わず逸らし、少女ですら一瞬硬直した瞬間。どん、と鈍く湿った音がした。続いて、何かが潰れるような音。

「……と。ちよつと危なかったな……嬢ちゃん、生きてるか？」

「来るのが遅いわよ……何にてこずってたのよ」

男の場違いに軽い言葉に、少女が恨みがましい口調で応じた。村人たちも、何があったのかとばかりに、横手を見やる。

そこには、若い男が立っていた。何の気負いもなく、さも当然と  
いった風情だ。

口調そのままに笑いを浮かべていたが、その笑いは獣と同じ、獐  
猛な笑いだった。いや、ある意味、男は獣と同じだったかもしれない

い。

かなりの巨漢である。村人たちよりも頭一つ分以上大きい。腕も太く、小柄な少女なら片手で持ち上げるくらいの腕力があるだろう。そして、その身長に匹敵するほどに巨大な長柄戦斧を軽々と肩に担いでいた。

長柄戦斧の刃は紅く染まり、その足元には両断された狼の死骸が転がっている。

「……何なんだ、一体」

村人の誰かが呟く。が……全員が思い出していた。先程まで追っていた盗賊のうちの一人は、長柄戦斧を手にしていたはずだ。

「貴様、さっきの盗賊……」

先程の、中年の男が言いかけて……そこでようやく気付いた。

若い男の、長く尖った耳に。

「貴様、エルフかつ！」

嘲りと恐怖が混じった叫び。

男の眉がぴくんと跳ね上がる。何処となく面倒くさそうな風情だ。

「ま、そんなもんは見りゃ分かるだろ……とにかく、死にたくなかったらとっとと離れた方がいいと思うぞ。」

「……もう遅いか……」

視線だけで遠方を見やる。がさがさと言う音と殺気が、凄まじい速さで近づいてきていた。

「とにかく、退がってて！」

少女が前方に出ながら振り返らずに叫んだ。

「……何つうか俺たち、最近こんなんばっかだな」

サリクスは、ぶつぶつとぼやきながら長柄戦斧を一閃させる。軌道上にいた一匹は、その刃でもって胴から真っ二つに両断される。

「呪いなんて信じないけどさ、だったら何なのかしらね……」

キルファも、ぶつぶつとナイフを投げつける。口調はやる気がないが、その技が鈍ることはない。確実に、眉間を、喉笛を射抜いて



いく。

「これじゃあきりがいいわよ……あたしの飛び道具には限りがあるし。この間渡した、あの胞子の包みはどうしたの？」

この場の狼を全部眠らせてしまえば、それで事足りる。

「いや……あの時、あの子に全部渡しちまって……手持ちがねえんだよな」

肩をすくめるような動作をしながら、サリクスがあっけらかんと言った。それを聞いたキルファの顎が、かくん、と下がる。

「はあ？ ……全部？」

滑稽なまでに引きつった顔で、キルファが訊く。半眼で狙いをつけ、ナイフを投じるが、飛んでいくナイフも何処かへろへろとしてやる気がなかった。それでも一撃で倒しているあたりはさすがと言えたが。

「あつ……あんだねえっ！ 何のためにあたしがあれだけの量、集めたと思ってるのよ！ 役に立たないなら意味ないじゃないの！」  
「まあそうだが……実際、今ここにない以上、議論しても無意味なような気がするぞ。ほらまあ、エルフは前向きに生きる事が肝要って言うだろ」

「あたしはエルフじゃないんだけど」

一人で納得したように頷いているサリクスに、キルファが淡々と突っ込みを入れた。

「……いつかそのうち、料理に毒を盛ってやる」

口の中でぶつぶつと呟く。

「三日三晩、腹痛に苦しみながら笑い転げるがいいわ」

「それは出来れば遠慮願いたいような」

何やら暗く含み笑いをしているキルファを、サリクスは額から一筋の汗を流しながら眺めた。

言うまでもないが、二人とも漫才のような会話を繰り広げながらも、絶え間なく武器を振るっている。

狼の群れは、全部で八匹。とどめ……とばかりにサリクスが長柄

戦斧を振るう。

綺麗に首と胴体が離れた死骸が足元に転がる。辺りには強烈な血の匂いが充満していたが、もう殺気は感じない。これで全部だ。

「何とか終わった……か」

サリクスが呟き、構えていた長柄戦斧を下ろした。そして、大きく息を吐く。

重い武器をずっと振るっていたせいで、実は結構息が切れているのだが、さすがに血だまりだらけの地面に腰を下ろす気にはなれなかった。

ふと横を見ると、キルフアは紅く染まった地面を魅入られたようにじっと見つめている。感情というものがぼっかりと欠落したその顔を覗きこみ、サリクスはおずおずと声をかけた。

「嬢ちゃん……大丈夫か？」

二年前の事件に加え、先日のダレットの一件もある。紅いもの、それも血を見るのはかなり辛いはずだ。どうしても、あの記憶が蘇ってしまう。

「……何とかね」

キルフアは気丈に顔を上げ、ぎこちなく笑って見せた。まだ、逃れることなど出来はしないが……それでも、以前よりはましになってきているようだ。

大丈夫。大丈夫だから。

そう自分に言い聞かせる。何回か深呼吸すると、いくらか動悸がおさまった気がした。

「さて……これからどうするかね」

サリクスが、視線で後ろに下がっていた村人たちを示した。

「凄え……」

誰かが呟いた。

村人たちの目の前では、一方的な戦いが繰り広げられている。エルフの男が、長柄戦斧を大きく振り回す。並の人間ならその遠

心力と重量に身体の体勢を崩すところだが、男は顔色一つ変えない。大きく弧を描いた刃は、いともあっさり狼の胴体を断ち割った。

その後ろから、白ずくめの少女がナイフを投じていた。正確な手さばきで、狼の急所を確実に射抜いている。

戦いに関しては素人である村の男たちも、理解せざるを得なかった。この二人は自分たちとは桁が違う。命を危険にさらす実戦を、数多くこなしてきた玄人だ。

若い男はともかくとしても、まだ子供らしい少女までもが正確にナイフを扱うことに、男たちは恐ろしさすら感じていた。どんな生き方をしてきたのだろうか。顔を見られたくないのか、深くフードを被っていることも、何か関係があるのだろうか。

それに、何よりも。

あの男は、間違いなくエルフだ。長い耳がそれを証明している。魔法という胡散臭い奇跡を起こす、恐怖の民。

そんな連中が、何故こんなところにいる？

もしかしたら……盗賊などよりも、よっぽど恐ろしい何かを招きはしないか？

根拠などない。だが、それは確信だった。自分の身体に流れる血が、そう結論づける。

「何とか終わった……か」

男が言い、長柄戦斧についた血糊を払った。少女も、少しの間ぼうつと立ち尽くしていたものの、死骸に刺さったナイフをてきぱきと回収している。この様子一つを見ても、実戦に慣れている連中であることは明白だった。

狼よりもよっぽど恐ろしい連中であることは明らかだった。が、狼が去ったという安心感からか、男のうちの一人が声をかける。

「貴様等……何でこんなところにいる？」

怒気と恐怖の入り混じった声に、今まで見向きもしなかった二人が、ようやく自分たちの方を見やる。その面倒くさそうな風情に、男たちの顔から恐怖の色が消え、軽蔑と怒りだけが残る。

「ここは人間の村だぞ……貴様等がいるような場所じゃない」

最年長の男が、精一杯の威厳でもって言った。だが、二人はまったく顔色を変えない。

「別に。村には入ってないでしょうが。帝国は、移動に関しては規制をしていないわ」

法律の条文を棒読みするかのように、少女が言う。実際、少女の言っていることは正解だった。が、別に男たちも法律に則って二人を責めているわけではない。

少女……キルファの言葉は、単に男たちの神経を逆撫でするだけの結果に終わった。もつともキルファにしたところで、男たちを説得するつもりなど毛頭なく、型どおりの反応しかない村の連中に呆れ返ってそれを揶揄しただけなのだが。

「……何だとお？」

若い男があらさまに顔を怒りに染める。小さい子供なら脅しも効くとも思ったのか、ずかずかと近づくとその肩をつかもうとした。が、キルファは一步横に引いてあっさりとそれを避ける。

彼女にしてみれば当たり前の結果であったが、子供に馬鹿にされたとでも思ったのか、男の顔が怒りと恥で真っ赤に染まる。

「このエルフのガキがっ……！」

「あたしは別に完全なエルフじゃないんだけどね」

キルファが言い、腰の後ろからナイフ……投擲用ではなく、普通の型である……を引き抜いた。それを無造作に男の目の前に付き付ける。

「忘れてるようだから言ってあげるけど。その狼と同じ末路を辿りたくなかったら、おとなしく村に帰ったほうがいいと思うわよ」

銀色の刃よりもなお冷たい口調で、キルファは断言する。男の顔が面白いように引きつった。

「嬢ちゃん……そうやってすぐに刃物を持ち出す癖は、どうにかした方がいいと思うぞ」

サリクスが呆れたように言う。しかし、手に長柄戦斧を持ってい

ては説得力の欠片もない。

「あんたは最近だけだろうけど、あたしは十四年間ずっとこんなやり取りをしてんのよ。いい加減、嫌にもなるわよ」

「それは確かに」

説得する方に問題があるのか、される方に問題があるのか。とにかくサリクスはあっさりと頷いた。それ以上キルファを止める様子はない。

「あ……」

まだ目の前に銀色の刃を付きつけられたままの哀れな男は、がたがたと震えながら立ち尽くしている。側にいる男たちも、手を出しかねているようだ。

何かに魅入られたように、キルファの顔を見つめ続ける。

その顔が、不意に変わった。何かに気付いたかのように、瞳が大きく見開かれる。

「……紫？」

眩きに、全員の視線がキルファに集中した。キルファは諦めたとしても言ったように、肩をすくめて見せる。

いくらフードを被ってみても、近くで見られれば瞳の色はばれてしまう。視界を封じるわけにはいかないからだ。それでもフードを被っているのは、瞳と同様に目立つ銀髪を隠す意味の方が強かった。髪の色で注目されれば、それだけ紫の瞳に気づかれる可能性も高くなる。

だが、もうそんななけなしの努力をする必要などない。面倒くさそうに、頭にまとわりつくフードをはねのける。

あらわになった紫色の瞳に、集まった男たちが一斉に眼を見張るのが分かった。キルファは、それを邪魔くさそうに半眼で睨みつける。

「……毎度毎度こんな感じなのよ？　一々、御丁寧に説得する気力もいい加減失せるってもんだわ」

「確かになあ……」

サリクスがしみじみと頷いた。

憎しみ。恐れ。軽蔑。

自分に向けられる視線の意味は、大体そんなところだった。今に始まったことでもない。昔から……生まれたときからそんなものだ。今更、嘆くことでもないだろう。

だが。

いつもいつも殴られて、たとえそれに慣れてしまったとしても。決して、痛みがなくなるわけではないのだ。

「……………」

キルファが村の男たちに向ける視線は憎しみでも何でもない。本当の意味での無表情。何も見えていないような。

紫の瞳は、何も映さない。空を見つめているのと、何ら変わらない。

「嬢ちゃ……」

サリクスが思い出したように声をかけるが、キルファは彼を横目で一瞥しただけで、応える様子はない。

痛みを感じないようにするにはどうしたらいいか。何の事はない。『殴られなかった』と、自分に思わせてしまえばいいのだ。

そう。あんなことはなかった。あんな辛いことなど、なかったのだ……

（……分かってるわよ）

キルファは心で呟く。

（そんなものは、ただの現実逃避でしかない。逃げたって、現実は変わらない。目の前にあるんだから。実際に、今ここで）

分かっている。そんなことは。

だから。目の前の現実から逃げ出すしか出来ないような、弱い存在が自分だとはさすがに思いたくなかった。他人すら認めてくれない存在を、自分が認めなかったらどうなるのだ？

必死に、思考を元に戻す。ぼんやりとしていた視界が、徐々にはつきりとしてくる。

その時。

「……っ！」

サリクスが反射的に長柄戦斧を握った。強烈な殺気。

「まだいやがったのか！」

遠くに離れていたただだったのか、仲間の血の匂いを嗅ぎ付けたのか。とにかく、全部倒したと思っていた狼が、また現れた。

（ちっ……俺も油断してたな！）

殺気を感じし、サリクスの表情が珍しく焦る。

（どっちから来る……？）

一直線に走る殺気の軌道。その先には——キルファがいた。

この面子の中では、一番年少で小柄だ。その方が襲いやすい。狼と言えどそれくらいの計算は出来るのか、狼たちはキルファを狙っていた。

「嬢ちゃんっ！」

普段の彼女なら、そんなものは簡単に察知してのけただろう。だが、ぼんやりとしていた彼女は、一瞬反応が遅れた。

サリクスが庇いに入ろうとするが、間に合わない。キルファも咄嗟にナイフを投げつけ、一匹は仕留めたが、もう一匹を倒す余裕はない。

キルファの眼が見開かれる。狼は、目前にまで迫っていた。

（……間に合わない！）

恐怖を感じる時間すらない、一瞬の出来事。

ただ、鋭い牙だけがはっきりと見えた。

そして。

夜の闇に、銀光がきらめく。

銀光は狼の身体を正確に捕らえ、切り裂く。悲鳴を上げる間もなく、飛びかかったままの姿勢で地に倒れた。



「……………」

既視感。

硬直していたキルファは、おそろおそろ目の前に立ちはだかる影に目をやった。

「これって……」

「……しかしまあ、毎回毎回美味しいところだけ持ってくよな。普段何もやらんくせに」

「何もやらないは余計だ」

呆れ顔で言うサリクスに、抜き身のままの剣を手にしたダレットは、無然とした顔で答えた。

「……何でここにいるの？」

咄嗟に後ろから掴まれて突き飛ばされたキルファは、よろよろと立ちあがりながら言う。啞然とした顔で。

目の前にいるのは、確かにダレットだ。いつもの外套は着ていないし、服も旅装束とは違う……村の人間に調達してもらったものらしい……が、愛用の剣も手にしているし、間違いない。

「何だか盗賊だ狼だって言って騒いでたからな。心配になって出てきたんだが……正解だったな。」

しかし……」

ダレットはのんびりと目の前の情景を眺め、呟いた。

「よくもまあ、これだけの数をやったもんだな」

一同の周りには、倒された狼の死骸がごろごろと転がっている。気の弱い人間なら失神しかねないほどの血臭だ。実際、キルファたちは平然としているが、村の人間には気持ち悪そうにしている者もいる。

「これ、全部お前たちだろ？ ナイフが刺さった跡があるし、鎌や何かじゃ胴を両断なんて出来ないだろうし」

冷静に死骸を観察し、ダレットは言った。こういった度胸、もしくは吹っ切れた態度が、実戦を経た者とそうでない者との違いと言える。

「まあな」

サリクスが困った顔で言う。ちらりと横目で何かを見た。ダレットも不審がり、首を傾げて視線の先を辿る。

その『何か』……つまりキルファは、額に青筋を浮かべ、鬼のような形相でダレットを睨みつけていた。

「あっ……あんたはあね……」

ぷちぷちと頭の血管が切れる音を、一同は確かに聞いた気がした。「何で、毎度毎度考えなしに突っ走って、人の計画をおじゃんにするのよ、あんたはああっ！」

髪をくしゃくしゃと掻き、今までの苛立ちを全部ぶちまけるようにキルファは喚く。村の男たちも、訳がわからないといった様子で彼女を眺めている。

「素直に、おとなしく村で寝てりゃいいものを！ 何でわざわざ出てくるわけ？ 少しは頭使いなさいよっ！」

ダレットの胸倉を掴み……もったもかなり身長差があるので、背伸びするような格好だが……キルファは耳に響く声で怒鳴りたてる。ダレットは、目を点にして彼女を見下ろしている。

「大体、まだ怪我治ってないんでしょうが！ そんな状態で剣なんて振り回す、普通？ 馬鹿を通り越して呆れるしかないわよ、本当にっ！」

「……………」

ダレットは困ったように笑い、顔をしかめた。額にはびっしりと脂汗が浮いている。

大分治ったとはいえ、傷が塞がりきっていない状態で全力疾走し、なおかつ長剣を振るったのだ。これで負担がかからない方がおかしい。

ダレットはなおも無理に笑って見せるが、こうなっては誤魔化しきれるものでもない。実際、腹の傷がまた疼くように痛み出している。痛み自体にだいたい慣れてしまったこともあって、立っているくらいは平気なのだが、これ以上は剣など使えないだろう。

「分かった分かった……今度からおとなしくしてるから」

ぱたぱたと手を振って見せるが、キルファは引き下がる様子はない。

「そうしろって言いたいけどね、もう『今度』なんてないわよ」

キルファはダレットの服を掴んだ手はそのままに、視線で村人たちを示した。男たちは、突然の乱入者と突如始まった口喧嘩に、ただただ呆然としている。

「あの連中の前にこのこ出てくるもんだから、こっちの考えも何も全部パア、よ。」

……まったくさ、少しは推理とか推測とか覚えた方がいいわよ。何も考えなかったでしょ」

「あー、あの……」

ぶつぶつと愚痴を続けるキルファを遮るように、男の一人が言った。

「騎士様……ですよ？　そこの子供と、お知り合いなんですか……？」

怪我をして倒れていたダレットを運んでいったうちの一人だ。どうやら『帝国の騎士』の顔は覚えていたらしく、敬語でおそろる尋ねてきた。

「ん？　ああ……」

ダレットが何気なく答える。サリクスは頭を抱え、キルファは脱力して地面に倒れこみかけ、慌てて踏みとどまる。頭の血管が、もう数本ほどぶち切れた気がした。

「……嬢ちゃん、気持ちは分かる。よおっく分かるが、さすがにナイフは止めとけ、ナイフは」

キルファが腰の後ろからナイフを抜きかけているのを見て、サリクスがなだめるように言う。が、正直、彼も一発ぶん殴りたいくらいの気分ではあった。

「……何だっていうんだ？」

ダレットだけが、唯一、困惑した顔をしている。

「その子供……ハーフですよ？　それに、その大男はエルフ……」

「……そうだな」

尚もあっけらかんと答えるダレット。村の男たちは露骨に嫌悪感をあらわにし、キルファとサリクスは顔を引きつらせる。ダレットだけが、平然としていた。

「何だって、騎士様が、エルフやハーフ風情なんかと……」

そもそも、ダレットが騎士だと分かったのは、証明の短剣を所持していたからだ。それが偽物とも思わないだろうが、男たちの顔からは、不信感がありありと見て取れた。

「……って言われるから、あたしたちはわざわざ隠れてただけど」キルファがぶつぶつと言う。いい加減、呆れ返るのにも疲れてきたようだ。

「……何だか事情がよく分からないんだが。俺が寝てる間に何かあったのか？」

のんびりとした口調でダレットが訊く。

「もうやだ……」

と、キルファが諦めきった口調でぼやいた。

「もう、必死に隠れて野宿する必要もなさそうだから全部ばらすけどね」

言って、ダレットではなく、横で困惑した表情の男たちを半眼で眺めた。

「あんたが怪我して意識不明になって、あたしの手には負えないから、とりあえず村に運ぼうかって話になったんだけど。あたしとエルフがいたら、どうせ門前払いになって終わりでしょ？　どうせ、

『エルフとハーフ風情とつるむような奴なんぞ知ったことじゃない』とか言ってるさ。

それで、しゃあないから、あんたを村の前に放り出して担ぎこませたわけ。それで、あたしたちは森の奥に隠れてたのよ……あんたとの関係がばれないようにね。

それを……」

キルフアは再びダレットを睨みつけた。

「あんたが！ のこのこと姿を見せて全部無駄にしちゃったんだけどね！ まあ、ある程度は治ってるみたいだけど」

疲れたとでも言うように、ため息をつく。

「じゃあ、盗賊が云々つてのは……お前らのことか？」

今更ながら、ダレットは気付いたように言った。

「そうよ……」

キルフアが呟くように言う。その身体が、不意に力を失って倒れる。

「……とっ……」

ダレットが慌てて支える。小柄な身体をふわりと抱きとめた。

「……って、おい？」

完全に意識を失っているらしいキルフアを、慌てたように身体を揺する。しかし、目を覚ます気配などない。

いぶかしげに顔を覗きこむ。固く目を閉じたその顔は苦しそうに歪んでおり、呼吸もおかしい。やたらと息切れしているようだ。額に手を当ててみると、相当に熱い。

何故、今まで気付かなかったのか。何やら、むしろように情けなくなった。

「なっ……？ ……何か、風邪みたいなの……」

「過労だろうな」

おろおろしているダレットに、冷静にサリクスが言った。

「このところずっと、ろくに寝つけなかったみたいだからな。それに気苦労もあったし……」

……心配してたんだぞ、本当に」

苦笑しながらサリクスが言う。ダレットは改めて、腕の中の華奢な身体を見下ろした。元々小柄だが、何だか更に小さくなったような気がする。

「そうか……」

ダレットは呟き……そして、思い出したように慌てだす。

「とりあえず、どっかで休ませないと……村に連れて帰るか」

「お前、嬢ちゃんがやったことの意味を全然理解してねえだろ」

サリクスがこめかみに手を当てて言った。『何で一々説明せにやならんのだ』とその顔が雄弁に語っている。

「その連中に訊いてみる。『紫の眼の子供を村に連れこんで構わねえか』ってな。……お前が考えるほど、人間やらエルフってのは寛大じゃない。それを一番知ってるのは嬢ちゃんだろうけどな」

言葉に引つ張られるように、ダレットは横手にいた男たちを見た。一同は皆揃って、嫌悪感と恐怖、不信感をあらわにしている。訊くまでもない。答えは明白だった。

ここも同じだ。

ダレットは泣き出したいような気分になり、腕の中の少女を抱きしめた。こんな状況は、初めてではない。だから、理解できないわけでもないが……

それでも。異なる血を引く人々も信じようと思うのは、単に自分が愚かなだけなのだろうか？

「……まあ、普段なら脅すとか何とか、色々方法もあるんだけどな」サリクスはそれこそ狼のような鋭い獣の目つきで、男たちを見据えた。琥珀の瞳が、先ほどの狼のように怪しく輝く。長柄戦斧の刃が、月光を照り返して闇に三日月を生み出した。

村人たちは動けない。本能が動くことを拒否している。一步でも踏み出せば足元の死骸と同じ末路を辿る。それは予感ではなく、確信だった。

「……脅すって」

ダレットも、やや退いたようにサリクスを眺めている。思わず、腰の剣に意識を集中する。

「今はまあ、そんなことも必要ねえよなあ？」

……さっき、狼の群れに襲われてがたがた震えてたのは何処のどいつだったか？ ん？ お前か？ それとも、そこのお前か？」

長柄戦斧を握りこみ、にやりと笑う。まさに、獲物を見つけた肉食獣の笑いだった。

「そこを『わざわざ』助けてやったのは、俺とその嬢ちゃんだよな？ お前らも間近で見てたもんな、知らないわけはねえよな？」

……助けてもらっておいて、まさか断るわけも……」

そこで一旦言葉を切り、一呼吸置いてからきっぱりと言った。

「その嬢ちゃんが倒れたってのに、まさか世話を断るわけもねえよな？ ……その腹に大穴開けた馬鹿男はさんざん面倒見ておいて、なあ？」

「それって、立派に脅してるんじゃないか……」

立派な脅しというのも何だか嫌だったが、とにかくダレットは長柄戦斧を構えて含み笑いをしているサリクスを、不気味そうに見ながら言った。

「脅してなんかいいえさ」

サリクスは軽く笑う。

「ただ、ここで断ったら、狼五十匹突入と同じくらいの被害を与えてやるって言うただけで。警告じゃないか。俺って親切だよな。うん」

普通なら笑い飛ばすのだろうが、この男は洒落にならない。長柄戦斧の腕前に加えて、初級の魔法まで使いこなすのだ。本当にやりかねない雰囲気、今のこの男にはある。

「……実はお前も結構疲れてたりするか？」

ダレットが、呆れ返ったように言う。

「当たり前だろ」

サリクスが、皮肉に笑いながら言った。

「えーと、あの……」

男たちが、ぎぎいっと音がしそうなほどゆっくりな動きで、ダレットの方を見る。だが、ダレットの腕の中に少女がいることに気が付き、絶望的な表情をした。

「あのー……騎士様？」

「安全が最優先って言うなら、この男の言う通りにしといた方がいいぞ。後でどうなるかは俺も保証できん」

ダレットが肩をすくめて言う。

次の瞬間、男たちは絶望的な顔でいっせいにうなだれた。



いつも覗いてはいたものの、入るのは初めての場所。慣れているような思い込みがあるが、いざ入ってみるとやたらと戸惑うことが多い。

強引に借りた村の宿の一室で、サリクスは疲れたようにため息をついた。そのまま、備え付けのテーブルに突っ伏す。この男にしては珍しかったが、今は情けないと思うような余裕もない。

キルファのように倒れこしなかったが、彼も相当疲労が溜まっていたのだ。普段は軽薄な笑いの仮面をかぶっているので、気付く者はあまりいないのだが。

「ちっ……」

木材の毛羽立った、ぬるい肌触りに顔をしかめながら舌打ちする。思うように動けない。

（嬢ちゃんのことをとやかくは言えねえな……）

心の中で毒づく。もう少し、体力があると自負していたのだが。

こんっ、こんっ、と扉が鳴る。答える気力もなく無視していると、勝手に扉が開いた。入ってきたのはダレットだ。

「よお……」

「……何だか疲れてるな」

「お前は元気そうだな……ずっとここで寝てただけはあるな」

身体を起こす気すら起こらない。元々疲れていた上に、とどめに狼を片っ端から倒したのだ。

「嫌味か？　それは」

「嫌味だよ」

ダレットはずかずかと入ってくると、一つしかないベッドに腰掛ける。まだ傷は治りきってはいないはずだが、激しい運動でもしない限りは平気なのだろう。

「嬢ちゃんはどうした？」

「まだ寝てるよ。ああ見えて、子供だからな……体力が戻れば目を覚ますだろ。とりあえず、シェルタに見てもらってる。

……ああ、シェルタってのはここの宿の子だけだな」

「知ってるよ」

ぼんやりと言うサリクスに、ダレットは目を丸くする。

「俺と嬢ちゃんはその子に会った。話もした……お前のことも、あの程度は聞いていた」

シェルタに感づいたのは、はっきり言ってキルファの勘だ。その辺りのことは、サリクスも説明しにくい。身体がだるいこともあって、サリクスはそのところの説明を打ち切った。

「……お前が何か言ったんだろ？ わざわざ短剣まで貸して。シェルタって子は律儀にあの場所まで来たからな」

「まあな。気がついたらここで寝てるわ、お前たちの姿は見えないわ……さすがに、俺も訳が分からなかったからな。それでとりあえず、シェルタに様子を見てもらったんだが……」

ダレットはそこで首を傾げた。

「あの子は、お前らに会ったなんて一言も言ってなかったぞ？」

「んー……まあ、何となく想像はつくな。あのシェルタって子は行動の予測がし易そうだし」

サリクスは皮肉を込めて笑うが、ダレットは顔をしかめて考え込んだままだ。

「……どういうことだ？」

「腹が立つから言わねえ」

サリクスはそこでのっそりと起き上がると、ベッドからダレットを追い落とす。

「場所変われ。何で疲れてる俺が椅子で、お前がベッドに座ってるんだ」

言うなり、ごろりと横たわった。正直このまま寝てしまいたかったのだが、あれこれ説明することも多い。明日は一日中寝てやる、などと訳の分からない決意を試みたりする。

床に叩き落されたダレットはしばらく無然とした顔をしていたが、やがて椅子に浅く腰掛けた。

「俺はまあ、ずっとここで寝こんでただけだからな。特に話すこともない……むしろ、訊きたいのはこっちだ」

ダレットはしばらく頭で言うべき事を整理する。普段あまり使わない頭なので、いざ必要なときにもとにかく動きが遅い。

「……あの、変な子供の姿をした魔物。俺はあいつにやられて気を失ってたが……あの後、どうなったんだ？」

こうやってキルファとサリクスが無事でいると言うことは、倒したか魔物が引き上げたかのどちらかなのだろうが。

「嬢ちゃんがけりをつけたよ」

サリクスが言う。

「……どういうことだ？ 確か、あの魔法消去は防がれてた……」  
目を丸くしているダレットに、サリクスは顛末を大雑把に説明する。

話が進むにしたがって、ダレットの表情が戦慄に凍った。

柔らかかそうな銀髪が、細い輪郭の周りに散らばっている。短めの髪は、自分で適当にナイフで切っているのだろう、長さもばらばらだ。少しでも整えたら、さぞ可愛らしくなるだろうと思えたが。

鮮やかな紫の瞳は、今は瞼の下に封じられている。それでも、一度見たら忘れられるようなものでもない。

シエルタは、恐る恐る少女の……キルファの顔を覗きこんだ。苦しいのか、呼吸も荒く、時々小さなうめき声が漏れる。

まさか、ダレットの世話をしているときはこの少女の看病をすることになるなどとは思わなかった。気が進まなかったのだが、頼まれては断る理由が見つからない。

「むう……」

再びキルファの顔を覗きこみ、シエルタはうめいた。

自分にキルファとあのエルフの探索を頼んだときの、そして意識

を失ったキルファを抱えて戻ってきたときの、ダレットの切羽詰った顔が思い出された。

もしも、あれが自分だったら……あの男は同じ表情をしてくれただろうか？

基本的に、ダレットは困っている人間を見たら助けずにはおれない人間だ。それを偽善と呼ぶかお人好しと呼ぶかは置いておいて、とにかく、誰が倒れても悲しそうな顔はするだろう。

が。この少女に対するものとは違うだろう。おそらく。

慌てて飛び出したダレットを追いかけて行って、あの場を見ていたから……シエルタには、分かってしまった。悔しいが、それが現実だ。

自分の、ダレットに対する感情が何なのか……恋愛感情なのか、ただの憧れなのか、好奇心なのか。自分でも判断がつかねたが、それが敗北したことだけは確かであるようだった。

「……………っ！」

眠っていたキルファが声にならない叫びを上げ……目を見開いてがばっ、と起きあがる。

シエルタは、見下ろした体勢のままで硬直した。

うっそうと茂った森。その中に佇む、今にも倒れそうな小さな家。見渡してみると、向こうに同じようなものがいくつかまばらに見える。

嫌と言うほど見慣れた情景。自分が生まれ育った場所だ。ハンザという名前の山中の村。

記憶にはあっても、愛着などなかった。いや……一番、忘れたいものかもしれない。それでも、十二年間過ごしてきた風景というのは、二年やそこらでは消えてくれないようだ。

(……面倒なものよね)

今は、この場所はどうなっているかは分からない。だが、記憶にあるものと違うということだけは確信できる。この風景は、自分が

焼き尽くしたのだから。

(……また、嫌な夢を見たものだわ)

妙に視点が低い。自分の身体を見てみると、手足がやけに短い。ようやく物心ついたころの姿をしているのだと、それで悟る。

『キルファ』はちよこちよこと小走りに駆けていく。小さな小屋……昔、住んでいた家だ……に辿り着くと、背伸びしてドアを開けた。

『お帰りなさい』

おそらくそう言っているのだろう。だが、出迎えたエレナ……キルファの母だ……は、唇を動かしかしはするものの、声は発しない。それどころか、何の音も聞こえてこない。

キルファも何かを言って、エレナに飛びついた。エレナの側で甘えるようにして目を閉じ、眠ろうとする。夢の中の母は、記憶そのままに温かい。

せめて夢の中くらいは、母親に甘えても良いだろう。もう二度と叶わぬ事なのだから。

自分に向けられる優しい手は、二年前に失われてしまった……

(……そう……だった?)

かすかな違和感。同時にキルファは目を覚まし、立ち上がる。

風景が変わっていた。どうやら、自分自身が成長したらしい。夢の中であるので、時間の経過などは関係ない。

嫌な予感がした。もしかしたら……

『……母さん』

キルファは無造作にエレナに向かって手を伸ばす。記憶そのままの、優しい笑みを浮かべてエレナはキルファに手を差し伸べる。

次の瞬間。

(…………!)

優しい笑顔はそのままに、母親の姿は紅い炎に飲みこまれた。苦悶の表情を見る間もなく、炎にかき消されて母の姿は見えなくなる。

『母さん……母さん!』

キルファが、炎に向かって泣き叫ぶ。気がつけば辺りは一面炎に包まれており、キルファは切り刻まれた死体に囲まれて呆然としていた。

何も出来ずに、ただがたがたと震えていた。

今も分らない。自分は一体……この時、どうすれば良かったのか。為されるがままに死ねば良かったのか、それとも……

（許してくれ、なんて言う資格はない。でも、謝る気もない。あたしにだって、生きる自由くらいはある……）

ぼんやりとキルファはそんなことを考える。

そのうちに、また場面が切り替わった。ハンザの村を抜け出した後に向かった、王都ラインガルド。人間の街。

所詮、自分は『半分』でしかないのだということを思い知らされた。まともに生きていけるわけもなく、生きていくためなら何でもやった。幸か不幸か、母親から授けられた大量の知識があり、生来の身軽さや機転の早さを持ち合わせていた。

……それが良いことなのかも悪いことなのかも分からないが。

緑の瞳が、自分を見つめていた。栗色の髪の毛、如何にも人の良さそうな青年。しかし、その裏にとてつもない力を隠した青年。

（……ダレット）

ダレットは、いつも通りののほほんとした笑いを浮かべていた。

キルファに笑いかけ、そして手を伸ばす。その手を、キルファは何の躊躇いもなくに取った。少し前の記憶。

そして。

（……………！）

吹き出す紅い血が視界を染めた。

ダレットの腹から黒い刃が生えていた。一瞬にして意識を失ったのか、苦悶するでもなく、静かな表情でダレットは地面に倒れる。

咄嗟に突き飛ばされたキルファは、その向こうの人影を認識するのにやや時間がかかった。

黒い鎧を纏った子供。あの魔物――

『ああああ……』

がたがたと声が震える。紡ぐべき言葉は霧散し、頭の中が真っ白になるのが分かる。

いや、紅い色彩が思考を支配していく。血と、炎の色。

それしか見えない。出口も、何もかも。だから……

『ああああああっ！』

キルファは、ただ叫ぶしかなかった。

がぼっ！ と起きあがる。そのまま夢の続きのようにがたがたと震えていたが、しばらくしてようやく、夢であったことを心の中で確認する。

(……もう大丈夫。大丈夫だから……)

自分に言い聞かせ、早鐘のように鳴り響く心臓を落ち着かせる。

まだ呼吸も荒いし、身体中に汗をかいているようだ。

元々眠りが浅いので、夢を見ることはそう珍しくないが、ここまですなされたのも久し振りだ。もっとも、ここしばらくはろくに眠っていないかったが。

「……って……」

ややあって、ようやく周りの状況が飲みこめてきたキルファは、ぼんやりと呟いた。

「何処よ？ ここ……」

「わたしの家」

無然とした答えは、横から来た。まだ完全に目覚めていない頭で、辛うじて振り向く。

見知った顔だ。白っぽい金髪に碧眼。あの、シエルタとかいう女だ。

「……ってことは、人間の村、よね？ ……何であたし、こんなところにいるわけ？」

徐々に意識がはっきりしてくる。側の森で、狼の群れと対峙していたのは覚えている。その後、どうしたのだろうか？

「何だか気を失ってたあなたを、ダレットさんが運んできたのよ。  
あの長柄戦斧を抱えたエルフも一緒にね」

「ダレット？ ああ……」

ようやく思い出した。何も考えずにこのこと姿を現したダレットをさんざんに罵った後、無様にも意識を失ってしまったのだ。疲労が溜まっているのは自覚していたが、まさかあんな場面で倒れるとは思わなかった。

「あたしとしたことが……とんでもない馬鹿をやったわね」

一人ごちる。そのままゆっくりと身体を動かしてみる。身体が鉛のように重く、思うように動けない。

まあ、少しの間なら、だましだまし動かせるだろう。後で休めるかどうかは疑問だったが、とにかくこの場にいるよりはましであるはずだ。

「くっ……」

動いた途端に視界が歪む。首を振って意識を集中する。よろよると立ちあがると、側に置いてあった自分のマントを羽織った。何となく違和感を感じて振り返ってみると、あちこちに仕込んであった投擲用ナイフが全部取り外され、側のテーブルに置かれていた。舌打ちをして、とりあえず普通のナイフだけを腰の後ろに差す。

「また御丁寧にっ……」

恨み言は途中で途切れ、キルファは強烈なめまいを感じて床に膝をついた。予想以上に身体に負担がかかっている。

「くそっ……情けないったら……」

それでもテーブルのナイフに手を伸ばしているあたりは、ほとんど執念であった。

その横で、シエルタは呆然と様子を眺めている。ややあって、  
「……何やってるの？」

何も考えていない風で訊いてきた。ぎろりとキルファはシエルタを睨みつける。

「見れば分かるでしょうがっ……とっところから出て行くわよ……」



…そうすれば文句はないでしょう……！」

自身では精一杯怒鳴っているつもりなのだが、実際に口から漏れるのは途切れ途切れの呟きでしかない。

「まあ、寝かせてもらってたことは感謝するけど……あたしだってさんざん狼を退治したんだからお互い様ってもんでしよう……」

再び立ちあがろうとする。が、気力だけで、実際にはほとんど動けなかった。

「……まだ寝てたほうがいいんじゃない？ とりあえず」

シエルタが、腹立たしいくらいにのんびりと言って寄越した。

「それくらいは分かっているわよ……でも、ここにいたらまた面倒が起こるだけだもの……」

「……もしかして、わたしたちを信用してない？」

ようやく気付いたように、シエルタは首を横に傾げながら言った。キルフアは無言。だが、それは肯定だった。

「……そんなに、人間って信用できないものなの？」

「当たり前じゃないの」

キルフアは即答した。床にへたりこんだまま、シエルタを見上げて睨みつける。

「生憎と、この目の色のお陰で色々あったもんでね……少なくとも、人間の村で無防備に寝こけている気にはなれないわね。所詮、出来損ないが安心していられる場所なんて無人の山にでも行かない限らないのよ。」

人間だろうとエルフだろうとどっちでもいいけど、会う度にじろじろ見て下手すれば叩き殺そうとするんじゃない、信用しろって方が無理ってもんだわ」

ぺらぺらと一気にまくしたてる。それでまた体力を消耗したのか、身体がぐらりと傾き、床に倒れ伏す。しかしそれでもなお、ベッドで横になっている気はないらしい。

頑ななその態度に、シエルタも扱いに困った。しかし、いくらハーフだろうと、自分より年下の女の子を、それもダレットが大事に

している子を床に転がしておくのは気が引ける。

「人間なんて信用できないって言ったわね。だったら……ダレットさんはどうなの？ あの人、あなたは信用なんてしていないわけ？」

皮肉な笑いを浮かべて、シェルタは言った。キルファは一瞬硬直し……そして、その顔が真っ赤に染まる。

「そんなこと、あんたには関係ないでしょう……！」

床に倒れ伏したままかすれた声でわめき、再び、キルファは気を失った。

紫の瞳。それが何を意味するか、大陸で知らない者はいない。人間とエルフの混血児。

裏切り者として忌み嫌われる存在の証。

だが。時に、それはただの嫌悪以上の意味を持つことがある。

たとえば。一人の少女が、強大な力を持つ前時代の遺物、魔物を一撃で倒した時に。

「魔法を、使えたのか……」

「お前も知らなかったんだな」

自分が倒れた後の顛末を聞き、ダレットは呆然と呟く。サリクスがのんびりと応じたが、ダレットの表情にただの驚愕ではない切迫した何かを感じ取り、眉をひそめた。

「……何かあるのか？」

「一撃で、あいつを吹き飛ばしたんだな？」

ダレットが、駄目押しするように訊いた。サリクスもあの時感じた戦慄を思い出し、顔を強張らせながら頷く。

＜凱旋＞は、一流の魔導士でも一人では起動出来ず、数人が分担してやっと使える魔法だ。かつては攻城戦にも使われたほどの威力なのである。

つまり、現存する魔法のうちでは最も強力な部類に属する魔法を、一人の子供が軽々と起動してのけたということになる。

「確かに……あの力を野放しにしておくのは、たとえば俺でも恐れるだろうな」

サリクスは呟く。命令を受けた当初は知らなかったこととは言え、『監視』の役目を担っている者としては内心、複雑なものがあつたが。

あれだけの攻撃魔法。＜白紙＞の魔法。村の長老でなくとも、恐れるというものだ。

(……しかし、それに加えて頭も良いし、身軽さもある……投げナイフなんかも十分に使える。考えれば考えるほど、恐ろしい存在だな)

少女の愛らしい顔の裏に潜むものは、あまりにも大きい。今更ながら、冷や汗が吹き出してくる。

「……何よりも、だ」

ぼそり、と一言一言考えながらダレットは続けた。

「それだけの力を持つのはハーフだってことだ。……人間にもエルフにも縛られない、つまり、抑えておける要素がない」

人間にしろエルフにしろ、生きているものは何かしらの制約を受けるが……ハーフは、その制約が極端に少ない。少なくとも、『同族』などというものは存在しないのだ。

いや、むしろ……

「……エルフやら人間やらを恨んでいる可能性すらある」

淡々とサリクスが続けた。ダレットが懸念しているものが何か、ようやく悟っている。

「そういうことだ。」

前に、俺の師匠に言われたことなんだが、な。聞いた事がないか？ 三十年くらい前の事件……十やそこらの村や街が立て続けに壊滅した事件」

「ああ……」

サリクスが頷いた。

「あの事件も、犯人は一人のハーフだったらしい。……この世界を恨んで、どうしようもなくなった、な」

ダレットが重い口調で言い、ため息をつく。

「ってことは、ハーフは全員、あんなやたらめったら強力な魔法力を持っている、と」

「そうらしい。まあ、エルフみたいに個人差はあるだろうけどな」  
ダレットの場合、師匠から聞いた話だけである上、魔法に関しては専門外なので説明がしにくいのだが、サリクスは自分も魔法を使

えるから状況を把握するのが早かった。

「諸刃の剣……、か」

ダレットがぼそりと言う。サリクスは、首を傾げて話を続けるように促した。

「俺の師匠に言わせると、な。力なんてもんは、他人に向けられるのと同様に自分にも向けられる。たとえ力があっても、使いこなせなければ何の意味もない。むしろ足枷にすらなる……」

はあ、と大きくため息をついた。

「あいつにとって、そんな力があつたことが幸運だったのか、それすらも分らないな……」

ダレットの呟きを聞きつけ、サリクスが顔をしかめた。キルファがぼそりぼそりと語った内容を思い出す。

未だに囚われているらしい悪夢。今の彼女の出発点とも言える事件。

けれど。

「……大丈夫だろ、多分」

サリクスは気安く笑った。いつもの軽い笑いを浮かべて。

「あの子はそんなに弱くはないさ……少なくとも、自分の力に捕らわれるような事はな。」

ただし、一つ言っておくと、だ」

サリクスはひたり、とダレットを見据えた。

「嬢ちゃんを心配するんだったら、その力を使わせたくはないんだっただら……」

二度と、今回みたいな無様な真似はするな」

冷たい刃のような、静かな口調で言う。それに気圧されながらも、ダレットは訊いた。

「……どうということだ？」

「嬢ちゃん……あの子は多分、自分のためだったら何があろうと力を使おうとはしない。力の大きさと危うさはあの子自身も悟っているからな。」

ただし。例外はある」

一旦言葉を切る。ダレットが何か問いたいような顔をするが、黙らせて話を続ける。

「さっき、大体のことは話したと思うけどな。言っておくが、あの子が魔法を使わざるを得なくなったのは、お前が考えなしに飛びこんで大怪我なんぞしたからだぞ」

「いやだって、あの時はそれしか方法がなかったから……」

「たとえなくても、だ。あの子の性格はお前も知ってるだろ？ 自分を庇って大怪我なんぞされて、今にも死にそうだとなったら……どうするかは想像がつかない？」

考えるまでもなく、答えは一つだった。そして、現実にはそればかり起っている。そのせいで自分は助かったにしろ、何かとてつもなく大きな封印を解いてしまったような気分だった。

もしかしたら、それは正しいのかもしれない。キルファが二年前に自らに課した封印を、解く鍵となってしまったのはダレットなのだ。彼自身は知る由もなかったが。

「お前はもしかしたら、いざとなったら自分が盾になれば良いとも思ってるかも知れないが……それは許されない。」

あの子が魔法を使うとしたら、その理由は多分、お前しかない」キルファの意志に反する唯一の例外。それは間違いなく、目の前にいる一人の人間だった。

「だから、だ。嬢ちゃんに今まで通りの平穏を望むんだったら、三十年前の二の舞にさせたくないんだたら……」

お前が強くなれ。それしかない」

預言者のように、決然とした響きでサリクスは言い切った。ダレットの表情が、一瞬にして引き締まる。

「――分かった」

静かに、ダレットは頷いた。

「離せっ！ 離してよ！」

「だから！ 寝てなきゃ治らないって言ってるでしょ！」

「言っとくけどねえ、あんたよりは医術に関しては詳しいのよ！」

少しくらいなら動けるわよ！ その間にとっとここんなところから離れる……」

シエルタと、すぐに意識を取り戻したキルファはぎゃあぎゃあと言い争いをしていた。が、その様子は尋常ではない。

何故か、病人のキルファをシエルタが必死に押さえ込んでいるのだ。何とかしてベッドに寝かしつけようとしているらしい。

普段ならばキルファがあっさりとシエルタの腕を振り解くのだろうが、いかんせん、意識すらはつきりしていない状態である。それでもしばらくはほとんど本能でもがいていたが、やがて力尽きたか、枕に顔をうずめると苦しそうに息をしている。

「なんて手のかかる病人なのかしらね……」

シエルタが感心したように呟く。また暴れられてはかなわない、と紐を引っ張り出すとごそごそとベッドに縛り付けた。ほとんど囚人のような扱いである。

「あんたねえ、人を何だと……」

「人を信用してないのはそっちでしょう。わたしだけ信用して裏切られるわけにはいかないもの」

声にならない声で反論するキルファに、シエルタは冷然と言っただけのける。

「あなたは信用できないけど、まあ、ダレットさんに頼まれたしね。あなたを寝かせといてくれ、って。わたしは頼まれごとを果たしているだけ」

キルファの毒舌が移りでもしたのか、シエルタが嫌味に言う。普段はもっと素直な少女なのだが。

キルファもいい加減反論する気力も失せたか、黙りこくって目を閉じている。大体が、視界すらはつきりしないのだ。

「そんなに嫌なの？ 人間の村で寝てるのが」

「先に叩き出そうとするのはあんたらでしょうが……」

「わたしたちのことは置いておいて。あなた自身はどうなの？」

シエルタの問いに、キルファは即答する。

「絶対に嫌。安心して寝てる気になんかならないわね、絶対に。街にしろ村にしろ、人間かエルフが大勢いるところでろくなことがあったためしがないもの」

頑なな答えに、シエルタは嘆息する。

「安心出来ようと出来なかりうと、とにかく寝てなさい。このままだと本気で死ぬわよ」

「別に死んでも構わないわよ……特に未練もないし」

キルファの言葉に、シエルタは眉をひそめた。キルファの顔を窺うが、平然として……まあ、相変わらず苦しそうではあったが……特に動揺した様子は見受けられない。

単なる売り言葉に買い言葉、というわけでもないらしい。となれば、これがこの少女の本心なのだろうか？

じろじろと顔を見る。雰囲気こそ妙に大人びた部分があったが、顔を見る限り、自分より年下の子供だ。そんな、まだいくばくも生きていないであろう子供が？ ……一体どういう生き方をしてくれば、平然とそんなことを言えるようになるのだ？

「じゃあ、さ」

思いついたように、シエルタは続けた。

「何であな、今まで生きてたわけ？」

キルファは黙りこくった。

今まで生きてきた理由。そんなもの、こっちが聞きたい。あるとすれば……死ぬまで自分を想ってくれた母、自分が生きる為に殺したあの村のエルフたちのため。

他人を犠牲にして生き延びた自分が、あっさりと死のうものならそれこそ申し訳が立たない。ならばせめて、一生苦しめられながら生きていこう、と思った事はあった。現に今も、それは続いているが。

だが、結局のところ……



「死ぬのもやっぱり恐いからね……それだけなんだわ、本当に。

……何をやってるんだろ、あたし」

自嘲気味に笑う。ぼんやりと視界が霞む。気に入らない女の顔も見えなくなったことだけが、唯一の救いだった。

「じゃあ、今は恐いとは思わないの？」

「別に。自分で自殺しようって気が起こらないだけ。これで死ぬなら死ぬで、それでもいいんじゃないかしらね……」

過労であっさりと死ぬと考えると少し間抜けな気もしたが、死んだ後で誰がどう言おうが、自分の耳には入らないのだ。だったら、それこそどうでもいいことかもしれない。

もっとも。ここでハーフが一人死んだところで、何かが変わる存在がいるとも思えなかったが。まあ、サリクスあたりは監視の役目が終わって村に戻るかもしれないが。

（……何か忘れてる気もするけど。まあ、良いか）

頭がぼうつとする。かなり熱が出ているのかもしれない。情けない、とそれだけ思った。

（……頭も動かなくなってきたわね）

意識が遠のくのが分かる。本当に、身体が限界に達しているのだ。多少、気を失っていた時間があつたはずだが、大して効果は上がっていないらしい。

心の中で悪態をつきながら、キルファは枕に顔をうずめて寝入ってしまった。

「はうう……」

シェルタが、疲れたとでも言ったようにため息をついた。

「ん……」

何やら気配を感じてキルファは目を覚ました。体調のせいで大分感覚が鈍っているようだが、それでも、すぐ側に誰かいればさすがに目を覚めます。常に辺りを警戒する癖は、そうそう抜けはしない。

窓からは、まだ日光は差しこんでこない。身体も汗でぐっしより

となっているが、大して体調が戻ったような感覚はない。シエルタ  
と言いつ争って寝入ってしまったから、そんなに時間は経っていない  
ようだ。

窓からはかすかに月明かりが入ってくる。暗いお陰でいまいちはず  
きりしないのだが、人影が動いているのが見える。

「あの女、まだいたの……？ しつこいったら……」

ぶつぶつと呟く。が、すぐに眉をひそめた。顔だけゆっくりと動  
かして、人影を窺う。

黒い人影は、大柄な感じがした。間違っても、自分より少し年上  
なだけの少女には見えない。

「……誰？」

「起こしちゃったか」

かすれるような誰何に、声は律儀に答えた。この声は……

「ダレット？」

呟きに、人影……ダレットはかすかに笑って応じてみせ、側に椅子  
を引っ張ってくると腰掛けた。

「大丈夫か？ いきなり倒れるから心配したぞ」

「何のつもりよ……！」

心配そうに尋ねたダレットは、キルファの怒気混じりのかすれ声  
に目を丸くした。

「よくもまあ、人間の村に運んでくれたもんね……！ どれだ  
けもめるか、あんただって知らないわけじゃないでしょう……大体、  
どうやって押し切ったんだか……」

「なんか、サリクスが長柄戦斧構えて含み笑いしたら素直に通して  
くれたぞ」

「それってただの脅迫」

キルファは呆れ顔でため息をついた。正直、ダレットがごねたの  
だろうと思っていたので少し意外ではあったが。

「……サリクスは？」

「隣で寝てるよ。あっちも疲れてたんだろうな」

「誰のせいだと思ってるのよ……」

キルファのぼやきに、ダレットは苦笑した。

「何だって人間の村なんかに連れてきてくれたのよ……」

なおもキルファは言及する。馬鹿正直に状況を説明しかけ、ダレットはようやくキルファの言わんとしていることに気付いた。

「……そんなに気にしてるのか？ その……目の色」

「気にするとかしないとか、そんな問題じゃないでしょう……！」

どんな目で見られてるか、あんただって少しは知ってるんじゃないの？ それともまた、何も考えなかったの？

こんなところで、悠長に寝てられるわけ……」

「そんなに信用できないか？ その……人間が」

「あのシェルタって女も同じことを言ったわ」

キルファは苦々しげに応じる。

「自分たちのことも省みずに、よくもそんなことが言えたもんだわ！ 人を見れば追い出す、叩き出す、拳句に意味もなしに殺そうとする……これで信用しろっての？」

「……………」

何にせよ、ダレットは人間である。そして、人間の街で育ち、つい最近まで生活していた。

ダレットが黙ったまま拳を握り締めるのを見て、キルファは少しだけ罪悪感を覚えた。だが、今言ったことも事実だ。この男に直接関係はないにしても。

「……だったら」

ダレットが言い……ひとり、と静かな視線でキルファを見据えた。

「俺は？ 俺まで信用……出来ないか？」

今度は、キルファが言葉に詰まった。そのまま、じっと暗がりの中の人影を観察する。よく顔は見えないが……どんな表情をしているのかは、不思議とはつきりと分かった。これ以上はないというほど、真剣な表情。何処かに切迫した悲哀すら感じさせる。

これは。この男は……

「……そうね。あんたは……信用できるかもしれない」

答えは、意外にあっさりと出た。

出会ってからずっと、自分を見ていてくれた。護ってくれた。これだけは確かだから。

「……裏でなんか考えてるだけの頭はなさそうだし。考えてることはすぐ顔に出るし」

きっちりと言を付け加える。一瞬、サリクスの顔が頭をよぎった。気のいい『監視役』。

「そうか……」

ダレットがふわりと笑う。そのまま、キルファの熱を持った額に軽く触れた。指先が冷たく感じられる。いつも剣を握っているから、手は節くれだつてごつごつとしているが……不思議と、優しい感触を残した。

（何か、昔こんなことがあったような……母さん？）

小さい頃、風邪をひいたりしたときもこんな感じだった気がする。ダレットは男だから母親というのもおかしな話だが、実際、父親の顔を知らないのだから仕方がない。もし生きていたとしたら、こんな感じなのかもしれない。

「とにかく、今は寝てろ。ここにるのが嫌だって言うなら、俺が側にいてやるから」

囁くように言う。それが子守唄にでもなったかのように、キルファはすうっと寝入ってしまう。

それを確認し、ダレットはため息をついた。  
やがて。

「……やっと寝た？」

扉をそうっと開けて、入ってきた人影がある。シエルタだ。

「ああ……」

ダレットは顔だけ振り向き、肩をすくめて見せた。シエルタが入ってきて、キルファは気付く様子はない。完全に熟睡しているようだ。

「信じられない。本当に寝てる」

キルファの顔を覗きこみ、シエルタが呆れたように言った。そのまま、彼女も欠伸をする。もう深夜だ。大体が、キルファとサリクスが盗賊に間違われ、狼と対峙したのも夜だったのだから……あと数時間で、夜が明けてしまうかもしれない。丸々一日動いているような感じがする。シエルタも強烈な眠気を感じた。

「色々済まなかったな。後は俺がやるから、シエルタも寝たほうがいい」

「でも、一番まずいのってダレットさんなんじゃ……」

何しろ、腹の傷はまだ治りきっていないのだ。大分治ったとはいえ、先ほど無茶をして剣を振り回したばかりなのである。

「大丈夫だよ、俺は。大概頑丈にできてるからな」

のんびりと言う。シエルタも、これ以上反論する気力は残っていなかった。済まなそうな顔をして、とことと部屋から出て行く。

「ふう……」

ダレットが大きく息を吐き、腹に手を当てる。実際のところ、シエルタに言ってみせたほどには平気というわけでもない。急激に動いて塞がりかけた傷口が開きでもしたか、動くときと痛みが痛い加減、慣れてきた痛みではあったが。

また、治るのが少し遅くなるかもしれない。だが、今はどうでもいいことのように思えた。

椅子に腰掛けたまま、天井を仰ぐ。王都の自分の家とは比べるべくもない、小さくて簡素な建物。それでも、何処か懐かしい感じがした。

「そう言えば……」

自分は、キルファの生まれや経歴に関して何も知らないことに、ふと気付く。彼女自身がまず言いたがらないし、ダレットにしても、聞くのははばかられた。

それでも……

「これが治ったら、少しくらい、訊いてみるか……」

ぼんやりと呟く。

ふと横を見ると、キルファは、穏やかな……憑き物が落ちでもしたかのような表情で、小さく寝息を立てていた。

ざあっと夜風が髪をなびかせる。

「……………」

キルファは黙って草の上に座り込み、夜空を見上げた。月が少し欠けている。あの狼との戦闘……無様に気を失ってこの村に運び込まれてから数日が経っていた。

明らかに異物であるハーフとエルフ、キルファとサリクスの二人に村の人間はあまりいい顔をしなかったが、お互い、慣れてきていた。親しげに話をするわけでもないが、露骨に嫌悪を露わにすることもない。

だが、だからといって簡単に癖が抜けるわけでもない。人々が家に戻る夜を見計らって、キルファは外に出てきていた。体力も戻ってきていたし、シェルタの家の宿屋に押し込まれていても気詰まりだ。

ハンザの村は辺境だったから、この村はどことなく故郷を思い出させる。閑散とした雰囲気は、懐かしさと哀しさを同時に感じさせた。ダレットなどは山中にいると人恋しくなるようだが、キルファはこちらの森や山の中のほうがいくらかでも落ち着いていた。

「はあ………」

背後を半眼で見据える。習慣的に辺りの気配を探り、誰もいないと確信した時点で、ようやく安堵の息を吐いた。昔からの癖で、スラム時代に技能として叩き込まれた。自分の行動に何処か虚しさを感じるものの、実際、役立つ習慣だった。

少し前までは。

「信用……ね」

ぽつりと呟く。

シェルタに言われ、ダレットに訊かれた。ぼんやりとした意識の中で何か言った気がするのだが、思い出せない。

信頼。あまりにも空々しく響く一言。

今まで、周囲の人間が全て敵だった。そんな状況で、誰かを信用など出来るわけがない。信じるというものがどういう感覚なのか、いまいち分らない。

誰も信じてこなかった気がする。他人も――そして、自分自身も。  
(……………)

虚しいことだと分かってはいる。だが、脱却する術が見つからない。

自分の膝を抱き、顔を埋める。そうして小さく縮こまっていれば、少しでも誰かとぶつかる……そして傷つく可能性が減るような気がした。

不意に、がさりと後ろで音がした。

「……………何やってるんだ？ お前」

ダレットだ。気配は少し前から捉えていたが、放っておいたのだ。無視を決め込もうかとも思ったが、声をかけられてようやく後ろを振り向く。

治りかけの状態で走り回り、また傷が悪化していたはずだが、平気な顔をして立っている。いくらか回復したのかもしれない。

「大概頑丈にできてるわよね……あんたも」

思わず呟く。あの大怪我を目の当たりにしているから尚更だ。それに、キルファはダレットが療養している場面を直接見ていない。

「まあな。やっと普通に動けるようになった」

まだ力を入れると多少は痛むが。ダレットはキルファの後ろに佇み、彼女を見下ろす。

「……………で、何の用？」

「お前、何だかやけにきつく当たってないか？ ……用ってほどでもないが、なんか一人でぼーっとしてるから、何をやってるのかと思ってるな」

ダレットが顔をしかめつつ言った。だが、キルファは別に態度を変えた覚えなどない。いつも通りに顔をつき合わせているだけだ。



「……知らないわよ、そんなもん」

キルフアが眉をひそめた。

「ぼーっとしたいこともあるわよ。どっかの誰かが大怪我した挙げ句になおかつ馬鹿やらかすもんだから、こっちは疲れまくってたし」

「悪かったな」

嫌味混じりに言うキルフアに、ダレットが苦笑して応じた。

「まあ、詳しい事情はサリクスの方から大体聞いたけどな。……その、なんだ」

ダレットは一瞬言いよどむ。そして、キルフアの頭をぽんと叩いた。

「心配かけたな」

微笑しながら言う。キルフアは一瞬ぽかんとし、それから顔を真っ赤にして、立ち上がって喚き散らした。

「だっ……誰が心配したってのよ！ 自分で剣の前に飛び込む大馬鹿を！ 自業自得よ、ちっとは痛い目見た方が……」

背伸びするような格好で喚くキルフアを、ダレットは苦笑して眺めた。その姿は、いつもよりずっと幼く見える。ようやく年相応になったと言ふべきか。

黙って銀色の頭をくしゃくしゃと撫でる。子供扱いされたとしても思ったのか、キルフアが目に見えて慚然とした顔をした。

「悪かったな」

ダレットが呟く。何処か皮肉めいたものすら感じさせる微笑。

「悪かったわよ、こっちがどれだけ苦労したと……」

尚もキルフアは喚き散らす。そうして――不意に気付いた。

「へ……？」

目の端に雫が浮かんでいる。動いた拍子に、涙はきらめきとなって地面に落ちた。

キルフアは自分の目をこすり、信じられないと言った様子で両手を見下ろす。

（……泣いてる？）

どうして涙など出てくるのだろう。今は哀しくも辛くもないのに。  
むしろ……

「え……」

呆然としているキルファを、ダレットは穏やかな表情で眺める。

「泣きたい時には泣いて良いぞ」

のんびりと笑ってダレットは言った。

「いきなり偉そうな口利かないでよ！ 大体、誰のせいだと……」

キルファは途中まで勢い込んで言い、愕然とする。……誰のせい？

「何だってあんたのせいであたしが泣かなきゃ……」

呟く。拭っても、ぽろぽろと涙はこぼれてくる。顔が火照っているのが感じられる。

夜風がまた頬を撫でる。その冷たさを心地良く感じ……キルファの心の中で、ぴしりと何かが弾けた。

意地なのか、今まで積み上げてきた矜持なのか。たった一人という感覚。

堰を切ったように涙が溢れてくる。マントの端でそれを拭い、布に顔を埋めた。泣いている顔など、断じて他人に見られたくはない。ダレットが黙って近寄ると、髪を手で梳くように撫でた。

「……………！」

キルファの顔が真っ赤になる。突き飛ばして怒鳴り散らしてやろうと思ったのだが、身体が思うように動かない。それどころか、いつの間にかダレットの服を掴んで俯いていた。

「心配……したわよ」

自分が何を言っているのかも分からなくなってきた。嗚咽に混じって、ぽつり、ぽつりと呟く。

「どうしようかと思ったわよ……いきなり倒れて、動かなくて……死んだらどうしようと思った……」

自分のせいで、また誰かの命が失われたら。しかも、それが自分に手を差し伸べて、護ってくれた者だとしたら。

いや——そんなことは関係ないかもしれない。単純に、あまりに

も恐かった。

目の前の男を失うのが。

あとは言葉にならない。キルファは服の裾をぎゅっと掴んで嗚咽する。

「……もう二度と、あんな真似はしない」

キルファの頭に手を触れながら、ダレットは静かに言った。

「強くなる。お前も、自分も護れるくらいには」

自分の腕の中の少女を見据え、決然とした口調で言う。キルファが上を見上げ、ダレットの顔を覗き込む。目を大きく見開いていた。

「……あたしは」

ぽつり、とキルファが呟く。

「ただ泣いて、騎士に護られてるだけのお姫様じゃない。自分自身で必死にあがいて、走り回れる。たとえ、それがどぶの底でもね」  
誰かに頼ろうとすることが許せなかった。社会の底辺にあつて、出会う者皆に蔑みの視線を向けられても、それでも必死に一人で抗ってきた。それを今更崩されてたまるものか。

（——たった……一人？）

不意に違和感と虚しさを感じる。そう、少し前まではそうだったかもしれない。

けれど——今は？

目の前に佇む男は、確かに、自分に手を差し伸べてくれた。その身を盾にしても護ろうとしてくれた。

その理由こそ分からないけれど。でも……一つだけ、言える気がする。

今は——一人きりではないのかもしれない。

「……………」

黙り込んでいるキルファを、ダレットは優しげな視線で眺める。

そうして付け加えた。

「お前が弱いから護る、って言ってるんじゃない。弱いよ、俺もお前も、この世界の皆が。強い人間なんていない。でも、弱いから強

くならうとするし、抗おうと出来る。

あがくのは、何も一人じゃなくてもいい。誰かと一緒なら、その分だけでも強くなれる。一人じゃ無理でも、誰かと一緒なら出来るかもしれない。そういうことだよ。

お前の側にいて、強くなれるようにする。俺自身の意志として」  
ふと、ダレットの脳裏に以前に聞いた言葉が蘇る。

『そういうのを何て言うか知ってる？ 偽善、って言うのよ』  
彼女のため、などと言うつもりはない。自分自身の意志として、  
誰かの幸福を望むこと。それは許されるはずだ。

「……………」

キルファの目から、またぼろぼろと涙がこぼれる。しゃくり上げながら、それでもぼつりと言った。

「……本当に？」

恐い。何をどう信じたらいいいのか分からない。信じると言うことが何なのか、感覚が意識の外殻を滑っていくようで、はつきりしない。

「ああ」

ダレットはふわりと笑い……ふと、何かを思いついたような顔をした。

キルファの前に片膝をつく。そうして、彼女の左手を取った。指輪の蒼い石が一瞬きらめく。

「何を……」

キルファが何か言いかける。が、次の瞬間に頭が真っ白になった。ダレットが白い手の甲に軽く口づける。古くから伝わる、騎士の誓約の作法。

姫君と、その前にかしづく騎士。そんな構図だった。

今のダレットは、仕えるべき主君も国の名誉も持たない。手にしているのは、自身の想いと護るべき少女だけ。

突然の出来事にキルファは呆然としている。一瞬だけ、手に柔らかな温かい感触があったが、それがずっと頭から離れない。

「なっ……なに……」

完全に混乱しているキルファに、ダレットは立ち上がると肩をすくめた。

「けっこう様になってただろ？ 一応、俺も前は騎士やってたわけ……」

照れくさそうに言う。だが、最後まで言うことは出来なかった。

「きゃあああああああっ！」

ようやく混乱から脱却したキルファが、甲高い悲鳴を上げる。その声に、村人全員が何事かと外を覗いたほどだ。

弾かれたかのように手を引っ込め、握り締める。顔を林檎のように真っ赤にして、怒鳴り散らした。

「何するのよっ！ この変態、女の敵っ！」

喚き散らす。ダレットが思わず一步後ずさるのには構わず、キルファは尚も言い続ける。どうやら相当びっくりしたらしい。

キルファの両手に、魔法のように何本もの投げナイフが握られる。そうして、それを一気に投げつけた。

「うあっ！」

ダレットが慌ててそれを避ける。身体をずらし、避けきれないものは手で掴み取る。一瞬の攻防の後、両者が揃って大きく肩で息をした。

「し、死ぬかと思った……」

「いっぺん死んできなさいっ！」

キルファは尚も喚くと、拳を繰り出した。横腹に鉄拳が叩き込まれる。華奢なその腕に似合わず、結構な威力だ。

「痛っ……そこ、腹の傷……」

塞がりかけた傷口にまともに一撃を食らい、ダレットが地面に膝をついた。顔面が蒼白になり、脂汗をびっしりとかいている。

とりあえずは気が済んだのか、キルファが仁王立ちになり、はあはあと大きく息をした。

「いたっ……死ぬ、本気でっ……」

「もういっぺん腹に大穴空けてりゃいいのよ！ 何すんのよいきなり！」

びくびくと痙攣まで始めたダレットの前で、キルファが無意味に偉そうな口調で怒鳴り散らす。

だが、その顔はどこか嬉しそうだっただ。

「うーん……結局ああいう展開になるんだよねー、あいつら……」

大きな木の陰で、サリクスは一人ぼやき、頭を掻いた。尚も何か怒鳴り散らし続けるキルファの声に、肩をすくめる。

「もうちつと劇的な展開になってもいいと思わねえか？ あれじゃあ三流の滑稽話だよ。ったく、俺が吟遊詩人か何かだったら絶対にああいう奴は主人公にしねえぞ、話が進まねえ」

遠くに見えるキルファとダレットを指さし、苦笑する。振り返ったその先にいるのは、シエルタだ。サリクスと一緒にあって、陰から様子を窺っている。家の外に出たらサリクスがやけにこそそこそ歩いていたので、不審に思っただけなのだが。

「何て言うのか……何なの、あれ……」

ややあつて、シエルタが呆れ返ったように言った。

「仲……良いのよね……？ あの二人……」

「んー、特に嬢ちゃんなんて、相当気を許した奴じゃないとあんな態度は取らないからな。照れ臭いんだろ、つまり」

サリクスは言っただけをすくめる。反対にシエルタは泣き出しそうな顔をした。

「わたし……全然知らないで、ひどいこと一杯言っちゃった。どうしよう……それからあなたにも。」

その……、ごめんなさい」

最後は消え入りそうな声になった。泣き出す寸前のようなシエルタの頭を、サリクスはくしゃくしゃと撫でた。

「よくできました」

小さな子供にでも言うかのような口調で、にっと笑ってみせる。

頭二つ分も大きい男だが、その軽い口調故か、不思議とあまり威圧感はない。

「言えただけでも上出来だよ。それすらも分からない馬鹿が、この世の中には多すぎるからな」

言って、サリクスは肩をすくめる。

「自分の行動が、他人を傷つけていることに気付かない馬鹿がな。誰も傷つけずに生きるなんて真似は不可能だが……その自覚だけはなければならない。多分、そうやって一番傷つけられてきたのが嬢ちゃんなんだろうな。」

だがまあ、傷つける奴もいれば、それを癒してくれる奴もいる。

……な？」

サリクスは言って、後ろでぎゃあぎゃあと言い争いをしている二人を示した。

「傍からは漫才にしか見えねえけどな。いつもあんなもんだよ、あの二人」

平凡な日常がいつか必ず、傷を癒してくれるはず。

忘れることは出来ない。許されない。けれど……再び立ち上がることだけは。

「ねえ……」

シエルタが、ふと思いついたように言った。

「あなたはいないの？ その……誰か」

サリクスはいつも、一步引いたところから二人を見ている。何かを面白がってでもいるかのよう。『監視役』というだけではなくて、決して深入りしようとはしない。サリクスの様子から、シエルタは何となくその理由を察していた。

「さあて」

サリクスは言って、また肩をすくめた。何となく、道化師を連想させる仕草だ。

「ガキ二人のお守りだからな、俺は」

呟き、シエルタを振り返る。

「そろそろ戻るか。いい加減、見つかるとまずい」

あんな場面を陰から見られていたと知ったら、特にキルファはまた暴れるだろう。しかも、彼女はめっぽう勘が良い。

「そうだね」

シエルタも、小さく頷いた。

その向こうで、キルファとダレットはまだ不毛な言い争いを続けていた。



うっそうとした森が広がっている。その中のわずかに開けた場所に、指で数えられるだけの家がぽつりぽつりと点在している。

見慣れた風景。自分の生まれ故郷、ハンザという名で呼ばれる地だ。

その中でも更に外れに、今にも壊れそうな小さな小屋があった。一見廃屋に見えてしまうほどに傾いていたが、一応中に誰か住んでいるらしい。

「ただいまー」

小さな少女が、とことこ小屋に駆けていくと飛びあがって扉を開けようとする。が、背の高さが足りず、飛び上がって悪戦苦闘している、中から扉が開いた。

「お帰り」

優しい声音が響く。聞き慣れた声。だが……女の声ではない。

母親ではないのは明白だ。だが、少女——小さい頃のキルファは、少しも臆することなく人影に駆け寄った。

「お兄ちゃん！」

「こんにちは。いつも元気だね……キルファは。いい事だよ」

「うん！」

背の高い人影……まだ少年と呼べる年齢の男だ……は律儀にかがむと、キルファの銀色の頭を撫でた。キルファの顔が、安心したように緩む。日向でまどろむ猫を連想させる表情だ。

少年は何やら作業をしているようなのだが、キルファはちょこまかと動いて覗きこもうとする。要するに邪魔をしているのだが、少年は別に嫌な顔をするでもなく、小さな子供をあやしながら作業をしている。

そこに、ぱたぱたという足音が聞こえた。

「リュシウス、これで良いと思うんだけど……。あら、キルファ、

帰ってたの？

駄目よ、リュシウスの邪魔をしちゃあ」

奥の部屋から女性が顔を出した。キルフアの母親、エレナだ。壺や袋を幾つも抱えている。

「構いませんよ」

リュシウスと呼ばれた少年は鷹揚に答えると、またキルフアを構ってやっている。小さい子供の扱いにも慣れているようだ。

「悪いわね、いつもキルフアの面倒を見させてしまっ」

「いえ。僕も好きでやってるようなものですしね」

懷から菓子ของの包みを出してキルフアに渡す。キルフアがそれに齧りつくのを眺め、エレナとリュシウスは揃って笑った。

「大変なのはむしろエレナさんの方でしょう？　こんな小さな子を育てて、それに……村の連中も」

「私も、好きでやってることだから」

心配顔で言うリュシウスに、エレナが苦笑して応じた。抱えた荷物を机の上に置くと、菓子を頬張っているキルフアの頭を撫でる。

「私は大丈夫だけど……この子は。キルフアは……どうなるのかしらね、これから……」

笑顔に悲しさが混じる。キルフアだけが何も知らぬ顔で、紫の瞳で母親を見上げていた。

「……夢か」

身を起こし、キルフアは呟いた。

辺りを見渡せば、朝日が昇りかけている。その横で、ダレットとサリクスの二人が転がって寝ていた。

今いる場所は、あまり狂暴な肉食獣は生息していない。そのせいで、最近では野宿の際に番を立てる事もなくなっている。何にせよ、安心して寝られるというのは有り難い限りだ。

「小さい頃のことなんて、思い出そうとしても思い出せないのに。何だって夢だともはつきり覚えてるのかしらね」

急速に、夢の映像が記憶から薄れていく。寝ぼけ眼で、ぼんやりとキルファは夢を反芻した。

「……リュシウス、か」

名前を呟く。

「どうなってるのかしらね、今頃」

あの惨劇以来、村のことなど知る術はない。当然、ハンザの村の住人……リュシウスの消息も不明だ。

かつての知己が、妙に懐かしく思えた。今更会ったところで、どうなると思えなかったが。大勢の村人を殺した上に脱走した娘に出会ったら、取るべき行動など一つに思えた。

殺されてやるのも一つの道かもしれない。ただ、身勝手だとは思ったが、自分は死にたくない。それだけは確かだ。

だから。

今となっては……あの転がった死体の中に、リュシウスがいなかったことを祈るだけだ。

「……………」

重苦しい気分を吹き飛ばすように首を振ると、キルファは跳ね起きた。

その頃。

「ここの近くに間違いないのね？」

淡々と女が訊いた。本人にしてみれば単に場所を尋ねただけなのだが、脅されてでもいるかのような、変な緊張感と圧迫感を与える声である。その声は涼やかではあったが、裏に伶俐な刃物が潜んででもいるような印象がある。

「うーん、情報通りならね。でもさあ、結構探す範囲が広いよ？何とかなるかな？」

答えたのは若い男の声だった。女とは色々な意味で対照的で、口調はやたらと軽い。こちらは、道化師の口上でも聞いているかのような印象を周りに与える。

女はその話し方が気に入らないのか、露骨に顔をしかめて見せた。が、いつものことなのだろう。男に動揺した様子はまったく見当たらない。

「あー、そのカラスさん、こんな子を見ませんでしたかねえ？」  
男は冗談めいた口調で言いながら、懷から一枚の紙を取り出して、ひらひらとさせてみせる。だが、別に男にカラスと意志の疎通をするなどという技術があるわけではなく、カラスは間の抜けた鳴き声を上げつつ飛び去って行く。

「……あのねえ……」  
さすがに女も呆れた顔で言う。そのまますたと男の側まで歩くと、ごん、と問答無用で張り倒した。女の拳をまともに顔面に食らい、男はもんどりうって転がる。それでも、へらへらとした笑いはそのままだ。

「馬鹿なことやってないで、さっさと探す！」  
怒鳴ると、地に落ちた先ほどの紙片を拾う。何度も読んだもののだが、生真面目な性格のためか、つつい目を通してしまう。

とは言っても、紙には何かが箇条書きで数行書かれているだけである。三回目を通せば、暗記できてしまうほどの量だ。

「……たったこれだけの特徴で探せと言われれば、普通は無理だっ  
て言うけど。それが出来るのも結構凄いことかもしれないわね」

何とはなしに女は呟いた。全力で殴り倒したにも関わらず既に復活していた男が、耳ざとく聞きつけて言う。

「まあ、だから僕たちに命令が来たんだけどね」

男が、何かを含んだ笑いを浮かべた。男にしたところで、今更紙片の内容など確認するまでもなく、暗記している。

「性別・女、年齢・十四歳、髪・銀……」

それでも、相変わらず芝居がかった口調で諳んじてみせる。女は別に聞いてもないようだったが。

「目の色・紫、か。本当にこれだけの情報しかないんだからねえ……」

肩をすくめてみせるが、女は冷たい視線を一瞬向けただけだった。  
「紫の眼。ハーフの証拠……、か。話には聞いてるけど、実際に見るのは初めてだわ」

「僕もだよ。……でもさ、不思議だよ、何だって皆揃って目の色が変わるんだろ。突然変異みたいなものなんしょ？」

「さあね……でも、それを究明するのは私達の役目じゃないわ。私たちがやるべきことは別にある。」

……だから。馬鹿なことやってないでとっとと先に行くわよ」

女は、男の返事も待たずにすたすと歩き出した。

「えーと、ちょっと水汲んでくるわね」

即席の竈を組み、携帯用の食料を引っ張り出し……と、朝御飯の準備をしていたキルファは、寝ぼけ眼のダレット、サリクスに向かって言った。そのまま返事も待たずに、容器を抱えてすたすとその場を離れる。

大体、野宿場所には川の側を選んでいるから、水汲みといったところで大して手間がかかるわけでもない。男二人にしても、ぼんやりと首を縦に振っただけだ。

少し歩けば、小さいが透き通った水が流れる川があった。昨日のうちに見つけておいたものだ。もっとも、ダレットの地図にも記載がある川だから、探すというほどでもないのだが。何にせよ、旅をしている者には必要不可欠な存在である。

携帯用の鍋に水を汲む。毎日やっている、どうということもない作業だ。

ふと水面を見下ろす。緩やかな流れに、自分の顔が映っていた。銀色の髪、紫の瞳。生まれた時から見慣れてはいる。が、何とはなしに自分の瞳に目が行ってしまう。

「……確かに、珍しいけど」

ぽつりと呟く。

「これだけだったら、何てことないのに。この色がハーフだけって

言うんでなければ、大して問題にはならなかっただろうけどさ。

ま、単なる目印なんだけど。こんなもの」

この瞳を潰してしまえば、宿命……この一言で片付けるのはあまりにも腹立たしいが……から逃れられるのではないか。そう思ったこともある。手にしたナイフを何回目に向けただろうか。

いっそのこと、潰してしまえば意外に上手く行ったのかもしれない。だが、単なる現実逃避でしかないことに、気付いてしまった。目を潰したところで、何が変わるわけでもない。そんな虚しさに。事實は変えられない。死ぬまでずっと。

「……分らない、知らないというのも、それはそれで幸せなことなのかもしれないわね」

気付いてしまう、知ってしまうことが苦しみとなることもある。

結局のところ、幸せも苦しみも、本人次第だ。

「はあ……」

あんな夢を見たせいだろうか。どうにも気分が晴れない。

しばらくぼんやりとしていたが、不意に情けない顔をしたダレツトの顔が脳裏に浮かび、我に返る。

「さっさと餌を作ってやんなきゃ」

呟き、立ちあがる。

その時。

後ろでがさり、という音がした。

（……しまった）

自分で思っているよりもぼんやりとしていたのだろうか。気配を察知するのが遅れた。

（多分、二人いる。……素人じゃないわね。何らかの実戦経験がある連中）

集中し、知覚を総動員する。鍋から手を離し、懐に手をやる。

手に馴染む金属の感触を確かめてから、キルファはゆっくりと振り返った。

「何だか、こんな場面は前にもあった気がするわね……大概、ろくなことにならないんだけど」

ぶつぶつと言いながら降り返る。口調こそ軽いが、辺りの空気がぴりぴりと張り詰めている。つまり……全力で警戒している。

「ども。始めまして」

ぴっと右手を挙げて見せ、やたらとにこやかな口調で言うのは、若い男だ。金髪碧眼、痩せ型と言うよりはひよろつとした体型で、甘い顔立ちをしている。街に行けば女が放っておかないような優男だが、その動作が何処か芝居じみている。これが地なのか、何か理由があって演じているのかはいまいちはっきりしないが。

ただ、一つだけ言えることは……気に食わない男だ。その軟派な物腰と言い、態度と言い――その裏に何か隠していることと言い。懷に手を突っ込んで警戒したまま、キルファは横のもう一人を見た。

こちらは若い女だ。燃えるような赤毛と同色の瞳。男とは色々な意味で対照的で、間近で相對しているだけで、炎を付きつけられているかのような凄みがある。美女なのだが、同性のキルファでも近寄りがたい雰囲気があった。

額から一筋、汗が流れる。男は細身の剣、女は短剣を腰に差している。物腰を見れば分かる。二人とも、かなりの使い手だ。

それに。

二人とも……その耳は長く尖っている。エルフ族の証拠だ。こうして睨み合っているだけでは分からないが、魔法を使いこなす可能性もあるのだ。

「……何の用よ？」

無愛想に、キルファはそれだけ訊いた。

「あなたが、『キルファ』ね？」

淡々と、今度は女の方が訊いた。

「人違いよ」

即答する。無意識のうちに、一步後ろに下がる。この二人組の目

的が何なのかは分からないが……少なくとも、自分にとって嬉しいものではなさそうだ。

そうでなければ、こんな手練二人がやってくることなどないだろう。

「それなら、あなたと同じ銀髪、紫の目の女の子をここに連れてきてもらえる？　そうしたら、人違いと認めてもいいわ」

女が無表情に言う。ハーフ自体が極端に少ないし、銀髪も全人口から見たらかなりの少数派だ。自分と同じくらいの年齢の少女など、まずいないだろう。その上で女は言っているのだ。無論、キルファもその嫌味に即座に気付いている。

キルファは舌打ちし、投げナイフを握り締めた。二人も気付いてはいるはずだが、自分の武器を抜く様子はない。自分の腕に自信があるのか、それとも白兵戦が本領ではないのか。

そらつとぼけるのは諦め、キルファは苦々しげに言った。

「あたしの名前知ってるのね……だったら、そっちの名前も聞かせてもらいたいもんだけど」

「僕がウィレム。こっちがブランシュ。……これでいいかな？」

にっこりと、殴り倒したくなるくらい親切に言って寄越したのは、ウィレムと名乗った若い男だ。

「余計なことは言わなくていい」

ブランシュと呼ばれた女が、苦虫を噛み潰したようにウィレムを睨みつける。ウィレムは肩をすくめたが、まるでこたえた様子はない。

「まだよ……だから、あんたらは、あたしに何の用があるの？」

問いかけながら、頭で必死に考えを巡らす。

二人の言葉尻を捉えた限りでは、この二人は何らかの情報を得て自分を探していたようだ。髪と目の色、年齢と言ったところか。もしかしたら、大雑把な似顔絵くらいは付いているかもしれないが。自分はこの二人組とは面識はない。

となれば、情報を与えた何者かがいるはずだ。今、その『何者』



について言えることといえば、おそらくエルフだろうということだけだ。それでも、二人組がエルフだからというだけの理由だが。

（あとは……）

これも確信はないのだが、二人は自分の使う『インシード』の姓は知らないようだ。エルフは公式には姓を名乗ることを禁じられているから、使わなかったと言えはそれまでなのだが。

自分が姓をつけて名乗るようになったのは二年前、ラインガルドに潜りこんでからだ。知らないとするば、『何者』かと自分との接点はエルフの村にいた頃ということになる。あの頃は、ただの『キルフア』だった。

（二年前……）

二年以上前の話で、エルフがわざわざ自分を探す理由。そんなものの、一つしかない。

「あなたについてきて欲しいところがあるの。そこまで連れていくのが、私たちの役目」

「役目、ね」

呟く。とりあえず、『何者』かがいることは明白になったわけだ。

「嫌だ、と言ったら？」

「嫌でも来てもらうよ」

にっこりとウィレムが宣言する。その笑いは、さっきまでの笑いとは違う。まるで、肉食獣が獲物を見つけたときのような笑顔だった。

「……………っ！」

キルフアは恐怖を誤魔化すかのように、ナイフを握り締めた。

「……お腹空いたな」

「腹減ったな」

木にもたれかかるようにして、ダレットとサリクスは異口同音に呟いた。

「……遅くないか？ ただ水汲みに行ったにしては」

川の位置は、二人も把握している。小柄な少女の足とはいえ、時間のかかるような場所ではないはずだ。

「まあ、何か用でもあったとか……」

サリクスがとりなすが、ダレットは難しい顔をしたままだ。

「何の用があるって言うんだ？ あいつに」

そこでようやく、サリクスの顔から笑みが消える。

突如。

木々の向こうに蒼い光が見えた。光は一瞬まばゆく輝き、そして残像を残して消える。

「これって……」

二人とも、光の色に見覚えがあった。何度も助けられた色。キルファの＜白紙＞の魔法が発する光だ。

二人は同時に立ちあがる。言葉を発するのもしどかしく、武器を握る。

顔を見合わせると、光が見えた方角に向かって駆け出した。

「……あたしを、何処に連れてく気？」

じりじりと後ろに下がる。ナイフを両手に握り、いつでも投げられるように構えた。が、素人ならどうにでもあしらう自信はあったが、この二人相手ではどこまで通用することか。それぞれが相当な使い手だ。加えて魔法を使われたら、それこそ打つ手がない。

「来てみれば分かるわ」

ブランシュが事務的な口調で言った。彼女は意識的に後ろに下が  
り、代わってウィレムが前に出る。ウィレムが、腰に佩いた剣を抜  
いた。

細身の、真っ直ぐな刀身の剣である。だが、その刀身にはほとん  
ど刃がない。先端だけが針のように研ぎ澄まされている。エストク  
と呼ばれる、刺突に特化した剣だ。

騎士がよく用いる剣であり、王宮文学や芝居などにも度々登場す  
る。確かに、棍棒などよりはこの男には似合っているかもしれない。  
ウィレムは剣を引き、刺突の構えを取る。キルファにはさほど剣  
術に関する知識はないが……一つだけ分かった。

自分には勝てない。

更に。

後ろに下がったブランシュは、ぶつぶつと何かを呟き出す。その  
正体は、考えなくとも分かる。

（呪文！）

おそらく、ウィレムが接近戦担当、ブランシュが中距離戦担当と  
言ったところなのだろう。戦士と魔導士が組むことは珍しくない。  
むしろ戦術の基本だ。お互いの欠点を補えるからである。

魔導士には呪文を唱える間に隙が出来る。その間、戦士に護って  
もらえば良いし、一度に何人もの敵と相対した場合、魔法というの  
は強力な武器となる。

二人の様子からして、昨日今日組んだというわけでもなさそうだ。  
典型的ではあるが、連携は見事だった。

（……逃げるしかないか）

決断は速かった。が、自分のすぐ後ろには面倒なことに川がある。  
退路を絶たれた状態だ。二人も、それを見越した上でここで接触し  
てきたのだろうか。

細い川のことだ、越えることも可能ではない。だが、水の中を突  
っ切れば確実に足が鈍る。その間に追いつかれたらそこで終わりだ。  
（……どうする？）

一瞬が永遠に引き伸ばされたかのような思考。

次の瞬間……キルファはウィレムに向かって駆け出していた。

ウィレムもさすがにこの行動には面食らったようだったが、構わずに剣を構えて機を窺う。走りながら、キルファは大声で宣言した。

『開門っ！』

蒼い光が辺りを包み込む。ブランシュが眉を寄せて苦い顔をした。起動直前の状態にしておいた魔法を消去されたのである。

これで、後ろから追撃される可能性は大分減る。キルファはなおも、ウィレムとの間合いを詰めた。

後少しでエストクの間合いに入ってしまう。ウィレムが勝ちを確信し、刺突を繰り出したその時。

キルファは助走を付けた状態で地を蹴った。元々が身軽な彼女のことだ。軽々と跳びあがり、必殺のはずだった剣先は宙を切る。

ぎりぎりのところで、跳んで避けたのだ。剣先は虚しく、彼女の残像に突き出された。

呆然とするウィレムは放っておき、跳んだキルファはウィレムの肩に手をかけてもう一段跳びあがり、ウィレムの頭上を飛び越える。そのままウィレムの後ろに立つと、方向を変えて真っ直ぐに駆け出した。背後を取った時点でウィレムを倒すことも可能ではなかったが、ブランシュの出方が気になったのである。

ウィレムの後ろを取れば、ブランシュは魔法を使えない。魔法で追撃される可能性も、ウィレムを射線上に置けばその可能性はぐんと減る。

（あの二人のところに戻れば、何とかなる）

ブランシュの魔法の技量は分からないが、ウィレムと組んでいる以上、一流の魔導士と思って間違いないだろう。強敵ではあったが、ダレットとサリクスがいれば追い払うことも不可能ではない。

短いやり取りから、キルファは二人の技能をこう読んでいた。  
が。

『風よ・我を護る・風陣と成せ！』

背後から呪文が聞こえた。ブランシュだ。

一流の魔導士というのは、魔法の威力におぼれない。魔法が発動したからとて、油断しない。つまり……魔法が失敗したときからの立ち直りも早い。

キルファに魔法を消去されたのを察知するなり、次の呪文を唱え出したのであろう。

（まさかっ！）

キルファが心の中で悲鳴を上げると同時に、森の中を突風が吹き荒れる。防御魔法＜風陣＞。自分を中心とした範囲内に、強風の渦を発生させる魔法である。

効果を及ぼす範囲が広い、ほとんど回避は不可能な魔法である。

上級魔法の部類に入り、このことからブランシュが一級の魔導士であることが分かる。

しかし。

（すぐ側に仲間がいるのよ？　そこで、こんな無差別範囲の魔法を使う、普通っ？）

成す術もなく吹き飛ばされながら、キルファは思いきり毒づいていた。

「何考えてるのよ、あの女……」

呟きはうめきに混じる。小柄な身体はものの見事に吹き飛ばされ、近くにあった大木に激突して止まる。全身を強打したせいで、呼吸することすら苦しい。

動けないでいるキルファに、ブランシュはすたすたと歩み寄った。

「さて。一緒に来てもらおうわ」

相変わらずの事務的な口調で言いながらかがみこむ。ある程度体術に通じていれば、薬など使わなくとも手刀の一撃で気絶させることも可能だ。

「仲間……ごと、吹き飛ばす……普通っ！　何、考えてるのよ……あんた……」

顔だけ上げて睨みつけ、絞り出すように途切れ途切れに言う。そ

れをブランシュは、こともなげに言い返した。

「ああ、別に良いのよ、あの男は。このくらいでどうにかなるような奴じゃないから」

けろりとして言つてのける。心配だの何だのといった様子は微塵も感じられない。

キルファの首筋にとん、と軽く触れる。傍目には触れたとしか見えなかったが、それだけでキルファはあっさりと意識を手放した。

大木の根元に倒れ伏したキルファはそのままに、彼女ごと吹き飛ばされたウィレムに声をかける。

「さて。目標の確保は完了したことだし、さっさと戻るわよ」

ウィレムは、よろよろと起きあがった。確かに服は土埃にまみれているが、ブランシュの言った通り、大して怪我をした様子もない。へらへらとした笑いもそのままだ。

「ひどいよブランシュ……僕ごと魔法に巻きこむなんてさ。他にもつとやりようってものが……」

「あっさりと抜かれた奴にとにかく言われたくないわね。大体、こんな強風の魔法でどうにかなるような男じゃないでしょ、あなたは」  
言つて、ブランシュは呆れかえったようにため息をついた。

「そういうわけだから。その子は、あなたが抱えていつてね」

「はい……」

これ以上反論するのは諦め、ウィレムは倒れたキルファの身体を抱え上げる。年齢は十四歳と聞いていたが、それにしては小柄だし、体重も軽い。

まあ、これなら起こして引きずっていく手間もないだろう。少し見たこの少女の性格からすれば、いつ逃げ出してもおかしくない。

「ま、案外簡単な任務だったね」

「無茶な話だったら、私たち二人だけに命令なんて来ないわ。無茶と分かっていることをやるような方でもない」

「そりゃそうか……」

キルファを抱えたまま首を傾げるウィレム。

「さて、戻るわよ」  
ブランシュが来た方向に向かって歩き出す。が、すぐに足を止めた。

「な……?」

ダレットは思わずうめいた。

エルフの男と女が目の前にいる。二人だけだったら、自分たちと同じ旅人が盗賊かとも思っただろうが……その腕に抱えられているものが問題だった。

白い服を着た小柄な身体。気を失っているのか、だらりと腕を垂らしている。考えるまでもない——キルファである。

「キルファ?」

ダレットはまた呟く。

呟きが聞こえたのか、男と女は顔を見合わせた。そのまま、こそこそと話をする。

「そう言えば、付随事項に『人間の男と一緒にいる可能性がある』とはあったわね」

「あの男がそうか……まずいね。こっそりと離れるつもりだったのに。どうする?」

「どうもこうもないわ。私たちは、同伴者に関しては何も言われていない。倒すわけにも行かないだろうから……また吹き飛ばしますか」

ひそひそと物騒な話をする。ダレットとサリクスには聞こえていないが。

「貴様等……キルファに何をした?」

ダレットは怒鳴りながら長剣を抜く。そのまま斬り付けそうな勢いだったが、かすかに躊躇しているようだ。男……ウィレムの腕にはキルファが抱えられたままなのだから。

「別に。ちょっと眠ってもらっただけ……怪我はさせてないわよ」  
先程強風で吹き飛ばしたことはこの際黙っておく。

「だったら、どうするつもりだ……！」

「私たちは、この子にちょっと用があるの。それで同伴を願っただけ。あなたたちには何の用もないのよ。出来れば、さっさと消えて欲しいんだけど」

淡々とブランシュが言う。彼女も腰の短剣を抜くが、彼女にとって短剣は護身用の域を出ない。ダレット相手に通用しないことは彼女も承知していた。

「勝手な事を言うな！」

ダレットが長剣を手に踏み込んだ。ウィレムに斬りかかるが、彼としてもキルファごと斬るわけにはいかない。仕方なしに剣の腹で足を狙うが、ウィレムは辛うじてこれを避ける。小柄な少女とは言え、人一人抱えてはそう簡単には動けない。

後ろのブランシュが呪文を唱え終わったのを察知し、ウィレムは慌てて後ろに下がった。

『我が前に・聳え立てよ・絶対の壁！』

ウィレムとダレット、二人の間に突如炎が出現する。炎がまさしく壁となって二人を隔てた。防御魔法＜炎壁＞。任意の線に沿って炎を吹き上げるもので、防御にも攻撃にも使われる魔法だ。

しかも、ブランシュは吹き上げた炎の中に小さな瓶を放った。炎の中で瓶は割れ、一瞬にして炎の勢いが増す。

「ちっ……」

ダレットが身の危険を感じて後ろに下がった瞬間、炎が弾けた。ブランシュが投げた瓶の中に、油と火薬が仕込んであったのである。舌を巻くほどの用意周到だった。帝国にエルフの兵士などいないが、正規の軍にはまず有り得ないことだ。傭兵などは、時々こんな装備を用意していることがあるが。

ここは木の多く生えた……つまり、可燃物だらけの森の中だ。放っておけば、大規模な山火事になりかねない。実際、爆発の際に飛び散った火の粉は、近くの草に燃え移ってきている。

「サリクス……！ 魔法でどうにかならないか？」



横を振り向き、ようやくダレットは気付いた。

サリクスは、呆然とエルフの男女を眺めている。

「サリクス！」

ダレットがもう一度怒鳴ると、彼はようやく我に返った。

「あ、ああ……」

またぼんやりと答える。ダレットは焦燥の顔で炎の向こうを見ていた。今すぐに追いかけたいのだが、炎が邪魔で二人とキルファの姿は見えない。

『その力もて・我が前の敵を打ち砕け・風よ・鉄槌と化せ！』

攻撃魔法＜風鎚＞起動。一点を起点として、純粹な空氣の爆発を叩きつける魔法だ。それをサリクスは、炎の中心を起点として起動させた。

熱を帯びた強風が二人に吹き付ける。反射的にダレットは腕で顔を庇っていた。

消火の手段の一つとして使われるのが、爆発による鎮火だ。爆発で空氣を排除して炎を消すのである。炎と言えど、所詮は酸化現象である。真空の中で炎を持続させることは出来ない。

魔法の爆発によって炎は弾き飛ばされ、やがて消える。焦げた臭いと熱氣が充満していたが、構わずにダレットは走りだそうとし……そして、舌打ちして足を止める。

三人……ウイレム、ブランシュ、そしてキルファの姿は既に見えなくなっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5051q/>

---

騎士とエルフの冒険絵巻

2011年3月19日17時11分発行